

詩篇

詩篇はヘブレオ語ではテヒリム、即ち讚美歌書と称せられている。作者は、少くともその大部分を作つたのは、ダヴィド王であつた。しかしその内には、アサフその他前書きにある名の人々に作られたものも若干ある、という説の人も少くない。個々の詩がいつ出来たか、その時については明確に分つていない。しかしエスドラスの援助を得てこれを集録したのはネヘミアであつた。

ウルガタの分類の仕方は、ヘブレオ語原典と異なつてゐるが、それはおもに原典の第九、第十、及び第百十四、第百十五の両篇ずつが、七十二人のギリシヤ語訳とウルガタ訳ではそれぞれ一篇とされておゐり、また原典の第百十六と第百十七が両訳ではそれぞれ二篇に分たれてゐる所から来るのである。

それ故この訳書では、ヘブレオ語原典の詩篇番号に括弧を付けておいた。

詩篇は通常五部に分たれてゐる。即ち第一篇から第四十一篇までが第一部、第四十二篇から第七十二篇までが第二部、第七十三篇から第八十九篇までが第三部、第九十篇から第百六篇までが第四部、第百七篇から第百五十篇までが第五部とされてゐるのである。そして各部の終には栄唱が付いてゐるが、ただ第百五十の詩篇には栄唱がなくその詩篇が大栄唱の如く全体の結尾をなしてゐるのである。

詩篇は天主を讚美し、之に感謝し、罪の赦しを乞ひ、精神上及び物質上の悩みに際してその御助けを願ふ考えから作られてゐるので、昔から聖会でも公けの聖務日禱の主要な要素とされてゐたが

また特別な個人祈禱にも適している。

◎新テキストによる詩篇の訳は附録にある。

第 一 篇

義者の幸福と不義者の不幸¹⁾

一 幸福なるかな、²⁾ 不敬なる者³⁾
 の勧告に従いて歩まず、罪人の⁴⁾
 道に立ち入らず、邪惡の座に就⁵⁾
 かず、³⁾ 却つて主の御律法⁴⁾
 に志す人、かかる人はその御律⁵⁾
 法を昼も夜も思いめぐらさん。
 三 かかる人は流るる水の辺に植⁶⁾
 えられたる樹の、時節来りて実⁷⁾
 を結ぶ如くなるべし。⁵⁾ その葉⁸⁾

第一篇 1) 聖ヒエロニモはこの詩篇を称して、詩篇に対する聖靈の御序言としている。—2) 詩篇も山上の説教と同じく、「さいわいなるかな」と讃えることで始めている。—3) 用語及び意味における対句法。前者においては *abijt, stetit, sedit* (歩む、立つ、坐す) という動詞や、*consilio, via, cathedra* (勧告、道、座) という名詞が使われており、後者においては漸次惡の深みに沈む様が表されている。—4) 啓示の全部。ただ十誡ばかりではない。—5) 律法を忠実に守る人々への祝福が枝葉繁り豊かに実を結ぶ木に譬えてある。かかる木は暑いパレスチナには少く、ただ灌漑によつてのみ繁茂できるのである。この水とは律法についての默想。

四 は落ちざらん、しかししてそのなさん所は^{ところ}何^{なに}にても栄^{さか}ゆべ
 五 し。6) 四 不^ふ敬^{けい}なる者は然^{しか}らず、実^{じつ}に然^{しか}らずして、風^{かぜ}が地^ちの面^{おもて}
 六 より吹^ふきあぐる塵^{ちり}の如^{ごと}し。7) 五 されば不^ふ敬^{けい}なる者は審^さ判^{はん}にて
 起^たたざるべく、罪^{つみ}人も義^ぎ人の集^{つど}会^いにてまた然^{しか}らん。8) 六 そは
 主^{しゅ}、義^ぎ人の道^{みち}を知^しり給^{たま}い、9) 不^ふ敬^{けい}なる者の道^{みち}は滅^{ほろ}ぶべけれ
 ばなり。

第二篇

メシアの勝利¹⁾

一 いかなれば異^{こと}邦^{くに}人^{びと}等は騒^{さわ}ぎ立^たち、
 二 民^{たみ}等は空^{くわ}しき事^{こと}を企^{くわ}てしや。2) 二 地^ちの
 王^{おう}たち³⁾は起^たちあがり、諸^{しよ}侯^{こう}は相^あ集^{あつ}
 まりて一^いつとなり、主^{しゅ}に敵^{てき}し、その
 三 受^{キリスト}膏⁴⁾者⁴⁾に敵^{てき}せり、三^い曰^{いわ}く、「我^{われ}等^らい

6) その行^ゆく所^{ところ}はすべて天主^{てんしゅ}の御^ご
 祝福^{しよくふく}を蒙^もるであらう。――7) 詩^し三
 四・五などを参照^{さうしよ}。――8) 世^よの終^{はつ}
 りの公^{こう}審^{しん}判^{はん}の時^{とき}には義^ぎ人^{にん}達^だが証^{しやう}
 人^{にん}や陪^{はい}審^{しん}員^{いん}となるであらう。哥
 前^こ六・二参^{さん}照^{しやう}。――9) 漫^{まん}然^{ぜん}と、無^む
 関^{かん}心^{しん}に知^しることでなく、保^ほ護^ごし
 たり救^{きう}つたりする愛^{あい}情^{じやう}深^{しん}い認^{にん}識^{しき}

第二篇 1) この詩篇は救世主のことを歌つたもので、徒
 四・二五及び一三・三三の示す如く、キリストとその靈
 的御国のことと解すべきである。形式は劇的で、作者、
 攪乱者、救世主、天主、それからまた作者と、交互に語
 るようになってゐる。――2) 民等とはユデア人のこと。
 3) その最初の者はヘロデとピラトであつた。――4) ヘブレ

ざ、彼等かれらの絆はだを断たち切り、その轆くびきを我等われらより抛なげう

たん。」と。
 四^{てん}天に住^すみ給^{たも}う者^{もの}、
 彼等^{かれら}を嗤^{わら}い、

主^{しゆ}彼^{かれ}等^らを嘲^{あざけ}り給^{たま}わん。
五
かくて後^{のち}、
5)
彼^{かれ}怒^{いか}りて

彼等かれらに語ものい、
猛り立ちて彼等かれらを怖おじ惑まどわしめ給たまふ

うべし。
六
されど我^{われ}は⁶⁾
彼^{かれ}によりて、
その聖^{せい}な

る山やまシシオンの上に、その掟おきてを説とかんために王おうと

立てられたり。
主^七₍₇₎^{しゆ} 我^{われ}に曰^{のたま}えらく、
「汝^{なんじ}はわ

が子^こなり。
我^{われ}今日^{きょう}汝^{なんじ}を生^うめり。
我^{われ}に^{もと}求めよ、

さらば我^{われ}汝^{なんじ}に嗣^{ゆかり}産^りとして異邦人等^{ことくにびとら}を、領地^{りようち}とし

て地ちの果はてを、
与あたえん。
汝なんじは鉄くろかねの杖つえもて彼等かれら

を治め、
陶器師の器の如くに彼等を碎かん。」

と。
されば今、いま
王等おうたちよ10)
曉さとれかし、
汝等なんじらち地

を裁く者よ、教を受けよ。二畏懼もて主に仕え

オ語では膏を塗られた者という意味の、よく知られているマシアー。メシアという語はそれから出た。メシア（キリスト）という名の源は此処である。――5) 主の勘忍袋の緒が切れた時。――6) メシアの言葉。――7) 天主御父。――8) これらの言葉はただキリストにのみあてはまる。それはただ彼にのみ一切の支配権と天主としての崇敬とが帰せられるからである。ユデア人の間でもここはメシアのことを述べているものと解されていたそうでなければ、徒一三・三三にある会堂で、かの使徒がこれをキリストをさすものとしなかつたであろうし、來一・五のパウロの立証も効果がなかつたであらう。今日とは、始なく終なくの意。即ち永遠に生むこと。――9) メシアはかくする権能を持ち給う。いついかにしてそうされるかは述べてない。――10) 二節にある人々。

二 戦きつつこれに歓喜の声を挙げよ。三訓令を
 受け納れよ、¹¹⁾これ、主が怒り給いて、汝等
 が正しき道より亡ぶることの、決してなから
 二 三 んためなり。¹²⁾三やがてその御忿怒の火と燃
 えん時、¹³⁾すべて彼に依り頼み奉る者は幸福
 なるかな。

第三篇

主に対する信頼

一 ダヴィドの詩。彼がその子アブサロムを避
 けて逃れし時¹⁾の作。^二主よ、
 なんぞ我を悩ます者の多きや。我に逆らいて
 起つ者多し。²⁾三わが靈魂に云う者多かり、
 四 「彼にはその天主による救拯なし。」と。³⁾四さ

¹¹⁾ヘブレオ語本「接吻せよ」(母上一〇・一参
 照)。パレスチナやその附近の国々では王侯に敬
 意を表するのに、その顔や手や膝に接吻したの
 である。――¹²⁾汝らが滅亡の淵に落ちないため。
¹³⁾「実にその御忿怒やがて燃ゆべし」とする方
 が可。

第三篇 ¹⁾母下一五章など参照。 ²⁾殆どすべ
 ての臣下と最も親しい友達までが背き離れたこ
 とを力強く述ぶ。――³⁾天主は曾てサウルをお棄
 てになつた如く、ダヴィドを棄て給うたように
 見えた。ヘブレオ語原典及び七十人訳では、こ
 こ及び五節九節の終に、セラと附記してある。

五
れど主よ、汝はわが庇護者、⁴⁾ わが榮譽、わが頭を抬ぐ
六
る⁵⁾者にて在す。我声を挙げて、主に呼わりたるに、彼
七
その聖なる山より我に応え給えり。我は眠り呆け、⁶⁾ 且
八
起き出たり、そは主我を庇い給いたればなり。幾千の民
九
我を困むとも、我は怖れじ。主よ、起ち給え、わが天主よ
我を救い給え。実に汝はすべて故なく我に仇する者を撃
ち、罪人の齒を碎き給えり。⁷⁾ 救拯は主のものなり、御祝
福は御民の上にあり。

第 四 篇

主による平安

一
終りまで。¹⁾ 歌うために。²⁾ ダヴィドの詩。
二
わが呼び奉りし時、わが正義の天主、我に聴き給いぬ。
患難の時には、汝我を寛がせ給えり。³⁾ 我を憐み、わが祈

セラとは歌隊の交替する所を示す語。―4)ヘブレオ語本「楯」。
5)ダヴィドは頭部を包んで橄欖山に登つた。―6)夜中に無数の敵に困まれたけれども、宮中で自分の衛兵達に護られているのと同様に、平然としていた。
7)昔の絵には、アッシリアの兵士等が捕虜達の齒や鬚を無理に抜く様が表してある。

第四篇 1)「伶人頭(うたのかみ)のために」とする方が正しい。七十人訳及びヴルガタ訳の意味は、いつまでも歌うべし、とい

八	七	六	五	四	三
を与え給えり。 ^八 彼らはその穀物の実 ^ミ	の上に記されたり。 ^七 汝はわが心に歡樂	云う者多し。 ^七 主よ、御顔の光は我等	として空虚を好み、虚偽 ^五 を求むや。	四 知れ、主がその聖なる者 ^六 を妙にな	三 りを聴き給え。 ^三 人の子等よ、 ^四 汝等
		中にて云う所は、汝等の臥床にて悔い	されど罪を犯すなかれ。 ^七 汝等の心の	し給えるを。主はわが彼に呼わり奉ら	いつまで心鈍からんとするぞ。汝等何
		よかし。 ^八 六 義の犠牲 ^九 を献げ、主に依	ん時、我に応え給わん。 ^五 汝等怒れ、	給えり。主はわが彼に呼わり奉ら	とて空虚を好み、虚偽 ^五 を求むや。
		り頼め、「我等に幸を示すは誰ぞ」と	されど罪を犯すなかれ。 ^七 汝等の心の	し給えるを。主はわが彼に呼わり奉ら	とて空虚を好み、虚偽 ^五 を求むや。
		云う者多し。 ^七 主よ、御顔の光は我等	中にて云う所は、汝等の臥床にて悔い	し給えるを。主はわが彼に呼わり奉ら	とて空虚を好み、虚偽 ^五 を求むや。
		の上に記されたり。 ^七 汝はわが心に歡樂	よかし。 ^八 六 義の犠牲 ^九 を献げ、主に依	し給えるを。主はわが彼に呼わり奉ら	とて空虚を好み、虚偽 ^五 を求むや。
		を与え給えり。 ^八 彼らはその穀物の実 ^ミ	ん時、我に応え給わん。 ^五 汝等怒れ、	し給えるを。主はわが彼に呼わり奉ら	とて空虚を好み、虚偽 ^五 を求むや。

うのであろう。――2) 小琴で伴奏すべし。――3) 通常この詩の内容は、アブサロムの謀叛に関するものとされている。そうとすれば詩篇第三と同じ事情の下に詠まれたものであるが、第五第九両節からわかる通り、これは晩の祈禱である。――4) 人々の頭に立つ高位高官など偉い人達をあらわす呼びかけ。――5) 彼らが彼を陥れるために云いふらした譏諷。ヘブレオ語本ではここ及び五節の末にセラとあり、その意味については詩篇第三の註三参照。――6) 旧約で「聖なる者」と云われているのは、自らその身を天主に仕えるため献げた者や、又は天主からそのために召された者で、従つてこの語は非凡な徳があることを意味するのではない。――7) ダヴィドは自分の相手達が、不本意ながらも自分に敵対せざるを得ないのに理由のあることを認める。しかし怒つても、その怒りを長く続けたりもしくはその表わし方を謬つたりして、罪を犯さないでほしいと云うのである。――8) 晩に罪を糾明し痛悔することを勧む。9) 清い靈魂と正しい志を以て献げる犠牲。

と、葡萄酒と、油とによりて、富みたり。¹⁰⁾ 九 我は直に安らかに眠りて休まん。そは主よ、汝奇しくも¹¹⁾ 我を希望に立たしめ給いたればなり。

第五篇

人々の不義に対し天主に祈る

一 終まで、¹⁾ 嗣産を得る女のために。²⁾ 二 ダヴィドの詩。
三 主よ、わが言に御耳を貸し給え、わが叫声を曉り給え。三 わが祈祷の声に御意を注め給え、わが王、³⁾ わが天主よ。
四 そは我、汝に祈らんとすればなり。
主よ、汝朝未明にわが声を聴き給わん。

¹⁰⁾ 敵はその富を恃まば恃め、我は天主を頼みとせん。
¹¹⁾ ヘブレオ語本「汝ただ独り」。

第五篇 1)「伶人頭(うたのかみ)に献ぐ」。2)昔の註釈者達の説によれば、天主の特別な恩寵を受ける女という以上は、ユデア教会、次いではキリストの教会を意味すると。しかし「エル・ハンヒロト」というヘブ、レオ語は、「ナハル」という動詞から来たものではなく、「笛に合せて」という意味で、詩を歌う時伴奏に用いられる楽器を示すとするのが、どう考えても本当らしい。3)自ら目に見える天主の御国の王たるダヴィドが目に見えぬ「諸王の王」に祈るのである。

五

五 朝未明に我汝の御前に立ちて仰ぎ見奉らん、⁴⁾ そは汝

六

不義を欲する天主に在さざるが故なり。⁶⁾ また悪しき者は

七

汝の御傍に住むことなく、不義なる者は汝の御眼前に留ま

八

ることなかるべし。⁷⁾ 汝は凡て不義を作す者を厭い給う、

九

凡て虚偽を語る者は、汝これを亡ぼし給わん。血⁵⁾ と欺瞞

一〇

との人は、主これを憎み給うべし。⁸⁾ されど我は、汝の御

一一

憐憫の豊かなるによりて、汝の家に入らん。我は汝を畏れ

一二

汝の聖殿に向かいて、⁶⁾ 拝まん。⁹⁾ 主よ、我を汝の義によ

一三

りて導き給え、わが敵ゆえに、⁷⁾ わが道を汝の御眼前に至

一四

らしめ給え。¹⁰⁾ 蓋し彼等の口には真実なく、彼等の心は空

一五

し。¹¹⁾ 二 彼等の咽喉は開ける墓なり、⁸⁾ 彼等はその舌をもて

一六

欺瞞を行ふ、主よ、彼等を審判き給え。彼等をしてその企

一七

図をやめしめ給え、その不敬の多きによりて、彼等を逐い

4) 天主に心を向けることを、う

わべにも表わすために、聖殿の

ある方に顔を向けた――5) 卑劣に

も犯した殺人罪。――6) この聖殿

とはガバオンにあつた幕屋か、

ノベにあつた契約の櫃のこと。

ダニエルもイエルサレムの方に

向かつて祈つた(但六・一〇)。

7) 何となれば、もし彼も罪に陥

つたら、敵が手を拍つて喜ぶだ

ろうから。――8) 開いている墓が

死のすみかであり、いつも新たに死人

を迎え入れるように、邪悪な者

のども、嘘や讒言を流布して

他人の死のもとになる。

出し給え。⁹⁾ そは主よ、彼等汝を怒らせ奉り
たればなり。三されど凡て汝に依り頼む者は
樂しめかし、彼等は永遠に喜び躍るべく、汝
彼等の中に住み給うべし。¹⁰⁾ また凡て汝の御
名¹¹⁾を好む者は、汝を誇りとせん、三そは汝
義人を祝し給うべければなり。主よ、汝は御
好意¹²⁾の楯¹³⁾もてする如く、我等に冠を被せ
給えり。

第六篇

主に御憐憫を乞う

一 終りまで、歌うために。¹⁾
ダヴィドの詩。²⁾
第八音に合せて。³⁾ 主よ、

9) かかる呪咀は、まず第一に呪いの云い方を用いた預言であり、次にかかることを願うのには教会の敵か天主の御憐憫を拒否していなければならぬ。—10) 彼らの保護者として。—11) ここその他多くの箇所で、天主の御名というのは、その御本質、限りなく愛すべきその御完徳をさす。—12) 愛に満ちた天主の御摂理。—13) 詩篇作者は普通の楯を意味するマーゲンという語の代りに、大楯を意味するシンナーという語を用いている。

第六篇 1) 詩篇第四の註一註二を参照。—2) ダヴィドがこの詩を作つたのは、詩篇第五十「憐み給え」の時代、即ち預言者ガドにいましめられて、道德上の惰眠から覚め、自分の罪の大なることを悟つた時と殆ど同じ頃であつたらしい。—3) 多くの釈義学者の

九	八	七	六	五	四	三
老^おいたり。^九不義^{ふぎ}を作^なす者^{もの}よ、悉^{ことごと}く我^{われ}を去^さ	眼^め憤^{いかり}怒^りに冥^{くら}みたり、我^{われ}は諸^{もろもろ}々の敵^{てき}の中^{うち}にて	や。^八我^{われ}は呻^{うめ}きつ^つつ勞^{はたら}きたり、夜^よ毎^{ごと}わが衾^{ふすま}	た、冥^{よみ}府^ふにありては、誰^{たれ}か汝^{なんじ}を讃^ほめ称^{たた}えん	よ、顧^{かへり}みて、わが魂^{たま}を救^{すく}い出^{いだ}し給^{たま}え、汝^{なんじ}の	主^{しゅ}よ、我^{われ}を癒^{いや}し給^{たま}え。^四わが魂^{たま}太^{いた}く怖^おじ惑^{まど}	を懲^こらし給^{たま}うなかれ。^三我^{われ}弱^{よわ}ければ、主^{しゅ}

信ずる所によれば、これは八の樂絃器をさすのではなく、寧ろ音樂の方で「オッタヴァ・バツサ」と称している一オクターヴ下の低音部を意味するのであつて、その莊重で悲しげな歌い方は、詩篇第六や第十一に甚だ適している。――⁴この詩篇はいわゆる痛悔の七詩篇（その内、六、三一、三七、五〇、一四二の各篇の作者はダヴィド、一〇一、一〇九の作者は不明）の一つ。――⁵力のこもる所である骨で全身を代表させてある。――⁶体の痛み

に魂の深い悩みが加わつた。――⁷私が憐みを受けるに値しているからではなく、あなたが憐み深くまします故に。――⁸作者は死後の世界として地獄のほかには、まだ救いを受けない夜見の国しか知らない。天国はキリストの御昇天まで、旧約の義人達に対して閉じられていた。――⁹憬れていた夜の休息さえ、かくの如く苦悩に變つた。

一〇 主わが願いを聴
 一 主わが泣く声を聴き給いたればなり。
 二 主わが祈禱を承け給えり。二わが敵はみな、赤面し
 三 容れ給えり、主わが祈禱を承け給えり。
 四 退きていと速かに恥じ入れよかし。
 五 いたく狼狽し、退きていと速かに恥じ入れよかし。

10) 彼らの企らみが水泡に帰したので。

第七篇

不義者に対し天主の正義に訴う

一 ダヴィドが、イエミニの子クシ¹⁾の言に由
 二 りて、主に歌いし詩。
 三 主わが天主よ、我汝に依り頼めり、すべて
 四 我を責むる者より、我を救い、我を助け出し
 五 給え、然らずば、我を贖い救うべき者のな
 六 きままに、彼獅子の如く²⁾わが魂を攫い往か
 七 ん。主わが天主よ、我もしかかる事³⁾をな
 八 し、わが手にもし不義あり、我もし我に悪

第七篇 1) クシは寧ろクスという方がいいが、この名は他の所に出て来ない。この人物をセメイと同一に見る人もある。(母下一六・五以下)。他の説によれば、クスというヘブレオ語はエチオピア人の卑称であつて、ダヴィドに無情冷酷であつたため、かく称せられたサウルをさすのであると。――2) 強くて残忍な相手を表わすのに聖書で屢々用いられる、よく当つてゐる譬喩。3) 私がしたといわれている事。

一五	一四	一三	一二	一一	一〇	九	八	七	六		
死の飛道具を用意し、その矢を火矢 ¹⁰⁾ となし給えり。一五 視よ、か	い給わん、 ⁹⁾ 彼御弓を引き絞 ^{しほ} りて、そを用意し給えり。一四 それに	彼、日毎に怒 ^{いか} り給うや。一三 汝等立ち歸 ^{かえ} るにあらずば、彼御劍を揮 ^{ふる}	より來 ^{きた} るなり。一二 天主は義 ^{ただ} しき審判者にして、強 ^{つよ} く、氣長 ^{きなが} に在 ^{まゐ} す。	を採 ^{さぐ} り給う天主よ。一一 正義の授助 ^{たすけ} は、心の直 ^{なお} き者を救 ^{すく} い給う、主	一〇 罪人の惡意 ^{あくい} は絶 ^た やされ、汝義人を引 ^ひ き立て給わん、心と腎 ⁸⁾ と	汝を囲 ^{かこ} まん。そのために、高處 ^{たかき} に歸 ^{かえ} り給え。九 主は民を裁 ^{さば} き給う。	汝の命 ^{なんじめい} じ給える御掟 ^{みおきて} によりて、起 ^た ち給え。八 さらば民の集 ^{つど} いは	起 ^た ち給え、わが敵の境界内 ^{さかいうち} にても崇 ^{あが} められ給え。主わが天主よ、	を地に蹂躪 ^{ふみにじ} り、わが譽 ^{ほまれ} を塵 ^{ちり} に埋 ^{うず} めよかし。七 主よ、御忿怒 ^{おんいかり} もて、	敵の前に空しく倒 ^{たお} れしめ給え。六 敵わが魂 ^{たま} を追 ^お い捕 ^{とら} え、わが生命 ^{いのち}	をなしたる者に報 ^{むく} いたることあらば、 ⁴⁾ 我をして応 ^{ふさ} わしく、わが

4) 自ら手を下して敵に復讐しようとする。5) 本節の終にセラとあり。詩篇第三の註三参照。6) 特にイスラエルの十二族、又は天主の教会。7) 天主はかような審判を行給う時、天の高きにある御座に登り給う。8) 腎は肉慾の潜む所とされている。9) ヘブレオ語本「天主は御劍をとぎ給う」。10) 燃える物質で包まれた矢で之を射る前それに点火した。

一六 の者は不正を宿し、悲哀を妊み、不義を産め
り。一六 彼、¹¹⁾ 坑をあけ、これを掘りたれど、
一七 その作りし坑に陥りたり。一七 彼の悲哀は已が
一八 頭に帰り、彼の不義はその脳天に下らん。¹²⁾
一八 我は主に、その義に由りて讚美を献げ、最
高き王の御名に讚歌唱い奉らん。¹³⁾

第 八 篇

感嘆すべき主の御業

一 終まで、¹⁾ 葡萄酒搾り器のために。²⁾ ダヴ
イドの詩。
二 主よ、我等の主よ、汝の御名は全地にあり
ていかに妙なるかな、そは汝の御稜威諸天の
上に揚りたればなり。³⁾ 三 汝、幼兒と乳吞兒

¹¹⁾ 罪人。――¹²⁾ これに対する例は洞穴の中のダニ
エルや窯の中の三少年。――¹³⁾ この詩篇は聖務日
禱に、聖会がその迫害者に対する祈とされてお
り、また罪もないのに虐げられていると感じて
いる人の個人的祈禱ともされている。

第八篇 ¹⁾ 詩篇第四の註一参照。――²⁾ ダヴィド
の家の人達がフィリスト人の町ゲトから持つて
来た調子か、または葡萄を取入れる楽しい気持
の時奏する様な調子で。實際この前書きの付い
ている三つの詩篇(八。八〇。八三。)は、楽しい
内容のものである。――³⁾ 自然の美しさを見て、

一〇	九	八七	六	五	四
汝の御名は全地にありていかに妙なるかな。 なんじみな ぜんち	通う海の魚も然り。 ¹²⁾ 主よ、我等の主よ、 かよ うみ うし り 12) しゅ われら しゅ	く、なおまた野の畜も、空の鳥も、海路を く なおまた の けもの そら とり うみじ	め、これを汝の御手作の上に立て、 ¹¹⁾ 万物 め、七 なんじみて わざ えん た 11) ばんぶつ	より卑き者に作り、これに榮と譽とを冠らし より ひく もの つく これに さかえ ほまれ かむ	を眷顧み給うや。 ⁹⁾ ただ僅かにこれを天使 ¹⁰⁾ を かんり たも 9) ただ わづかに これを てんし 10)
				んか、 ⁷⁾ 人 ⁵⁾ 人も何者なれば、汝これを記憶に んか、7) ひと 5) なんにもん なんじ きおく	留め給い、人の子 ⁸⁾ また何者なれば、汝これ とどめ たま ひと こ 8) なんにもん なんじ
				る ⁶⁾ 汝の天を、汝の据え給える月と星とを觀 る 6) なんじ てん なんじ す たま つき ほし み	んがためなり。 ⁵⁾ 四 それ、我汝の御指の作な んがためなり 5) 4 われなんじ おんゆび わざ
				し給えり、これ、敵と復讐者とを滅ぼし給わ し たま 4 てき かくしゅうや ほろ たま	と ⁴⁾ の口により、汝の敵ゆえに、讚美を全う と 4) のく により なんじ てき さんび まうと

作者が思わず発した感嘆の叫び。自然界の幾多の声は主の御業をたたえている。――4) 子供たちですら、主を知り之を頌える。キリストはここをマテオ二一・一一に引用しておいでになる。

5) ヘブレオ語本「黙せしめんためなり」。――6) 芸術家のように、巧みな御指で形成し給うた。

7) この詩篇は多分夜作られたのである。

8) 人の子、すなわちベン・アダムはやはり卑下謙遜の呼び名。――9) 無上の恵豊かな御眷顧は御託身であつた。――10) ヘブレオ語では「エロヒム」これは七十人訳でもラビの註釈でも、「天使」の義に解してある。――11) 人間が自然的に自由意志を具えている点で――また超自然的に天主に似ていることに由つて。――12) 最小の動物から最大の怪物に至るまで。

第九篇 (上)

天主裁き給えかし

一 終りまで、¹⁾ 御子の秘事に就きて。²⁾ ダヴィドの詩。
 二 主よ、我心を尽して汝を頌え、汝の奇蹟³⁾ を悉く物語らん。
 三 我汝によりて喜び躍り、汝の御名に讃歌唱わん、至高き者よ
 四 わが敵後を見せん時、弱りて汝の御面前より亡び去るべし。
 五 そは、汝がわが権とわが訴訟、云分とを支持し、公平に裁く
 者として、御座に坐し給いたればなり。⁴⁾ 六 汝、異邦人等を責め
 給いしに由りて、不敬なる者亡びたり、汝、その名を世々永久
 に抹殺し去り給えり。七 敵の剣は終末まで力失せたり、その諸
 市は汝これを毀ち給えり。その記憶は響を立てて消え果てぬ。
 八 されど主は永久に常住し給う。彼裁かんとてその御座を設
 け給えり、九 しかして自ら公平もて地球を裁き、⁵⁾ 正義もて民

第九篇 1) 詩篇第四及び第五の註一参照。2) ダヴィドの同時代の人々が知つていた古い或歌の冒頭の語(ムート・ラツベーン)で、その旋律を詩篇第九に適用したのに相違ない。3) 自然界における。また選民の歴史における。4) ダヴィドとその相手とを正式に裁くために。5) ただ神政政体の国民ばかりでなく。

一〇 を裁き給わん。一〇 かくて主は貧しき者⁶⁾の避難場、艱難
 二 の時の折よき援助者となり給えり。二 されば汝の御名を
 三 知る者は、汝に依り頼めかし、そは、主よ、汝を求むる
 三 者は、汝これを棄て給わざればなり。三 シオン⁷⁾に住み
 三 給う主に歌唱い、異邦人等の間にその御企画を告げよ。
 一四 一三 そは血を求め給う彼⁸⁾、彼等を憶え居給いて、貧しき
 一四 者の叫びを忘れ給わざればなり。一四 我を憐み給え、主よ
 一五 我が敵より受くる恥辱⁹⁾を照覧し給え、一五 我を死の門¹⁰⁾
 より救いあげ給う者よ、これ、我が娘なるシオンの諸
 門¹¹⁾にて、あらん限り汝の讚美を宣べ伝えんためなり。
 一六 一六 我は汝の御救拯ゆえに¹²⁾喜び躍らん、異邦人等は己が
 設けし滅亡¹³⁾に陥り、己が隠し置きたるその民に足を捕
 一七 られたり。一七 主は審判を行い給う時¹⁵⁾知られ給わん。

6) 虐げられている者。――7) ダヴィ
 ドは契約の櫃をシオンに安置して
 いた。――8) 例えば兄弟殺しのカイ
 ンに下つた天罰で示されたように
 創九・五参照。――9) 患難。――10) 作
 者は夜見の国の門が地の深い処に
 あると考えている。――11) 集会や裁
 判は門の所で開かれた。――12) 汝が
 我に与え給うた御救いゆえに。
 13) ヘブレオ語本「坑」。14) 火器の
 使用前には、野獸を捕獲するのに
 エジプトの絵にある如く、強い投
 毬を使うのが普通であつた。今な
 お野生の象は、馴らした象を使つ
 ておびきよせ、隠れている大胆な
 男達が気づかれぬようにその脚に
 繩の毬をはめて捕える。――15) その
 御審判によつて。

一八 罪人は己が手の作りしものにかかれり。¹⁶⁾ 一八 罪人は冥府に
 陥れかし、天主を忘るるすべての国人も亦然れ。^{一九)} 実に、
 貧しき者いつまでも忘れらるることはあらず、貧しき者の
 忍耐¹⁷⁾も永久に空なることはあらず。^{二〇)} 起ち給え、主よ、
 人間をして増長せしめず、異国人等をして、汝の御眼前に
 審判を受けしめ給え。^{二一)} 主よ、彼等の上に立法者を立て給
 え、これ、異邦人等が人間たる身の程を知らんためなり。¹⁸⁾

第九篇 下 (第十篇) ヘブレオ人による第十の詩篇

一 何なれば主よ、遙かに退きて、患難の時に、折よく顧み
 給わざるぞ。^{二)} その間に不敬なる者高ぶりて、貧しき者火
 の苦しみを嘗めさせられ、前者等が廻らす奸計にかかりた
 るを。¹⁹⁾ 三 実に罪人その魂の欲望のままに誇り、不義なる者
 称えらる。²⁰⁾ 四 罪人は主を怒らせ奉れり、その御忿怒の大い

¹⁶⁾ ヘブレオ語本はここにヒツガ
 ヨン、即ち「琴の彈奏」及びセ
 ラ即ち歌隊交替と附記している
¹⁷⁾ ヘブレオ語本「苦しむ者の望」
¹⁸⁾ ヘブレオ語本ではここに、前
 に屢々出て来たセラ(例えば本
 篇一七節参照)が附記してあり
 次の節から新しい篇、即ち第十
 篇が始まるが、第九第十兩篇は
 文が似ている所から、七十人訳
 及びヴルガタ訳では、兩方を合
 併している。――¹⁹⁾ 義人も苦しま
 なければならぬが、不敬なる者
 が終局の勝利を得ることは決し
 てない。――²⁰⁾ ヘブレオ語本「誇
 る」。

五 なるに由りて彼これを顧み奉らじ。五 天主はその眼中にあらず、その道は
 六 いつの時にも穢けがれたり。汝の御審判はその面前より排除けられたり。彼その
 七 諸々の敵を押し拉がん。六 彼その心の中に謂えり、「我は禍なくして、代々よ
 八 り代々に至るまで揺ぎなかるべし。」と。七 その口は、呪咀と侮辱と欺瞞とに
 九 満ち、その舌の下には、悩ましと苦しめとあり。八 彼は罪なき者を殺さんと
 一〇 て、富める者と物蔭に窺いつつ坐す。九 その眼は貧しき者を狙えり、彼は獅
 二 子が洞ほら21)にある如く、物蔭に待伏せす。その待伏せするは、貧しき者を捕え
 三 んため、貧しき者をおびき寄せて捕えんためなり。一〇 彼はこれを罫わなにかけて
 四 倒さんとす、22) 屈み居りて、貧しき者を制せんため、襲いかからんとす。
 五 二 実に彼その心の中に謂えらく、「天主は忘れたり、いつまでも見ざらんと
 六 て、その面を背けたり。」23) と。三 起ち給え、主なる天主よ、汝御手を挙げ
 七 給えかし、貧しき者を忘れ給うなかれ。三 何の故にか不敬なる者天主を怒ら
 八 せ奉りたる。蓋はその心の中に「彼は罰せじ。」と云いたればなり。一四 汝は

21) ヘブレ
 オ語のソ
 一クは本
 来「密林」
 の義。
 22) 狩人の
 たとえ。
 23) 「世界
 は盲目的
 な偶然に
 支配され
 ている」
 という悪
 人の考え

一五 照覧し給う、実に汝はその悩ましと苦しめとを見守り給う、そは彼等を汝の御手に捕え給わんがためなり。貧しき者は汝に委ねられたり、汝は孤兒に援助者となり給わん。一五 罪人と心根悪しき者との腕を挫き給え、その罪を探し求めんも、²⁴⁾ 見当らざるに至るべし。一六 主は永遠に、世々の世々かけて、王たり給わん、汝等異邦人は彼の地より亡び去るべし。²⁵⁾ 一七 主は貧しき者の望みを聴き容れ給えり、汝の御耳は彼等の心の念願を聴き給えり一八 そは、人が地上にて最早思ひあがりて己を大とせざるよう、孤兒と虐げられたる者と共に正義を帰せんがためなり。

²⁴⁾ 罪が償われて、最早主の御目に見えなくなる。
²⁵⁾ カナアン人がそらなつたように。

第十篇 (第十一篇)

義人は安し

一 終まで¹⁾ ダヴィドの詩。²⁾
二 我は主に依り頼む。如何なれば汝等わが魂に云うや、「雀の如く、山に³⁾ 移り往け。」

第十篇 1) 詩篇第四第五の註一参照。 2) サウルが彼をつけ狙つた始めの頃の作。 3) 身を護り得る処に。 一 二節乃至四節にあるのは、人がダヴィドに勧めたこととその理由。

三 蓋は、視よ、罪人等、暗処にありて心の直き者を射留め
 四 んと、弓引絞り、箠に矢を備えたればなり。 四 実に、汝が
 五 成就したるものは、彼等の毀つ所となれり。さるを義人⁴⁾
 五 は何をかなしたる。」と。 五 主はその聖なる御殿⁵⁾に在す、
 六 主の御座は天にあり。その御眼は貧しき者を眷顧み、御臉
 六 は人の子等を査べ給う。 六 主は義しき者と不敬なる者とを
 七 査べ給う、されど不義を好む者は、その魂を憎む。 七 彼は
 八 罪人等の上に、罌を雨と降らし給わん、火と硫黄と疾風と
 は、彼等の酒杯の分なり。⁶⁾ 八 それ、主は義しく在して義を
 好み給う。その御顔は公平を照覽し給えり。⁷⁾

第十一篇 (第十二篇)

高ぶる仇に対して

一 終りまで、¹⁾ 第八音に合せて。²⁾ ダヴィドの 第十一篇

¹⁾ 詩篇第四の註一参照。 — ²⁾ 詩篇

⁴⁾ ダヴィド。 — ⁵⁾ 天国の聖殿に。この天の御住居から天主は、王として、審判者として、人の世の出来事の成行を見守つておいでになるのである。 — ⁶⁾ この天罰の光景はソドマとゴモラとの滅亡から取つてある。酒杯は飲むためのみならず箠を抽くための道具。それで聖書ではよく或人に当る箠、即ち運命の意味に用いてある。詩一五・五。マテオ二六・三九参照。 — ⁷⁾ ヘブレオ語本「直き者はその御顔を仰ぎ見ん。」

詩^し。3)

二 主よ、我を救い給え、蓋し聖なる者^{もの}4) 滅じ、人の

三 子等の間より、信実失せ行きたり。三人々各々その

四 近き者に空事を語り、欺く口唇と二心もて⁵⁾ 語れ

五 願わくは主欺く口唇と、大言壮語する舌とを

六 悉く絶やし給え。五そは云えり、「我等の舌を大い

七 に揮わん。我等の口唇は我等の有なり。6) 何者か我

八 等の主たる。」と。六「乏しき者の惨しきと、7) 貧しき

九 者の呻吟との故に、今我起たん。8)」と主云い給う、

一〇 「我、救拯を齎し、これを親しく扱わん。七 主の御

一一 言は純き言^{ことば}なり、火に鍊えられ、土を分たれ、10) 七

一二 度^{たび}11) 淨められたる銀なり。八 主よ、汝は我等を恙な

一三 からしめ給わん、永久にかかる輩より我等を護り給

第六の註三参照。13) この詩篇はサウ

ルのダヴィド迫害時の、もしくはアブ

サロム叛逆時の事情によく合致する。

4) ヘブレオ語ハーシド、「敬虔な人」

の意。5) ラテン語 in corde et corde

よく出てくるヘブレオの云い方で「二

心一の義。6) 我らの舌を思いのまま

に使うのは我々である。我々の前の時

代よりも現代において、不敬なる者は

こういう云い方をしているではないか

7) 作者の祈りに対する天からの答。

8) 彼らが勝利を得たと誤信している内

に、天主の彼を滅ぼし給う時が近づい

て来る。9) 欺瞞のない言葉。10) こ

の銀は夾雑物のない純粹なもの、貴重

なもの象どり。11) 完全なことや完

成をあらわす数。

わん。^九不敬なる者徘徊り歩
く、されど汝の高きによりて
汝人の子等を殖やし給えり。¹²⁾

¹²⁾六節の天主の御言葉は、虚偽のない信賴すべきものであるから、たとい不敬なる輩が沢山いて、天主の御許容により、僭越にも思いあがつているとしても、敬虔な人々（二節）は御祐助を受けるであらう。

第十二篇 （第十三篇）

悩める義人の嘆き

一 終まで、¹⁾ ダヴィドの詩。²⁾

いつまでぞ、主よ、汝終まで我を忘れんとし給う

や。いつまで、汝我より御面を背けんとし給うや。³⁾

二 我いつまでわが魂に計画を、⁴⁾ わが心に日毎悲

哀を、抱くべきぞ。^三 わが敵いつまでわが上にあげ

られてあるべきぞ。^四 顧みて、我に応え終え、主よ、

わが天主よ。わが眼を照らし給え。^{五)} そは我が死に

て眠らざるため、^五 わが敵が「我彼に勝てり。」と

第十二篇 1) 詩篇第四の註一参照。

2) この詩篇もやはりサウルの迫害時代のもので、殊にその末期、即ちダヴィドのつらい事態が長びき且悪化して、もはや地上において苦しみが果てそうもなくなつた時の作であらう。――3) いわば私に対して怒つておいでになるように。――4) どうしたら助かることができるかと。――5) 生きる力が失せるにつれて、目の光輝もなくなる。

六
云わざるためなり。我もし揺るぎたらば、我を悩
ます者喜び躍らん。⁶⁾六されど我は汝の御憐憫に依
り頼めり。わが心は汝の御救拯によりて喜び躍ら
ん、我は善きものを我に賜う主を讃め、至高き主
の御名に頌歌唱わん。⁷⁾

第十三篇 (第十四篇)

不信なる者に

一 終まで、¹⁾ ダヴィドの詩。²⁾
愚なる者はその心の中に云えり、「天主なる者な
し。」と。彼等は腐敗せり、その意図によりて憎
むべき者となれり、善をなす者なし、ただ一人だ
になし。³⁾二主は天より人の子等を照覧し給えり、
誰か悟る者、または天主を求むる者ありやを見ん

⁶⁾天主の友に敵が勝つのは、同時に天主御自身に勝つのである。——⁷⁾この最後の五語はヘブレオ語本にはなく、後代の典礼的添加である。

第十三篇 1) 詩篇第四の註一参照。

2) この製作の時代はわからないが、細部までかなりよく、アブサロム叛逆の頃に適合する。詩一三は詩五二と殆ど同じである。最も重要な相違は五二・六であつて、これは一三・六のテキストを改変したのである。——³⁾創六・五、一二にあるような例外はここでは看過されている

とてなり。

三 彼等は皆道をはずれたり、おしなべて無用の者となりた

り、⁴⁾

善をなす者なし、一人だになし。彼等の咽喉は開きたる墓なり、

彼等はその舌もて欺むき行いぬ、その口唇の下には蝮の毒あり。彼等の

口には誹りと苦みと満てり、その足は血を流すに速し。彼等の途には滅

亡と禍とあり、平和の道は彼等の知らざる所なり。その目の前には天主

を畏るる念なし。四 不義を作す者、パンを食う如くわが庶民を食い尽す

者、⁵⁾ 皆悟らざる者にあらずや。五 彼等は主を呼び頼みたることなし、

恐るることなかりし時に、⁶⁾ 恐怖のあまり震い慄きたり。六 蓋は主、義

しき類の人々の中に在せばなり。汝等は貧しき者の企てを破りたり、さ

れど主は彼の希望にて在す。七 シオンよりイスラエルに救拯を賜うべき

は誰ぞ。主が御民の捕囚を除き給わん時、⁷⁾ ヤコブは歡び、イスラエル

は楽しまん。

4) 善業の好き果を結ばずして。

5) 民の膏血を搾る者。——6) 例え

ば、この世の持物や生命までも

失うのではない

かなどと、恐れ

る理由がない場

合に。——7) この

挿入句は、多分

バビロンの捕囚

の間にこの詩に

加えられたので

あるう。

第十四篇 (第十五篇)

主の家に入るに足る者

一 ダヴィドの詩。

主よ、汝の幕屋に住まうべきは誰ぞ、また汝の聖なる

山に憩うべきは誰ぞ。¹⁾ 二 汚れなく歩み、義しきを作す

者、^三その心に真実を云う者、その舌もて欺むき行わざ

る者、またその隣人に悪をなさず、その隣人に侮辱を加

えざる者、^四その目に悪人を無と見なせど主を畏るる人

々を敬う者、その隣人に誓いて欺かざる者、²⁾ 五 その金を

高利目的に貸さず、³⁾ 賄賂を受けて罪なき者を害わざる

者、これなり。かかる事を行う者は、永久に動搖なかる

べし。

第十四篇 1) この詩篇は契約の櫃

の奉遷の際(母下六参照)他の詩篇と共に歌われたものである。

これを詩一一九―一三四の巡礼歌の中に数える人も少くない。

2) これらの語は、利五・四をさす。

3) 選民仲間に金を貸す者は、利息を取つてはならなかつた(出二二・二四。利二五・三六以下)。

第十五篇 (第十六篇)

天主に身を獻げたる人

一 ダヴィドの標題自記。¹⁾

我を護り給え、主よ、そは我

汝に依り頼みたればなり。

二 我は主に云えり、「汝はわ

が天主なり、実に汝はわが善

き物を要し給わず²⁾」と。

三 彼はその地³⁾の中なる聖者

等に対して、わが彼等に望め

る所を、悉く奇しく満し給え

り。^四 彼等の弱き所⁴⁾は殖え

たり、然る後彼等は急げり。

第十五篇 1) ヘブレオ語「ミクタム」。これはすべてダヴィド

の作とせられている六つの詩篇の冒頭に記されているが、意味

はかなり曖昧である。七十人訳では *strophos psalms* で「柱の銘」

の義。即ちこの詩は永久に遺す記念碑に刻むに最も応わしいと

いうほどの意味。この美しい歌は聖職者の詩篇である。最初の

数節は剃髮式(トンスラ)の行われる間に歌われ、第五節は司

祭敍品のためや修道誓願を立てたり更新したりする際に用いら

れる。聖ペトロは第一〇節を、メシアに当るものとして引用し

ているが(徒二・三一)、一九三三年七月一日の聖書委員会の

決定もこれを確認している。2) 天主は御自らだけで完全に幸

福にまします。ヘブレオ語本「我にとりての善き物は汝を措い

てほかになし(汝御独りのみわが最高の善き物にて在す)。」

3) 選ばれた民の居るべき聖地。今は選ばれた人に入るべき教会

4) 罪、偶像礼拝をさす。

五 我^{われ}は血祭^{ちまつり}のために彼等^{かれら}の集会^{つどい}を召集^{よびあつ}めじ、またわ
 が口唇^{くちびる}によりて彼等^{かれら}の名^なを思い出^{いだ}さじ。⁵⁾ 五 主^{しゅ}こそ
 わが嗣産^{ゆかり}の、わが酒杯^{さかづき}の、分^{ぶん}なれ。⁶⁾ 汝^{なんじ}こそ我^{われ}に
 わが嗣産^{ゆかり}を返^{かえ}し給^{たま}うべき者^{もの}なれ。⁷⁾ 六 準^{はかりなわ}繩⁸⁾ はわが
 ため美^{うる}わしき所^{ところ}に当^{あた}たれり、実^げにわが嗣産^{ゆかり}、我^{われ}に
 は美^{うる}わし。⁷⁾ 我^{われ}は諭告^{さとし}を我^{われ}に授^{さづ}け給^{たま}える主^{しゅ}を讃^ほ
 め奉^{まつ}らん、剩^{あまつさ}えわが賢^{むらと}も夜^{よる}に至^{いた}るまで我^{われ}を促^{うなが}した
 り。⁸⁾ 我^{われ}は常^{つね}に主^{しゅ}をわが目前^{めづまへ}に置^おく、そは我^{われ}の動^{うご}
 かさるることなきよう、彼^{かれ}わが右^{みぎ}に在^{ましま}せばなり。¹⁰⁾
 九 この故^{ゆえ}にわが心^{こころ}は樂^{たの}しみ、わが舌^{した}は喜^{よろこ}べり、な
 おわが肉^{にく}も希^き望^{ぼう}に安^{やす}んずべし。¹⁰⁾ 一〇 そは汝^{なんじ}わが魂^{たま}を
 冥府^{よみ}に棄^すておき給^{たま}わす、汝^{なんじ}の聖者^{ひじり}に腐敗^{くされ}を見^みるこ
 とを容^{ゆる}し給^{たま}わざるべければなり。¹¹⁾ 二 汝^{なんじ}は我^{われ}に生^{せい}

5) 彼らという代名詞は偽の神々をさす。
 ユデアの律法は實際偽神の名を口にす
 ことを禁じていた。――6) 詩一〇・七とそ
 の註参照。――7) 旧約の司祭レヴィ人が天
 主の特別な相続分であり、従つてまた主
 が彼らの特別な相続分であらせられたよ
 うに、新約の聖職者達が天主を自分の特
 別な相続分を選べば、それに対して主も
 また彼らを全く御自分のものとお認めに
 なるのである。――8) 土地不動産の分配は
 はかり繩を張つて行つた。――9) 地上のす
 べての宝の空しさと、ただ天主のみを有
 する幸福とを悟るための。――10) 徒二・二
 五。――11) 「私の魂はよみに留まらず、わが
 体は腐敗せぬであらう。」この言葉では、
 もはやダヴィドは前の各節にあるように
 ただ苦しみや誘惑を受け給う(マテオ四
 ・八。路四・七参照)メシアの前表であ

命の道¹²⁾を知らせ給えり。汝は我
に汝の御顔を仰ぐ喜びを満たし給
わん。汝の右には終に至るまで樂
しみあり。

第十六篇

(第十七篇)

敵の手より救われんことを祈る

一 ダヴィドの祈祷。¹⁾
主よ、わが正義²⁾を聴き容れ、わ
が懇願に御意を留め、欺く口唇に
よらざるわが祈祷に御耳を貸し給
え。二 御顔より³⁾わが宣告⁴⁾出で
汝の眼は公平を見給えかし。三 汝
わが心を試み、夜にこれを訪れ、⁵⁾

るのみならず、主その方になつて、その御肉身の復活を予
言している。徒二・二五以下、一三・三五によれば、これ
らの言葉はイエズス・キリストの御復活によつて成就した
¹²⁾ 天主における生命への道。即ち天国の永生に至る道。

第十六篇 1) ダヴィドはすぐ助けて頂く必要あり、声を
大にしてそれを天にお願いする。つぶさに見れば、この詩
もサウルの迫害中、もつと詳しく云えば、母上二三・二五
以下に記されている苦難の日々、即ちダヴィドが、ヘブ
ロンの東南マオンの荒野に隠れていた頃の作であるらしいこ
とがわかる。――2) 私の正しいお願い。――3) 汝の御前より。
または全知の汝の明らかに見給う御眼より。――4) 私に有利
な宣告。――5) 夜は懲らしめや不幸の象徴。

火もて我を験し給いたり、⁶⁾ されど不義はわが衷に見あたらざりき。

四 わが口人々の業を語らざらんため、我、汝の口唇の御言に由りて、⁷⁾

難き道を守れり。五 わが歩みを汝の徑に終始せしめ給え、これわが足

のよろめかざらんためなり。六 天主よ、汝我に聽き給いたれば、我

呼わりたり、我に御耳を傾けて、わが言を聽き容れ給え。七 汝に依り

頼む人々を救い給う者よ、汝の妙なる御憐憫を示し給え。八 汝の御右

手⁸⁾に抗う者より我を護り給え、御眼の瞳の如くに。御翼のかげに我

を庇い給え、九 我を悩ましたる不敬なる者の面前にて。わが敵わが魂

を囲み、¹⁰⁾己が膏を閉鎖せり、⁹⁾ その口は高ぶりて語れり。二 彼等は我

を逐い出し、今や我を囲み、地に倒さんと、目を注けたり。三 彼等は

獲物を待ち構えたる獅子の如く、また物蔭に居る若獅子の如く、我を

捕えたり。三 主よ、起ち給え、彼¹⁰⁾に先んじて之を倒し給え。わが魂

を不敬なる者より救い、汝の御劍を¹¹⁾汝の御手¹¹⁾の敵より挽ぎ放ち給

6) 患難による試鍊

7) 汝の聖なる御掟

によりて。

8) 天主の御右手は

サムエルの注油に

よりダヴィドを王

に挙げた。故にわ

が敵はその御右手

に逆らう者である

9) 心の冷酷無情を

あらわすたとえ。

申三二・一五、百

一五・二七参照。

10) 信仰のない者。

11) 汝が御劍を持つ

ておいでになるそ

の御手。もしくは

汝の御手もて彼ら

え。主よ、彼等を地の少数より別ちてその生命を
 取り給え。¹²⁾ 彼等の腹には汝の隠し給えるもの¹³⁾
 満てり。彼等は子に飽きたり、余れるをその幼兒
 に遺せり。^{一五}されど我は、義にありて汝の御眼前
 に現れん。¹⁴⁾ 汝の御光榮の顯れん時、我、満足る
 べし。

第十七篇 (第十八篇)

敵の手より救われたる感謝

一 終まで、¹⁾ 主の下僕²⁾ ダヴィドの作。
 彼主が己をそのすべての敵の手より、またサウルの手より
 救い給いし日に、³⁾ この歌の詞を主に申したるなり。即ち
 いわく、主よ、わが力よ、我汝を愛し奉らん、主はわ
 が支柱、わが避難所、わが救い主なり。わが天主はわが援

より、汝がこれに与え給える剣をもぎ放
 ち給え。――¹²⁾ 悪人をして、少数の義人の
 群を支配せしめ給うなかれ。――¹³⁾ この世
 の宝。――¹⁴⁾ ヘブレオ語本「我汝の御顔を
 見ん」。これはこの世では明らかに見る
 ことが出来ないが、死後天国では明瞭に
 見られる。

第十七篇 1) 詩篇第四第五の註

一 参照。――2) この語は既にアブ
 ラハム、モイゼ、ヨズユ、及び
 ヨブに用いられた榮ある呼名。
 3) この立派な感謝の祈は母下二
 二、ダヴィドの最後の言葉の前

助者なり、されば我之を頼み奉らん。彼はわが庇護
 者、わが救いの角、⁴⁾ わが引受者に在す。⁵⁾ 我、讃
 称えつつ主を呼び奉らん、さらば我わが敵より救わ
 るべし。^五 死の苦しみ我を囲み、不義の激流⁶⁾ 我を
 怖じ惑わしぬ。^六 冥府の苦しみ⁷⁾ 我を包み、死の畏
 不意に我を捉えたり。^七 我患難の裡に主を呼び頼み、
 わが天主に叫びしに、彼その聖殿より⁸⁾ わが声を聞
 き給えり、御眼前におけるわが叫びは、御耳に入り
 しなり。^八 地は震い慄き、⁹⁾ 山々の基は揺らぎ動き
 たり、そは彼、これに對して怒り給いたればなり。
^九 その御忿怒に煙立ち上り、その御面よりは火燃え
 出で、これによりて炭火熾れり。¹⁰⁾ 彼は天を傾け
 て、降り給いぬ、¹¹⁾ その御足の下には暗闇ありき。

にもある。多分彼の晩年に出来たもの
 であろう。——⁴⁾ この譬喩はおもに野生
 の牡牛から採つたもので、その角は恐
 るべき武器である。申三三・一七。詩
 二七・七—八など参照。——⁵⁾ 二、三、
 両節には、敘述を一層明瞭にするため
 に次第に語の強さと味とを増して、譬
 喩が重ねてある。——⁶⁾ 豪雨で急に氾濫
 した山間の川は、傾斜の急な谷間では
 屢々人畜をこの上ない危険に陥れる。
⁷⁾ よみは死者のすみか。ダヴィドを毘
 に追いこもうとする狩人に象どつて述
 べてある。——⁸⁾ 天から。——⁹⁾ ダヴィド
 与えられた天主の御祐助が、八一—一七
 節に天主の御出現の如く述べてある。
¹⁰⁾ 天主の御怒りが御胸の内に燃える火
 に見立ててある。——¹¹⁾ 荒天の時には雲
 が垂れさがるように見える。

二 かくて智天使に乗りて飛び、¹²⁾ 風の翼にて翔り、¹³⁾ 暗闇をその覆とな
 し、¹⁴⁾ 空の雲の暗き水を躬に纏いてその幕となし給えり。¹⁵⁾ 其の御眼前
 なる光輝に、雲は雹と炭火¹⁶⁾とを伴いて進めり。¹⁷⁾ 主天より雷霆を轟か
 し給えり、至高者御声を発し給えり、雹と炭火とあり。¹⁸⁾ 彼、御矢を放
 ちて、彼等¹⁹⁾を打ち散らし、電光を繁くして彼等を怖じ惑わせ給えり。
 一六 時に水の底現れ²⁰⁾ 世界の基礎露出せり、主よ、汝の御叱咤により、
 御忿怒の息吹²¹⁾によりてなり。²²⁾ 彼高処より御手をさしのべ、我を捉え
 て大水²³⁾より引き出し、一八 わが最強き敵と、我を憎む者等とより、我を
 救い出し給えり、彼等我にまさりて強かりければなり。²⁴⁾ 彼等はわが患
 難の日に我を襲いしが、主わが保護者となりて、²⁵⁾ 我を広き所²⁶⁾に連れ
 出し給えり、その我を救い給いしは、我を嘉し給えるに由りてなり。
 三 主はわが義しきに応じて我に報い、わが手の淨きに從いて我に酬い給
 わん、²⁷⁾ 三 そは我主の道を守り、わが天主に背きて不敬の振舞をなしたる

12) 天主はケルビ
 ムの搬ぶ玉座に
 乗り給う。出二
 五・一八参照。
 13) あらしの黒雲
 のこと。——14) 電
 光。——15) ダヴィ
 ドに仇する者。
 16) 母下二二参照
 海の底。ダヴィ
 ドが落込んだ患
 難の象徴。
 17) 烈風の擬人化
 18) 不幸の大波。
 19) 安全な所。

二三 ことなければなり。三三 実にそのすべての御規定はわが眼前にあり、我は
 二四 その義しき事を捨てしことなかりき。二四 我は彼の御前に汚点なく、不義
 二五 より躬を守らん。二五 されば主はわが義しきに応じ、御眼に映りしわが手
 二六 の淨き²⁰⁾に従いて、我に報い給わん。二六 汝は聖なる者に対しては聖に、
 二七 罪なき者に対しては罪なく在し、二七 直き者に対しては直く在し、僻む者
 二八 に対しては僻み給わん。²¹⁾ 二八 実に汝は賤しき民を救い給わん、されど高
 二九 ぶる者の眼はこれを卑くし給うべし。二九 主よ、寔に汝はわが燈火を輝か
 三〇 し給う、わが天主よ、わが暗黒を照らし給え。²²⁾ 三〇 そは我汝によりてこ
 三〇 そ誘惑²³⁾より救われ、わが天主によりてこそ垣を越ゆべければなり。²⁴⁾
 三一 わが天主は、その道きよく、主の御言は火に験されたり。彼はすべて
 三二 之に依頼む者の保護者にて在す。三二 そもそも主を他にして誰か天主なる
 三三 また我等の天主を外にして誰か天主なる。三三 天主こそ我に力を帯せしめ
 三四 わが道を汚れなからしめ給える者、三四 わが足を鹿の如くなし²⁵⁾ 我を高処

20) 手の淨きとは
 その業その行い
 に罪なきことを
 云う。 — 21) 天主
 の御賞罰は人の
 業の如何による
 22) ダヴィドの生
 涯中暗くなるこ
 とがあると、い
 つも主の御祐助
 の光が彼を照ら
 した。燈火は繁
 榮の自然的象徴
 23) 敵の攻撃。
 24) 母下二二・三
 ○参照。 — 25) 敏
 速は戦士に大切
 な性質。昔は殊

三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六

に立たせ給う者、²⁶⁾ 三三 わが手に戦うことを教え給う者なれ。汝はわが腕
 を青銅の弓の如くになし、²⁷⁾ 三六 我に御救拯の御加護を垂れ給えり。汝の
 右手は我を支え、汝の懲戒は終まで我を矯正さん、汝の懲戒、これこそ
 我を教うべきなれ。三七 汝はわが下なるわが歩みを広くし給えり、²⁸⁾ され
 ばわが足弱らざるなり。三八 我はわが敵を追いて、これに追いつかん、し
 かして彼等が滅ぶるまでは帰らじ。三九 我は彼等を粉碎せん、彼等は起つ
 ことを得ざるべく、わが足下に倒るべし。四〇 汝は戦鬪のため我に力を帯
 せしめ、我に逆い立ちし者等をわが下に倒れしめ、四一 わが敵をして我に
 背を向けしめ、我を憎みし者等を滅ぼし給えり。四二 彼等は主に向かいて
 叫びしが、これを救う者なく、これに応うる者なかりき。四三 我は彼等を
 風の前の塵の如くに粉碎し、巷の泥の如くに蹂躪らん。四四 汝は我を民の
 争い²⁹⁾ より救い出し、我を立てて異邦人の頭となし給わん。³⁰⁾ 四五 わが知
 らざりし民我に臣事え、耳に聞くや否や我に従えり。四六 異邦人の子等は

にそうであつた
 26) 母下二二・三
 四。— 27) しなや
 かで強くする。
 28) 楽に歩めるよ
 う広い街路に導
 き給うた。
 29) 殊にアブサロ
 ムの叛逆の時そ
 うであつた。
 30) 実際当時第一
 の勢盛んな王と
 なし給うた。

四七 我に虚偽を云えり、³¹⁾ 異邦人の子等は衰えて、その道よりよろめき
 出たり。主は活き給う、わが天主は祝せられさせ給え、わが救拯
 四八 の天主は崇められさせ給え。天主よ、汝、わがために仇を報い、
 四九 わが下に諸民を服せしめ給える者よ、わが怒れる敵より我を救い給
 五〇 う者よ。汝は我に逆い起つ者等の上に我を挙げ、不義の人³²⁾ より
 五一 我を助け出し給わん。この故に、主よ、我は異邦人の中にて汝
 を頌え、汝の御名に讃歌唱わん。³³⁾ 汝はその王に大いなる救いを
 賜い、その受膏者³⁴⁾ ダヴィドに、またその裔に、世々に至るまで御
 憐憫を垂れ給う者なり。

第十八篇 (第十九篇)

被造物界に現われたる主の栄光

一 終まで、¹⁾ ダヴィドの詩。
 二 諸天²⁾ は天主の栄光を語り、蒼穹はその御手の業を告ぐ。三 昼は

31) 無理じいされた全
 くらわべだけの服従
 32) おもにサウル。
 33) 羅一五・九。
 34) この詩篇はメシア
 的意義を有し、天に
 昇り、世を治める君
 と立てられ給うた神
 人の感謝の歌である

第十八篇 1) 詩篇第
 四第五の註一参照。
 2) ダヴィドの「最も

四 昼に言葉を発し、夜は夜に知識を示す。³⁾
 五 その声の聞えざる、話もなく言もなし。⁴⁾
 六 その響は全地に及び、その言は世界の果にまで至れり。⁵⁾ 大彼⁶⁾ その帷幕を日の中に設け給えり、日はその闇を出る花婿の如く、道を走る巨人の如く雀躍したり。⁷⁾ 七 その出るや、天のこの涯よりし、その廻りゆくや、かの涯に及ぶ。その熱より身を隠し得る者はあらざるなり。⁸⁾ 八 主の法⁹⁾ は玷なくして、魂を更え主の証は信ずべくして、小さき者に智慧を与う。¹⁰⁾ 九 主の正しき事は直くして、心を喜ばしめ、主の御掟は明らかにして、

深い作の一つ」と云われているこの詩篇は、物質界と啓示された御掟とが天主を立証することを交々歌っている。それで全篇二部に分れ、第一部(二―七節)は創造主たる天主の御力と御稜威とをたたえ、第二部(八―一五節)は天主がイスラエル人に啓示された神法の美しさと利益とを述べる。――³⁾「昼は光輝や御力や御恵みについて語り、夜は無辺なること神祕、美、安息について語る」これは一歌隊の甲乙兩組のようである。――⁴⁾天や蒼穹や昼や夜の証言は万人に聞え万人にわかる語の説教。――⁵⁾ヴルガタの譬喩によれば、創造主はこの天体を選んで、そこに御自分の御住居を設けようとされたのであるが、ヘブレオ語本では、主が太陽のために天幕を張り給うたことになつている。天は太陽が毎夕隠れ、朝になると出てくる巨大な幕屋のようなものである。⁶⁾昇る太陽が花婿に譬えてあるのはその美しさをあらわし、巨人に譬えてあるのはその力を示す。⁷⁾物界の太陽から精神界のそれに移る。

一〇 眼を照らす。一〇 主を畏る念⁸⁾は聖にして、世々の世々に
 存し、主の審判は真にして、本来義しと認められ、二 黄金
 よりも多くの宝石よりも慕うべく、蜜よりも、生蜜よりも
 甘し。二三 実に汝の下僕⁹⁾はこれを守る。これを守るに多く
 の報酬あり。二三 誰か己の過失を知らんや。わが隠れし科¹⁰⁾よ
 り我を淨め給え。一四 また他の人のそれより、汝の下僕を衛
 り給え。彼等にしてわが上に君臨せざらんか、我汚れなく
 して、最大なる罪を免れ淨かるべし。一五 さらばわが口の
 言は御意に適う如きものたるべく、わが心の思念は常に汝
 の御眼前にあるべし。主よ、わが援助者、わが贖い主よ。10)

第十九篇 (第二十篇)

出陣する王のための祈願

一 終まで、1) ダヴィドの詩。2)

第十九篇

1) 詩篇第四第五の註一参照。— 2) この詩

8) この掟は心の中に天主への有益な敬畏を起させるためのもの。— 9) ダヴィドのこと。彼はその詩歌の中で頻りにこの美しい呼名を用いている。10) 彼は天主が自分の援助者であることを体験した。またその天主がいつか自分及びすべての人から罪の轡を取り去りその救い主になり給うことも感知していた。

二 願わくは、主患難の日^ひに当りて汝に^{なんじ}応え給えかし、ヤコブの
 三 天主^{かみ}の御名^{みな}汝を^{なんじ}庇えかし。三 彼、聖所より汝に^{なんじ}救援を遣り、
 四 シオンより汝を^{なんじ}衛り、汝のすべての供物を御心に留め給えか
 五 し、汝の燔祭の牲は肥えたるものとせられよかし。四 彼、汝の
 六 心のままに、汝に賜い、汝の図る所^{ところ}を悉く成らしめ給えかし。
 七 我等は汝の救拯によりて悦び、我等の天主の御名によりて誇
 八 らん。七 希わくは主汝の願を悉く叶え給え、今にして我は、
 九 主がその受膏者^{キリスト}を救い給えることを知れり。彼はその聖なる
 一〇 天より、これに^{こた}え給わん、御右手の救拯は力あり、
 一 戦車に頼り、或者は馬に頼る。されど我等は主我等の天主の御
 二 名を呼ばん。九 彼等は縛められて倒れたり、されど我等は起上
 三 りて直立せり。一〇 主よ、王を救い給え、我等が汝を呼び奉らん
 四 目に、我等に^{こた}え給え。

篇はイスラエルの王に關するもので、彼が危い戦争をしようとする間際に人民がそのためまず天主に祈願をこめるのであるこの戦争とは、自分を攻めて来たアンモン人及びシリア人の連合軍を自ら迎え撃つたそれであるらしい。母下一〇―一二章参照。一三創三五・三参照。勝利を得るため王は燔祭のほか素祭をも献げた。ヘブレオ語本ではここに、セラ即ち歌隊交替とある。一五味方のための王の計画。一六王。

第二十篇 (第二十一篇)

王の勝利に対する感謝の歌

一 終まで、¹⁾ ダヴィドの詩。²⁾
 二 主よ、王は汝の御力によりて樂しみ、汝の御救拯によりて甚く喜び躍らん。³⁾ 汝は彼に、その心の所望を許与し、その口唇の所望を徒ならしめ給わざりき。³⁾
 四 即ち汝は甘美なる御祝福もて彼に先んじ、その頭に王の冠を置き給えり。⁴⁾ 五 彼、汝より生命を請い求めしに、汝これに、世々に至るまでの、世々の世々に至るまでの、長き寿を与え給えり。⁵⁾ 六 汝の御救拯によりて彼の栄光は大なり、汝は榮耀と大いなる美とを彼に着せ給わん。⁷⁾ 実に汝は世々に至るまで彼を祝福となし、⁶⁾ 汝の御顔を仰ぐ歡喜もて之を樂しませ給うべし。

第二十篇 1) 詩篇第四第五の註一参照。2) 詩一九が出征する王のための人民の祈願なら、詩二〇は勝利に対する感謝。3) ヘブレオ語本ではここにセラ即ち歌隊交替とある。4) 総黄金造りで貴重な宝石を鑲めたアンモンの王の冠は、勝利者の手に奪われた。それを榮ある戦利品としてダヴィドの頭にかぶせたのである。5) その子孫において。殊にメシアにおいて。長きよわいとは、天主の御祝福や御報いのこと。6) 万民の救い」はダヴィド家から出るから。

八	これ王は主に依頼めばなり。彼は至高き者の御憐憫によりて
九	揺ぐことなからん。願わくは汝の御手、 ⁷⁾ 汝のすべての敵に
一〇	認められ、汝の御右手、汝を憎む者を悉く見出さんことを。
一〇	汝は御顔を現し給う時、彼等を火の竈の如くなし給わん。 ⁸⁾
一一	主御忿怒によりて彼等を怖じ惑わし給わん、火彼等を吞み尽す
一二	べし。二彼等の子等は地より、彼等の裔は人の子の中より、汝
一二	の滅ぼし給う所とならん。三蓋は彼等汝に対して悪事をたくら
一三	みたればなり。彼等は陰謀をめぐらしたれども、それをなしと
一三	ぐることに能わざりき。四実に汝は彼等をして、背を向けしめ給
一四	わん、汝の残し給える者に対しては、 ⁹⁾ その顔を狙い給うべ
一四	し。 ¹⁰⁾ 主よ、御力もて起ち上り給え。我等汝の剛きを謳い頌
	えんかな。

7) 王に話しかける言葉。
8) 火のかまどの譬えは、
忽ち滅ぼされることを示
す。¹⁾ 9) もし敵の何びと
かが戦場に踏み止まり汝
に抵抗しようとする、
汝はこれを矢で射ぬき給
うのである。
10) ヘブレオ語本「汝の弓
ずるもて彼らの面をねら
い給う。」は、逃げる敵
を、勝利者が追い越して
前からその顔目がけて矢
を射るという意。

第二十一篇

(第二十二篇)

メシアの受難

一 終まで、¹⁾ 朝の助けに、ダヴィ
 ドの詩。²⁾
 二 天主よ、わが天主よ、我を顧み
 給え、³⁾ 何ぞ我を棄て給いしや。⁴⁾
 わが罪ゆえに我呼ばわるも、わが
 救拯より遠し。⁵⁾ 三 わが天主よ、我
 昼に叫ばんも、汝応え給わじ、夜
 に然せんも、わがために愚となら
 じ。⁶⁾ 四 されど、イスラエルの讃
 め称うる者よ、汝は聖所に住み給
 う。^五 我等の父祖は汝に依頼めり、

第二十一篇 1) 詩篇第四及び第五の註一参照。2) これは
 彼がアブサロム叛逆の知らせを聞いて逃げる時祈りとして
 作つたものと思うこともできる。しかしこの中にあらわさ
 れている苦しみの大なることや、その時間空間を超越して
 いる効果は、それでは十分説明がつかない。故にこの詩は
 いつも、メシアのことを述べているものと思われている。
 主は十字架上で少くとも御自らこの冒頭の部分を祈りに用
 い給うた。3) 七十人訳の添加。4) マテオ二七・四六及
 び可一五・三四のエリ、エリ、ラマ、サバクタニを見よ。
 5) 罪の本質は天主に背き離れること。故にその罪として造
 物主が被造物を棄て給うのは正当である。主は我らの罪を
 御自分の責任の如くにして負い給うたから、天主に棄てら
 れたような孤独感を味わい給うた。6) わが悲嘆の叫びを
 罪となる不平にしたいくない。

六 依頼めるに、果して汝彼等を救い給えり。六 彼等は汝に呼わりて
 七 救われたり、汝に依頼みて、恥辱を受けざりき。七 されど我は蛆
 八 虫にして、人にあらず。人々の侮り、平民の棄て物なり。八 我を
 九 見し者はみな我を嘲笑い、唇もて語り、頭を振れり、九 彼、主
 一〇 に依頼みぬ、主彼を助けよかし、彼を嘉するにより、之を救えよ
 一〇 かし。一〇 8) 一〇 そもそも汝は我を胎内より出し給える者なり、わが母
 二 の乳房吸いし時よりのわが希望なり。二 我は胎を出し時より汝に
 三 委ねられたり、9) わが母の胎内にありし時より、汝はわが天主に
 三 在す。三 我より離れ給わされ、そは患難近く、助くる者なけれ
 三 ばなり。三 若牛数多我を取り巻き、肥えたる牡牛¹⁰⁾ 我を囲めり。
 四 彼等は¹¹⁾ 我に向かいてその口を開けり、猛り吼ゆる獅子の如
 五 し。12) 一五 我は水の如く流し出され、わが骨は悉く外れ、わが心臓
 一六 はわが腹の中にて蟬の如く融けたり。一六 わが力は土器の破片の如

7) 路二三・三五参照。
 8) マテオ二七・四三。
 9) 生まれたばかりの赤
 児を実の父の膝にのせ
 るように、汝の実の子
 として汝のものとする
 ため渡された。一〇) へ
 ブレオ語本「バサンの
 力強きもの」。ヤボク
 河の北岸からヘルモン
 の山腹にかけての牧場
 の牡牛は有名であつた
 11) 敵。一2) 獲物を見て
 吠える獅子のように、
 イスラエルの司祭長や
 長老らは口を開いてイ
 エズスを責めた。

一七 えり。一七 実に犬ども数多我を取り巻き、心根悪しき者の群我を
 一八 囲めり。彼等はわが手わが足を貫き、一八 わが骨を悉く数え、我
 一九 を見つめ眺めたり。一九 彼等は互にわが衣服を分ち、わが下衣を
 二〇 籤引にせり。13) 二〇 されど主よ、汝は我より御祐助を遠ざけ給わ
 二一 ざれ、我を護らんとて顧み給え。二一 天主よ、わが魂を剣より、
 二二 わが唯一のもの14) を犬の手より助け出し給え、二三 我を獅子の口
 二三 より、わが弱きを野牛の角より、救い給え。15) 二三 我汝の御名を
 二四 わが兄弟に伝え、16) 集会の中にて汝を讃めん。17) 二四 汝等主を畏
 二五 るる者よ、彼を讃めよ。ヤコブのすべての裔よ、彼を頌えよ。
 二五 イスラエルの裔はすべて彼を畏れよかし、そは彼貧しき者の
 祈願を軽んじ蔑み給わず、御面を我に背向け給わず、我の彼に
 二六 呼ばわりし時、我に応え給いしが故なり。二六 我大いなる集会の

13) 受難者の死は間近に迫り、人々は犯罪者を処刑する場合のように、その持ち物を籤で分けた(マテオ二七・三五参照)。一
 約一九・二三、二四。
 14) わが生命の本なる唯一の魂。一五) この熱烈な祈願に応える救いが、いかにして行われるかは、この詩篇に云つてない。それが死者よりの復活において行われたことは、成就の結果が示している。
 16) 肉身で我等の主イエズス・キリストの真の兄弟であるユデア人たちの義
 17) 来二・一二。

二七 中^{うち}にて汝^{なんじ}をたたえ奉^{まつ}る。我^{われ}は彼^{かれ}を畏^{おそ}る者^{もの}の眼前^{めづまへ}
 にて、わが誓願^{ちがい}を還^{はた}さん。¹⁸⁾ 二七 貧^{まず}しき者^{もの}食^くして飽^あ
 き、主^{しゅ}を求^{もと}むる者^{もの}之^{これ}を讃^ほめん。彼等^{かれら}の心^{こころ}は世々^{よよ}に
 生^いくべし。¹⁹⁾ 二八 地^ちの果^{はて}悉^{ことごと}く思^{おも}い出^{いだ}して主^{しゅ}に立^{たち}帰^{かえ}
 り、諸国^{しよこく}の族^{やから}みなその御眼前^{みまへ}にて礼拝^{れいはい}せん。²⁰⁾
 二九 そは国^{くに}は主^{しゅ}の有^{もの}にして、彼諸国^{かれしよこく}の民^{たみ}を治^{おさ}め給^{たま}う
 べければなり。^{三〇} 地^ちの肥^こえたる者^{もの}みな食^くして²¹⁾ 拝^{おが}
 みたり、地^ちに下^{くだ}る者^{もの} ²²⁾ すべてその御眼前^{みまへ}に平伏^{ひれふ}さ
 ん。^{三一} かくてわが魂^{たま}彼^{かれ}のために活^いき、わが裔^{すえ}彼^{かれ}に
 仕^{つか}え奉^{まつ}るべし。^{三二} 来^{きた}るべき代^よの人々^{ひとびと}主^{しゅ}につきて告^つ
 げらるることあらん、²³⁾ また諸天^{てん}は生^うまらるべき民^{たみ}、
 主^{しゅ}の造^{つく}り給^{たま}える者^{もの}に、その義^ぎを告^つぐべし。²⁴⁾

18) 何かひどく困ることがあると、一般に
 或る数だけ犠牲を献げるという約束をし
 て、誓いを立てる習慣があつた。そして
 もし祈り求めた助けが得られると、感謝
 の犠牲と関連して饗宴を開き、孤児や貧
 民を招いて、自分の喜びのすそわけをし
 たものである。――19) イエズスの御苦しみ
 と密接な関係のあるこの感謝の犠牲は聖
 体の犠牲である。――20) 主の御苦難、御死
 去、御復活、及び聖体の犠牲の効果は全
 世界を真の神天主に帰依させること。
 21) 精神を満足させる食物を。――22) 死を免
 れ得ぬすべての人間。――23) 主のもの」と
 なるために(彼前二・九参照)。――24) 大と
 は在天の勝利の教会の聖人たち。民とは
 天主の御摂理によつて目に見える教会に
 属すべき人々。

第二十二篇 (第二十三篇)

わが牧者なる天主

一 ダヴィドの詩。¹⁾

主我を導き給う、²⁾ 我に欠くるものあら

じ。³⁾ 彼は我を牧場に置き、回復の水の辺

に我を連れ出し、⁴⁾ 三 わが魂を回復せしめ、

その御名のために⁵⁾ 我を正義の徑によりて

導き給えり。^四 実に、我はたとい死の陰の

只中を歩むとも 禍を恐れじ、そは汝、我

と共に在せばなり。汝の鞭と汝の杖⁶⁾ これ

こそ我の慰めなれ。^五 汝は我を悩ます者に

向かいて わがために食卓を備え、⁷⁾ わが

頭に油を注ぎ給えり。⁸⁾ 酔をもたらずわが

第二十二篇 1) この詩篇はダヴィドが静かな幸福

を味わっていた頃の作。—2) ヘブレオ語「わが牧

者なり。」—3) 牧者として人を導くという譬えは、

まず第一に二人の牧者ヤコブ(創四八・一五)及

びダヴィドに当るが、最も当るのはイエズス・キ

リスト(約一〇・一以下)。—賽四〇・一一。

4) 盛夏に牧場や水を見つけるのは、パレスチナで

はなかなか容易でない。—5) 義人によつて御自分

の御栄えを揚げ給うために。—6) 牧者は防禦用の

棍棒と、それより長い、身を支え羊を追うために

使う杖とを携えていた。—7) これから作者は饗応

する主人のたとえを用いる。—8) 饗応者の所では

習慣として客に油を注ぐことが行われていた。路

七・四六参照。

六 酒杯^{さかずき}⁹⁾ はいかに妙^{たえ}なるかな。 六 わが生^いくる日^ひの限^{かぎ}り、 汝^{なんじ}
の御^{おん}憐^{あわれ}憫^みは我^{われ}に添^そい来^{きた}らん、 此^{これ}、我^{われ}が日^ひ久^{ひさ}しく主^{しゅ}¹⁰⁾の
家^{いえ}に住^すむを得^えんためなり。

第二十三篇 (第二十四篇)

聖所詣での歌

一 週^{しゅう}の第一^{だいいち}日^{にち}に、ダヴィドの詩^{うた}。¹⁾
地^ちと之^{これ}に満^みてる物^{もの}、世^せ界^{かい}と之^{これ}に棲^すめる物^{もの}は、主^{しゅ}の有^もな
り。²⁾ 二 そは彼^{かれ}之^{これ}を海^{うみ}の上^{うへ}に据^すえ、³⁾ 之^{これ}を河^{かわ}の上^{うへ}に備^{そな}え給^{たま}
いたればなり。 三 主^{しゅ}の山^{やま}に登^{のぼ}るべきは誰^{たれ}ぞ、その聖^{せい}所^{じよ}に
立^たつべきは誰^{たれ}ぞ。 四 手^ては汚^{けが}れなく、心^{こころ}は淨^{きよ}く、空^{むな}しき事^{こと}
にその魂^{たま}を奪^とられず、またその近^{ちか}き者^{もの}に欺^{あざむ}き誓^{ちか}わざりし
者^{もの}ぞ、それなる。 五 かかる者^{もの}は主^{しゅ}より祝^{しゆく}福^{ふく}を、その救^{すく}い
なる天^か主^みより憐^{あわれ}憫^みを受けん。 六 此^{これ}こそ彼^{かれ}を求^{もと}むる者^{もの}の、

⁹⁾ わが使命。 — ¹⁰⁾ 主はわれらに御
体を食せしめ、ミサ聖祭において
われらのため御自らを献げ給う時
最も善牧者の実を示し給う。

第二十三篇 ¹⁾ 本篇は契約の櫃を

シオン山に奉遷した祝いの折の作
らしい。 — ²⁾ 哥前一〇・二六。
³⁾ ヘブレオ人は地を、天主が水上
に築き給うた建物のように考えて
いた。

七 ヤコブの天主の御面を求むる者の、族なれ。⁴⁾
 七 諸侯よ、⁵⁾ 汝等の門をあげよ、永遠の門よ、⁶⁾
 八 あがれ、さらば栄光の王ぞ入り給わん。⁷⁾ この
 九 栄光の王は誰なるぞ。そは強く猛き主なり、戦
 闘に猛き主なり。⁸⁾ 諸侯よ、汝等の門をあげよ
 永遠の門よ、⁹⁾ あがれ、さらば栄光の王ぞ入り
 一〇 給わん。この栄光の王は誰なるぞ。万軍の主
 これこそ栄光の王に在すなれ。¹⁰⁾

第二十四篇 (第二十五篇)

悩みより救われんことを願う

一 終まで、¹⁾ ダヴィドの詩。²⁾
 二 主よ、我汝にわが魂を挙げたり。³⁾ わが天主よ
 我汝に依頼めり。我をして赤面せしめ給うなか

4) ヘブレオ語本ではここに、セラ、すなわち歌隊交替とある。――5) ヘブレオ語本「門よ、汝らの頭をあげよ」。入り給う方の高さに較べると、門の柱も高さが足りないから。
 6) 原住民のイエブス人が既に建てておいた古い門。――7) 主の家のあるシオンの都とその聖山とは天国の象どり。アダムの罪以来天国の門は閉じられていたが、キリストがそれを開いて天国にお入りになつた。――8) ヘブレオ語本ではここにセラとある。

第二十四篇 1) 詩篇第四第五の註一参照。

2) この詩はアブサロム叛逆の時の作であらうこれにはイエレミヤの哀歌のように、各節の始めにヘブレオのアルファベットが付けてある

三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三
れ。三またわが敵をして我を嗤わしめ給うなかれ、蓋はすべて汝に待ち望む者は滅ぶることあらざるべければなり。四ことさらに不義を行ふ者はみな恥辱を受けよかし。主よ、汝の道を我に示し、汝の徑を我に教え給え。五我を汝の真理によりて導き、我を教え給え、汝は天主わが救主に在して、我終日汝を待望みたればなり。六主よ、世々の昔よりの汝の御憐憫と汝の御仁慈とを、思い出で給え。七わが若き時の過失とわが知らざるそれとは、憶い出で給うなかれ。主よ、汝の御仁慈ゆえに、汝の御憐憫に従いて、我を思い出で給え。八主は甘美にしてまた直く在す。この故に道を謬てる者に法を与え、九御定めによりて柔和なる者 ⁴⁾ を導き、やさしき者にその道を教え給わん。一〇主の道は悉く、その契約と証詞とを求むる者には、憐憫なり、信実なり。一一主よ、汝は御名のため ⁶⁾ に、わが罪を赦し給わん、実にそは大いなり。一二主を畏るる人は誰ぞ。彼、之がためにその選びたる道において法を立て与え給えり。一三かかる										

しかし例えばワフ、コフなどのように二三欠けているものもありレシユは二度続いて出てくる。二三節ではフェーが附加されている。――3) 四旬節第二主日入祭文の言葉。
 4) 悪意から迷つたのではない謙遜な人々。
 5) おめぐみをいただくための条件。――6) 汝の御栄えのために。

一四 者の^{もの}霊魂^{たましい}は幸福^{さいわい}の裡^{うち}に留^{とど}まり、その裔^{すえ}は地^ちを嗣^つぐべし。⁷⁾ 一四 主^{しゅ}
 は之^{これ}を畏^{おそ}る者^{もの}には強^{つよ}き支^{ささ}えに在^{まし}ま、その契^{けい}約^{やく}は彼等^{かれら}に明^{しめ}示^めさ
 れん。^{一五} わが眼^めは常^{つね}に主^{しゅ}に向^むかう、そは彼^{かれ}わが足^{あし}を畏^{おそ}る⁹⁾より
 引^ひ出^{いだ}し給^{たま}うべければなり。^{一六} 我^{われ}を顧^{かへり}み、我^{われ}を憐^{あわれ}み給^{たま}え。実^けに我^{われ}
 は孤^こ独^{どく}にして憐^{あわれ}なる者^{もの}なり。^{一七} わが心^{こころ}の苦^{なや}悩^みはいや増^ませり、我^{われ}
 を窮^{きゆう}境^{きやう}より助^{たす}け出^{いだ}し給^{たま}え。^{一八} わが屈^{くつ}辱^{じよく}とわが心^{しん}勞^{ろう}とをみそなわ
 して、わが罪^{つみ}を悉^{ことごと}く赦^{ゆる}し給^{たま}え。^{一九} わが敵^{てき}を見^み給^{たま}え、実^けに彼等^{かれら}は
 多^{おほ}くして、不^ふ当^{とう}の憎^{にく}悪^みもて我^{われ}を憎^{にく}むなり。^{二〇} わが魂^{たま}を守^{まも}り、
 我^{われ}を救^{すく}い給^{たま}え、我^{われ}汝^{なんじ}に依^{より}頼^{たの}みたれば、赤^{せき}面^{めん}することあらざるべ
 し。^二 無^{つみ}辜^{なき}者^{もの}と直^{なお}き者^{もの}と、我^{われ}に付^つきたり、そは我^{われ}汝^{なんじ}に待^{まち}望^{のぞ}みた
 ればなり。^{二三} 天主^{かみ}よ^み 11) イスラエルをそのすべての患^{なや}難^みより救^{すく}
 い出^{いだ}し給^{たま}え。

7) 地、すなわち約束の地
 カナアンを無事に占有す
 るとは、律法を忠実に守
 る報いとして、イスラエ
 ル人にしばしば約束され
 たこと。——8) 四旬節第三
 主日の入祭文。——9) 野獸
 を取るためかけるわなは
 しばしば敵の待伏せのた
 とえ。——10) 約一五・二五
 11) 附加された典礼文。

第二十五篇

(第二十六篇)

罪なき故に天主の審判を待む

一 終^{おわり}まで¹⁾ ダヴィドの詩²⁾。
 主^{しゅ}よ、我^{われ}を裁^{さば}き給^{たま}え、そは我^{われ}、わが罪^{つみ}なきままに
 歩^{あゆ}みたるが故^{ゆえ}、³⁾ 主^{しゅ}に依^{より}頼^{たの}みて、弱^{よわ}らざるべきが
 故^{ゆえ}なり。二 主^{しゅ}よ、我^{われ}を験^{ため}し、我^{われ}を試^{こころ}み給^{たま}え。わが
 腎^{むらと}と心^{こころ}とを火^ひもて査^{しら}べ給^{たま}え。三 そは汝^{なんじ}の御^{おん}仁^{いに}慈^じ
 わが目^めの前^{まえ}にあり、我^{われ}汝^{なんじ}の真^ま理^{こと}を喜^{よろこ}べばなり。
 四 我^{われ}は虚^き榮^よの会^{つどい}と共^{とも}に坐^ざし⁵⁾ たることなし、また
 不^ふ義^ぎを行^{おこな}う者^{もの}と共^{とも}に歩^{あゆ}まじ。五 我^{われ}は心^{こころ}根^ね惡^あしき者^{もの}
 の集^{つどい}会^{かい}を憎^{にく}めり、また不^ふ敬^{けい}なる者^{もの}と共^{とも}に坐^ざせじ。
 六 我^{われ}は無^{つみな}辜^き者^{もの}の中^{うち}にて⁶⁾ わが手^てを洗^{あら}い、⁷⁾ かくて
 汝^{なんじ}の祭^{さい}壇^{だん}をめぐらん、主^{しゅ}よ。⁸⁾ 七 そは汝^{なんじ}を讃^{たた}うる声^{こえ}

第二十五篇

1) 詩篇第四第五の註一参照。

2) これはアブサロム叛逆の折の作である。
 3) 私は殊に偶像礼拝を自ら行つたり他人に
 させたりするようなことをせず、罪なく世
 を渡ろうと一生努めたから。4) 腎は愛情
 のある所、心は靈的生活の行われる所。

5) 悪人と長い間故意に交際していることを
 表わす。詩一・一参照。6) 罪なき者の仕
 方に倣つて。7) 手を洗うとは、無罪を証
 するための象徴的動作。司祭は供物を献げ
 る前に手を洗うべしという規定をも暗示し
 ている(出三〇・一七、二一)。8) 本節及
 び次節は、ミサ中奉獻後の洗手式の間に唱
 える。

八 を聞き、汝の諸々の奇しき御業を談らんがためなり。八主よ、我は汝の家の美
 九 麗と、汝の栄光の住まる処とを好めり。九天主よ、わが靈魂を不敬なる者と共
 一〇 に、わが生命を血の人と共に、亡ぼし給うなかれ、一〇彼等の手には不義あり、
 二 其の右手には贈物⁹⁾満てり。二されど我はわが罪なきままに歩めり、我を贖い
 三 我を憐み給え。三わが足は真直なる道に立てり、我集会の中にて、主よ、汝を
 讃め奉らん。

9) わい
 る。

第二十六篇

(第二十七篇)

天主に対する不動の信賴

一 ダヴィドの油を注がるる前¹⁾の詩。
 主はわが光、わが救拯なり。我誰をか
 恐るべき。主はわが生命の保護者なり
 我誰にか怖じ惑うべき。二悪しき徒輩
 我を悩ますわが敵は、わが肉を食まん

第二十六篇 1) ヴルガタ及び七十人訳の附加したもの。
 「油を注がる」とは、ダヴィドがサウルの死後ヘブロ
 ンで統治を實際に始めた時(母下二・四)をさし、サ
 ムエルによる最初の注油を云うのではない。この詩篇
 を作つた動機はサウルの圧迫及び迫害であつた。

一〇	九	八	七	六	五	四	三
よ、我 ^{われ} を棄 ^す て給 ^{たま} わされ、我 ^{われ} を軽 ^{かろ} んじ給 ^{たま} わされ。一〇それ、わが父 ^{ちち} わが母 ^{はは}	下僕 ^{しもべ} より離 ^{はな} れ去 ^さ り給 ^{たま} うなかれ。わが援助 ^{たすけ} 者 ^て たり給 ^{たま} え、わが救 ^{すく} いなる天主 ^{かみ}	汝 ^{なんじ} の御面 ^{みおもて} を我 ^{われ} 探 ^{たず} ね奉 ^{まつ} らん。我 ^{われ} に御面 ^{みおもて} を背 ^{そむ} 向 ^む け給 ^{たま} うなかれ、怒 ^{いか} りて汝 ^{なんじ}	応 ^{こた} え給 ^{たま} え。八わが心 ^{こころ} は汝 ^{なんじ} に云 ^い えり、「わが面 ^{おもて} 汝 ^{なんじ} を探 ^{たず} ね奉 ^{まつ} れり ⁵⁾ 」と。主 ^{しゆ} よ	めぐり、その幕屋 ^{まくや} にて歡喜 ^{よろこび} の犠牲 ^{いけにえ} を献 ^{ささ} げたり。我 ^{われ} は主 ^{しゆ} に歌 ^{うた} いて讚歌 ^{ほめうた} を唱 ^{とな}	の上 ^{うへ} ⁴⁾ に我 ^{われ} を高 ^{たか} く挙 ^あ げ、今 ^{いま} わが敵 ^{てき} の上 ^{うへ} にわが頭 ^{こころ} を抬 ^{もた} げしめ給 ^{たま} えり。我 ^{われ} は	そは主 ^{しゆ} の美 ^{うる} わしきを見 ^み 、その聖殿 ^{みどの} を訪 ^{おと} わんためにこそ ³⁾ 。五それ、彼 ^{かれ} はそ	とて、 ²⁾ 我 ^{われ} に迫 ^{せま} る間 ^{ひま} に、自 ^{みづか} ら弱 ^{よわ} り倒 ^{たお} れたり。三たとい陣立 ^{じんだ} てして我 ^{われ} を攻 ^せ

2) 敵を、彼の血に渴している野獣に見立ててある。——3) その避難中の、または戦争中の生活から、奉献せられた場所に天主のまします処へ帰るため。——4) 敵の近づき難い堅固な避難所。5) 私というものの全部で汝の御助を祈り求めた(私の心も、私の顔も、汝の方に向けて)。

二 は我^{われ}を棄^すてたり、されど主^{しゅ}は我^{われ}を拾^{ひろ}い給^{たま}えり。6) 二主^{しゅ}よ、汝^{なんじ}の道^{みち}における法^{のり}を我^{われ}に示^{しめ}し、わが敵^{てき}ゆえに我^{われ}を直^{なお}き徑^{みち}によりて導^{みちび}き給^{たま}え。三我^{われ}を悩^{なや}ます者^{もの}等の意^{こころ}に我^{われ}を付^{わた}し給^{たま}うなかれ、そは偽^ぎ証^{しょう}する者^{もの}7) は我^{われ}に逆^{さか}らい起^たち、不^ふ義^ぎは自^{みづか}らに對^{たい}して偽^{いつわ}りたればなり。三我^{われ}は生^いける者^{もの}の国^{くに}にて、8) 主^{しゅ}の善^よき物^{もの}を見^みるべしと信^{しん}じ奉^{たてまつ}る。一四主^{しゅ}を待^{まち}望^{のぞ}め、雄^お々^おしく振^{ふる}舞^まえ、汝^{なんじ}の心^{こころ}を強^{つよ}うして、主^{しゅ}に依^よ頼^{りたの}め。

6) 彼はみなし子か捨て子に似ている。——7) 二心ある讒謗者。——8) 死の暗黒に對して、この地上で。

第二十七篇 (第二十八篇)

懇 願

一 ダヴィド自作^{じさく}の詩^し。1) 主^{しゅ}よ、我^{われ}汝^{なんじ}に向^むかいて呼^よばわり奉^{たてまつ}る。わが天^か主^みよ、我^{われ}に默^もし給^{たま}うなかれ、2) 然^{しか}らずして、汝^{なんじ}我^{われ}に默^もし給^{たま}わば、恐^{おそ}らくは我^{われ}穴^{あな}に下^{くだ}る者^{もの}の如^{ごと}にならん。3) 汝^{なんじ}に向^むかいてわが祈^{いの}る時^{とき}、汝^{なんじ}の聖^{せい}なる御^み殿^{との}4) に向^むかい

第二十七篇

1) この詩篇はアブサロム叛逆中の作と一般に信じられている。

2) 会話で答えないにせよ、行為で助け
ないにせよ。——3) 穴とは墓のこと。

4) ヘブレオ語「デビル」。これは至聖所をさす。ユデア人は祈るために、

てわが手を挙ぐる時、わが懇願の声を聴き給え。三 罪人と共に我を
引き去り給うなかれ、不義を行ふ者と共に我を亡ぼし給うなかれ。
彼等はその近き者と平和を語れども、その心には悪意あるなり。
四 その為す所に応じ、その企図の悪しきに應じて、⁵⁾ 彼等に与え、
その手の業に應じて彼等に授け、その身の報を彼等に返し給え。
五 彼等は主の為し給う所とその御手の業とを了らざるにより、汝こ
れらの者を毀ちて、そを建て給うことなからん。六 主は祝せられさ
せ給え、そはわが懇願の声を聴き給いたればなり。七 主はわが援助
者、わが保護者なり。わが心これに依頼みたれば、我助けられたり
かくてわが肉再び華やきたれば、⁶⁾ 我わが意より彼を讃め奉らん。
八 主はその民の力なり、その受膏者⁷⁾ の救拯の保護者なり。九 主よ
汝の民を救い、汝の家督を祝し給え。彼等を導き、永遠に之を高め
給え。⁸⁾

時々イエルサレムの
聖殿の方を向いた。
但六・一〇参照。
5) これは何かの私怨
に対して復讐を求め
るのでなく、天主の
存在及び主宰に対す
る信仰の維持を願う
のである。――6) 心の
喜びが体にも影響す
る。――7) 受膏者とは
ここでは主に選ばれ
た王、ダヴィドのこ
と。――8) これは疲れ
たり傷ついたりした
羊を肩に担つて運ぶ
羊飼から取つたと
え。

第二十八篇

(第二十九篇)

天主の御稜威の讚美

一 ダヴィドの詩、幕屋祭を終るに際して。¹⁾

天主の子等よ、²⁾ 主にささげ奉れ、

牡山羊の仔を主にささげ奉れ。³⁾

二 栄と誉とを主にささげ奉れ。御

名への頌栄を主にささげ奉れ。そ

の聖なる庭⁴⁾にて主を拝み奉れ。

三 水の上に主の御声す。⁵⁾ 御稜威

の天主は轟きませり。主は大水⁶⁾

の上に在す。主の御声は力あり

主の御声は威嚴あり。五 杉を碎く

第二十八篇 1)ヘブレオ語本では単に「ダヴィドの詩」と

題してある。ウルガタは七十人訳に倣つて、この標題に

「幕屋祭を終るに際して」という語を附加したが、これは

その典礼上の目的を示すもので、幕屋祭の最後の日に、こ

の詩篇を歌つたのである。2)天主の子等とは天使たちの

こと「百一・六以下、詩八八・六、七参照」。それが天主

の子等と称せられるのは、天主とこの上もない親しい仲で

物質界を離れた靈的本質において天主に似ているから。こ

れを地上の権力者、王侯の意に解する人も少しある。

3)「牡山羊の仔を主にささげ奉れ」はヘブレオ語本にはな

い。4)礼拝及び供犠の場所。詩一五・一九参照。5)雷

鳴を云う。この語が七回反復してあるのは、雷が相繼いで

鳴るのを表わすのである。6)凝結して厚い黒雲になつ

た空の水分。

六 主の御声す。主はリバノンの杉を碎き、六これを
 打ち給わん、リバノンの犢の如く。最愛の者は野
 牛の仔の如し。七火焰を分つ主の御声す。八荒野
 を震撼わす主の御声す。主はカデスの荒野⁸⁾を
 動揺がせ給わん。九鹿に備えをせしむる主の御声
 す。九 彼は木深き処を露にし給わん。その御殿に
 てはみな「栄光あれ！」と云わん。一〇主は洪水
 を住居となし給う。主は永遠に王として坐し給わ
 ん。一〇 主は御民に力を賜わん、主は御民を平和
 もて祝し給わん。一一)

第二十九篇 (第三十篇)

死より救われし感謝

一 ダヴィドの館奉獻の時に歌える詩。一)

第二十九篇

一) この詩篇は後に、ユダ・マカベオが

7) 天主の愛子イスラエルは、野牛の仔の如く静止している。しかしヘブレオ語本ではこれと違い、「リバノンとシリオンとを野牛の仔の如くおどらせ給う」とある。一8) カデス(バルネア)の荒野はパレスチナの南部にあり、アラビアの荒野の北の部分である。一9) 鹿は雷鳴に驚いて臥して仔を産む。一10) 大主は大洪水の時既に審判者たり王たることを示し給うたが、これは永劫に変わりなくそうである。一11) 平和もて」という語は暴風雨の後の虹のように輝いている。

二 主よ、我汝を崇め奉らん、そは汝我を支え、わが敵をして我に就き
 喜ぶことなからしめ給いたればなり。三 主よ、わが天主よ、我汝に向
 かいて呼ばわりたるに、汝我を痊し給えり。四 主よ、汝はわが魂を冥
 府より導き出し、我を穴²⁾に下る者より救い給えり。五 その聖者等よ
 主に歌えかし、その聖なる思い出³⁾を讃め称えよかし。六 実に御忿怒
 は御義憤によれども、生命はその御好意による。夕には泣くことあら
 んも、朝には歡喜あるなり。七 さてわが豊かなりし時、我云いぬ、
 「我永久に揺らぐことあらじ」と。八 主よ、汝は御好意もてわが美わ
 しき⁴⁾に力を授け給いしが、汝御面を我に背向け給いしかば、我怖
 じ惑いぬ。九 主よ、我汝に向かいて呼ばわり、わが天主に向かい
 て懇願い奉らん。一〇 我腐敗に下りゆくに、わが血に⁵⁾何の益ありや。塵
 は汝を讃称えんや、または汝の眞実を宣べ伝えんや。二 主は聴きて
 我を憐み給えり、主はわが援助者となり給えり。三 汝はわがために、

始めた奉殿記念祭
 (喀前四・五二以
 下)で歌われた。
 これは、ふしぎな
 御助けに対する天
 主への讃美(二一六
 節)と、病氣及び
 全快の敘述(七一
 一三節)との二部
 から成つてゐる。
 2) 墓。——3) 主の御
 正義と御憐みとの
 表示。——4) 王の威
 光。——5) 私が死ね
 ば。

二三
わが歎きを喜悅に転じ、わが粗衣⁶⁾を断ちて、我に歡樂を纏わせ給えり。一三これ、わが榮⁷⁾が汝に歌わんため、我が悔ゆることのなからんためなり。主よわが天主よ、我永遠に汝を讃め頌え奉らん。

6) 不幸の時身に纏う
肌ざわりの悪い衣服
7) 主よ、汝により回復したわが力。

第三十篇 (第三十一篇)

苦しむ者の祈り

一 終まで、¹⁾ ダヴィドの詩、²⁾ 我を忘れたる時に。³⁾
二 主よ、我汝に依頼めり、我をして永久に滅びざらしめ給え。汝の義⁴⁾によりて我を救い給え。三 御耳を我に傾け給え、我を救いに、疾く来り給え。わがために保護者たる天主となり、我を救わんために避難の家となり給え。四 実に汝はわが力、わが避難場なり、されば汝の御名のために、我を導き、我を養い給わん。五 汝は彼等が我に隠し設けたるこの畏よ

第三十篇

1) 詩篇第四第五の註一参照

2) サウル迫害中の作らしい。イエズスは十字架上で御絶息前の最後の御言葉をこの詩篇中から採られた。――3) ヘブレオ語本にも七十人訳にも見当らない
ここでは「甚だしい苦悩の時」の意。
4) 主は罪なくして迫害されている者を救わずして滅びに至らせることなどお出来にならぬ。

六 り、我われを引き出し給たまわん、そは汝なんじわが保護者まもりてに在ましまなり。我われ汝なんじ
 の御手みてにわが靈魂たましいを委ゆだね奉まうる。⁵⁾ 主しゅよ、真理まことの天主かみよ、汝なんじは我われを贖あがな
 い給たまえり。⁷⁾ 汝なんじは虚むなしき物ものを徒あだに奉ほうずる人々ひとびとを憎にくみ給たまえり。され
 ど我われは主しゅに依頼よりたのめり。⁸⁾ 我われは汝なんじの御憐憫おんあわれみによりて喜び樂よろこしまん。そ
 は汝なんじわが辱はづかしめられたるを顧かへりみ、わが魂たまを危殆あやうきより救すくい給たまいたれば
 なり。⁹⁾ 汝なんじは我われを敵てきの手に閉とじこめずして、わが足あしを広ひろき所ところに⁷⁾ 立た
 たせ給たまえり。¹⁰⁾ 主しゅよ、我われ悩なやみおれば、我われを憐あわれみ給たまえ。わが目め、わが
 魂たま、わが腹はら、忿怒いかりによりて歪くさいたり。¹¹⁾ 実げにわが生命いのちは心痛しんつうの裡うちに
 わが年とし齡いは嘆息たんそくの裡うちに尽つきたり。わが力ちからは悲慘ひさんなる境遇きやうぐうによりて弱よわ
 り、わが骨ほねは震動ふるいけり。¹²⁾ 我われはわがすべての敵てきに越こえて、誹そしらるる
 ものとなれり、わが隣人となりびとには殊ことに甚はなはだし、わが知人しりびとには恐おそれらる
 るものとなれり。我われを見みし者ものは、我われを避さけて逃にげ去さりぬ。¹³⁾ 我われは死し
 せる者ものの如ごとく、心こころより忘わすれられ、碎くだけたる器うつわの如ごとくなれり。¹⁴⁾ 実げに

⁵⁾ これは十字架上で主が仰せられた言葉（路二三・四六）この願いの故に、聖会はこの詩篇を晩の祈り（終課）に採用している。――⁶⁾ ヘブレオ語「無の空しき物」偶像は本当にある物でないから、かく称せられる。――⁷⁾ 容易に、自由に動き得る所。――⁸⁾ ノベの司祭たちの悲しい成行きは、友人知人らがダヴィドに近づかぬ動機となつた。

一五 我^{われ}は周^{しゅう}圍^いに居^おる多^{おほ}くの人の誹^{そし}謗^りを聞^きけり。彼^{かれ}等^らは我^{われ}を敵^{てき}とし一^{せい}齊^いに相^あ集^いて
 一六 わが生^{いの}命^ちを奪^{うば}わんと謀^{はか}りぬ。一五 されど主^{しゅ}よ、我^{われ}は汝^{なんじ}に依^{より}頼^{たの}みて云^いえり、「汝^{なんじ}
 一七 はわが天^か主^みなり」と。一六 わが運^{さだめ}命^めは汝^{なんじ}の御^み手^てにあり。我^{われ}をわが敵^{てき}の手^てより、
 一八 また我^{われ}を虐^{しい}ぐる者^{もの}より救^{すく}い出^{いだ}し給^{たま}え。一七 汝^{なんじ}の下^{しも}僕^べに向^むかいて御^み顔^{かお}を輝^{かが}かし、
 御^{おん}憐^あ憫^{れみ}によりて我^{われ}を救^{すく}い給^{たま}え。一八 主^{しゅ}よ、我^{われ}汝^{なんじ}を呼^よび奉^{まつ}りたれば、我^{われ}をして滅^{ほろ}
 一九 びに至^{いた}らしめ給^{たま}わざれ。不^ふ敬^{けい}なる者^{もの}こそ辱^はしめられて、冥^{よみ}府^ふに墮^おされよかし。
 二〇 欺^{あざむ}く口^{くち}唇^{びる}は啞^{おし}となれかし。そは義^{ただしきもの}者^{もの}に敵^{むか}いて高^{たか}ぶり蔑^{さげ}み、不^ふ当^{とう}なること
 二一 を語^{かた}るなり。二〇 主^{しゅ}よ、汝^{なんじ}を畏^{おそ}る者^{もの}に秘^ひめ置^おき給^{たま}え。九 汝^{なんじ}の御^{おん}仁^い慈^じの豊^{ゆた}けさ
 二二 はいかに大^{おお}いなるかな。汝^{なんじ}は人^{ひと}の子^こ等^らの眼^め前^{まえ}にて、一〇 汝^{なんじ}に依^{より}頼^{たの}む者^{もの}に之^{これ}を施^{ほどこ}
 二三 し給^{たま}えり。二三 汝^{なんじ}は彼^{かれ}等^らを御^み面^{かお}の蔭^{かげ}に隠^{かく}して、人^{ひと}々^{びと}の虐^{しい}げより免^{まぬ}れしめ、彼^{かれ}等^ら
 二四 を汝^{なんじ}の幕^{まく}屋^やの中^{うち}に庇^{かば}いて、舌^{した}の諍^{いさ}かを避^さけしめ給^{たま}わん。二三 主^{しゅ}は祝^{しゅく}せられさせ
 二五 給^{たま}え、そは堅^{けん}固^こなる城^{まち}市^{うち}の中^{うち}にて、一一 我^{われ}に奇^くしき御^{おん}憐^あ憫^{れみ}を示^{しめ}し給^{たま}いたればな
 二六 り。二三 すなわちわが心^{こころ}に餘^{あま}りて、我^{われ}は云^いいぬ、「我^{われ}汝^{なんじ}の御^{おん}目^めの前^{まえ}より棄^すてら

九) 貴重な
 宝物のよ
 うに。
 一〇) 天主は
 どういう
 人を愛し
 庇護し給
 うかを人
 前に示す
 を望み給
 う。
 一一) 堅固な
 城市の中
 にいるよ
 うに。

二四
れたりと。是によりて汝、わが汝に叫びし時、わが祈の声を聴き給えるな
り。主を愛し奉れ、その諸々の聖者よ、そは主、信実を求め、¹²⁾ 高ぶり行
う者に、十二分に報い給うべければなり。^{二五} すべて主に依頼む者よ、雄々し
く振舞い、汝等の心を強くせよ。

¹²⁾ すなわ
ち「信実
にてまし
ます。」

第三十一篇

(第三十二篇)

罪の赦しを受けし者の幸福

一
一 ダヴィドの自作、教訓。
幸福なるかな、その不義を赦さ
れ、²⁾ その罪を蔽われたる者。³⁾
二 幸福なるかな、主が罪を帰し給
えることなく、⁴⁾ その精神に欺瞞
なき人。⁵⁾ 我黙し居りしが故
に、⁶⁾ 終日泣き叫びし間に、わが

第三十一篇 1) 多くの人は「さとし」即ち「教訓詩」の義
とするが、より新しい説では「黙想」と解する。―2) ヘブ
レオ語本「除かれ」。―3) 全知の審判者の御眼に罪が見えな
くなるように。初期の新教徒はこの「蔽われたる」という
語を、その誤れる義化説の証拠にしようと試みたが、徒勞
であつた。―羅四・七。―4) 全部返済した負債のように。
5) 罪を赦される基本条件の一つ。罪びとが自分の罪を少し
も弁解せず認め且告白する誠実さ。―6) 自分の罪を認めよ
うとせず。

7) 棘とは、ダヴィドに悟らせるため加えられた苦しみ。――8) ヘブレオ語本「セラ」。――9) ヘブレオ語本「セラ」。――賽六五・二四
10) イスラエル人。――11) 主の御忍耐の力の尽きぬ内に。――12) 天罰。
13) ヘブレオ語本「セラ」。――14) 八節を、ダヴィドがまさに罪びとらに与えんとする善き勧告の前置として、云う言葉とする解釈者も多いが、むしろ他の釈義学者の説に従つて、天主御自身が親しくダヴィドに答え給うお言葉と見たい。――15) この話相手は天主でなく、強制束縛しなければダヴィドに近づかぬ人々。

によりて^{たの}楽しみ、喜び^{よろこ}躍れ。すべて^{おど}心の直き^{なほ}者よ、誇れ^{ほこ}。

第三十二篇 (第三十三篇)

天主の全能に依り頼む

一 ダヴィドの詩。^し

義^{ただ}しき者^{もの}よ、²⁾ 主^{しゅ}によりて喜び^{よろこ}躍れ。讚美^{さんび}は直き^{なほ}者^{もの}にこそ^{ふさ}応^{おこ}わ

しけれ。小^お琴^{ごと}もて主^{しゅ}に感謝^{かんしゃ}せよ、十^{じゅう}絃^{げん}の琴^{こと}もて彼^{かれ}を頌^{たた}えよ。

三 新^{あら}しき歌^{うた}を彼^{かれ}に唱^{うた}えよ、調^{しら}よく歌^{うた}え、声^{こゑ}高^{たか}らかに。四 そは主^{しゅ}

の御言^{みことば}は直^{なお}く、その御業^{みわざ}は悉^{ことごと}く信実^{まこと}なればなり。五 彼は憐憫^{あわれみ}と

義^ぎとを愛^めで給^{たま}う、地^ちには主^{しゅ}の仁慈^{いつくしみ}満^みちたり。六 諸天^{てん}は主^{しゅ}の御

言^{ことば}によりて、その能力^{のうりよく}はすべて御口^{みぐち}の氣息^{いき}によりて固^{かた}められた

り。七 彼は革袋^{かわぶくろ}に盛^もる如^{ごと}く、海^{うみ}の水^{みづ}を集^{あつ}め、深淵^{ふち}を食庫^{くら}に納^{おさ}

め給^{たま}う。八 全地^{ぜんち}は主^{しゅ}を畏^{おそ}れよ、世^よに住^すめる者^{もの}はみな、その御前^{みまえ}

に戦^{おの}けかし。九 そは彼言^{かれい}い給^{たま}いしに、是等^{これら}成^なり、命^{めい}じ給^{たま}いしに

第三十二篇 1) この語は

ヘブレオ語本にはない。

そしてダヴィドの作か否

か明らかでない。ここか

しこの数節から、若干の

釈義学者は、イスラエル

人が主のおかげで奇蹟的

勝利を得た折作られたも

のと推定している。

2 イスラエル人。3) 堅

琴より小さいが、それと

同形の楽器。4) 異教徒

を罰し給う御正義。

一〇	創造られければなり。 ⁶⁾ 一主は諸国の策謀を空しからしめ、民の思いを斥け
一一	諸侯の策謀を徒勞ならしめ給う。二されど主の御計画は永久に、御心の思念
一二	は代々に存す。三幸福なるかな、主がその天主にて在す国人、その世嗣にと
一三	選び給える民。三主は天より望見て、すべての人の子を照覽し、一四その備え
一四	給える御住居より地に住む者を悉く眺め給えり。一五彼は彼等各々の心を形成
一五	り給える者、その諸々の所作を知り給う者なり。一六王は軍兵の多きによりて
一六	救われず、また巨人も己が力の人いなるによりて助からず。一七馬も救いには
一七	益なし、己が力の溢るるによりても助からざるべし。一八視よ、主の御眼は彼
一八	を畏るる者の上に、その御憐憫を頼みとする者の上にあり。一九是、彼等の霊
一九	魂を死より救い出し、飢饉の時にも彼等を養い給わんとてなり。二〇我等の霊
二〇	魂は主を待望む、そは彼こそ我等の援助者にして、保護者に在せばなり。
二一	三実に我等の心彼によりて楽しまん、我等はその聖なる御名に依頼めり。
二二	三主よ、我等が汝に依頼める如く、我等の上に御憐憫を垂れ給え。 ⁷⁾

5) 海の底
 はいわば
 大水を入
 れる倉庫
 6) 尤一六
 ・一七。
 7) テ・
 デウム」
 の最終句
 の前句。
 最後の両
 節は、教
 会の典礼
 に用いる
 ため附加
 したもの
 であるう

第三十三篇

(第三十四篇)

聖なる敬畏

一 ダヴィドがアビメレク¹⁾の前にて己^{おの}が顔貌^{かおつき}を変じ^{へん}、彼に逐^おわれて去^さりし時^{とき}の作^{さく}。²⁾

二 我^{われ}いつの時^{とき}にも主^{しゅ}を頌^{たた}え奉^{まう}らん、その讚美^{さんび}は常^{つね}にわが口^{くち}にあらん。三 わが靈魂^{たましい}は主^{しゅ}を誇^{ほこ}りとせん、柔和^{にやうわ}なる者^{もの}。³⁾ 四 我^{われ}と共^{とも}に主^{しゅ}を崇^{あが}は聞^ききて悦^{よろこ}べかし。五 我等^{われら}諸^{もろとも}共にその御名^{みな}を讚^ほめあげん。六 我^{われ}主^{しゅ}を求めしに、彼^{かれ}我^{われ}に応^{こた}え、わがあらゆる患難^{なやみ}より我^{われ}を救^{すく}い出^{いだ}し給^{たま}いぬ。七 汝^{なんじ}等^ら彼^{かれ}に近^{ちか}づきて、光明^{ひかり}を受^ういぬ。

第三十三篇 1) アキス(母上二一)即ちアキメレク(ヘブレオ語アビメレク)は、フィリスト人の王たちに共通の名称。2) 「顔つきを変じ」とは狂気をよそおふこと。ダヴィドはサウルに追われて、ゲトの附近のフィリスト人の領地に逃げこんだが、すぐ住民数人にその民族の恐るべき敵と見なされ、捕えられてその地の王の前に引かれた。もしも巧みに狂気をよそおわなかつたならば、その命は空しく奪われたであらう。この詩篇はアルファベット順になつており、ヘブレオ語のアルファベットの字数に従つて、二行詩句二十二から成る。ただワフがなく、一七、二三兩節には同じフエーが付けてある。3) ヘブレオ語「アナ・ヴィム」はまた「謙遜なる者」を意味することもある。

七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七	一八	一九
けよ、さらば汝等の面恥辱を受くることなからん。セこの憐なる者 ⁴⁾ 叫び	しに、主彼に ^{しゆかれ} 応え ^{こた} 給いて、これをそのすべての患難より救い給いぬ。ハ主	の天使、 ⁵⁾ これを畏れ奉る者の周囲を囲みて彼等を助け出さん。九主の仁	慈深く在すことを味わい見よ。幸福なるかな、彼に依頼み奉る者。一〇主を	畏れよ、そのすべての聖者等 ⁶⁾ 。彼を畏るる者には乏しきことなければな	り。二富める者は乏しくなりて、飢えたり、されど主を求むる者は佳き物	に欠くることなからん。一二いざ来れ、子等よ、我に聴け、我汝等に主を	畏るることを教えん。一三生命を惜しみ、幸福なる日を見んと望む人は誰	ぞや。一四悪しきことには汝の舌を、欺き語らざるよう汝の口唇を、抑え慎し	め。一五悪を離れて善をなし、平和を求めてこれを得んと努めよ。一六主の御	眼は義人に向かい、その御耳は彼等の祈願を聴く。一七されど主の御顔は悪	をなす者に向かう、そは彼等の記憶を地より亡ぼさんとなり。一八義人叫	びしに、主之に ^{しゆこれ} 応え、彼等をそのすべての患難より救い出し給いぬ。一九主

4) ダヴィドはゲトに居た時自分が援助を要することを考えて、かく自称した。
 5) 天軍の総帥たる契約の天使。一六) 本當に主を奉ずる人々。一七) 路一・五三。
 8) 彼前三・一〇。

二〇 は心悩める者に近く在す、彼、氣落したる者を救い給わん。
 義人の患難は多し、されど主はそのすべてより彼等を救い出し給わん。三主は彼等の骨を悉く守り給う、その一つだに碎かるることあらじ。九) 三罪人の死はいと不幸なり、義人を憎む者は罪せらるべし。三主はその下僕等の靈魂を贖い給わん。彼に依頼む者はみな、罪せられざるべし。10)

9) 約一九・三三以下にある事實は、この語が文字通り実現されたものの如く見える。イエズスの骨は十字架上で一つも折られなかつた。10) 昔はこの詩篇が聖体授与の際に歌われたものであつた。

第三十四篇

(第三十五篇)

迫害の時の祈願

一 ダヴィドの自作。1)
 主よ、我に不義をなす者を審判き給え、2)
 我と闘う者を征服え給え。三矛と盾3)とを執りて、我を援助に起ち給え。三御劍を抜きて、我に迫る者に道

第三十四篇 1) この詩篇はサウルの部下に追いつめられていた頃の、ダヴィドの身に起つたこと、及びその言葉(母上二四・一六)にもよく合つてゐる。2) この罰を願うのは、天主の御光榮發揚に対する熱意から出ている。3) 作者は天主を戦士として表現する。

四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

を塞ぎ、わが魂に云い給え、「我こそ汝の救済なれ。」と。四願わくは、
わが生命を狙う者、事敗れて恥入り、我に悪事を図る者、退けられて狼
狽せんことを。五彼等は風の前なる塵の如くなり、主の天使⁴⁾これを追
い詰めよかし。六その道は暗くして滑らかになり、主の天使彼等に追
迫れかし。七そは彼等故なく我にその滅亡の罟を伏せおき、理由もなき
にわが魂を辱しめたればなり。八願わくは、彼の知らざる罟、彼に來り、
その隠し置きたるが、彼を捕えんことを。彼等は自らその罟にかかれか
し。九されどわが魂は主によりて喜び躍り、その御救拯ゆえに樂しまん。
一〇わがすべての骨⁵⁾は云うべし、「主よ、誰か汝に如く者ありや。汝は
憐なる者をこれにまさりて強き者の手より、乏しき者貧しき者をその掠
奪者より、救い出し給う。二無法なる証人等立ち上りて、わが知らざる
事を我に問えり。三⁶⁾彼等は我に、善⁷⁾に報ゆるに惡を以てす、是わが
靈魂には味気なきことなり。八⁸⁾一三されど我は、彼等の我に煩わしかりし

4) 契約の天使。
詩三三の註五を
見よ。一5) 私と
いうものの全部
6) 相手方は偽証
人らの申し立て
で、私をして叛
逆人である旨自
白させようとし
た。一7) 母上二
四・一八のサウ
ルの言葉を参照
せよ。一8) ダヴ
イドはヴルガタ
によれば、自分
をうまず女に譬
えているが、ヘ
ブレオ語本では

一四 時、毛衣を纏い、断食して⁹⁾ わが魂を苦しめぬ、わが祈はわ
 が懐に向かうべし。¹⁰⁾ 一四 我は我等の近き者や兄弟に對する如
 く、その意に従い、喪にありて悲しむ者の如く項垂れたりき。
 一五 さるを彼等は、我に敵いて喜び集いぬ。鞭わが上に集中し
 けるが、しかも我知らざりき。 一六 彼等は別れたれども悔い
 ず、¹¹⁾ 我を試み、我を嘲けり笑い、我に向かいてその齒を咬
 み鳴したり。 一七 主よ、汝はいつまで黙視せんとし給うや。彼
 等の惡意よりわが魂を、獅子よりわが唯一のものを、¹²⁾ 取り
 返し給え。 一八 我大いなる集会の中にて、汝に感謝し、衆くの
 民のなかにて汝を讃め奉らん。 一九 不当にも我に敵い、謂なく
 我を憎み、胸せする者をして我に就き喜ばしめ給うなかれ。¹³⁾
 二〇 そは彼等、実に我に穩かに語い、しかも世¹⁴⁾ の忿怒もて欺
 瞞を図りければなり。 二一 また彼等は我に向かいてその口を広

そのよるべない身を孤児に
 擬えている。實際は妻ミコ
 ルには背かれ、ヨナタスと
 の交際はできず、父母はモ
 アブへ逃げなければならな
 かつたのである。 — 9) 作者
 は深い悲しみの印として喪
 服をまとい、断食と祈りと
 で天主にわが敵を全快させ
 て頂こうとした。 — 10) ダヴ
 イドは王上一八・四二のエ
 リアのように、祈りを一層
 熱心にする印として頭を垂
 れる。 — 11) 天主は彼らを打
 ち散らし給うたが、彼らは
 悔い改めなかつた。 — 12) 詩
 二一・二〇参照。 — 13) 約一
 五・二五 — 14) 天主を信ぜぬ

者、世間的な人間。15)「聞きたまえり」の意。

二三 く開け、「善哉、善哉、我等の目これを見たり」と云いぬ。二三 主よ、汝は見給えり、¹⁵⁾黙し給うなかれ。主よ、我より離れ去り給うなかれ。二三 起ち給え、し^{二四}かして注意し給え、わが訴訟に、わが天主よわが主よ、わが云分に。二三 主わが天主よ、汝の義に従いて、我を裁き給え、彼等をして、我に就き喜ばしめ給うな^{二五}かれ。二三 彼等をしてその心の裡に、「善哉、善哉、我等の靈魂に。」と云わしめ給うなかれ。また「我等彼を呑み尽せり。」と云わしめ給うなかれ。二三 わが禍を祝ぐ者は諸共に赤面して恥じ入り、我に向かいて大言壮語する者は狼狽と恥辱とを纏えかし。二三 わが義しきを嘉する者をして喜び樂しましめ、その下僕の平安を欲む者をして恒に云わしめ給え、「主は大いに崇められさせ給え。」と。^{二八}さらばわが舌、汝の義を、終日汝の讚美を、心がけん。

第三十五篇

(第三十六篇)

罪人の惡意と主の御仁慈

一 終まで、¹⁾主の下僕²⁾ダヴィド

第三十五篇

¹⁾詩篇第四第五の註一参照。—²⁾詩一七の註

の自作。³⁾

二 不義なる者はその心の中にて云えり、罪を犯さんと。その

眼前には天主への畏懼あらず。⁴⁾ 三 実にかかる者は、その御

眼前にて欺きの行為をなしたれば、その不義憎むべきものと

認めらるるなり。⁴⁾ 四 その口の言は不義と欺瞞、彼は善を行わ

んために悟るを欲まず、⁵⁾ 五 その臥床にありては不義を企み、

凡て善からぬ道に踏み止まりて、悪を厭わざるなり。⁵⁾ 六 主よ

汝の憐憫は天にまで達し、汝の信実は雲にまで及ぶ。⁶⁾ 七 汝の

義は天主の山の如く、汝の審判は大いなる深淵の如し。⁷⁾ 主

よ、汝は人をも畜をも護り給わん。⁸⁾ 天主よ、汝はその御憐

憫をいかに増し給えるぞ。されば人の子等は汝の御翼の蔭に

依頼まん。⁹⁾ 彼等は汝の家の豊かなるに⁸⁾ 酔わん、汝は彼等

に汝の歡樂の流を飲ましめ給うべし。¹⁰⁾ 実に生命⁹⁾の泉は汝

二参照。―3)ダヴィドはこ

の詩篇をサウルの迫害中に

作つたらしい。―4)不義な

る者には、罪を懼れる「敬

畏」がない。―5)これらの

語はわざと悪を選ぶ、悪を

行ふ意志の堅いことを表わ

す。―6)「限りなし」の意。

7)深淵の如く底が知れない

究め難い。―8)家とは聖殿。

ヘブレオ語本では「牲の肥

えたるに」。酬恩祭の犠牲

は、奉納者が友人及び貧者

と分けて食べ尽すが、それ

から採つた譬え。―9)すべ

ての幸福。これは天主より

賜わる聖寵と天国の光榮を

さす。

二 一の御許にあり、汝の光によりてこそ我等光¹⁰⁾を見るべき
 二 なれ。二 汝を知る者に汝の憐憫を、心の直き者に汝の公
 二 義を及ぼし給え。二 高ぶる者の足をしてわが許に來らし
 二 三 め給わず、¹¹⁾ 罪ある者の手をして我を動かさしめ給わざ
 二 三 れ。二 三 そこに不義をなす者倒れたり、彼等は逐い出され
 二 三 たり、立つことを得ず。

10) 天主は生命の源であると共に、
 また光の源でもある。光を見ると
 は、救い、幸福を得ること。
 11) 勝利者の足が捕虜達を踏みつけ
 るように。

第三十六篇 (第三十七篇)

天主のむくい

一 ダヴィド自作の詩。¹⁾
 二 心根悪しき者を羨むなかれ、また不義をなす者
 二 を妬むなかれ。二 三 そは彼等草の如く速かに枯れ
 二 三 緑草の如くはやく萎るべければなり。二 三 主に依
 二 三 頼みて、善をなし、地に住まえ、さらば汝その

第三十六篇 1) この詩篇はアルファベツト
 順になつていて、各詩節の冒頭にヘブレオ
 語のアルファベツトが付けてある。全部で
 二十詩節あり、時々アルファベツトの唯一
 つの字の下に三詩節あることもある。

四 富によりて養われん。²⁾ 主によりて樂しめ、さらば彼汝の心の求むるも
 五 のを、汝に賜わん。⁵⁾ 汝の道を主にあらわし、これに頼れ、さらば彼自
 六 ら行い、⁶⁾ 汝の義を光の如く射し出でしめ、汝の権を真昼の如く明らか
 七 になし給わん。⁷⁾ 主に順服いて、これに祈れ。己が道によりて榮ゆる者
 八 を、義しからぬ事をなす人を、羨むなかれ。⁸⁾ 忿怒³⁾をやめ、憤激を捨て
 九 よ。悪事をなすに熱中するなかれ。⁹⁾ そは心根悪しき者は絶やさるべけ
 一〇 れど、主を待望む者は地を嗣ぐべければなり。¹⁰⁾ 即ち今少時にして罪人
 二 はあらずなるべく、汝その所在を探ぬとも、見当らざるべし。¹¹⁾ 二されど
 三 柔和なる者は地を嗣ぎ、平和の豊かなるによりて樂しまん。⁴⁾ 三罪人は
 四 義人を窺い、之に向かいてその齒を咬み鳴さん。¹²⁾ されど主は彼を嗤い
 五 給うべし、そはその日⁵⁾の来るべきことを豫見し給えばなり。¹³⁾ 四罪人等
 六 劍を抜き、その弓を引絞れり。貧しき者乏しき者を倒し、心の直き者を
 七 殺さんとなり。¹⁴⁾ 五その劍は己が心臓を刺貫ぬき、その弓は折れよかし。

2) 約束の地を首尾よく手に入れ
 3) 天主が悪を罰せずにおき給う
 4) マテオ五・四。
 5) その天罰の日
 6) 天主が惡を罰せずにおき給う
 7) 天主が惡を罰せずにおき給う
 8) 天主が惡を罰せずにおき給う
 9) 天主が惡を罰せずにおき給う
 10) 天主が惡を罰せずにおき給う
 11) 天主が惡を罰せずにおき給う
 12) 天主が惡を罰せずにおき給う
 13) 天主が惡を罰せずにおき給う
 14) 天主が惡を罰せずにおき給う

一七六 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八

一六 義人には、罪人の大いなる富よりも、少許のものこそよけれ。一七
 は罪人の腕は折らるべしと雖も、⁶⁾ 義人は主の支え給う所となるべ
 ればなり。一八 主は汚玷なき者の日数⁷⁾を知り給う、彼等の嗣産は永遠
 にあらん。一九 彼等は災禍の時にも滅びざるべく、飢饉の日にも飽かさ
 るべし。二〇 実に罪人等は亡び、主の敵はほめ崇められたらん後、忽ち
 にして煙の如く消え失せん。⁸⁾ 二一 罪人は借りて返さず、されど義人は
 憐憫ありて施すべし。二二 それ、彼を祝し奉る者⁹⁾は地を嗣がんで、され
 どこれを呪い奉る者は亡びん。二三 人の歩みは主に導かるべく、彼その
 道を嘉し給うべし。二四 その者たとい倒るとも、害わるることあらじ、
 そは主御手もて支え給えばなり。二五 我曾て若く、今は老いたれど、義
 しき者の棄てられ、その裔のパンを乞えるは、未だ見たることなし。¹⁰⁾
 二六 彼はいつの日にも憐憫ありて貸し与う、さればその裔も祝福を蒙る
 べし。二七 悪を離れて善をなせ、しかして代々に住まえかし。¹¹⁾ 二八 そは

6) 腕は悪事をする
 助けや道具になる
 ものの象徴。
 7) この世の壽命と
 運命。――8) 始めは
 太くても後には空
 中に消えてしまふ
 9) ヘブレオ語本で
 は「主の祝し給う
 者」、下記も「主
 の呪い給う者」と
 なつてゐる。
 10) 一時的の試練の
 あることは否定し
 ない。――11) すすめ
 は一巡して第三節
 に歸る。

二九 主公義を好みて、その聖者等を捨て給わざるべければなり。彼等は永久に護られん。義しからぬ者は罰せられ、不敬なる者の裔は亡び去るべし。二九されど義人は地を嗣ぎて、世々にわたりてそこに住まわん。三〇義人の口は智慧を考え、その舌は公義を語らん。一二 三二その天主の法、彼の心により、さればその歩みはよろめくことあらじ。一三 三三罪人は義人を窺い、これを殺さんと図る。三三されど主はこれをその手に委ね給わず、またその裁かるべき時にも、彼を罪し給わざるべし。三四主を待望みてその道を守れ、さらば彼、汝が嗣産の地を得るよう、汝を挙げ給わん。罪人等の亡びん時、汝これを見ん。三五我は不敬なる者の高くあげられて、リバノンの杉¹⁴⁾の如く高くなれるを見たり。三六さて我通過ぎしに視よ、彼あらず、我之を探ねしかど、その所在見当らざりき。三七無辜を守り、公義を考えよ、そは平和なる人には遺裔あれども、¹⁵⁾ 三八不義なる者は一斉に滅ぼされ、不敬なる者の遺裔は亡び失すべければなり。三九されど義人の救拯は主より来る。彼は患難の時にその保護者にて在す。四〇かく主は彼等を助けて彼等

12) 箴三一・二六。
 13) 賽五一・七。
 14) 杉は氣高きの象徴
 15) 子孫が多いのは特別の幸福とされていた。

を解放^{ときはな}ち給^{たま}わん、彼等^{かれら}を罪人^{つみびと}よりもぎ取りて彼等^{かれら}を救^{すく}い給^{たま}わん、そは彼等^{かれら}彼^{かれ}に依頼^{よりたの}みたればなり。

第三十七篇 (第三十八篇)

痛悔者の懇願

一 ダヴィドの詩^し、¹⁾ 安息日^{あんそくじつ}の²⁾ 記念^{きねん}に。³⁾
二 主^{しゅ}よ、猛^{たけ}り立^たちて我^{われ}を責^せめ給^{たま}うなかれ、⁴⁾
三 また怒^{いか}りて我^{われ}を懲^こらし給^{たま}うなかれ。⁵⁾ 実^げに
四 汝^{なんじ}の矢^やは我^{われ}に立^たち、汝^{なんじ}は御手^{みで}もて我^{われ}を固^{かた}
五 く抑^{おさ}え給^{たま}えり。⁶⁾ 汝^{なんじ}の御忿怒^{おんいかり}によりてわが
六 肉^みに健^{すこ}かなる所^{ところ}なく、わが罪^{つみ}ゆえにわが骨^{ほね}
七 に平安^{やす}き所^{ところ}なし。⁸⁾ 実^げにわが不義^{ふぎ}はわが頭^{こう}
八 を越^こえ、⁹⁾ 重荷^{おもに}の如^{ごと}く、¹⁰⁾ 我^{われ}に甚^{はなは}だ重^{おも}くなれ
九 り。¹¹⁾ わが愚^{おろ}かさゆえに、¹²⁾ わが傷^{きず}は膿^うみ

第三十七篇 1) いわゆる悔悛の詩篇の第三。これ

はダヴィドがアブサロムの叛逆の前、罪を犯した後の頃に作つたものであろう。2) 詩篇第三十七が安息日の聖務の一部をなしていたことを示すために、ユデアの伝承によつて、七十人訳が書き加えた語。3) 記念とはミンカ(素祭、無血祭)の供物をさす。即ち「素祭の折に歌う」という意。4) 審判者としてでなく、父として。5) 天主の御罰の象徴。6) 大水の溢れ漲る貌に擬えたもの。7) 罪を重荷に見立ててある。8) 聖書の慣用語で罪を愚かさと呼ぶ。

七 腐れたり。我は悲惨なる者となり果て、絶えず屈みて、終日悲しみ歩

八 みぬ。八そはわが腰迷妄にて満たされ、⁹⁾ わが肉に健かなる所なければ

九 なり。我は、悩みていたく挫けたり、わが心の呻くによりて叫びぬ。

一〇 主よ、わが望はすべて汝の御前にあり、わが呻吟は汝に隠れなし。

二 二わが心擾され、わが力我を去りたり、わが目の光さえ我にあらず。

三 三わが友わが近き者も、我に逆らい迫り来て立てり。わが傍にありし者

四 も、¹⁰⁾ 遙かに立ちぬ。¹¹⁾ 三 わが生命を狙う者暴力を用い、我に悪事を企む

五 者空事を語りて終日詭計をめぐらしぬ。一四 されど我は聾者の如く聞かず

六 また口を開かずして啞者の如くなりき。一五 かく我は聞かず、返し言を口

七 にせざる人の如くなりぬ。一六 主よ、我汝に依頼みたれば、主わが天主

八 よ、汝は我に応え給わん。一七 それ、我は云いぬ、「願わくはわが敵の我

九 に就きて喜ぶことなかれかし。彼等はわが足のよろめける間に、¹²⁾ 我に

一〇 向かいて大言を吐きたればなり。」と。一八 実に我は鞭打を覚悟せり、¹³⁾

⁹⁾ 昔の解釈は大

部分、これが情

慾の卑しい乱れ

た動きを云つて

いるのだとして

いる。一〇) 最も

近い身よりの人

々。一〇) 近づい

てくるが、私の

不幸を見て怖れ

急に立ち留り、

援助を拒否する

¹²⁾ 不運を意味す

るのによく用い

られる譬え。

¹³⁾ 私は自分を罰

に値する者と思

つている。

一九 わが苦痛は常にわが眼前にあり。一九 実に我はわが不義を告白し、わが
 二〇 罪ゆえに物思わん。二〇 されどわが敵は生きて我よりも強し。また不当
 二一 に我を憎む者殖えたり。二一 悪もて善に報ゆる者、我が善を追い求むと
 二二 て、我を譏れり。二三 主わが天主よ、¹⁴⁾ 我を棄て給うなかれ、我より離
 二三 れ給うなかれ。二三 主よ、わが救拯の天主よ、わが援助に心向け給え。

¹⁴⁾ 真の悔悛は、カインやユダのように絶望せず、却つて天主に依りする。

第三十八篇 (第三十九篇)

人生の苦悩を主に訴う

一 終まで¹⁾ イデイトウンその人のために、²⁾ ダヴ
 イドの歌³⁾
 二 我云いけらく、「我舌もて罪を犯さざらんために
 わが道を慎しまん。罪人我に逆らい立ちし時、⁴⁾ 我
 わが口に衛士を置けり」と。三 我啞となりて謙り、
 三 善き事さえも黙し居りしに、わが苦しみは新たに

第三十八篇 詩篇第四第五の註一参照。一²⁾ イデイトウンはダヴィドの三楽長の一人。一³⁾ サウルの晩年頃の作である。一⁴⁾ 私が短気で罪を犯し、悪人共に気味よしと思われることがないように、悪人に私を責めることが許されている間黙つていよう。

四 りぬ。⁵⁾ わが心わが内に熱しけり、思いめぐらすほどに火と燃ゆべければ、^五 我舌もて語いぬ、「主よ、我にわが終末を、またわが日数の幾何なるかを、知らしめ給え、これ、我に欠けたる所⁶⁾ を知らんためなり。^六 視よ、汝はわが日数に限界を置き給えり、わが存在は汝の御前には無きが如し。実に一切は空し、活ける人いずれもみな然り。⁷⁾ 寔に人は幻影の如く過ぎ行き、徒勞に打ち騒ぎ、積み蓄えて、しかも誰がためにそを集むるかを知らず。^八 されば今、わが待望むものは何ぞ。主にあらずや。しかしてわが存在は汝の許にあるなり。^九 わがすべての不義より、我を救い出し給え、汝は我を愚人に誹らるる者となし給えり。^{一〇} 我啞となりてわが口を開かざりしは、汝これをなし給えるに由りてなり。^{一一} 二 汝の鞭を我より退け給え。^{一二} 御手の強きによりて、御懲戒の下に我力尽きたり。汝は人を不義ゆえに懲らし、その生命を蜘蛛網の如くに失せしめ給えり。実にいずれの人も徒勞に打ち

5) 沈黙して忪えて
 いるだけ、苦痛の
 度は高まる。
 6) 壽命が満了する
 に欠けている部分
 即ち残りの命。
 7) ヘブレオ語本は
 樂器の音でこの嚴
 肅な考えを強調し
 ようと、その意を
 明示するためセラ
 と附記している。
 8) 彼は苦惱の中に
 ありながら天主を
 礼拝する。

一三 騒^{さわ}げるなり。9) 一三 主^{しゅ}よ、わが祈^{いのり}祷^{だう}わが懇^{ねが}願^いを聴^きき容^いれ給^{たま}え、
わが涙^{なみだ}に御^{おん}耳^{みみ}を貸^かし給^{たま}え。默^{もだ}し給^{たま}うなかれ、そは我^{われ}汝^{なんじ}の御^み
もと許^{もと}にある他^{よそ}所^{びと}人^{ひと}にして、わが父^ふ祖^そすべての如^{ごと}く、旅^{たび}客^{びと}10) な
ればなり。一四 わが逝^ゆきてあらずなるその前^{まへ}に、我^{われ}の爽^{さわ}快^{やか}に
なるを得^えんため、我^{われ}を容^{ゆる}赦^{ゆる}し給^{たま}え。

第三十九篇

(第四十篇)

救われし感謝

一 終^{おわり}まで 1) ダヴ^じイ^{さく}ド自^じ作^{さく}の詩^し。
二 我^{われ}主^{しゅ}を待^{まち}望^{のぞ}み、また待^{まち}望^{のぞ}みたるに、彼^{かれ}我^{われ}に御^み意^{こころ}を留^とめ給^{たま}
いぬ。三 しかしてわが祈^{いのり}願^りを聴^きき容^いれ、我^{われ}を悲^ひ惨^{さん}の坑^{あな}より
渣^{おり}滓^{どろ}の泥²⁾より、引^ひ出^{いだ}し、わが足^{あし}を岩^{いわ}の上^{うへ}に立^たたしめ、わ
が歩^{あゆ}みを導^{みちび}き給^{たま}いき。四 また新^{あたら}しき歌^{うた}を、我^{われ}等^らの天^か主^みに献^{ささ}
ぐる歌^{うた}を、わが口^{くち}に授^{さず}け給^{たま}いぬ。多^{おほ}くの人^{ひと}見^みて畏^{おそ}れ、主^{しゅ}に

9) ヘブレオ語本には「げに人と
いう者はみな吐息の如し。」と
ある。またここにセラ。――10) 他
所人はもてなし主に対して、そ
の寛大と同情とにすぎるよりほ
か、何の請求権もない。

第三十九篇

1) 詩篇第四第五の

註一参照。この歌の作られたの
は、サウルの迫害の終つた頃と
思われる。――2) 坑と泥とは共に
「よみ」のたとえ。作者の生命
は無上の危険に瀕していた。そ
れから救われた事を、しつかり

五 依頼よりのたのむに至いたらん。幸福さいわいなるかな、己おのが希望のぞみを主しゅの
御名みなに置き、空むなしきもの、³⁾ 偽いつわりの愚おろかなるもの⁴⁾
を顧かへりみたることなき人。⁶⁾ 主しゅよわが天主かみよ、汝なんじは奇
しき御業みわざを数多おまたなし給たまえり、汝なんじの思召おもほしめし⁵⁾ において
汝なんじの如ごとき者ものはあらず。我われは告つげたり、語かたりたり、さ
れどそは数かずうるには餘あまりに多おほし。⁶⁾ ⁷⁾ 汝なんじは犠牲いけにえと献物ささげもの
とを欲のぞみ給たまわらずして、⁷⁾ 我われに耳みみ⁸⁾ を備そなえ給たまえり。燔はん
祭さいと罪祭ざいさいとは汝なんじこれを求もとめ給たまわざりき。⁸⁾ 其の時とき⁹⁾
我われ云いけらく、「視み給たまえ、我われ来きたる。¹⁰⁾ 書ふみの卷頭はじめに
わがこと録かきしるされたり、我われこそ御旨みむねを行おこなうべけれと。
わが天主かみよ、我われはそを欲のぞめり、汝なんじの法のりはわが心こころの中うち
にあり。¹²⁾ 我われは大おほいなる集會つどいの中うちにて汝なんじの義ぎを告つ
げたり。視みよ、我われわが口唇くちびるを制とどめじ、主しゅよ、汝なんじこ

と立つことのできる岩の上に置かれた
として、表現してある。——³⁾ 殊に偶像
⁴⁾ 魔術や占いのようなもの。——⁵⁾ 天主
の御計画。——⁶⁾ multiplicati は謬り
multiplicata (mirabilia) が正しいら
しい。——⁷⁾ 彼は聖所を遠く離れていた
から(ダヴィドがサウルやアブサロム
に追われる身であつた時を思え。)
⁸⁾ 耳とは服従の義。従つて「汝は我に
服従の力を与え給えり」の意となる。
⁹⁾ こういう境遇では、律法所定の犠牲
を望み給わぬと悟つた時。——¹⁰⁾ 我自ら
汝にわが身を献げまつる。——¹¹⁾ 当時へ
ブレオ人の書物は卷物であつた。
¹²⁾ 使徒聖パウロは、来一〇の中で、こ
の考えが天主の御子の人となつてこの
世に生まれ給う時のお心がけであつた
と説く。

二 れを知り給う。二 我は汝の義をわが心の内に秘め置かず、汝の眞実と汝
 の御救拯とを宣べたり。汝の御憐憫と汝の眞実とは、我これを大いなる
 会に隠さざりき。二三 主よ、されば汝は御憐憫を我より遠ざけ給わざれ。
 二三 汝の御憐憫と汝の眞実とは常に我を支えたり。二三 そは数知れぬ禍我を
 囲み、わが不義我を捉えたれば、¹³⁾ 我見ることを得ざりしが故なり。是
 等はわが頭髮にまさりて多く、わが氣力我を去りたり。二四 主よ、我を救
 い出し給うこと、御意に適えかし。主よ、我を助けんと顧み給え。¹⁴⁾
 二五 わが生命を奪わんと附狙う者は齊しく事敗れて恥じ入れよかし。我に
 悪事を企む者は退きて恥じ入れよかし。¹⁵⁾ 一六 我に「善哉、善哉！」¹⁶⁾ と
 いう者は、立所にその恥辱を蒙れよかし。一七 願わくは凡て汝を求むる者
 が汝によりて喜び樂しまんことを、また汝の御救拯を愛する者が、常に
 「主は頌えられさせ給え！」¹⁷⁾ と云わんことを。一八 さて我は物乞にして
 貧し。されど主我を御心につけ給う。汝はわが援助者、わが保護者に在

13) 罪は復讐の女
 神ネメシスの如
 く、罪人を擲ま
 えてこれを罰す
 るまで、追いか
 けてやまない。
 14) 本六九・二。
 15) 本三四・四。
 16) この叫びは、
 人の不幸を喜び
 嘲ける言。「い
 い氣味、いい氣
 味！」。——17)「善
 哉善哉」に对照
 をなす。

す。わが天主よ、ためらい給うなかれ。

第 四 十 篇 (第四十一篇)

至 福

一 終まで、¹⁾ ダヴィド自作の詩。²⁾
 二 幸福なるかな、乏しき者貧しき者に対して理解ある人。主は禍の日
 に彼を救い給わん。³⁾ 主は彼を守り、これを活かし、地上にてこれを
 至福ならしめ給えかし、その敵の意に彼を委ね給うなかれ。⁴⁾ 主は苦
 しみの床にある彼に援助を与え給えかし。汝は彼の病める時に、その
 臥床を全く変え給えり。⁵⁾ 我は云いぬ、「主よ、我を憐み給え、我汝に
 罪を犯したれば、わが魂を痊し給え。」と。⁶⁾ わが敵は我につきて悪し
 き事を云えり、「彼の死してその名の滅ぶべきは何時ぞや。」と。⁷⁾ ま
 た我に会わんとて入り来る者あれば、空事を語り、その心は己が裡に
 不義を集めぬ。⁸⁾ 彼が外に出て語りしも、⁹⁾ 八かかる事なりき。わが敵

第四十篇 1) 詩篇

第四第五の註一参
照。—2) アブサロ

ム叛逆の始めの、

アキトフェルの裏

切の折の作に違ひ

ない。—3) 本節は

教皇のためにする

祈りに用いてある

4) 悪しき企みを心

に抱きながら親密

を装つて語つた。

九 みな我に仇せんと叫び、我に悪しき事を謀りぬ。 九 彼等は我に
 対して非道の辱を立てたり、「眠る者、最早再び起つことなか
 らんか。」と。 一〇 実にわが頼みとしたる我の仲よき人にして、
 わがパンを食いし者さえも、我に對して大いなる裏切をなした
 り。 5) 二 されど主よ、汝は我を憐み、我を再び扶け起し給えり。
 三 されば我彼等に報いん。 6) 二 三 わが敵が我に就きて喜ばざるべき
 こと、我これによりて汝の我を嘉し給えるを知る。 一三 また汝は
 わが無辜ゆえに我を引き受け、永久に我を汝の御眼前に確く立
 たせ給えり。 7) 一四 主イスラエルの天主は世々より世々に至るま
 で、祝せられさせ給え。 然あれかし、然あれかし。 8)

第四十一篇 (第四十二篇)

天主を慕いて

一 終まで、1) コレの子等の作、教訓。 2)

第四十一篇 1) 詩篇第四の註一参照。 2) レヴィ人コ

5) 本節はダヴィドの顧問で裏切をしたアキトフェルを思い出させる。イエズスはこの言葉をユダに適用し給うた。(約一三・一八) 一 6) ダヴィドが正當の王としてなすべき報復を意味する。 7) 母下七・一六の御約束の通り 8) ヘブレオ語「アーメン、アーメン。」―本節の祝福を以て、五部に分れていゝる詩篇の第一部は終る。

二 鹿³⁾の水源を慕う如く、天主よ、わが魂も汝を慕うなり。
 三 わが魂は強き活ける天主を望みて渴けり。我が往きて天主
 四 御面前⁴⁾に現るべきは何時ぞや。日毎我に「汝の天主は
 何処にありや。」と云われたる間は、昼も夜もわが涙我に糧
 五 となれり。我は歡喜と讚美との声、宴する人のさんざめき
 の中を、妙なる幕屋の所に渡り行き、天主の家にも至
 六 るならんが、これらの事を思い出でては、わが衷なる心魂を
 披瀝したりき。わが魂よ、汝何とて悲しむや、何とて我を
 七 悩ますや。天主に依頼め、そは我なお彼を頌え奉るべければ
 八 なり、わが顔の救拯に在す。わが天主を。わが魂はわが衷に
 九 て悩み乱れたり、されば我ヨルダンの地と小さきヘルモン
 山⁸⁾とより、汝を偲び奉らん。汝の滝の轟音に、淵は淵を
 呼ぶ。汝の高波巨濤はわが上を越えたり。天主、昼にはその

レの子孫は歌手であつた。彼らは十一の詩篇の作者である。――3)ヘブレオ語本「牝鹿」。――4)イエルサレムの聖殿で。作者は七節にある如く、ヨルダンの東の地の北方にいた。――5)主は汝を助けることができないか、あるいはその僕なる汝を見捨てたのだ。――6)無上の親密感の満ち溢れるに任せて。7)イエルサレムの聖所に参詣したことを思い出して、作者は悲しい憧憬の情で胸が一ぱいになる。――8)ヘブレオ語本「ミサル山」。これは固有名詞らしい。

御憐憫を、夜にはその御歌を、示し給えり。わが衷には、わが生命の天主への
 一 祈禱あり。○我天主に云わん、「汝はわが支持者なり。何とて汝我を忘れ
 二 給えるぞ。何とて我は、敵の我を虐ぐるによりて、悲しみ歩くや。」二わが
 三 骨の碎けたる間、我を悩ますわが敵は、日毎我に「汝の天主は何処にあり
 や」と云いつつ我を責めたり。三わが魂よ、汝何とて悲しむぞ。何とて我
 を悩ますぞ。天主に依頼め、そは我なお彼を頌え奉るべければなり、わが顔
 の救拯に在すわが天主を。

9) ひどい
 苦しみを
 あらわす
 たとえ。
 10) 六節の
 反復。

第四十二篇

(第四十三篇)

聖なる幕屋を偲ぶ

一 ダヴィドの詩。¹⁾
 天主よ、我を裁きて、聖ならぬ
 国民²⁾に對しわが訴訟を定め、
 不義と欺瞞との人³⁾より我を救

第四十二篇 1) ヘブレオ語本にはこの前書きがない。——カトリック典礼はこの詩篇をミサの階段祈禱に入れている。
 2) アブサロムの叛逆の時、ダヴィドに敵対した民。——3) この語は集合名詞で国民と同じ意味らしい。もし個人をさすとするれば、アキトフェルであることは確か。

二 い出し給え。三そは、天主よ、汝はわが力なればなり。何とて汝我
を棄て給えるぞ。何とて我は、敵の我を虐ぐるによりて、悲しみ歩
くや。三汝の光明と汝の信実とを放ち給え、⁴⁾ 是等は我を導きて、
汝の聖山に、また汝の幕屋に到らしめたり。^四 されば我天主の祭壇
へ、⁵⁾ わが年少を悦びに満し給う天主の御許へ、入りゆかん。天主
よ、わが天主よ、我小琴もて汝を讃め奉らん。^五 わが魂よ、汝何と
て⁶⁾ 悲しむぞ、何とて我を悩ますぞ。天主に依頼め、そは我なお彼
を頌え奉るべければなり、わが顔の救拯に在すわが天主を。

第四十三篇 (第四十四篇)

天主の昔の御慈愛を偲びて御憐憫を乞う

一 終まで、コレの子等の作、¹⁾ 教訓。
二 天主よ、我等この耳に聞けり、我等の父祖我等に告げたり、彼等
の日に、昔日に、汝のなし給える御業を。^三 汝の御手は異邦人等を

4) 天主は御光を以て現状の暗さを逐い払い、その信実を以てもとからの御約束を守り給う。―5) さすらいの地からシオンの山へ。―6) 詩四一・六、一二、参照。

第四十三篇 1) ヘブ

レオ人解釈者はバビロン捕囚時代の作としている。この詩篇

四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

打ち滅ぼしぬ、汝は彼等²⁾を植え、民等を悩まして之を逐い出し給いき。
 四 蓋し彼等はその劍によりて国を占めしにあらず、その腕彼等を救いしに
 もあらず、ただ汝の御右手、汝の御腕³⁾及び汝の御顔の光によれり、そ
 は汝彼等を嘉し給いければなり。五 ヤコブの救拯を命じ給う汝こそ、わが
 王にしてわが天主なれ。六 我等は汝によりて我等の敵を角⁴⁾もて突き倒し
 汝の御名によりて我等に逆い起つ者を蔑視まん。七 実にわが頼らんとする
 はわが弓にあらず、また我を救うべきはわが劍にあらず、八 ただ我こそ我
 等を悩ます者等より我等を救い、我等を憎む者等を滅ぼし給えるなれ。
 九 我等は終日天主によりて誇り、世々にわたり汝の御名によりて頌え奉ら
 ん。一〇 されど汝は今、我等を斥け我等を辱しめ給えり、天主よ、汝は我
 等の軍勢と共に出征き⁶⁾給わじ。二 汝我等をして敵に背後を向けしめ給い
 たれば、我等を憎みし者等、己がために掠め取りぬ。三 汝は我等を食用の
 羊の如くに付し、我等を異邦人の間に散らし、三 汝の民を無代にて売り渡

はまたマカベ
 オ時代にもよ
 く合う。
 2) 我らの父祖
 3) 腕は勝利を
 得る力の象徴
 4) 相手を角で
 突き刺し宙に
 投げあげる牡
 牛のやり方に
 たとえてある
 5) ヘブレオ語
 本「セラ」
 6) 天主の鎮座
 し給う契約の
 櫃を携えてゆ
 くこと。

一四 し給えり。これが交易には、得る所多からざりき。一四 汝は我等を、我
 等の隣人の誹りの的、我等の周囲にある者等の弄り物、また笑柄とな
 し、一五 異邦人には話の種、民等の間にては頭を振らるるものとなし給
 えり。一六 わが屈辱は終日わが前にあり、わが顔の恥我を蔽えり。一七 そ
 は我を誹り罵る者の声によりて、敵と迫害者との面前においてなり。
 一八 是等の事みな我等の上に起り来れり、されど我等は汝を忘れたるこ
 となく、汝の御契約に不当の行為をなしたることなく、一九 また我等の
 心の後へ退きたることなし。汝も我等の歩みを汝の道より逸脱れしめ
 給わざりき。二〇 それ、汝は我等を患難の処⁸⁾において打ち拉ぎ給い
 死の蔭我等を蔽いたり。二一 我等もし我等の天主の御名を忘れ、我等の
 手を異なる神に差し伸べたることあらば、⁹⁾ 二二 天主これらの事を糺し
 給わざらんや、実に彼は心の秘密をさえ知り給うものを。寔に我等は
 汝のために終日死に遇い、屠らるべき羊の如くせらるるなり。¹⁰⁾ 二三 起

7) 多くの解釈者は本節初めの否定語を第二の文にもかけていゝる。——8) へブレオ語本「野犬のすみか」すなわち荒野。イスラエルの惨状の象どり9) 偶像に向かつて両手を高くさしおべるのは、莊嚴な供犠の際には殊に帰依と礼拝とのしるしであつた。
 10) 聖パウロはこの語を、羅八・三六において迫害されるキリスト教徒に

二四 き給え、主よ、何とて眠り給うや。起き給え、我等を終まで棄て給うなかれ。二四 汝何とて御面を背向け、我等の惨状と我等の患難とを忘れ給うや。二五 実に我等の魂は塵に伏し、我等の腹は地につきたり。二六 起き給え、主よ、御名のために我等を援け我等を贖い給え。

適用している。
 二四 我らの靈肉共に、地につくまで屈まっている。

第四十四篇 (第四十五篇)

王の婚姻の歌

一 終まで、¹⁾ 変るべきもののために、²⁾ コレの子等の作、教訓として、愛人に対する歌。³⁾
 二 わが心佳き言の葉を吐き出す。わが作を云い出るは王に向かいてこそ。

第四十四篇 1) 詩篇第四第五の註一参照。 2) ヘブレオ語本「百合花に従い」。すなわち百合花の形をした楽器を奏でるか、あるいは「百合花」で始まる歌の旋律を用いるかして歌つたのであろう。七十人訳に「変えられたるものにつきて」とあるのは、この詩篇中聖会を主の淨配にたとえて、救われた人類をほめたたえてある点で、既に本篇を神秘的メシア的に解釈しているのである。 3) 美しさと勇氣と正義とで拔んででいる王と、その尊い婿君に似合いの王女との婚姻の讚美。合理主義者の解釈によれば、この結婚はサロモンのエジプト王女との婚姻か他の王のそれをさすが、旧約時代のユデア教会の人々や聖会の

三 わが舌は速かに文字書く人の筆なれや。⁴⁾ 容姿美わしき
 四 は人の子等に優り、汝の唇には愛らしき溢れたり。さ
 五 れば天主、永久に汝を祝し給えり。⁴⁾ 最力ある者よ、汝
 六 の劍⁵⁾を腰に佩びよ、⁵⁾ 汝の盾目美きと麗しきとをもて
 七 馳せ向かい、真幸く進みて、統べ治めよ、真理と柔和と
 八 正義とのために。汝の右手⁶⁾ 汝を奇しく導かん。⁶⁾ 汝の
 九 矢は鋭し、諸民を汝の下に倒して、王の敵の心臓に立た
 十 ん。⁷⁾ 天主よ、⁷⁾ 汝の玉座は世々にわたり、汝の御国の
 十一 笏は公平の笏なり。⁸⁾ 汝は義を好み不義を憎めり、され
 十二 ばこそ天主、汝の天主は、汝の同僚に優りて⁸⁾ 汝に、喜
 十三 悦の油を注ぎ給えるなれ。⁹⁾ 汝の衣服よりは没薬、蘆薈
 十四 肉桂¹⁰⁾ 薫り、象牙の宮殿よりもまた然り。そこより汝を
 十五 楽しましめたるは、¹¹⁾ 汝の誉れの介添なる諸王の娘等¹¹⁾

教父たちの解釈では、キリストと
 聖会との靈的婚姻にほかならない
 4) 演説者に対する速記者の筆のよ
 うに速く、舌も胸にこみ上げてく
 る思想を述べる。⁵⁾ 劍は王の威
 光の象徴。⁶⁾ 右手は、武勇を教
 える教師をたとえたもの。⁷⁾ エ
 ロヒム。来一・八参照。⁸⁾ 仲間
 すなわち聖人達も優遇されるが、
 汝ほどではない。⁹⁾ ふるまい主
 の所では、客に油を注ぐ習慣があ
 った。それで注油は優待と喜びの
 するし。¹⁰⁾ 肉桂はインドに産す
 る木で、その乾した花や内皮は香
 として用いた。¹¹⁾ このメシア婚
 姻の際の介添えの姫君達とは、聖
 会教父達の説によれば、真の天主
 イエズス・キリストに続々帰依し

二 なり。后¹²⁾は金糸の衣着て、種々の裝飾に包まれ、
 汝の右に立ちぬ。二 聴け、娘、視よ、汝の耳を傾
 けよ。汝の民をも、汝の父の家をも、忘れよか
 し。¹³⁾ 一三 さらば王は汝の美麗を慕わん。実に彼は
 主汝の天主¹⁴⁾にして、人々これを礼拝すべし。¹⁵⁾
 一三 ち口の娘等は礼物を携えて汝の顔を請い求めん
 庶民の富める者もみな然り。一四 凡て王の娘の栄耀
 一五 は、内部にては¹⁶⁾黄金の縋をつけ、一五 種々の裝飾
 一六 に包まる。その後¹⁷⁾に随いて、処女等王の許に導か
 一七 れ、その近き者等汝の御許に¹⁷⁾ 連れ来られん。
 一六 彼等は悦び雀躍りしつつ連れ来られ、王の宮殿
 一七 に導かれん。¹⁸⁾ 一七 汝の父祖に代りて、汝に子等生
 まれたり。¹⁹⁾ 汝はこれを立てて全地に君侯となさ

た異教諸国民。一¹²⁾キリストに帰依した
 ユデア人教会。これは天主の御国におい
 て特に榮譽ある地位を占める。一¹³⁾成程
 汝は父の家などを失う犠牲を払わなけれ
 ばならぬが、その代りもつと大なるもの
 即ちかかる王の愛を得る。一¹⁴⁾ヘブレオ
 語「汝のアドナイ」。すなわち汝の主。
 天主という語はヘブレオ語本にはない。
 15)ヘブレオ語本「その御前にひれふせ」。
 16)彼女が王に引きあわされるため宮殿内
 に案内される時。一¹⁷⁾王に対する呼びか
 け。一¹⁸⁾王の花嫁は聖会、または諸聖人
 の光輝を一身に集めておられる聖マリア
 またはこれに倣いこれに従う天主に忠実
 なる各人の靈魂と解せられている。殊に
 「童貞者」たちは、ほかの人の歌うことの
 できない喜びの歌を口にしながら、小羊
 のみあとに従う。黙一四・四参照。一¹⁹⁾子

一八
ん。彼等はいずれの代
々にも汝の御名を思い出で
ん。されば諸民は永久に、
世々に亘りて、汝を頌え奉
らん。

第四十五篇

(第四十六篇)

我等の避難所なる天主

一 終まで、コレの子等の
作、秘事²⁾に對する詩。

二 天主は我等の避難所にし
て力、患難の我等を激しく
襲いたる時の援助者なり。³⁾
三 さればたとい地揺らぎ、

孫が父祖の代りとなる、即ち父祖が彼らにおいて徳と力とを具えて
生き返る。新約の教会と、栄光を得給うた主との童貞的婚姻から、
「王的司祭衆」が生まれ、また天主の御国の「父」たちや靈的「牧
者」たち、即ち使徒や司教も生まれた。

第四十五篇

1) 詩篇第四第五の註一参照。——2) 聖會に對する天主の
御摂理と御助けと隠れたる御導き。しかしヘブレオ語の「アル・ア
ラモート」は全く別の意味で、文字通りに云えば「少女(の声)の
ために」。すなわちこの詩篇がソプラノで歌わるべきことを示した
音楽上の用語。——3) いかなる歴史上の出来事に基づいているか明ら
かではないが、この詩はモアブ人及びアンモン人を相手にヨザファ
トが闘つていた頃によく適合する。代下二〇参照。

四 山々海^{やまやまうみ}の中心^{もなか}に移^{うつ}るとも、我等^{われら}恐れ^{おそ}れじ、
 五 其^{その}水^{みづ}鳴^なり轟^{とどろ}きて、湧^わき返^{かえ}り、御力^{おんちから}に山々^{やまやま}震動^{ふる}きたり。⁴⁾ 五河^{かわ}の激流^{なげ}は天主^{かみ}の都^{みやこ}を愉^{たの}しま
 六 しむ、至高^{いとたかきもの}者^{もの}其^{その}幕屋^{まくや}を聖^{きよ}くし給^{たま}えり。⁶⁾ 天主^{かみ}其^{その}中央^{なかつ}に在^{ましま}せば
 七 揺^ゆらぐことあらし。天主^{かみ}朝未明^{あさまだき}に⁵⁾ 此^{これ}を助^{たす}け給^{たま}わん。⁷⁾ 民等^{たみら}は
 八 騒^{さわ}ぎ、国々^{くにくに}は傾^{かたむ}きたりき。彼御声^{かれみこえ}を発^{いだ}し給^{たま}いしに、地^ち揺^ゆらぎぬ。
 九 八万^{ばんぐん}軍^{しゆ}の主^{われら}は我等^{とも}と共^いに在^{いま}す。ヤコブ^{かみ}の天主^{われら}は我等^{ささえて}の支持^{ささえて}者^てな
 一〇 り。⁶⁾ 来^{きた}りて視^みよ、主^{しゆ}の御業^{みわざ}を、地上^{ちじよう}にていかなる奇蹟^{ふしぎ}をなし給^{たま}
 二 えるかを。¹⁾ 即^{すなわ}ち地^ちの果^{はて}までも 戦^{たたか}争^いを熄^やめしめ給^{たま}えるなり。彼^{かれ}
 三 は弓^{ゆみ}を折^おり、矛^{ほこ}を碎^{くだ}き、楯^{たて}を火^ひにて焚^やき給^{たま}わん。²⁾ 靜^{しず}まりて、
 四 我^{われ}が天主^{かみ}たることを了^{さと}れ。我^{われ}は諸国^{しよこく}の民^{たみ}に崇^{あが}められ、地^ちにて崇^{あが}め
 五 らるべし。³⁾ 三万^{ばんぐん}軍^{しゆ}の主^{われら}は我等^{とも}と共^いに在^{いま}す。ヤコブ^{かみ}の天主^{われら}は我等^{ささえて}の
 六 支持^{ささえて}者^てなり。⁸⁾

4) セラ、すなわち楽器の伴奏つき。— 5) 不安の夜から救われる途はただ朝を迎えることだけ。— 6) セラ。— 7) この言葉を発して、イスラエルの敵に威嚇的命令を下し給うのは、天主御自身。— 8) 第八節の繰り返し。その意味の重要さは、セラ、すなわち楽器の伴奏によつて強調される。

第四十六篇 (第四十七篇)

凱旋の歌

一 終まで、¹⁾ コレの子等作の詩。²⁾
 二 諸々の国人よ、手を拍ち、³⁾ 歓喜の聲あげて天主に
 叫べ。³⁾ これ主は高くして畏るべく、⁴⁾ 全地を統治す
 大王に在せばなり。⁴⁾ 彼は諸民を我等に服わしめ、
 諸国を我等の足の下にし、⁵⁾ その愛で給える。³⁾ ヤコ
 ブの誇りなる嗣産を、我等のために選^{えら}び給えり。
 六 天主は^{かみ}歓呼^{かんこ}の裡に、主は^{しゅ}喇叭^{らっぱ}の聲^{こゑ}の裡に、上^{のぼ}り。⁴⁾
 給えり。⁵⁾ 七 讃歌唱え、我等の天主に、讃歌唱え。讃
 歌唱え、我等の王に、讃歌唱え。八 天主は全地の王
 にて在せば、賢く⁶⁾ 讃歌唱え。天主は異邦人等を
 治め給わん。天主はその聖なる御座に坐し給う。

第四十六篇 1) 詩篇第四第五の註一参
 照。2) 製作の時代は明らかでないが
 ヨザファト王がモアブ人及びエドム人
 に勝つて(代下二〇・二八)凱旋する
 のを、歓迎するための歌であらう。聖
 会はこれを、キリストの榮ある御昇大
 に適用している。3) この目的語はヴ
 ルガタでは「誇り」だが、ヘブレオ語
 では「ヤコブ」。4) 契約の櫃を携えて
 出征したのであらう。それで天主はシ
 オン山上のその御座所にお歸りになつ
 たのである。5) ヘブレオ語本「セラ」
 6) すなわちこの最高の王にふさうよう
 に。

一〇 諸民の諸侯は、アブラハムの天主の御許に集い来れり、そ
は地の力ある神々として、いたく崇められたればなり。⁷⁾

⁷⁾ 彼らはキリスト教に帰依したので、非常に高い光榮の地位にあげられた。

第四十七篇

(第四十八篇)

シオンの護りなる主

一 週の第二日における、¹⁾ コレの子等の讚美歌。
二 主は偉大なるかな、我等の天主の都の内、その
聖なる山にて、甚く讚えられさせ給え。³⁾ シオン
の山は全地の歡喜にと据えられたり。北側に²⁾ 大
王の都あり。天主之を護り給うべければ、その
家々に知られ給わん。³⁾ 五 実にも視よ、地の王等相
集い、一つとなりて寄せ来りしが、⁴⁾ 六 自らこれを
見るや、驚き慌て顫えあがれり。七 戦慄彼等を襲
い、その時子を産む婦の如き苦痛ありき。⁵⁾ 八 汝は

第四十七篇

¹⁾ ギリシヤ語を用いるユデア人が典札に用いるように、七十人訳が附加した言葉。本篇が作られた動機は、前と同じである。——²⁾ 聖殿と王宮とのあるシオン山は、昔のイエルサレムの建てられていた山の背の北端をなしていた。——³⁾ 立派な建物で、天主のこれを護り給うことが悟られる。——⁴⁾ 同盟した王たちは、イエルサレムから行程三時間ばかりの所にあるテクア附近の荒野に陣した。⁵⁾ よく用いられるきまつた云い方。

九 烈しき風もて、タルシスの船を碎き給わん。⁶⁾ 我等は聞き
 たる如く、⁷⁾ 万軍の主の都にて、我等の天主の都にて見た
 り。天主はこれを永遠に築建て給えり。⁸⁾ 一〇 天主よ、我等
 は汝の聖殿の中にて、汝の御憐憫を受けたり。二 天主よ、
 汝の御名の如く、汝の讚美も亦、地の果に及ぶ。汝の御右
 手は正義に満てり。三 シオンの山は樂しめかし、ユダの娘
 等⁸⁾ は、主よ、汝の御審判ゆえに喜び躍れかし。一三 シオン
 を繞り、これを囲め、その塔にて談れ。一四 その力に汝等の
 心を置き、その家々を査べ数えよ、¹⁰⁾ これ後代に語り伝え
 んためなり。一五 実にここにこそ天主、我等の天主は永久に
 世々にわたりて在すなれ。¹¹⁾ 彼は世々に至るまで我等を治
 め給わん。

6) 汝は烈しい東風で、タルシス
 行きの船を難破させ給うように
 我々の敵軍を、抵抗できぬ力で
 打ち破り給う。——7) 我等は祖先
 の口から、イスラエルの歴史を
 成す奇蹟の話を聞き伝えている
 8) ヘブレオ語本「セラ」。樂器
 の伴奏で詩篇の第一部を終る。
 9) ユダの町々。——10) それはみな
 天主の御保護により無事である
 11) 天主により不思議に庇護され
 たイエルサレムは、聖会の象ど
 り。またすべての受洗者はかか
 る天主の町である。

第四十八篇

(第四十九篇)

富の空しさ

一 終まで、¹⁾ コレの子等作の詩。
 二 諸々の国人よ、之を聴け。凡て世界に住める者よ、耳に留めよ、
 三 汝等地上に生まれたる者、人の子等はみな、富めるも貧しきも齊し
 四 わが口は智慧を、わが心の瞑想は了悟を語らん。我は箴言に
 わが耳を傾け、わが意向を堅琴に寄せて²⁾ 打ち明かさん。³⁾ 我禍の
 日にも、いかで怖れんや、たといわが踵⁴⁾ の不義は我を囲み、⁵⁾ 己が
 力を持み、己が富の大いなるを誇る者等ありとも。⁶⁾ 兄弟⁵⁾ も之を贖
 わず、人豈贖うを得んや。彼は天主にその身の代をも、⁹⁾ またその生
 命の代をも出さざるべし、よしや永久に勞して、¹⁰⁾ なお終まで生き存
 えんとも。¹¹⁾ 彼智者の死するを見ん時は、滅亡を見ざらん。⁶⁾ 分別な
 き者と愚か者とは共に亡びて、その富を他人に遺さん。¹²⁾ かくて彼等

第四十八篇 1) 詩

篇第四第五の註一

参照。— 2) 詩的な

語を用いて。

3) 詩七七・二。

4) 第一の意味「踵」

更に「仇する者」。

5) 兄弟さえ決して

6) 彼は智者も愚人

も同様死ぬのを見

ながら、自分も死

なねばならぬこと

を思わない。

二三 の墓は永遠にその家となるべし。その住居は子々孫々の代に至
 るまで存す。彼等はその地に己が名を命けたり。⁷⁾ 一三人は榮譽
 の中にありながら悟らざりき、彼は分別なき畜に儔い、これに
 似たる者となれり。⁸⁾ 一四これ、彼等の道にしてその蹟きの因な
 り。されどその後も彼等はその口によりて悦ばん。⁹⁾ 一五彼等¹⁰⁾
 は羊の如く、冥府の中に置かれたり、死彼等を喰い尽さん。か
 くて晨には¹¹⁾ 義人彼等を治めん。しかして彼等の扶助は冥府に
 て彼等の榮華¹²⁾ と共に萎れゆくべし。一六されど天主は我を迎え
 取り給わん時、わが魂を冥府の手より贖い給わん。¹³⁾ 一七人の富
 まん時、またその家の榮華の弥増さん時も、汝怖るるなかれ。
 一八そは彼死なん時には何物も携えざるべく、その榮華も彼と共
 に降り行かざるべければなり。一九彼の魂はその生ける間祝せ
 られん。かく汝彼に幸いし給わん時は、彼汝に感謝せん。二〇彼

7) 名前だけはその所有地に残つてゐるような人々でさえ、既に死んだ。
 8) 人も畜も同様に死ぬ。
 9) ヘブレオ語本「セラ」。
 樂器の伴奏つきで歌う第一部の結び。——10) 仇する者共。六節参照。
 11) 地上の艱難の夜が終つて後には。——12) 地上で極めた榮耀榮華と共に滅びる。——13) セラ。創五・二四参照。そこに「彼を連れ去り給いけり」という同様な云い方が、エノクの幸福な死を表わすため用いてある。

三
はその父祖の子々孫々¹⁴⁾の中にまで入り、永久まで光を
見ざるべし。三人は榮譽の中にありながら悟らざりき、
彼は分別なき畜に儔い、これに似たる者となれり。¹⁵⁾

第四十九篇 (第五十篇)

真の信心

一 アサフの詩。¹⁾
神々の神²⁾なる主³⁾ 詔勅して、日の出るより入
るまでの地を召し給えり。二 その美麗の光輝は
シオンよりす。三 天主は明白に來り給わん、し
かして我等の天主は、黙し給わじ。その御眼前
には火燃え、その周囲には強き疾風荒るべし。⁴⁾
四 彼その民を審判かんとて、上より天地を召し
給わん。五 彼の御許にその聖者等⁵⁾を集めよ、

¹⁴⁾不敬なる者共を一族に見立ててある。—¹⁵⁾反復。十三節と同じ言葉。

第四十九篇 ¹⁾ゲルソンの血統のレヴィ人で(代上六・一参照)、歌手ならびに詩人および洞見者として、いろいろの名で称ばれているアサフは、なお他の十二詩篇の作者である。—²⁾ヘブレオ語では、真の神の二つの名、エル、エロヒム。—³⁾イスラエルの神ヤーヴェ。—⁴⁾火と疾風とは、審判者として現れ給うシナイ山の立法者の前駆⁵⁾イスラエル人は契約の民として天主のものであるから、かく称する(出一九・六)。

六 すなわち犠牲によりて彼と契約を立てたる者を。六時に諸天は彼の義
七 を告げん、そは天主審判者にて在せばなり。七 聴け、わが民よ、我語
八 らん。イスラエルよ、我汝に証せん。我は天主、汝の天主なり。八 我
九 は犠牲ゆえに汝を責めじ、⁷⁾ 汝の燔祭は常にわが眼前にあり。九 我は汝
一〇 の家より犢を、汝の畜群より牡山羊を取らじ。一〇 そは森のあらゆる獸
二 も、山の上の畜も、牛も、わが有なればなり。二 我は空飛ぶすべてのも
三 のを知る、田畑の麗しきも我と共にあり。三 我はたとい飢うることあ
四 りとも、汝に告げじ。地球とこれに満てるものとはわが有なればなり。
五 我牡牛の肉を食い、または牡山羊の血を飲むことあらんや。一四 天主
六 に讚美の犠牲を献げ、至高者に汝の誓いを還せ。一五 しかして患難の日
七 には我を呼べ、我汝を救い出さん、かくて汝我を讚むべし。一六 され
八 ど罪人等には天主曰えり、汝何とてわが義を語り、わが契約を口にす
九 るぞ、一七 汝は規律を厭い、わが言を後に捨てたるに。一八 汝は盗人を

6) セラ。地上の音
樂も、天と共に天
主を讚美する意。
7) 汝がそれを献げ
なかつたからとて
8) 天主は全世界の
主であるから、犧
牲の動物によつて
富み給うこともな
ければ、また食す
る必要がないから
食物となし給うこ
ともない。故に正
しい意向を以て献
げぬ犠牲は無益で
ある。一9) 輕蔑し
たが。

一九 見れば、これと共に走り、姦淫者等に与したり。一九 汝の口は悪意に満溢れ
 二〇 汝の舌は欺瞞を企てたり。二〇 汝坐しては己が兄弟に逆らい語り、己が母の
 二一 子等に罾をかけぬ。二一 汝是等の事をなしたるに、我黙してありしを、汝、
 二二 我も汝に似たるべしと、不当に思い倣せり。されど我は汝を責め汝の面前
 二三 に置かん。10) 二三 汝等天主を忘るる者よ、是等の事を悟れ、さもなくば彼汝
 等を奪い去り給うも、汝等を救い出すべき者あらじ。二三 讚美の犠牲11) は我
 を崇むべし、これこそ我の、彼に天主の救拯を示さんとする道なれ。

10) 汝の悪を。
 11) 真の礼拝は
 内外共に慎し
 んでするのが
 大切。

第五十篇

(第五十一篇)

痛悔の歌

一 終まで、1) ダヴィドの詩。
 二 彼がベトサベ一の許に入りし
 により、彼の許に豫言者ナタン
 の来りし後の作。2)

第五十篇 1) 詩篇第四第五の註一参照。12) 母下一二。1) 典
 礼の悔悛詩篇の第四。聖アウグスチノは異教の新年祝いに出
 席したキリスト教徒の罪の償いに、自分の教会の信者たちと
 これを祈つたし、聖会もその聖務中およびその他の機会にし
 ばしばこれを誦える。

三 天主よ、御仁慈の大いなるによりて、我
 を憐み、御憐憫の豊かなるによりて、わが
 不義を抹し給え。 四 更に我よりわが不義を
 洗い去り、我よりわが罪を清め給え。 五 実
 に我はわが不義を知る、わが罪は常にわが
 前にあり。 六 我はただ汝御独りに 3) 罪を犯
 し、御前に悪しき事をなせり。これ、汝が
 詔勅の際に義と認められ、是非せられ給う
 時にも勝ち給わんがためなり。 4) 実にも視
 よ、我は不義の裡に孕まれ、わが母罪にあ
 りて我を孕せり。 5) 実にも視よ、汝は真実
 を愛で、汝の叡智の定かならぬ隠れたる事
 を我に顯し給えり。 6) 汝ヒソプ 7) もて我に

3) ダヴィドは、自分の罪ゆえに苦しまねばならな
 かつた多くの人々（ベトサベー、ウリア、ラバト
 ・アンモンの石垣の下で殺されたイスラエル人た
 ち）に対して責を感じないわけでもなかつたが、
 とりわけ天主に対して、罪を犯したことを感じて
 いた。 4) 羅三・四。 5) ヘブレオ語では、複数
 でなく単数の形の「罪」を用いている。「原罪」
 の意。そうでなければ、人がこの世に生まれる始
 めの状態、母の胎内を出る時に、これを汚すよう
 な、どんなほかの罪をさしているのかわからない
 百一四・四参照。 6) 天主から特別な恩寵と光と
 を受けていたので、餘計その罪が重かつた。
 7) ヒソプは今なおパレスチナの石地に生える唇形
 科の雑草。茎は木のようで一メートル程の高さ、
 髪の毛のような枝と葉があり、灌水式の時灌水器
 として用いられる（利一四・四。六・四九）ヒソ
 プで灌水するのは。ここでは心の潔めの象どり。

二〇 濯ぎ給わん、さらば我清くなるべし。汝我を洗い給わん、さらば我雪よ
 一 にも白くなるべし。○汝喜びと楽しみとを、我に聞かせ給わん、さら
 二 ば卑しめられたる骨雀躍すべし。二わが罪に御面を背向け、わが不義を
 三 悉く抹し給え。二三天主よ、わが衷に淨き心を創造り、わが腸の中に直
 四 き霊を新たに興し給え。二三我を御面前より棄て給わされ、汝の聖なる
 五 霊を我より取り給わされ。一四汝の救拯の喜びを我に返し、氣高き⁹⁾ 霊
 六 もて我を固うし給え。一五我は不義なる者に汝の道を教えん、さらば不敬
 七 なる者汝の御許に立ち歸るべし。一六天主よ、わが救拯の天主よ、我を
 八 血¹⁰⁾ より救い給え、さらばわが舌汝の義を喜び謳わん。一七主よ、汝わが
 九 唇を開き給わん、さらばわが口汝の讚美を宣べ伝うべし。一八それ、汝
 一〇 もし犠牲を欲み給いたりせば、我寔にこれを献げ奉りしならんに。汝は
 一 燔祭をも嘉し給わざらん。一九天主への犠牲は碎けたる霊なり。天主よ、
 二 汝は打萎れて謙れる心を蔑視給わざるべし。二〇主よ、御好意によりて、

8) ダヴィドは主の霊がサウルを去つたこと(母上一六・一四)を知つていゝので、それを留め置き給うよう願う。――9) 人を導き、邪慾を制するよう助けるところの。――10) ウリアを殺した罪(母下一一・一五)。――11) 心に応わしい志もなしに献げれば。

シオンに御慈しみを示し給え、これ、イエルサレムの石垣の築かれんためなり。三その時汝は正義の犠牲、供物、及び燔祭を嘉納し給わん、その時人々汝の祭壇に贖を置き奉るべし。¹²⁾

第五十一篇 (第五十二篇)

悪人のほろび

一 終まで、¹⁾ ダヴィドの教訓。^〇
 二 イドゥメオ人ドエグ来りて、「アキメレクの家」のダ
 ヴィド行けり」とサウルに告げし時。²⁾ 三 何とて悪しき
 心根を誇るや、汝不義に強き者よ。³⁾ 四 汝の舌は終日不
 正を企み、汝は鋭き剃刀の如く詭計を行えり。^五 汝は
 善きよりは悪しき心根を、公正よりは寧ろ不義を語る
 ことを好みたり。⁴⁾ 六 欺瞞の舌よ、汝は凡て滅亡の言。⁵⁾

¹²⁾最後の二節は、イエルサレムの石垣が破壊され、供犠が中止されたバビロンの捕囚時代に附加されたものらしい。

第五十一篇 1) 詩篇第四第五の註一参照。—2) ダヴィドがドエグの裏切りでサウルに大司祭アキメレクの殺されたことを知つた後に作つたもの母上二二・九参照。—3) 裏切者ドエグへの呼びかけ。—4) ヘブレオ語本ではここに「セラ」とある。—5) 誹られた相手の人々を滅びに陥れるよるな言葉。

七 七
を好めり。七されば天主は終までも汝を滅ぼし、汝の住居より汝を
八 引き抜きて移し、生者の地より汝の根を絶やし給わん。八義人等は
九 見て畏れ、⁷⁾ 彼を嗤いて云わん、^九 視よ、天主を己が援助者とせず
して、己が富の豊かなるを恃み、その空しきに誇りし人を。」と。
一〇 されど我は、天主の家にて⁸⁾ 豊かに実る橄欖樹の如く、永久に世、
二 々の世々まで、天主の御憐憫に依頼めり。二汝然なし給いたれば⁹⁾
我世々に汝を頌え奉らん。我汝の御名に待望まん、そは汝の聖者等
の眼前に美わしければなり。

第五十二篇 (第五十三篇)

天主をなみする愚かさ

一 終まで、¹⁾ マエレトのために、²⁾ ダヴィドの教訓。^〇
二 愚なる者はその心の内に云いぬ、「天主なし」と。³⁾
彼等は腐敗し、不義によりて厭うべき者となれり。善

6) 汝は死ぬだろう。
へブレオ語本「セラ」
7) 報復し給う天主を
畏敬する。――8) ダヴ
イドが避難して、ド
エグに見られた所の
聖幕屋。――9) 汝に依
り頼む人々を助け給
うたから。

第五十二篇 1) 詩篇第四第五の註一
参照。――2) このへブレオ語は、悲し
い調子か、またはある伴奏楽器をさ
す。――3) 詩五二は詩一三のほとんど

三 をなす者一人だになし。三 天主、曉れる者天主を索むる者ありや
四 を照覽さんと、天より人の子等を望見給いしに、四 皆迷いたり、
おしなべて益なき者となり果てたり。善をなす者なし、一人だに
五 なし。四 五 不義を行い、パンを食う如く、わが民を食い尽す者、み
六 な知らんとはせざるか。六 彼等は天主を呼びたることなし、彼等
七 は恐るべき事のなかりし場合にも、恐怖に震慄けり。そは天主、
ひとびとに喜ばるる者等の骨を散らし給いたればなり。五 彼等は天主
これを輕視め給えるに由りて、狼狽えたり。七 シオンよりイスラ
エルの救拯を与え給わんは誰ぞや。天主その民の俘虜を回歸し給
わん時、ヤコブは喜び躍り、イスラエルは楽しむべし。

第五十三篇 (第五十四篇)

主の御助けを願う

一 終まで、¹⁾ ダヴィイドの教訓歌の内。²⁾ ニジ

第五十三篇

1) 詩篇第四第五の註一参照。―2) ヘブ

そのままの複写。ただ目につく違いは、前書きと、天主の御名の変えてあることと、六節が變つてゐること位。
4) 羅三・一二。―5) これらの言葉は、主の御民を弱敵と見くびつた異教徒の軍勢が、幾度も天主に撃たれて、シオンの石垣の下で滅びた、イスラエル史上の出来事を想起させる。

フの人々来りて、サウルに「ダヴィドは我等の許に隠れおるに
あらずや」と云いし時。³⁾

三 天主よ、汝の御名によりて⁴⁾ 我を救い、汝の御徳能によりて
我を審判き給え。^四 天主よ、わが祈を聴き容れ、わが口の言を
御耳に留め給え。^五 そは他人等⁵⁾ 我に起ち逆らい、猛き者等わ
が生命を索めたればなり。彼等はその眼前に天主を置きたるこ
となし。⁶⁾ 六 実にも視よ、天主はわが祐助者、主はわが生命の支
持者にて在す。^七 わが敵にその悪を転らし回し、汝の信実によ
りて彼等を亡ぼし給え。^八 我は快く汝に供物を献げ奉らん、主
よ、我は汝の御名を頌え奉らん、そは美わしければなり。^九 実
に汝はあらゆる患難より我を救い出し給えり、かくてわが眼わ
が敵を見下したるなり。

レオ語本「絃楽器の伴奏
にて」。—³⁾ 母上二三・一
三以下。—⁴⁾ すなわち御
慈しみと全能とによりて
⁵⁾ ジフ人はユデア人であ
るが、他所者の如くダヴ
イドに意地の悪いことを
した。—⁶⁾ セラ。この思
想するためフォルテの奉
楽。

第五十四篇

(第五十五篇)

悪人に悩まさるる義人の祈

一 終まで、ダヴィドの教訓歌の内。¹⁾

二 天主よ、わが祈禱を聴容れ給え、わが懇願を輕視め給わざれ。

三 我に御意を注め、我に応え給え。我はわが試鍊によりて悲しみ惑

えり、^四そは敵²⁾の声と、罪人の圧迫との故なり。実に彼等は我に

不義を負わせ、怒りて我に煩いをかけたり。^五わが心わが衷に乱

れ、死の恐怖我を襲えり。^六恐怖と戦慄と、我に臨み、暗闇我を覆

えり。^七されば我云いき、「我に鳩の如き翼を与えん者は誰ぞや、

さらば我飛びゆきて、休息わんに。³⁾」と。^八視よ、我逃れて遙かに

去り、荒野に留まりぬ。⁴⁾九 我は氣の小さき⁵⁾と疾風⁶⁾とより我を救

い給える者を待望みき。^{一〇}主よ、投げ落し給え、彼等の舌を分ち給

え⁷⁾。そは我都⁸⁾の中に不義と不和とを見たればなり。^二昼も夜も

第五十四篇 1) 詩五

三と同様、アブサロ

ム叛逆初期の作。

2) 主要な敵アキトフ

エル。 3) 安全な所

に。 4) ヘブレオ語

本「セラ」。 5) 内部

の意氣沮喪。 6) 外

部の危険。 7) バベ

ルの塔建築のことが

記してある創一一・

一以下を暗にさして

いる。 8) イエルサ

レム。

三 給^{たま}わん、そは彼等^{かれら}には変更^{かわり}なく、天主^{かみ}を畏^{おそ}れたることなければなり。三 彼^{かれ}
 三 は報^{むく}いんとて御手^{みて}を伸^のべ給^{たま}えり。彼等^{かれら}は御契約^{みちがい}を潰^{けが}したれば、三 御顔^{みかお}の怒^{いか}
 三 氣^りによりて打散^{うちち}らされたり。その御心^{みこころ}は攻め寄^より給^{たま}えり。その御言^{みことば}は油^{あぶら}に
 三 まさりて柔軟^{やわらか}なれど、是^{これ}はこれ、投槍^{なげやり}なり。三 汝^{なんじ}の心^{こころ}がかり¹⁴⁾を主^{しゆ}に投^なげ
 二四 かけよ、さらば彼御^{かれおん}自ら汝^{なんじ}を養^{やしな}い給^{たま}わん。義^{ただ}しき者^{もの}の揺^ゆらめくを、永遠^{とこしえ}に
 二四 容^{ゆる}し給^{たま}うことあらじ。¹⁵⁾ 天主^{かみ}よ、却^{かえ}つて汝^{なんじ}は彼等^{かれら}を滅亡^{ほろび}の坑^{あな}に下^{くだ}し給^{たま}わ
 ん。血^ちを流^{なが}す人々と、欺計^{たばかり}多^{おほ}き人々^{ひとびと}とは、己^{おの}が日数^{ひかず}の半^{なかば}にだも至^{いた}らざるべ
 し。されど主^{しゆ}よ、我^{われ}は汝^{なんじ}に依頼^{よりたの}み奉^{まつ}らん。

第五十五篇 (第五十六篇)

信賴溢るる祈願

一 終^{おわり}まで¹⁾ 聖所^{せいじよ}より遠^{とお}ざ
 かりたる民^{たみ}のために、²⁾ ダ
 ヴイドがゲトにてアロフイ

第五十五篇 1) 詩篇第四第五の註一参照。 — 2) 七十人訳及びヴル
 ガタでは、ダヴィドとその味方が、サウルの怒りを避けるため、
 イエルサレムと聖所から離れなければならなかつたことを示すに
 過ぎないが。ヘブレオ語本では、「遠き所におる声立てぬ鳩」。

14) ヘブレオ語
 本「荷」。
 15) マテオ六・
 二五。彼前五
 ・七。

九	八	七	六	五	四	三	二	一				
御眼前に置き給えり、 ¹⁰⁾ 汝の御約束にもある如く。	我汝にわが生活を ⁹⁾ 告げ参らせたり、汝わが涙を	を救い給わず、怒りて民等を粉碎し給わん。天主よ	わが生命を狙い待ちたれば、 ⁸⁾ 汝何のためにも彼等	言を憎みぬ。彼等の思念は悉く我に逆らい禍をなす	彼等は住まいて隠れ、わが踵を窺わん。 ⁸⁾ 彼等は	肉 ⁷⁾ 我に何をなさんも我怖れじ。 ⁶⁾ 彼等は終日わが	て我への御言 ⁶⁾ を讃え奉らん、我天主に依頼めり、	怖れん。されど我汝に頼り奉らん。 ⁵⁾ 我天主により	れば、わが敵終日我を蹂躪れり。 ⁴⁾ 日の高きに ⁵⁾ 我	我を責め悩ましたればなり。 ³⁾ 我に抗い闘う者多け	天主よ、我を憐み給え、そは人我を蹂躪り、終日	口人 ³⁾ に捕われおりし時、記念に録せしもの。 ⁴⁾

これはよく人に知られていた或る歌の冒頭の詞で、その旋律に合せてこの詩篇を歌えというのであるらしい。

3) 第一の意は「他の (αλλοι) 国人」。

ここはフィリスト人のこと。——4) 母上二一・一四。——5) すなわち日が最も高い真昼時でも、やはり私は危険の中にいる。——6) 天主が私のためによい約束をして下さったその御言葉。——7) 肉的で弱い人々。——8) 私の歩みを見まもつてゐる。——9) 「逃亡中の往来」とそれに伴ういろいろな苦しみ。——10) 原文は「汝の革袋にわが涙を蓄え給え」。「涙壺」に涙を集め、これをたくわえることは、昔、悲しいことのあつた時、殊に愛する家族に死に別れた時、広く行われた。

一〇 その時わが敵は後に退らん。いつの日にても我汝を呼び奉らん、視給え、
 我は汝のわが天主にて在すを知るなり。二 我天主によりて御言を讃え奉ら
 ん。11) 主によりて詔勅を讃え奉らん、我天主に依頼めり、人我に何をなさん
 も、我怖れじ。三 天主よ、汝への誓約我にあり、そを讃美として汝に還し奉
 らん。一三 そは我が生者の光の中にありて、天主の御前に嘉せらるるよう、汝
 わが魂を死より、わが足を滑り倒るるより救い給いたればなり。

11) 五節を
 少し変え
 て反復。

第五十六篇 (第五十七篇)

み翼のかげに

一 終まで。1) 「滅ぼすなかれ」。2) ダヴィドがサウルの面前を避け
 て洞穴に逃れし時。3) 記念に録したるもの。
 二 我を憐み給え、天主よ、我を憐み給え、そはわが魂汝に依頼
 めばなり。我は不義の過ぎ去るまで汝の御翼の蔭に望を寄せん。
 三 我は至高き天主に、我にめぐみ給える天主に呼ばわり奉らん。

第五十六篇 1) 詩篇第四
 第五の註一参照。―2) 「滅
 ぼすなかれ」の旋律によ
 つて歌えとの意。―3) 多
 分、母上四以下に記して
 ある機会に。

四 彼は天より遣りて我を救い給えり、我を蹂躪る者共に恥辱を与え給えり。⁴⁾ 天主はその御仁慈とその信実とを遣りて、^五獅子の仔等の只中よりわが魂を救い取り給えり。我は戦々兢兢々として眠りぬ。人の子等、その齒は武器なり矢なり、その舌は鋭き劍なり。^六天主よ、御躬を諸天よりも高くし給え、汝の御栄光全地にあれ。^七彼等はわが足に畏を備え、わが靈魂を押し拉ぎぬ。彼等はわが面前に坑を掘りしが、己らこれに陥りたり。^八わが心定まれり、天主よ、わが心定まれり。^九我歌い奉らん、聖詩を唱い奉らん。^{一〇}わが栄光よ、^{一一}起きよ、琴と小琴よ、起きよ。我黎明に起きん。^{一二}主よ、我民の中にて汝を頌え奉らん、異邦人等の中にて汝に奏歌を唱い奉らん。^{一三}そは汝の御憐憫は諸天に及ぶまで汝の信実^{一四}は雲に及ぶまで大いになりたればなり。^{一五}天主よ、御躬を諸天よりも高くし給え、^{一六}汝の御栄光全地にあれ。

4) ヘブレオ語本「セラ」。^{一五}ヘブレオ語本「セラ」。^{一六}恐れなく。^{一七}わが栄光とは、わが靈魂をさす。詩七・六。二九・一三などを参照。^{一八}ヘブレオ語本「われ黎明をよびさます」(普通なら黎明が人々をよびさますのに)。^{一九}六節の繰り返し。

第五十七篇 (第五十八篇)

悪を罰する天主あり

一 終まで。1) 「滅ぼすなかれ」。2) ダヴィドが記念に録し
 たるもの。3)
 二 人の子等よ、汝等もし寔に実に正義を語るならば、
 直く裁けかし。4) 三 そは汝等心の裡に不義を行い、汝等
 の手地に不正を営めばなり。四 罪人等は胎より遠ざ
 かり、5) 胎より迷いて、虚偽を語れり。五 彼等の狂え
 る状は、蛇の似姿そのままにして、己が耳を塞ぐ聾の
 蝮の如し、六 即ちそは呪い師の、また賢しく蠱術を行
 う者の、6) 声を聞かじとするなり。七 天主は彼等の口
 にある齒を打折り給うべし、主は獅子共の牙を打碎き
 給うべし。八 彼等は流れ落つる水の如く消え失せん、

第五十七篇 1) 詩篇第四第五の註一

参照。2) 詩五六の註二参照。

3) 本篇はアブサロムの時代の作であ
 る。4) アブサロムは民心をダヴ

イドから引きはなすため、部下と共
 に裁判を手段に利用した。原文は

「汝らはたして正義を語るや。」

5) 善い道を離れている。6) 歌や音

楽を用いて蛇を操る術が旧約聖書に

出てくるのはこれが最初。この術は

北アフリカ、エジプト、インドで盛

に行われた。手に負えない蛇に譬え

てあるのは、天主を信ぜぬ裁判者の

頑迷を意味する。

彼は彼等が弱くなるまで、御弓を引き給えり。

九 彼等は融くる蠟の如く、取除かれん。火その

上に落ちたり、彼等太陽を見ることなかるべ

し。一〇 汝等の棘が茨たるを覚り知る前に、彼

怒りて、彼等を生きたるまま吞み給わん。⁸⁾

二 義人は報復を見ん時、悦びて己が手を罪人の

血にて洗わん。⁹⁾ 三 かくて人云うべし、「まこ

と義人に結実あるなり、実に地にて彼等を審判

き給う天主在すなり。」と。¹⁰⁾

第五十八篇

(第五十九篇)

殘虐なる敵を訴う

一 終まで。¹⁾「滅ぼすなかれ。」²⁾ ダヴィドがサウ
ルの人をやりて彼を殺さんとその家を見守らせ

7) 原文は「かたつむり、のとけて消えゆく如く、女の時ならず産みたる子の日を見ぬ如くなれかし」。8) 熱風が茨の大きくならぬ内に、これを吹いて枯死させるように、天主は悪人がまだその計画を実行せぬ内に、怒つてこれを早死させて除き給う。
9) 軍人の足が血を踏んで通るように。義人は復讐を見るけれども、自分では行わない
10) この世には不公平な裁判者が沢山いるが最高の審判者は、虐げられた罪なき人々のために報復し給う。

第五十八篇

1) 詩篇第四第五の註一参照。

2) 詩五六の註二参照。

し時、記念に録したるもの。³⁾

二 わが天主よ、わが敵より我を援け出し、我に起ち逆らう者より我を

救い給え。^三 不義を行う者より我を援け出し、血を流す人々より我を

救い給え。^四 実にも視よ、彼等わが魂を捕え、猛き者等我に襲いかか

れり。^五 主よ、我には不義も罪もあらず、我は不義なく走りて、直く

往けり。^六 我を迎えんと起ち給え、視給え、汝主万軍の天主よ、イス

ラエルの天主よ、すべての異邦人等を罰せんために御意を傾け給え、

悪を行く者共を悉く憐み給うなかれ。⁴⁾ 七 彼等は夕に帰り来り、犬の如

く飢餓を忍びて邑をめぐり歩かん。⁵⁾ 八 視よ、彼等その口もて語らんに

劍その唇にあり、⁶⁾ 「それ、誰か聞きたる。」⁷⁾ と。九 されど主よ、汝は

彼等を嗤い給わん、異邦人を悉く無に歸せしめ給わん。¹⁰⁾ 我汝をわが

力と恃み奉らん、⁸⁾ 汝はわが扶助者に在せばなり。二 わが天主、その

御憐憫は我に先んずべし。¹¹⁾ 天主はわが敵に就きて、我に示し給わん。

3) 母上一九・九以下。—4) ヘブレオ

語本「セラ」。

5) 飢えに狂暴になつて、夜間往来を

うるつき廻る野良犬のように、荒々

しく狡猾で。

6) 即ち唇で劍の上

うに傷つける。

7) 敵の言葉。天主は聞かないなら、

罰もしない。

8) すなわち私は汝を力にし、汝に依り頼む。

一三 わが民のいつも忘れざるよう⁹⁾ 彼等を殺し給うなかれ。わが保護者
 なる主よ、汝の御徳能もて彼等を散らし、彼等を倒し給え、一三そは彼
 等の口の罪とその唇の言との故なり。¹⁰⁾ 彼等をして己が驕慢にかから
 しめ給え。彼等はその呪咀と虚偽との故に知れ渡るべし、一四そは彼等
 の滅びたる時、御忿怒により滅びて、あらずなりたる時なり。かくて
 彼等は天主がヤコブを統治め、地の果までも然なし給うべきことを知
 るに至らん。¹¹⁾ 一五彼等は夕に帰り来り、犬の如く飢餓を忍びて邑をめぐ
 り歩かん。¹²⁾ 一六彼等は食わんがために散々にならん、されど飽くこ
 となくば、咄くべし。一七さりながら我は汝の御徳能を誣い、朝に¹³⁾ 汝
 の御憐憫を喜び躍らん。そは汝わが患難の日に、わが支持者、わが避
 難場となり給いたればなり。一八わが祐助者よ、我汝に奏で歌わん、汝
 は天主わが支持者にして、わが天主わが憐憫に在せばなり。

9) 彼らをわが民の
 眼前に天主のお罰
 の見せしめとして
 おくため、暫くの
 間殺し給うなかれ
 10) 彼らの唇の言葉
 は、その口の罪で
 ある。即ち彼らの
 言葉はどれもみな
 罪である。 11) セ
 ラ。 12) 七節の繰
 り返し。 13) 彼は
 夜の内に救われた
 から。

第五十九篇 (第六十篇)

出征前のダヴィドの祈願

一 終まで¹⁾ 変るべき者のために、²⁾ ダヴィドが
教訓として、³⁾ 記念に録したるもの。 二 彼がシリ

アのメソポタミア⁴⁾ とソバルとを焼き、ヨアブが
歸り来りて塩の谷にイドウメア人一万二千人⁵⁾ を
討ちし時の作。

三 天主よ、汝は我等を斥け、我等を潰走しめ給え
り。⁶⁾ 怒りてはまた我等を憐み給えり。 四 汝地を

震撼かしそを乱し給えり、その裂目を直し給え、
そは動搖ぎたればなり。 五 汝は御民に難き事を示

し、我等に苦しみの葡萄酒⁷⁾ を飲ませ給えり。

六 汝は汝を畏るる人々に徴⁸⁾ を与え給えり、そは

第五十九篇 1) 詩篇第四第五の註一参照。

2) 詩四四の註二参照。 3) ヘブレオ語本

「ミクタム」(詩体)。 4) 七十人訳およ

びウルガタ訳の附加。 5) この数は、母

下八・一三によれば一万八千とあるから

二つの内どちらか筆写者が誤写したので

ある。 6) エドム人のしたことを、彼

らが天主の道具となつてなしとげた。

7) ヘブレオ語本では「めまいのする葡萄

酒」。即ち毒薬が混ぜてあるので眩暈を

起す葡萄酒。予言者達はここかしこにこ

の譬えを用いている。賽五一・一七、二

二参照。 8) 敵の前より、何処へ逃ぐべ

きかという合図。

七 彼等^{かれら}が弓^{ゆみ}の前^{まえ}より逃^{のが}るるを得^えんため、汝^{なんじ}の愛^{あい}し給^{たま}える者^{もの}⁹⁾が救^{すく}わ
 るるを得^えんためなりき。¹⁰⁾ 汝^{なんじ}の御^{おん}右手^{みぎて}もて救^{すく}拯^いを施^{ほどこ}し、我^{われ}に応^{こた}え
 給^{たま}え。^{八)} 天主^{かみ}その聖^{せい}所^{じよ}にて語^{かた}り給^{たま}えらく、「我^{われ}樂^{たの}しまん、シケム
 を分^{わか}ち、幕^{まく}屋^やの谷^{たに}に測^{はか}量^からん。^{九)} ガラードはわが有^もなり、マナ
 ツセはわが有^もなり、エフライムはわが首^{こうべ}の力^{ちから}なり、ユダはわが王^{おう}
 なり、^{一〇)} モアブはわが希^き望^{ぼう}の壺^{つぼ}なり。^{一二)} 我^{われ}イドウメアにわが沓^{くつ}を
 届^{とど}かさん、異^{こと}邦^{くに}人^{びと}等^ら¹³⁾は我^{われ}に従^{したが}いたり。」と。^{二)} 誰^{たれ}か我^{われ}を堅^{けん}固^こな
 る市^{まち}¹⁴⁾に導^{みちび}くべき。誰^{たれ}か我^{われ}をイドウメアにまで導^{みちび}くべき。^{一三)} 天主^{かみ}
 よ、我^{われ}等を斥^{しりぞ}け給^{たま}えるは、汝^{なんじ}にあらずや。天主^{かみ}よ、汝^{なんじ}は我^{われ}等の軍^{ぐん}
 勢^{せい}と共^{とも}に出^{いで}征^ゆかんとし給^{たま}わざるか。^{一三)} 患^{なや}難^みより我^{われ}等を助^{たす}け出^{いだ}し給^{たま}
 え、人^{ひと}の救^{すく}援^いは空^{むな}しければなり。^{一四)} 天主^{かみ}によりてぞ、我^{われ}等^ら雄^お々^おし
 き振^{ふる}舞^{まい}をなさん、彼^{かれ}こそ我^{われ}等を悩^{なや}ます者^{もの}共^{ども}を無^むに帰^きせしめ給^{たま}うべ
 けれ。

9) イスラエルの民。
 10) セラ。――11) スツコト。
 シケムやスツコトは、
 カナアン全地を代表す
 る。前者は西方、後
 は東方の地にある。
 12) 私はモアブを征服し
 よう、それは肉の一ぱ
 い入った壺のように私
 の欲望を満足させてく
 れるだろう。――13) 周囲
 の異教民族さえ。
 14) セラ即ちペトラとい
 うエドムの首都。天然
 の要害の地。

第六十篇 (第六十一篇)

さすらい人の祈り

一 終まで。¹⁾ ダヴィドのほめうた。²⁾
 二 天主よ、わが懇願を聴き容れ給え、わが祈禱に御意を注
 め給え。³⁾ 我地の果より汝に呼わり奉れり。³⁾ わが心憂愁に
 沈みおりし時、汝我を岩の上に⁴⁾ 挙げ給えり。汝が我を導
 き給えるは、⁴⁾ 汝がわが希望、敵の面前にある強き塔にて
 在せるが故なり。⁵⁾ 我世々に亘りて汝の幕屋に住まわん、⁵⁾
 汝の御翼の蔭に庇われん。⁶⁾ わが天主よ、実に汝こそわが
 祈禱を聴き容れ、汝の御名を畏れ奉る人々に嗣産を与え給
 えるなれ。⁷⁾ 汝は王の日数に日数を加え、その年齢を千代
 万代にまで至らせ給わん。⁷⁾ 八 彼は天主の御眼前に永久に住
 まる。その御仁慈と信実とは、誰かこれを究むるを得べき。

第六十篇 1) 詩篇第四第五の註
 一参照。 2) ダヴィドがヨルダ
 ン東方、ガラードの地に逃げて
 いた、アブサロム叛逆の時の作
 らしい。 3) 聖所から遠隔の地
 にある彼には、それが非常に淋
 しく思われた。 4) 安全な場所
 に。 5) ダヴィドは天主が自分
 をイエルサレムの聖幕屋の近く
 に戻らせて下さると確く信じて
 いる。 6) ヘブレオ語本「セラ」。
 7) ダヴィドの子孫のメシアに該
 当する言葉。

九
九されば我、世々汝の御名に奏歌を唱い奉らん、こ
れ、日々わが誓約⁸⁾を還さんためなり。

第六十一篇 (第六十二篇)

天主のみへの信頼

一 終まで。1) イデイトウンのために。2) ダヴィドの詩。3)
二 わが魂^{たま}いかで天主に従わざらんや。4) そはわが救^{すく}
濟^い彼^{かれ}より出ればなり。三 実に彼こそはわが天主、わ
四 が救主なれ。わが支援者よ、我もはや動かじ。四 汝^{なんじ}
等いつまで人に襲撃るぞ。汝等は皆、傾ける石垣、
五 揺らめく籬の如くに殺すなり。5) 五されど彼等はわが
尊嚴^{とうとぎ}6) を奪わんと思えり。我は渴きて7) 走りぬ。彼^{かれ}
等はその口にては祝ぎしが、その心にては呪いしな
り。8) 六されどわが魂よ、汝は天主に従い奉れ、わが

8) 彼は自分の一生を全く天主の御栄え
のために献げると「誓つて」いた。

第六十一篇 1) 詩篇第四第五の註一参
照。2) 詩三八の註二参照。3) 本篇
はダヴィド年少の苦難時代を偲んだ作
でなければ、アブサロムの叛逆によつ
て王のための艱難を歌つた作であるこ
とは確か。4) ヘブレオ語本「わが魂
が安息を得るはただ天主によりての
み」。5) 今にも崩れそうな石垣のよう
に。6) わたしの王としての威光。
7) 天主の御助けを受ける必要を切に感
じて。ヘブレオ語本は「かれらは偽り
を楽しむ」。8) ヘブレオ語本「セラ」。

忍耐は彼よりのものなればなり。⁹⁾ 実に彼こそはわが

天主わが救主なれ、わが祐助者よ、我もはや移りゆか

じ。¹⁰⁾ わが救済わが栄光は天主にあり、我を祐助くる天

主なれば、わが希望は天主にあり。民の全会衆よ、¹¹⁾

彼に頼り奉れ、汝等の心をその御前に披瀝せよ。天主は

永遠に我等の祐助者にて在す。¹²⁾ 一〇されど人の子等は空

しく、人の子等は秤を偽る。¹³⁾ かくて彼等は自ら空しき

事によりて互に欺かんとす。二不義を待みとするなかれ

掠奪物を欲するなかれ。財物満ち溢るとも、これに心を

かくるなかれ。天主は一度曰えり。我は次の二つの事

を聞けり、権力の天主にあること、^{一三} 及び主よ、憐憫も

汝にあること、即ち是なり。そは汝、人各々にその作に

従いて、報い給うべければなり。¹⁴⁾

⁹⁾ ダヴィドは本篇の冒頭に問いの形であらわしたことを、ここではわが魂に要求する形で反復する。

¹⁰⁾ わが王国を捨てて異郷へ。ヘブ

レオ語本は三節の如く「われ動か

じ」。一〇汝ら依然われに忠なるす

べての者よ。一〇ヘブレオ語本、

「セラ」。一〇彼らは自分達に対し

て少しでも尊敬を抱いている人々

をさえ失望させる、その時彼らの

全く空しいことがわかるから。

¹⁴⁾ マテオ一六・二七。羅二・六。哥前三・八。加六・五。

第六十二篇

(第六十三篇)

朝の祈り

一 ダヴィドがイドウメアの荒野にありし時の詩。¹⁾
 二 天主よ、わが天主よ、我曙光より汝に向かわんと
 目覚む。²⁾ わが魂汝に慄れ渴けり。わが肉も汝にい
 かばかり然なしたることぞ。³⁾ 荒れ果て、道なく水
 なき地において、かく我汝の御徳能と御栄光とを仰
 ぎ見んと、聖所に在す汝の御前に現れたり。⁴⁾ 汝の
 御憐憫は生命⁴⁾ にも勝りてよければ、わが唇汝を
 讃め奉らん。⁵⁾ 我はわが生くる限り、かく汝を祝し
 汝の御名によりて⁵⁾ わが手を挙げん。⁶⁾ わが魂は髓
 と脂^{あぶら}とによる如く満されよかし。⁶⁾ さらにわが口、
 歡喜の唇もて讃め奉らん。⁷⁾ 我もしわが榻の上にて

第六十二篇 1) ダヴィドはサウルの迫害の時やアブサロムの謀叛の時に数回この荒野に避難せねばならなかつた。本篇は彼が王と自称しているので、後の場合の作であらう。2) 西方東方両教会の共唱祈禱の「朝の祈り」。3) その慄れは肉体をさえやつれさせるほど強い。4) 複数。幾千の命にもまさりて。生命はただ自然的なものに過ぎないが天主の御憐みは一層優れた超自然界のもの。5) 汝の御名を呼びまつりて。6) 脂肪は犠祭の最良の献げ物であつたから、脂肪は天主の豊かな御祝福の象徴。

八 汝を憶い出でたらば、朝に汝のことを思いめぐらさん。八そは汝
 わが祐助者にて在したればなり。されば我汝の御翼の蔭にて喜び
 躍らん。九わが魂は汝の御後を慕えり、汝の御右手我を受取れり。
 一〇されど彼等⁷⁾はわが生命を狙いたれども空しく、地の底⁸⁾に入
 り、二劍の手に付され、狐⁹⁾の分つ所とならん。一三さりながら王
 は天主によりて楽しむべく、彼によりて誓う人々¹⁰⁾は皆頌えらる
 べし、そは不義を語る者の口塞がれたればなり。

第六十三篇 (第六十四篇)

悪しき者の行末

一 終まで¹⁾ ダヴィドの詩²⁾
 二 天主よ、わが願い奉る時、わが祈禱を聴き容れ給え、敵の恐怖
 よりわが魂を救い給え。三汝は心根悪しき者の会合より、不義を
 行³⁾う者の群より、我を衛り給えり。四 実に彼等は劍の如くその舌

7) わが命を狙う者共。
 8) よみのドン底。
 9) ヘブレオ語本では
 「山犬」。この獣は埋め
 てある死体を掘り出し
 て食う。―10) 天主を唯
 一の神と認める人々。

第六十三篇 ―1) 詩篇

第四第五の註一参照。

2) 歴史上いつのことかは不明。述べてあることは、例えばサウルの

五、を磨ぎ、³⁾ 苦き物たるその弓を張り、^五 隠れたる処にて汚
 玷なき者を射んとせり。^六 彼等は俄にこれを射て懼るること
 となからん。彼等は悪しき事に固まり居るなり。彼等は畏
 を隠し設けんとて相語らい、「誰か我等を見ん。」と云え
 り。⁴⁾ 彼等是不義を図り、その図り図ることに疲れ果てた
 り。人は傲ぶる心になること⁵⁾ あらんも、^八 天主は御自ら
 の崇高きを示し給わん。彼等の傷は童等の矢による如く、⁶⁾
^九 彼等の舌は彼等に逆らいて弱り果てたり。彼等を見し者
 は皆怖じ惑い、^{一〇} いずれの人もおそれたりき。かくて彼等
 天主の御業を宣べ伝え、そのなし給いしことを了りぬ。
 二、義人は主によりて楽しみ、これに依頼まん、かくて心の
 直き者皆諸共に頌えらるべし。

迫害やアブサロムの叛逆などダ
 ヴイドの受難時代に合う。
 3) 讒謗するため。——4) 彼らは義
 人たちを除こうとする自分らの
 計画手段を、天主が御存じない
 と思つてゐる。——5) 傲慢極まる
 計画を思い立つこと。原文は、
 「おのおの内の思いと心とは
 深し」。——6) 小児の放つた矢のよ
 うに、こたえない。——7) ヘブレ
 オ語本「彼らを見る者みな頭を
 振らん」。

第六十四篇 (第六十五篇)

收穫感謝の歌

一 終^{おわり}まで。1) ダヴィドの詩。イエレミアとエゼ
 キエルとが、捕^{とら}え移^{うつ}されたる民に、その出^いで始^{はじ}
 めし時^{とき}与^{あた}えし歌^{うた}。2)
 二 天主^{かみ}よ、讚美^{さんび}はシオンにて汝^{なんじ}に相応^{ふさ}わしく、
 誓約^{ちがい}はイエルサレムにて汝^{なんじ}に還^{はた}されん。三 わが
 祈^{いのり}祷^きを聴^きき容^いれ給^{たま}え。すべての肉^{にく}3) は汝^{なんじ}に來^{きた}
 らん。四 不義^{ふぎ}なる者^{もの}の言^{ことば}は我等^{われら}に勝^かちたれども、
 汝^{なんじ}は我等^{われら}の不敬^{ふけい}を赦^{ゆる}し給^{たま}わん。五 幸福^{さいわい}なるかな、
 汝^{なんじ}の選^{えら}びて御許^{みもと}に迎^{むか}え取^とり給^{たま}える者^{もの}。彼^{かれ}は汝^{なんじ}の
 大庭^{おおにわ}に住^すまわん。我等^{われら}は汝^{なんじ}の家^{いえ}の幸^{さち}に満^{みた}さるべ
 し。汝^{なんじ}の御殿^{みどの}は聖^{せい}にして、六 公平^{こうへい}において奇^た妙^え

第六十四篇 1) 詩篇第四第五の註一参照。
 2) ヴルガタの附加したもの。エジプトに流
 寓していた、もしくはカルデアに拉致され
 ていたイスラエル人が、異郷から帰国の途
 に着きかけた捕囚の終り頃、イエレミア、
 エゼキエル両予言者が同胞にこの詩篇を歌
 わせたという意味。ヘブレオ語原文によれ
 ば、前にひでりがあり、イスラエル人はそ
 れのやむよう祈りを献げ、誓願を立て願つ
 ていたが、望みがかなつたので、今その感
 謝をするのらしい、本篇は收穫感謝に適當
 な歌である。――3) すべての人。殊にシオン
 の聖所の前に讚美、感謝、祈願のため集つ
 たイスラエル人の群。

なり。天主よ、我等の救主よ、地のすべての極の、⁴⁾ また遙かなる海にての、希望よ、我等に^七 応え給え。汝は御徳能によりて山々を備え、^八 権勢を帯び、^九 海の深き処をさえ騒がし、その^五 涛音を轟かし給う。異邦人等は慌て惑うべく、^六 極端に住む者も汝の^五 靈驗に怖じ恐るべし。汝夜明と日暮との始まる^六 処を悦ばせ給わん。一〇 汝は地を訪れて、これを豊かに潤し、さまざまに富ませ給えり。天主の河には水充滿てり。⁷⁾ 汝彼等の食物を備え給えり。そはその^八 整えられたることかくの如くなればなり。二 その溝を豊かに潤し、その産物を^九 弥増し給え。そは芽を出して大雨を楽しまん。三 汝は御慈恵もて年の冠^八 を祝福し給わん、さらば汝の畑は豊かに満たさるべし。^{一三} 荒野の眺望佳き^九 処は肥え、^{一〇} 丘々は^{一〇} 歡喜を帯ぶべし。畜群の牡羊は衣着せられたり、¹⁰⁾ 谷々は穀物にて満ち溢れん、¹¹⁾ 彼等は叫ぶべし、¹²⁾ 実に讚歌を唱うべし。

4) 地球のさいはてに住んでいる人々の。
5) この世の歴史に天主が介入されること
6) 東。――7) 豊作にする豪雨が降つた。
8) 国の農作物全部。
9) 緑はいわば喜びの衣。――10) 草が豊かであれば、羊も肥える

第六十五篇 (第六十六篇)

天主讚美のすすめ

一 終まで。1) 復活の頌歌。2)

全地よ、天主に歎び叫べ。二 その御名に讚歌を唱え、彼を頌えてこれに

榮あらしめよ。三 天主に申し奉れ、「主よ、汝の御業はいかに恐るべき

かな。汝の御徳能の大いなるによりて、汝の敵は汝に偽り媚びん。四 全

地は汝を拝み、汝に奏で歌えよかし、汝の御名に讚歌唱えよかし。」3)

五 来りて天主の御業を視よ。人の子等に就きて計らい給う所を畏るべき。

六 彼は海を乾ける地に変え給う。人々河を徒歩にて渡らん。4) そこにて

我等彼によりて悦ばん。七 彼はその御徳能もて永遠に統治め、その御目

は異邦人等を見守り給う。背く者共をして自ら高しとせしめ給わされ。5)

八 異邦人等よ、我等の天主を祝し奉れ。その讚美の声を聞かせよかし。

九 彼はわが魂を生かし、わが足のよろめくを容し給わざりき。一〇 天主よ

第六十五篇

1) 詩篇第四第五の註一参照。

2) 民の道德的復活に鑑みて、七

十人訳が附加したもの。一3) へ

ブレオ語本「セ

ラ」。一4) 紅海を

通りヨルダン河

を渡つた思い出

5) へブレオ語本

「セラ」。

二一 実に汝こそ我等を試みて、銀の験さるる如く、我等を火もて験し給えるなれ。
 二二 汝は我等を罠に陥れ、我等の背に患難を負わせ、二三 我等の頭上に人々を
 置き給えり。⁶⁾ 我等は火と水とを経たるが、汝は我等を爽快なる所に導き出
 し給えり。二三 我は燔祭の牲を携えて汝の家に往き、わが誓約を汝に還さん、
 一四 そはわが唇の申し出で、わが患難の時にわが口の述べたるものなり。一五 我
 髓に満ちたる燔祭を、牡羊の火祭と共に汝に献げ、牡牛を牡山羊と共に汝に
 供えん。⁷⁾ 一六 凡て天主を畏るる者よ、来りて聴け、我彼がわが靈魂になし給
 えることのいかに大いなるかを談らん。一七 我わが口もて彼に叫び、わが舌も
 て彼を頌えぬ。一八 我もしわが心の裡に不義を認めたらば、主は聴き容れ給わ
 ざるべし。一九 されど天主は聴き容れ給いて、わが懇願の声に御意を注め給え
 り。二〇 わが祈禱を斥けず、御憐憫を我より取り去り給わざりし、天主は祝せ
 られさせ給え。

6) アツシ
 リア及び
 エジプト
 の記念碑
 によれば
 勝利者は
 地に敵を
 臥させ、
 その上を
 車に乗つ
 て通つた
 7) ヘブレ
 オ語本
 「セラ」。

第六十六篇 (第六十七篇)

天主の御祝福

一	終 ^{おわり} まで。1)	讚 ^{さんび} 美 ^び 歌 ^か の内 ^{うち} 。ダ ^だ ヴ ^ヴ イ ^イ ド ^ド の頌 ^{たたえ} 歌 ^{うた} 。2)
二	天主 ^{かみ} 我 ^{われ} 等 ^ら を憐 ^{あわれ} みて、我 ^{われ} 等 ^ら を祝 ^{しめ} し給 ^{たま} え。その御 ^み 顔 ^{かお} を我 ^{われ} 等 ^ら の ^{うへ} に輝 ^{かがや}	
三	かして、我 ^{われ} 等 ^ら を憐 ^{あわれ} み給 ^{たま} え。3) 三	これ、地 ^ち 上 ^{じやう} に ^て 我 ^{われ} 等 ^ら が汝 ^{なんじ} の道 ^{みち} を知 ^し り
四	すべての異 ^{こと} 邦 ^{くに} 人 ^{びと} 等 ^ら にも汝 ^{なんじ} の救 ^{すく} 済 ^い の伝 ^{つた} えられんためなり。天主 ^{かみ} よ	
五	民 ^{たみ} 等 ^ら をして汝 ^{なんじ} を頌 ^{たた} えしめ給 ^{たま} え。諸 ^{もろ} 々 ^{もろ} の民 ^{たみ} をして汝 ^{なんじ} を頌 ^{たた} えしめ給 ^{たま} え。	
六	五 異 ^{こと} 邦 ^{くに} 人 ^{びと} 等 ^ら は樂 ^{たの} しみ、また喜 ^{よろこ} び躍 ^{おど} れかし、そは汝 ^{なんじ} 公 ^{こう} 平 ^{へい} に民 ^{たみ} 等 ^ら を裁 ^{さほ}	
七	き、地 ^ち 上 ^{じやう} に ^{ある} 諸 ^{しよ} 国 ^{こく} の民 ^{たみ} を導 ^{みちび} き給 ^{たま} えばなり。4) 六	天主 ^{かみ} よ、民 ^{たみ} 等 ^ら をし
八	て汝 ^{なんじ} を頌 ^{たた} えしめ給 ^{たま} え、諸 ^{もろ} 々 ^{もろ} の民 ^{たみ} をして汝 ^{なんじ} を頌 ^{たた} えしめ給 ^{たま} え。5) 七	地 ^ち は
	その産 ^{さん} 物 ^{ぶつ} を出 ^{いだ} しぬ。6)	願 ^{ねが} わくは天主 ^{かみ} 、我 ^{われ} 等 ^ら の天主 ^{かみ} の我 ^{われ} 等 ^ら を祝 ^{しめ} し給 ^{たま}
	わんことを、天主 ^{かみ} の我 ^{われ} 等 ^ら を祝 ^{しめ} し給 ^{たま} いて、地 ^ち の果 ^{はて} すべ ^て 彼 ^{かれ} を畏 ^{おそ} れ	
	奉 ^{まう} らんことを。	

第六十六篇 1) 詩篇第
四第五の註一参照。
2) 七十人訳及びヴルガ
タ訳の附加。— 3) ヘブ
レオ語本「セラ」。
4) ヘブレオ語本「セラ」
5) 四節の繰り返し。
6) この詩篇は豊年の作
らしい。收穫の感謝は
天主がまたメシアの祝
福に対する希望をもか
なえて下さるように、
という祈願となる。

第六十七篇 (第六十八篇)

シナイよりシオンへの天主の御幸

一 終まで、¹⁾ ダヴィド自作の頌歌²⁾
 二 願わくは天主起ち給いて、³⁾ その敵は打ち散らされ、
 彼を憎む者共はその御面前より逃げ去らんことを。^三 彼
 等は煙の消え失する如く失せよかし、罪人は蠟の火に面
 して溶くる如く天主の御面前にて亡びよかし。^四 されど
 義人は宴し、天主の御眼前に雀躍して、悦び樂しめかし。
 五 天主に歌い奉れ、その御名に頌歌唱い奉れ。西より登
 り来る⁴⁾ 者に道を備えよ。主とはその御名なり。その御
 眼前に喜び躍れ。人々⁵⁾ はその御面前にて震慄かん。
 六 彼は孤兒の慈父、寡婦の裁判者にて在す。聖所にまし
 ます天主は、^七 同様なる者を同一の家に住ましめ⁶⁾ 給う

第六十七篇 1) 詩篇第四第五の註

一 参照。 2) この詩篇は、アンモ

ン人に勝つた後、契約の櫃の凱旋

(母下一一・一一)を祝つたもの

である。弗四・八以下にある通

り、これは全くメシア的である。

3) モイゼは荒野通過中、民が契約

の櫃を担つて更に前進する度に、

この言葉を唱えさせた。 4) 勝つ

たイスラエル人がアンモン人の領

地からイエルサレムへ歸るのに、

ぜひと向かわなければならぬ

方角。 5) 敵。 6) ヘブレオ語本

「よるべなき者を家に居らしめ」

天主にして、強き御力もて縛められし者を導き出し、逆らい
 奉る者、墓⁷⁾に居る者をも同じく然なし給う者なり。天主
 よ、汝が御民の眼前にて出でゆき給いし時、荒野の中を通り
 給いし時、⁸⁾九地は揺らぎ、諸天さえシナイの天主の御面前に
 イスラエルの天主の御面前に隳⁹⁾したりき。天主よ、汝は
 その遺産のために、御好意もて雨¹⁰⁾を取り置き給わん。そは弱
 りしかど、汝これを全うし給いぬ。二汝の獸等はその中に住
 まわん、天主よ、汝はその御慈恵もて貧しき者¹¹⁾のために備
 え給えり。三主は大いなる御徳能もて、福音を述べ伝うる人
 々に、¹²⁾言を授け給わん。一三彼は愛撫しまれたる者¹³⁾の軍勢
 の王なり、家の眉目美き者等、¹⁴⁾掠奪物を分たん。一四汝等も
 し籤の只中に眠らば、翼は白銀、その背の後は黄金の薄光に
 包まれたる鳩の如くなるべし。一五天に在す者、これが上に王

すなわち、家族を失つた人々。一) 荒野で倒れた不信なるイスラエル人の墓を暗にさしている。一) へブレオ語本「セラ」。一) これらの句はシナイ山における天主御啓示の際の自然現象を思い出させる。一) 御民のために天から降つたマンナ
 11) 困窮している御民。
 12) 女たちは戦勝を歌にして祝うのが慣であつた(出一五・二〇。士五・二一三一母上一八・六以下参照)。
 13) イスラエル人。一) 一家の主婦。

一六 等を散らし給う時は、彼等セルモンにある雪と白くせらるべし。¹⁵⁾ 一六 天
 一七 主の山¹⁶⁾は肥えたる山なり、凝固まれる山なり、肥えたる山なり。一七 汝
 一八 等何とて凝固まれる山を怪しみ視るや。これこそ天主がそこに住むを嘉
 一八 し給いたる山なれ。実に主は末長く住まい給わん。一八 天主の戦車は数万
 一九 悦ぶ者は幾千。主はシナにて彼等の中に、聖所のなかに在す。¹⁷⁾ 一九 汝は
 二〇 高処に昇り、俘虜を俘虜として引連れ、人々の中にて礼物を受け給えり。
 二〇 主たる天主の住み給うを信ぜざる者等よりさえ、然なし給えり。二〇 主は
 二一 日毎日毎に祝せられさせ給え、我等の救拯の天主は我等の旅を幸福なら
 二二 しめ給わん。¹⁸⁾ 二二 我等の天主は救拯を施す天主にして、死より脱れ出で
 二三 たるは主の有なり、主の有なり。二三 されど天主はその敵の頭を、己が罪
 二三 愆の中を歩みゆく者共の髪多き頭頂を、打碎き給わん。二三 主は曰いぬ、
 二四 「我バサンより連れ歸らん、海の底にまで連れ歸らん。二四 これ、汝の足
 二五 が敵の血に浸され、汝の犬共の舌もそれに与らんためなり。」二五 天主よ、

15) 大地はまるで
 雪でも降り敷い
 たように、戦死
 した将兵の白骨
 で蔽われる。
 16) シオン山。
 17) 作者は天主を
 戦いに勝つて捕
 虜や多くの資物
 をうしろに従え
 戦車に乗つてシ
 ナイ山からシオ
 ンへ凱旋する王
 としてあらわし
 ている。
 18) ヘブレオ語本
 「セラ」。

二六 彼等^{かれら}は汝^{なんじ}の進^{すす}み給^{たま}うを、わが天主^{かみ}の聖所^{せいじよ}に在^{いま}すわが王^{おう}の進^{すす}み給^{たま}
 うを見^みたり。^{二六} 諸侯^{きみたち}は鼓打^{つづみう}つ乙女^{おとめ}等の只中^{ただなか}にありて、琴奏^{ことかな}で歌^{うた}
 う人々^{ひとびと}を従^{したが}え、先^{さき}に進^{すす}みぬ。^{二七} イスラエルの源^{みなもと}19) より出^いでし
 汝等^{なんじら}よ、集會^{つどい}の中^{うち}にて主^{しゅ}たる天主^{かみ}を祝^{ことほ}ぎ奉^{まつ}れ。^{二八} 彼処^{かしこ}に心^{こころ}も空^{そら}
 なる若人^{わかうと}ベンヤミン^{きみたち}あり、²⁰⁾ 彼等^{かれら}の長^{かしら}たるユダ^{きみたち}の諸侯^{きみたち}あり。ザ
 二九 ブロンの諸侯^{きみたち}、ネフタリの諸侯^{きみたち}もあり、天主^{かみ}よ、汝^{なんじ}の御德能^{みちから}
 三〇 に命^{めい}じ給^{たま}え。天主^{かみ}よ、汝^{なんじ}が我等^{われら}の中^{うち}に行^{おこな}い給^{たま}えることを固^{かど}うし
 給^{たま}え。^{三〇} イエルサレム^{なんじ}にある汝^{なんじ}の聖殿^{みとの}より、王等^{おうたち}礼物^{れいもつ}を汝^{なんじ}に
 三一 献^{ささ}げん。²¹⁾ 三二 芦間^{あしま}の野獸^{やじゆう}、民等^{たみら}の牝牛^{めうし}の中^{うち}なる牡牛^{おうし}の集群^{むれ}を譴^いま
 責^しめ給^{たま}え、²²⁾ 銀^{しろがね}と駟^{ため}されたる者達^{ものたち}を排除^{おしのけ}んとすればなり。戦闘^{たたかい}
 三三 を欲^{この}む異邦人等^{ことくにびとら}を打散^{うちち}らし給^{たま}え。^{三三} エジプト^{つがい}よりは使^{つかい}者等^ら来^{きた}り
 三四 エチオピア^{いそ}は急^{いそ}ぎ天主^{かみ}にその手^てを伸^のべん。²³⁾ 三三 地^ちの国々^{くにぐに}よ、汝^{なんじ}
 等天主^らに歌^{うた}え、主^{しゅ}に奏^{かな}で歌^{うた}え、天主^{かみ}に奏^{かな}で歌^{うた}え。²⁴⁾ 三三 そは諸天^{しよてん}

19) イスラエルの祖として
 のヤコブとその子ら。
 20) イスラエル最初の王た
 るサウルはベンヤミン族
 の出であつた。またイス
 ラエルの聖所はベンヤミ
 ン族領内にあつた。
 21) イエルサレムはここで
 は、メシア的意義に解す
 れば、将来の世界的母教
 会をさす。――22) 芦間の野
 獸とはエジプト、牝牛と
 は強國、民らの牝牛とは
 弱小國民の意。――23) エジ
 プト人及びエチオピア人
 を代表とする異邦人改宗
 の予言である。――24) ヘブ
 レオ語本「セラ」。

三六 三五
 の天²⁵⁾に乗りて、東に向かい給う者なり。視よ、彼その御声に勢力ある御声を発し給わん。三三イスラエルに就きて天主に御栄光を歸し奉れ。その御稜威とその御徳能とは雲の中にあり。三六天主はその聖者等の中にありて奇し。イスラエルの天主こそはその御民に力と勢とを与え給わめ。天主は祝せられさせ給え。²⁶⁾

25) 天の最も高い処
 26) この最後の語は
 典礼のため附加し
 たものらしい。

第六十八篇 (第六十九篇)

苦難の裡にある義人の祈り

一 終まで¹⁾ 変るべき者のために。²⁾ ダヴィド作。³⁾
 二 天主よ、我を救い給え、そは水⁴⁾ わが靈魂に
 までも入り来り⁵⁾ たればなり。^三 我深き処の泥
 にはまり、足の踏処もなし。我海の深みに落ち
 入りたるに、あらし我を沈めたり。^四 我泣き叫
 びて疲れ、わが咽喉は涸れたり。わが天主を待

第六十八篇 1) 詩篇第四第五の註一参照。

2) 詩四四の註二参照。 3) この詩篇はメシア的。これは御受難の際の主イエズス・キリストの御苦しみの予言で、新約聖書中にしばしば引用されている。 4) 大危険のたとえ。 5) わが生命を脅かし。

五 望む間に、わが目は衰えたり。故なく我を憎む者共、わが頭の髪にま
 六 さりて多し。不当に我を迫めたるわが敵は強くなれり。その時我はわが
 七 奪わざりし物をも償わせられぬ。天主よ、汝はわが愚かなるを知り給
 八 う、わが愆は汝に隠れなし。天主よ、万軍の主よ、汝を待望む人々を、
 九 わが故に赤面せしめ給わざれ。イスラエルの天主よ、汝を求むる人々を
 一〇 わがゆえに滅びに至らしめ給わざれ。八そは我汝のために誹謗を忍び、
 恥わが面を覆いたればなり。九我わが兄弟等には他所者、わが母の子等
 一 には渡り者となれり。二実に汝の家に対する熱心は我を喰い尽し、六汝
 二 を罵りし者共の誹謗はわが上にかかれり。二我断食してわが魂を鬱がし
 三 めりしが、七そは我への誹謗種となりぬ。三また我毛衣をわが衣となし
 四 しに、我彼等の物笑となりぬ。三門に坐る者共は我を悪しざまに云い
 五 葡萄酒飲む者共は我に向かいて歌いはやしぬ。一四されど我は、主よ、汝
 六 にわが祈禱を献げ奉る。天主よ、これ御好意の時なり。一〇汝の御憐憫の

6) 約二・一三一
 一七参照。
 7) ヘブレオ語本
 「わが魂食を断
 ちて涙を流し」。
 8) しかるに、却
 つて。一〇人々
 はニユースを交
 換したり話をし
 たりするため
 町の門の所に集
 まつた。一〇天
 主の御憐みが特
 別人々に注がれ
 る時、殊にキリ
 ストの御救いの
 後。

一五	大いなるによりて、汝の救拯の信実もて、我に応え給え。一五 わがはまら
一六	ざるよう、泥より我を引き出し給え、我を憎む者共より、深き水より、 ¹¹⁾
一七	我を救い出し給え。一六 水の荒狂い、我を溺れしむることなかれ、深淵の
一八	我を呑むことなかれ、また坑のわが上にその口を閉ずることなかれ。
一九	主よ、汝の御仁慈の深きによりて、我に応え給え。汝の御憐憫の豊か
二〇	なるに従いて我を眷顧み給え。一八 汝の下僕に御面を背向け給うなかれ、
二一	そは我悩み居ればなり。速かに我に応え給え。一九 わが魂に御意を留めて
二二	これを援け出し給え、わが敵ゆえに我を救い給え。二〇 汝はわが受くる非
二三	難、当惑、恥辱を知り給う。二一 我を悩ます者共は皆汝の御眼前にあり。
二四	わが心は非難と悲惨とを待ち設けたり。我は共に悲しまんとする者を待
二五	ちしが、一人だになく、我を慰めんとする者を待ちしが、一人だに見当
二六	らざりき。二三 却つて彼等は食物として苦胆を我に与え、わが渴けるに醋
二七	を我に飲ましめぬ。 ¹²⁾ 二三 彼等の食卓 ¹³⁾ はその前にて畏となり、応報とな

11) 三節のたとえを再び使用。

12) これもカルワ

リオで文字通り実現した。マテ

オ二七・四八。

可一五・三八。

約一九・二九参

照。――13) かなり

大きな革を地上

に敷いて食卓代

りに用い、食事

がすむとそれを

巻いて片づけた

ものであつた。

二四 り、蹉跌となれかし。¹⁴⁾ 二四 彼等の見得ざるよう、その

眼を霞ましめ給え、またその背を常に屈ましめ給え。

二五 汝の御忿怒を彼等の上に注ぎ給え、また願わくは汝

二六 の御忿怒の激烈、彼等を捉えんことを。¹⁵⁾ 二六 彼等の住

居は荒れ果てよかし、彼等の幕屋には住む者なかれか

二七 し。¹⁶⁾ 二七 そは彼等汝の撃ち給える者を迫害み、わが傷

二八 の痛苦をいやが上にも増加えたればなり。二八 彼等の不

義に不義を加え、彼等を汝の義に至らしめ給うなかれ。

二九 彼等は生者の書より抹されよかし、¹⁷⁾ 義人等と共に

三〇 録さるることあらざれ。三〇 我は貧しくして苦しめり

三一 天主よ、汝の救拯我を引き立てたり。三一 我歌もて天主

三二 の御名を讃め、讃美もて彼を偉大なりと頌えん。三二 さ

らばそは角と蹄とを生ずる¹⁸⁾ 若き犢にまさりて天主に

14) 羅一一・九。15) この恐しい呪いは怒りからでなく、天主と正義のための熱心から出たもの。16) 聖ペトロは本節をイスカリオテのユダに適用したが、新約におけるその呪いは彼の身に実現した(徒一・二〇)。17) 生ける者の書とは、聖書のなかではしばしば地上及び天上の天主の御国に属することを意味する。出三二・三二参照。18) これらの特徴はそれが犠牲に好適であることを示す。ユデアのしきたりによれば、犠牲に献げる牡牛の年齢は三才までであった。蹄の割れているのは潔い獣である。故にいかに申し分のない獣の犠牲も、天主の御前には心から出る感謝の讃美歌ほど高い値打がないのである。

三三 嘉せらるべし。三三 貧しき者は見て悦べかし。汝等天主を求めよ、さらば
 三四 汝等の靈魂活きん。三四 実に主は貧しき者に応え給えり、その俘囚人¹⁹⁾
 三五 を蔑視給わざりき。三五 諸天も地も、海とその中にあるすべての制うも
 三六 のも彼を讃めよ。三六 そは天主シオンを救い給い、ユダの諸市建てらる
 三七 べければなり。かくて彼等そこに住まい、嗣産としてこれを得ん。三七 そ
 の下僕の後胤も之を領して、その御名を愛ずる者その中に住まん。²⁰⁾

第六十九篇

(第七十篇)

天主の御助けを乞う

一 終まで。1) ダヴィドの詩、主の彼を
 救い給いし記念として。²⁾
 二 天主よ、我を助けんと志し給え、主
 三 よ、我を助けに疾く来り給え。³⁾ 三 わが
 魂緒を索むる者共は事敗れて、恥じ入

第六十九篇 1) 詩篇第四第五の註一参照。— 2) ヘブレ
 オ語本にない、バルガタの附加。テオドレトはヘブレ
 オ人解釈者達と共に、この記念とはダヴィドがサウル
 の暴虐と追求から幾度も救われたことをさすのである
 うと考えている。— 3) 詩三九の一部(一四—一八節)
 であつて、多分伴奏を変えて歌うのである。それで
 特に別個の詩篇として編入されたのらしい。

19) 天主に対するそ
 の忠実の結果、鎖
 につながれている
 人々を。— 20) この
 予言はキリスト御
 創立の教会と天国
 で全く成就する。

四 我に禍を欲む者共は後に退りて羞じ赧めかし。我に「善哉、善哉」と云う者
 五 願わくは凡て汝を索むる人々の汝によりて喜び
 六 されど我は乏しく貧しければ、天主よ、我を助け給え。汝はわが援助者わ
 七 んことを。天主よ、我を助け給え。汝はわが援助者わ
 八 が解放者に在す。主よ、躊躇い給うなかれ。

第七十篇 (第七十一篇)

堅忍を求むる祈り

一 ダヴィドの作。ヨナダブの子等¹⁾と最初の俘虜等²⁾との詩。
 二 主よ、我汝に依頼めり、我をして永遠に滅ぶることなからしめ給
 三 え。汝の義によりて我を解放ち、我を援け出し給え。御耳を我
 四 に傾け、我を救い給え。汝我を救わんとて、わがために保護の
 天主、堅固なる所となり給え。実に汝はわが依所、わが避難場に
 在す。わが天主よ、罪人の手より、また法に背き行う者と不

第七十篇 1) 予言者イ

エレミアが挙げている

有名な苦行者たち(耶

三十五章。王下一〇・一

五、二三参照)。1) 2) へ

ブレオ語本にはない。

レカブ人の大すきな歌

一五	一四	一三	一二	一一	一〇	九	八	七	六	五	
らん。一五わが口は汝の義を、終日汝の救拯を、宣べ伝えん。我録す術を知	われよかし。一四されど我は常に希望を抱きて、汝のすべての讃美を弥増し奉	を誹る者共は滅び失せよかし。我に悪しき事を図る者共は狼狽と恥辱とに覆	我より遠ざかり給うなかれ、わが天主よ、我を眷顧みて助け給え。一三わが魂	り。彼を追いて捕えよ。そは彼を援け出す者なければなり。」と。一三天主よ、	語り、わが魂緒を狙いし者共一致して相謀れり、二曰く、「天主彼を離れた	うなかれ、わが力の衰えん時我を去り給うなかれ。一〇実にわが敵我につきて	謳わんために、わが口讃美に満たされてあれかし。九老いし時 ⁴⁾ 我を棄て給	ど汝はわが力ある援助者にて在す。八我が汝の御栄光を、終日汝の御稜威を	は常に汝に向かいてこそ。七我は多くの人に奇しまるる者 ³⁾ となれり。され	くせられたり、汝は我が母の胎内にありしよりのわが保護者なり。わが歌う	主よ、汝はわが幼少よりのわが希望なり。六我は胎を出るより汝によりて強

³⁾ 驚きの
 まと。
⁴⁾ これか
 ら、本篇
 の作られ
 たのがダ
 ヴイドの
 既に年老
 いていた
 アブサロ
 ム叛逆時
 代である
 と、結論
 する人も
 少くない

一六 らざれば、⁵⁾ 主の御能力に入り行かん、主よ、我はただ汝の義のみを

一七 心に留めん。^{一七} 天主よ、汝わが幼時より我に教え給えり、されば我今に

一八 至るまで汝の奇蹟を談らん。^{一八} されば老齡白髮に至るとも、我が来るべ

き代のすべての人に、汝の御腕⁶⁾を宣べ伝うるまでは、天主よ、我を棄

一九 て給うなかれ。汝の御権能と^{一九}汝の義とは、天主よ、至高き所にまで及

ぶ。汝のなし給える事は偉大なるかな。天主よ、誰か汝に如く者あらん。

二〇 汝はいかばかり数多く且酷き患難を我に見せ給えるぞ。されど汝は翻

二一 りて我を活かし、地の深き所⁷⁾より再び我を引き戻し給えり。二 汝はそ

二二 の御稜威を弥増し給えるが、^{二二}翻りて我を慰め給えり。三 されば我絃樂

器⁸⁾執りて汝に汝の信実を讃め頌えん、天主よ、我小琴執りて汝に奏で

二三 歌わん、イスラエルの聖なる者よ。⁹⁾ 三 我が汝に歌わん時、わが唇は 飲

二四 び躍らん、また汝の贖い給えるわが靈魂も然せん。^{二四} 剩え我に惡事を図

る者共慌て惑いて恥じ入らん時、わが舌も終日汝の義を思いめぐらさん。

5) 私は書くこと

を十分に知つて

いない。ヘブレ

オ語本では「わ

れその限りを知

らざればなり」。

6) 天主の全能。

7) 甚だしい死の

危険のたとえ。

8) ヘブレオ語の

云い方。「琴の

しらべに合わせ

て」。⁹⁾ 天主の

御名の中最も美

わしい一つ。イ

ザヤはこれを三

十回ほど用いて

いる。

第七十一篇

(第七十二篇)

メシアの栄光

一 サロモンによる詩。¹⁾
 二 天主よ、汝の審判を王に、²⁾ 汝の義³⁾を、
 王の子⁴⁾に与え給え。そは義もて汝の民を
 公平もて汝の貧しき者を、裁かん⁵⁾ためなり。
 三 民のために、山々は平和を、丘々は
 義を、受けよかし。⁴⁾ 彼は民の貧しき者を
 裁き、貧しき者の子等を救い、虐ぐる者を
 拉ぎ給わん。⁵⁾ また彼は日と共に、月の前
 に、千代万代に、存続り給わん。⁶⁾ 彼は羊
 の毛に⁶⁾ 降る雨の如く、⁷⁾ 地に滴る雫の如
 く、降り給わん。⁷⁾ 彼の時世には、月の失

第七十一篇 1) 本篇は直接メシアに当たるものである。ここに述べてある祝福が普通のイスラエル王の身に成就しようとは、誰も本気では考えられない(五節及び八節以下参照)。本篇に含まれてゐる期待も、ただメシアとその御国とに就いて抱き得るようなものである。2) カルデアの意識本では明かに「メシア王に」と云つてある。3) さばく権。4) ダヴィド王の裔に。5) 彼らの権利を擁護してやる。6) パレスチナですべての成長のもととなる雨に譬えて、メシア王の仁政が述べである。7) 七十人訳は士六・三七にあるゲデオンの羊の毛皮のことを想起してゐるのではないか。ヘブレオ語本「刈り取れる牧野に」。草を刈り取つた牧場には殊に雨が必要。

八 せ去るまで、⁸⁾ 義も、平和の豊かなるも、興らん。八かくて彼は
 九 海より海まで、河⁹⁾より地球の果まで、治め給うべし。九エチオ
 一〇 ピア人¹⁰⁾はその御前に平伏し、その敵は地を甜めん。一〇タルシ
 一 及び島々¹¹⁾の王等は禮物を献げ、アラビア人の、またサバ¹²⁾
 二 の、王等は贈物を持ち来らん。二かく地の王等は皆彼を拝み、異
 三 邦人等はすべて彼に臣事えん。三そは彼権力ある者より貧しき人
 四 を、また助くる者なき憐なる人を、解放い給うべければなり。
 五 彼は貧しき者乏しき者を飭り、憐なる者の靈魂を救い、一四 彼等
 六 の靈魂を貪婪と不義とより贖い給わん。かくて彼等の名はその御
 七 前に貴かるべし。一五 彼は生き存え給うべく、アラビアの黄金の中
 八 より彼に献げらるべし。人々は常に彼を拝み、終日彼を祝し奉ら
 九 ん。一六 国の内山々の頂には支柱¹⁴⁾あるべく、その産物はリパノン
 一七 にまさりて高く、邑の人々は地の草の如く生い立つべし。¹⁵⁾ 一七そ

8)「永遠に」の意。

9) エウフラト河。

10) 荒野の住民たち。最も荒々しい民でさえ。

11) タルシスはスペイン南部にある。一十二) 島々

とは地中海の諸島および小アジア、ギリシヤ

イタリヤなど沿海地方をさす(民二四・二四

参照)。一十三) サバはアラ

ビアの一地方。一十四) 命

を支えるもの、即ち穀

物。一十五) メシアの御代

の特別な恵み。新しい

イエルサレムなる聖会

の民は夥しい数になつ

て栄えるであらう。

一八 の御名は世々に祝せられさせ給え、その御名は日の前に¹⁶⁾ 永く存す。地のすべての族¹⁷⁾ は彼によりて祝福を受け、諸々の国民は彼を頌えん。一九 スラエルの天主は祝せられさせ給え、独り彼のみ奇蹟をなし給う。二〇 またその御稜威の御名も永遠に祝せられさせ給え。全地はその御稜威にて満さるべし。¹⁸⁾ 然あれかし、然あれかし。二〇 イエッセの子、ダヴィドの讚美は終りたり。¹⁹⁾

第七十二篇

(第七十三篇)

悪人の虚偽の幸福

一 アサフの詩。¹⁾
天主はイスラエルに對して、心の直き人々に對して、いかに仁慈深く在すかな。二 されどわが足は

¹⁶⁾ 太陽が我々に面を向けている間。五節参照。一¹⁷⁾ 創二六・四。二八・一四参照
¹⁸⁾ 一八、一九両節の讚美は、本篇そのものの終りでなく、詩四一・一からこまでに亘つた詩篇書第二部の結び。一¹⁹⁾ 詩篇編纂者の附記。詩篇全部でなく、ただその大部分だけがダヴィドを作者としているという意味。

第七十二篇 一) 代上一六・七参照。ここまでにアサフの詩は第四十九篇ただ一つしかなかつたが、第三部の始めの十一篇は彼の作である。

三 殆どよろめき、わが歩みは殆ど滑りたりき。²⁾ 三 そは我罪人等の安ら
 四 かなるを見て、不義者等を羨みしによりてなり。⁴⁾ 実に彼等の死に
 五 は心遣いなく、³⁾ 彼等の不幸には永続きすることなきなり。⁵⁾ 彼等
 六 は人々の労苦に参加わり居らず、また人々の如く鞭打たることも
 七 なからん。⁶⁾ これに由りて傲慢は彼等を放さず、⁷⁾ 彼等はその不義と
 八 不敬とに覆われたり。⁸⁾ 彼等の不義は恰も肥沃よりする如く出でた
 九 り、⁴⁾ 彼等は心の欲情のままに過せり。⁸⁾ 彼等は悪事を思い且語れ
 一〇 り、高ぶりて⁵⁾ 不義を語れり。⁹⁾ 彼等はその口を天に置けり、⁶⁾ そ
 一〇 の舌は地を經歷れり。⁷⁾ 一〇 これに由りてわが民⁸⁾ はここに回帰らん、
 二 彼等には満ちたる日⁹⁾ 見らるべし。^{二)} 彼等云いけらく、「天主いか
 二 で知り給うや、果して至高き者に知識ありや。」と。^{一三)} 視よ、これ
 二 らは罪人なり、しかも世にありて豊かにして、富を獲たり。^{一三)} また
 一三 我云いけらく、「さらば我は徒らにわが心を義しくし、無辜者の中

2) 本篇は悪人がなぜ栄えるかという問題を扱っている。

3) 天主は彼らが罪を犯したにもかかわらず、これを死なせようとは思ひ給わぬ。

4) 肥えた地に雑草がはえるように、豪奢な安楽生活から不義が生ずる。――5) 恥ずる色もなく。――6) 彼らの冒瀆によつて。

7) 彼らは主を侮辱してから人々を攻撃する。――8) 作者の民は善きイスラエル人。

9) 幸福な日。

一四 にてわが手を洗えり。一四 しかも我は終日鞭打たれ、朝な朝なわが懲戒を受け
 一五 たり。一五 我もし「かく語らん」と云いたらば、視よ、我汝の子等の代に忠
 一六 ならざらん。一六 我はこの事を知らんとて、思いめぐらしけるが、是はわが
 一七 前にある苦勞にして、一七 我が天主の聖所に入り、¹¹⁾ 彼等の終末を悟るまでは
 一八 然りき。一八 されど実に汝は欺くため彼等にそを置き給えるにて、彼等の起き
 一九 あがりし時、これを投げ倒し給えり。一九 彼等はいかにして荒むに至れるぞ。
 二〇 彼等は俄にあらずなれり。彼等は己が不義ゆえに亡びたるなり。二〇 主よ、目
 二一 覚むる人々の夢の如く、汝は汝の都にて彼等の像を無に歸し給わん。二一 わが
 二二 心燃え、¹²⁾ わが腎更えられたれば、二三 我も無きものとせられて、無知なる者
 二三 となりき。二三 我は汝の御前に獸の如く¹³⁾ なれり、されど我は常に汝と共にあ
 二四 り。二四 汝はわが右の手を執り、御旨によりて我を導き、御栄光もて我を迎え
 二五 取り給えり。二五 抑々我天に何をか持つ。また地においても汝を除きて我何を
 二六 か望まんや。二六 わが肉もわが心も衰えたり、わが心の天主にして、永遠にわ

10) 私がその事を黙つてい
 のは、悪
 人の仲間
 になりた
 くないか
 ら。
 11) 天主の
 御許へ光
 を求めに
 ゆく。
 12) 怒つて
 13) 理性の
 ない畜生
 のよう。

二七
二八
が分たる天主よ。二七 実にも視よ、汝より遠ざかる者共は亡ぶ、汝に不忠なる者共はみな
汝之を滅ぼし給えり。二八 されど我にとりては、わが天主に付き、主なる天主にわが希望
を置くぞ善き。そは娘シオンの門にて、我が汝の諸々の讚美を宣べ伝えんためなり。

第七十三篇 (第七十四篇)

聖所の荒廃を見て祈る

一 アサフ¹⁾の教訓²⁾
天主よ、何とて汝終まで棄て給えるぞ。何とて汝の御激
怒汝の牧場の羊に向かいて燃えたるぞ。二 初より汝の有た
りし集会を思い出で給え。汝は汝の嗣産の笏を³⁾ 贖い給え
り。汝の住み給える所はシオンの山なり。三 彼等の傲慢に
向かいて、汝の御手を終りまで挙げ給え。敵は聖所にてい
かばかりの悪事を行いたるぞ。四 また汝を憎む者共は、汝
の祭典の最中にて誇り、己が旗を標として押し立てたり。五

第七十三篇 1) 詩七二の註一参

照。2) 詩の種類。ヘブレオ語

「マスキル」は教訓詩の意。

3) 族。4) 作者がこの歌を作つ

た時、聖殿は久しい以前から荒

廢していた。5) 聖殿は潰され

ていた。それは敵が軍旗すなわ

ちその奉ずる神々の印を集会の

場所、聖殿の庭に立てたから。

五	五しかして頂 ^{いた} においても出口 ^{でぐち} 6) におけると等 ^{ひと} しく、知らざ
六	りき。樹 ^き の林 ^{はやし} にて斧 ^{おの} 揮 ^{ふる} う如 ^{ごと} く、 ^六 彼等 ^{かれら} はその諸 ^{もん} 門 ^{たち} を忽 ^{たち} ちに
七	伐 ^き り倒 ^{たお} せり、斧 ^{おの} と手 ^て 斧 ^{おの} とをもてこれ ^{これ} を倒 ^{たお} せり。7) 彼等 ^{かれら} は汝 ^{なんじ}
八	の聖 ^{せい} 所 ^{じよ} に火 ^ひ を放 ^{はな} ち、地 ^ち 上 ^{じやう} なる汝 ^{なんじ} の御 ^み 名 ^な の幕 ^{まく} 屋 ^や を潰 ^{けが} せり。8)
九	彼等 ^{かれら} はその輩 ^{やから} と共 ^{とも} に、心 ^{こころ} の中 ^{うち} に云 ^い いぬ、「いざ我 ^{われ} 等 ^ら 、天 ^か
一〇	主 ^み の祝 ^{いは} い日 ^び を悉 ^{ことごと} く、地 ^ち より廢 ^{はい} せん。」と。我 ^{われ} 等 ^ら は味 ^み 方 ^{かた} の
一一	標 ^{しるし} を見 ^み ず、今 ^{いま} は預 ^よ 言 ^{げん} 者 ^{しや} もなし。彼 ^{かれ} 10) 最 ^も 早 ^{はや} 我 ^{われ} 等 ^ら を知 ^し り給 ^{たま} わ
一二	ぬならん。天主 ^{かみ} よ、敵 ^{てき} はいつまで誹 ^{そし} るならんか、仇 ^{あだ} は末 ^{すえ}
一三	長 ^{なが} く汝 ^{なんじ} の御 ^み 名 ^な に逆 ^{さか} らうべきや。二何 ^{なに} とて汝 ^{なんじ} 御 ^み 手 ^て を、右 ^{みぎ} の御 ^み
一四	手 ^て を御 ^{おん} 懷 ^{ふところ} の中 ^{うち} より、終 ^{おわり} まで引 ^ひ き給 ^{たま} うや。11) 三されど天主 ^{かみ}
	は世 ^よ 々の前 ^{さき} より我 ^{われ} 等 ^ら の王 ^{おう} なり、彼 ^{かれ} は地 ^ち の只 ^{ただ} 中 ^{なか} にて救 ^{すく} 拯 ^い を行 ^{おこな}
	い給 ^{たま} えり。12) 一三汝 ^{なんじ} は御 ^み 德 ^{ちから} 能 ^{ちから} によりて海 ^{うみ} を固 ^{かた} め、水 ^{みづ} の中 ^{なか} なる
	龍 ^{りゆう} の頭 ^{かう} を打 ^{うち} 碎 ^{くだ} き給 ^{たま} いぬ。一四汝 ^{なんじ} は龍 ^{りゆう} 13) の頭 ^{かう} を碎 ^{くだ} き、これ ^{これ} をエ

6) 頂きはシオン山の頂き。出口は町の門。7) 敵は聖殿の貴金屬製の精巧な飾りの付いている城門を、斧や手斧でさながら木樵のように打ち碎いた。8) 聖殿に対する潰聖、掠奪、放火は王下二五・九によれば西暦紀元前五八六年に行われた。9) 彼らの聖なる旗印。それは敵のそれとすつかり取りかえられた。四節を見よ。10) 天主。11) 天主はイスラエルを今まで愛子として御懷ろに抱いておられたが今度は御手を引き給うた。12) 路一・六八。13) 鰐の。エジプト人を譬えたもの。

一五 チオピアの民に食として与え給えり。¹⁴⁾ 一五 汝は泉と激流とを湧き
 一六 出でしめ、エタン¹⁵⁾の河川を漕らし給えり。一六 昼も汝の有なり、
 一七 夜も汝の有なり。汝は曙光と太陽とを造り給えり。一七 汝は地のす
 一八 ベの限界を作り給えり、夏も春も汝これを造り給えり。一八 敵が主
 一九 を罵り、愚なる¹⁶⁾ 民が汝の御名に逆らいたる事を、思い出で給
 二〇 え。一九 汝に帰依り奉る靈魂を、獸等に付し給わされ、また汝の貧
 二一 しき者の靈魂を末長く忘れ給わされ。二〇 汝の御契約を顧み給え、
 二二 そは暗き人々は地にて不義の住居にて満ちたればなり。¹⁷⁾ 二二 賤し
 二三 き者をして恥じ退かしめ給うなかれ、貧しき者乏しき者は汝の御
 二四 名を讃えん。二三 起ち給え、天主よ、汝の訴訟を裁き給え。愚なる
 二五 者より終日汝に加えられたる罵倒を御心にとめ給え。二三 汝の敵の
 二六 声を忘れ給うなかれ、汝を憎む者共の傲慢は常に高まるなり。

14) 紅海で溺死したエジ
 プト人の死体の岸に流
 れついたものは、荒野
 の獸の餌食となつた。
 15) エタンとは七十人訳
 が誤解しているように
 固有名詞ではなく、河
 川にかかる形容詞で、
 「尽きることなき」の
 意。一六) 汝を知ろうと
 しない。一七) 敵はエデ
 ア国の名もなき片隔の
 地にまで寄せて来て、
 殘虐なことをした。

第七十四篇

(第七十五篇)

主は正しき審判者

一 終まで。¹⁾「滅ぼすなかれ」。²⁾アサフの歌える詩。
 二 天主よ、我等汝を頌え奉らん、頌えて、汝の御名を呼び奉らん。
 三 汝の奇しき御業を宣べ伝えん。³⁾我時を得ば、義もて審判かん。
 四 地とこれに住むすべての者と熔け失せたり、我はその柱を堅く
 建てたり。⁴⁾我云いぬ、悪しき者共には、「悪しく行うなかれ。」
 五 と、また罪人等には、「角をあぐるなかれ。」⁵⁾と。
 六 汝等の角を高くあぐるなかれ、天主に逆いて不義を語るなかれ。
 七 そは東よりにもあらず、西よりにもあらず、また荒れたる山々よりにもあ
 八 らず、⁶⁾これ、天主が審判者にて在せばなり。彼は甲を下げ、乙
 九 をあげ給う。⁷⁾それ、主の御手には混合物に満ちたる強き葡萄酒
 の盃あり。彼これを甲より乙に注ぎ出し給えり、されどその滓

第七十四篇 1) 詩篇第

四第五の註一参照。

2) 詩五六の註二参照。

3) 天主の御言葉。

4) ヘブレオ語本「セラ」

5) 野生の水牛が力を頼

んで傲然と頭を擡げる

様に譬えたもの。

6) この句は完全な文章

になつていない。悪人、

らは救いを期待するこ

とができない。——杯

は天罰の象徴。

一〇 は尽きずありて、地の罪人等みなこれを飲むべし。一〇然れども我は世々に宣べ伝えん、
 二 ヤコブの天主に歌い奉らん。二我罪人等の角を悉く打ち砕かん、但し義しき者の角は擧
 げらるべし。

第七十五篇

(第七十六篇)

敵敗北の感謝

一 終まで。一 讚美歌の内。アサフのアツシリア人に就
 きて²⁾歌える詩。

二 天主はユデアに知られ給えり、その御名はイスラエ
 ルに偉大なり。三 その在処は平安³⁾の裡に、その御
 住居はシオンにあり。四 其処にて彼、弓の力、楯、劍
 及び戦闘を挫き給えり。五 汝は永遠の山より、奇しく
 輝き給う。六 心の愚なる者は皆怖惑いたりき。彼等は
 己が眠に就けり、また富める人々も⁵⁾悉くその手の中

第七十五篇

一 詩篇第四第五の註一

参照。一²⁾作者はイエルサレム郊外
 におけるセンナケリブの惨敗を歌お
 うとするらしい。王下一九・三五。
 賽三七・三六以下参照。一³⁾ヘブレ
 オ語サレム(平安)は、イエルサ
 レムの旧名。一⁴⁾ヘブレオ語本「セ
 ラ」。一⁵⁾イエルサレム占領による
 財物獲得を熱望していた人々。

七 何をも見出でざりき。セヤコブの天主よ、馬に騎りし者共はみな、汝の御叱咤によりて寝入りたり。八 汝こそ懼るべきものなれ、汝の御忿怒の発せんその時には、誰か汝に抗うを得んや。九 汝は天より御宣告を聞かせ給えり、⁶⁾地は戦きて黙したり、一〇 所は天主地の柔和なる者を皆救わんと、審判に起ち給いし時にこそ。二 実に人の思念⁸⁾は汝を讃え奉らん、また思念の残餘は汝に祝日を献げ奉らん。二三 主汝等の天主に誓いて還せ、汝等すべてその周囲に礼物を持ち来る人よ、畏るべき者に、二三 諸侯の銳氣をさえ奪い去り給う者に、地の王等にとりて畏るべき者に。

6) 雷鳴に譬えてある。
7) ヘブレオ語本、「セラ」。
8) 人の計画。

第七十六篇

(第七十七篇)

なやみの日に天主を求む

一 終まで。イデイトウンのために。二 アサフ³⁾の詩。
二 我主にわが声もて、天主にわが声もて、呼わりしに、彼我に御意を留め給いぬ。三 わが患難の日に、我天主を求め、

第七十六篇 1) 詩篇第四第五の註一参照。2) 詩三八の註二参照。3) 彼の子孫の一人。作られた動機は定かにわからない。

夜にもこれに手を挙げしが、我欺かれざりき。わが靈魂は慰め
 らるるを辞みけり。我天主を思い出でて悦びしが、また悩み
 て、わが精神衰えぬ。わが眼不寝番の刻の前より覚め居たり、
 我は悩みて、ものをも云わざりき。我昔の日を思い、永遠き
 年を心に偲び、夜はわが心もて思いめぐらし、悩みてわが精
 神を苛責みぬ。天主は永久に棄てんとし給うか、或は最早恵
 を垂れんとし給わざるか。或は末長くその御憐憫を断たんと
 し給うか。或は天主憐むことを忘れ給うならんか、或は御
 忿怒によりてその御憐憫を閉じ給うならんか。二かかる時
 に我云いぬ、今こそ我始めたるなれ。こは至高き者の御右手
 の転変なり。我は主の御作を思い出でぬ。そは我開闢よりの
 汝の奇蹟を心に記めんとすればなり。かく我汝のすべての御
 作を思い廻らし、汝の御計画に思い耽らん。天主よ、汝の道

多分西紀前七二一年の十
 族の分国滅亡に作詩の感
 興をそそられたのである
 う。詩節が六つあり、そ
 の内第一、第三、第五に
 セラと附記してある。
 4) ヘブレオ語本「セラ」。
 5) ヘブレオ語本「そのお
 ん誓いは世々に至るまで
 すたりたるや」。6) ヘ
 ブレオ語本「セラ」。
 7) 天主が賢明なる思召し
 で、もとの幸福な境涯を
 つらい試煉に変え給うた
 ことを、私は漸く悟り始
 めた。

一五 は聖なり。我等の天主の如く偉大なる神は誰ぞや。一五 汝は
 奇蹟をなし給う天主にて在す。汝は民等の中に御徳能を識
 らしめ、一六 御腕もて御民なるヤコブとヨゼフとの子孫を贖
 い給えり。一七 天主よ、水は汝を見たり、水は汝を見て怖
 れ、深淵もふるいけり。一八 水の音は烈しく、雲も声を発し
 ぬ、そは汝の矢の過ぎ、一九 車の如く汝の雷霆の声したれば
 なり。一〇 汝の電光は地球を照らし、地は震い動きぬ。二〇 汝
 の道は海の中に、汝の径は大水の中にあり、汝の御足跡は
 識られざるべし。二一 汝はモイゼとアロンとの手により
 て、御民を羊の如く導き給えり。一二

第七十七篇 (第七十八篇)

天主の恩恵とイスラエルの民の忘恩

一 アサフの教訓^{一)}

八) ヨゼフの子らはヤコブの子ら
 と同等。それで特に挙げてある。
 一ヘブレオ語ではここに「セラ」
 とある。一九) 電光。一〇) 雷鳴が
 荒天の中を天主の乗り行き給う
 車のきしる音に譬えてある。
 一一) 分れていた波は天主御通過の
 後、再び合し、海を渡り給うた
 痕を止めなかつた。一二) 出一四
 ・二九。一ヘブレオ人が荒野を
 通つたのは、いつも主のおん導
 きによつてであつた。

第七十七篇 一) ヘブレオ語「マ

わが民よ、わが法に意を留めよ、わが口の言に汝等の耳を傾けよ。
 二 我譬喩をもてわが口を開き、元始よりの謎を語らん。²⁾ 三 我等が聞
 きたる所、知りたる所、我等の父祖が我等に談りたる所、この大い
 なる事は、^四 他代のその子等に隠れなかりき。そは主の讚美とその
 御徳能とその奇蹟とを談るものなり。^五 彼はヤコブの中に証詞を立
 て、イスラエルの中に法を定め給いぬ。彼は我等の父祖に、これを
 その子等に知らしめよと、命じ給いぬ。^六 これ、他代、即ち生まれ
 興りて己が子等に語り伝うべき子等も、そを知らんため、^七 彼等が
 天主に己が希望を置き、天主の御作を忘れずして、その御誠命を求
 めんため、^八 彼等がその父祖の如く、邪曲にして逆らい奉る輩、即
 ち己が心を直くせず、その精神天主に忠信ならざる輩とならんため
 なり。^九 弓を引絞りて射るエフライムの子孫は、³⁾ 戦闘の日に背を
 向けたり。⁴⁾ 一〇 彼等は天主の契約を守らず、その法を履みて行むこ

スキル」。教訓詩の意。——²⁾ 現在及び将来の世の人々が過去の出来事から自分の生き方についていかなる教訓を得べきか作者はそれを歴史によつて示そうとする³⁾ ここにイスラエル人をエフライムの子らと称しているのはこの一族がかなり主導的地位にあるのとエフライム人ヨズエが約束の地に御民を導き入れたから。⁴⁾ 母上四にある敗戦をさす。

二 ことを欲せず、二その御恩恵と、その彼等に示し給える奇蹟とを忘れ果て
 一 ぬ。三彼はエジプトの国にて、タニス⁵⁾の野にて、彼等の父祖の前に奇
 一三 蹟をなし給いき。一三即ち海を中断りて彼等を通らしめ、水を器に入れし
 一四 如く立たしめ、⁶⁾一四昼は雲により、夜はよもすがら火の光により、彼等
 一五 を導き給いしなり。一五彼は荒野にて岩を割き、大いなる深淵よりする如
 一六 く、彼等に飲ましめ、⁷⁾一六岩より水を引出して、河の如く水を流し給い
 一七 ぬ。一七然るに彼等はなお彼に罪を重ね、水なき処にて至高き者を忿怒に
 一八 誘い、一八己が慾のまにまに食を求めて、その心の中に天主を試み、一九天
 二〇 主のことを悪しざまに語りて云いぬ、一天主は荒野にて食卓を備うるこ
 二 ことを得給うか。二〇彼岩を撃ち給いしに、水迸り出で流溢れしが、また
 二 パンを与え、或はその民のために食卓を備うることをも得給うか。」と。
 三 是に由り、天主聞きて怖り給いしかば、火ヤコブに対して燃え、御忿
 三 怒イスラエルに対して騰りぬ。⁸⁾三こは彼等が天主を信ぜず、その御救

5) タニス (ヘブ
 レオ語ソアン)
 は下エジプトの
 古い町で (民一
 三・二三)、モ
 イゼの時代には
 フアラオの都で
 あり、出五一
 一に記してある
 事件の起つた所
 であつた。

6) 出一四・二一
 二二。一⁷⁾出一
 七・六。詩一〇
 四・四一。
 8) 民一一・一。

二三 拯に希望のぞみを繋かげざりしが故ゆゑなり。二三されど彼は上より雲に命めいじ、天の戸を
 二四 開ひらきて、^{二四}彼等かれらにマンナを食しょくとして降ふらせ、天のパンを彼等かれらに与あたへ給たまい
 二五 き。^九 ^{三五}人は天使等てんしたちのパン^{一〇}を食くらいぬ、彼糧かれかてを溢あふるばかり彼等かれらに遣おくり給たま
 二六 いしなり。^{二六}彼天かてんより南みなみの風かせを吹ふかせ、御徳能みちからによりて南西アフリカの風かせを導ひき入い
 二七 れ給たまいぬ。^{一一} ^{二七}また彼等かれらの上に、塵ちりの如ごとく肉にくを、海うみの砂すなの如ごとく羽毛はねある鳥とり
 二八 を、降ふらせ給たまいしかば、^{二八}是等これらは彼等かれらの陣營じんえいの只中ただなかに、また彼等かれらの天幕てんまくの
 二九 周圍まわりに落おちけり。^{二九}されば彼等かれらは食くらいて甚はなはだ満腹まんぷくせり。かく彼は彼等かれらの欲のぞ
 三〇 みしものを与あたへ給たまい、^{三〇}彼等かれらは己おのが欲のぞみし所ところ、徒勞あだとならざりしなり。彼
 三一 等の食物しょくもつなおその口くちにありし間に、^{一二} ^三天主かみの御忿怒おんいかり彼等かれらの上に立た騰のぼり、
 彼かれその中なかにて肥こえたる者ものを殺ころし、イスラエルの選拔よりぬきの人々^{一三} ^{一三}を打うち挫くじき給たま
 三二 いぬ。^{三三}これら諸々さまざまの事ことありしに、彼等かれらはなおも罪つみを犯おかして、彼の奇蹟ふしぎを
 三三 信しんぜざりければ、^{三三}彼等かれらの日は徒あだに、彼等かれらの年は慌あわただしく、過すぎ去さり
 三四 ぬ。^{三四}彼の彼等かれらを殺ころし給たまいし時とき、^{一四} ^{一四}彼等かれら彼を索もとめて立たち歸かえり、朝未明あさまだきに^{一五} ^{一五}そ

- 9) 出一六・四
 民一一・七。
 一〇) 天使たちの
 住処から降つ
 て来たから、
 天使たちの糧
 一) 民一一・三
 一。一) 民一
 一・三三。
 一三) 青少年たち
 一四) 特別の天罰
 がその上に下
 つて、一時に
 大勢の生命を
 奪い去つた時
 一五) 速かに。

四五	四六	四五	四四	四三	四二	四一	四〇	三九	三八	三七	三六	三五
て彼等を喰わしめ、蛙を遣りて彼等を滅ぼさせ給いぬ。19)	川と雨水とを、飲むこと能わざるよう、血に変え、18)	の御徴を、タニスの野にてその奇蹟を、行い給いし時なりき。即ち彼等の河	贖い給いし日17)にも、その御手を憶い出でざりき。そは彼がエジプトにてそ	ラエルの聖なる者を激せしめ奉りぬ。彼等は彼が己を悩ましたる者の手より	誘い奉りしこと、そも幾度ぞ。かく彼等はかえすがえすも天主を試み、イス	出で給いしなり。彼等が荒野にて彼を激せしめ、水なき処にてこれを忿怒に	給わざりき。彼は彼等が肉16)にして、行きては再歸らざる風なることを憶い	彼等を滅ぼし給わじ。また彼は幾度も御忿怒を転じて、御忿怒を悉くは燃やし	契約にも忠実ならざりしなり。されど彼は憐憫深く在せば、彼等の罪を赦し	れに虚偽を云いしのみなりき。即ち彼等の心は彼に對して直からず、彼との	主なることを思い出でけるが、ただその口をもて彼を愛し、その舌をもてこ	の御許に來れり。しかして天主が己の援助者にして、至高き天主が己の贖い

16) 原罪
 以来、
 本性が
 惡に傾
 いてい
 る人間
 17) エジ
 プトか
 ら救い
 出され
 た日。
 18) 出七
 二〇。
 19) 出八
 ・六、
 二四。

四七

徴症に、彼等の労作を蝗に付し、²⁰⁾ 彼等の葡萄園を雹もて、

四八

彼等の桑樹を霜もて滅ぼし給い、²¹⁾ 彼等の家畜を雹に、彼等

四九

の所有物を火に付し給えり。²²⁾ 彼は彼等に御義憤の御忿怒、

義憤と忿怒と患難、禍の天使達による遣し物を遣り給いしな

五〇

り。²³⁾ 彼は御忿怒の漏れゆく径として道を作り給いて、彼等

五一

の魂を死より容赦せず、彼等の家畜まで死に閉じこめ、^{五二} エジ

プトの国にては²⁴⁾ すべての初生兒を、カムの幕屋にては彼等の

五二

あらゆる苦しみの初穂²⁵⁾ を撃ち給いき。かくて彼は己が民

を羊の如く連れ出し、荒野にて牧群の如くこれを伴い行き、

五三

希望をもたせてこれを導き給いければ、彼等怖れざりき。し

かもその敵は海の覆う所となりぬ。²⁶⁾ しかして彼はその聖な

五四

る山、²⁷⁾ 即ち御右手の求め得給いし山に、彼等を導き入れ、そ

の面前より異邦人等を逐い払い、分配の準繩もてその地を彼等

²⁰⁾ 出一〇・一五。 — ²¹⁾ 出

九・二五。 — ²²⁾ 出九・二

四。 — ²³⁾ 四九—五・節は

エジプトの第五の禍の悪

疫(出九・一—七)と、

第十の禍(出一一、一二

章)とを一緒にしている

²⁴⁾ 出一一・一一—一〇及び

一二・二九—三〇。

²⁵⁾ 母となる苦しみ。母に

始めて児を産む苦しみを

味わせた長子。 — ²⁶⁾ 出一

四・二七。 — ²⁷⁾ 「約束の

地」の意。カナアンは山

が多いので、「山」云

つてある。

五五	に籤分けにし給い、 ²⁸⁾ 五五 イスラエルの諸族を彼等 ²⁹⁾ の幕屋に
五六	住ませ給いぬ。 ^{五六} されど彼等は至高き天主を試みて激せし
五七	め奉り、その証詞を守らず、 ^{五七} 背き離れて契約に遵わざり
五八	き。恰も彼等の父祖に似て、歪める弓 ³⁰⁾ の如く逸れゆきしな
五九	り。 ^{五八} 彼等はその丘 ³¹⁾ にて、彼を忿怒に誘い、その彫める像
六〇	もて彼を嫉妬に駆り奉りぬ。 ^{五九} 天主は聞きて ³²⁾ 見捨て、イス
六一	ラエルを無に等しきまで甚く滅し、 ^{六〇} シロの幕屋、人々の間
六二	に住み給いし己が幕屋を棄て、 ³³⁾ ^{六一} 彼等の力を俘囚に、彼等
六三	の宝 ³⁴⁾ を敵の手に付し、 ^{六二} 御民を劍の下に閉じこめ、その嗣
六四	産を斥け給いぬ。 ^{六三} 彼等の若者等は火 ³⁵⁾ の焼き尽す所とな
六五	り、彼等の処女等は哀歌を唱われず、 ³⁶⁾ ^{六四} 彼等の司祭等は劍
	に殪れ、彼等の寡婦等は歎きだにせざりき。 ³⁷⁾ ^{六五} 時に主は眠
	れる者の如く、葡萄酒に酔いたる勇士の如く、目さめ給い

²⁸⁾ 書一三・七。――²⁹⁾ 民ら、すなわちカナアン人たち。
³⁰⁾ 矢を放つても的に当らない、狂つてゐる弓。――³¹⁾ 高き処の祭祀。――³²⁾ 見て。
³³⁾ 耶七・一二、一四。二六・六。――³⁴⁾ この二つの云い方は契約の櫃をあらわす。
³⁵⁾ 戦火。――³⁶⁾ 彼らの死なねばならなかつたことをか、母となる榮譽の得られなかつたことをか。ヘブレオ語本の方角。いわく「乙女らは婚姻の歌を歌わることなく」。――³⁷⁾ ヘブレオ文は「なげくだに能わざりき」「喪に服するだに能わざりき」と訳する方がいいらしい。

六六 て、³³⁾ 六六 その敵を撃退け、彼等に常住の恥辱を与え給
 六七 いぬ。 六七 またヨゼフの幕屋³⁹⁾を棄て、エフライムの族
 六八 を選^{えら}び給^{たま}わずして、 六八 ユダの族、その愛で給^{たま}うシオン
 六九 の山を選^{えら}び給^{たま}い、 六九 その聖所を野牛の如く、世々に至
 七〇 るまで定め給^{たま}いし地に建^たて給^{たま}いぬ。 七〇 またその下僕^{しもべ}ダ
 七一 ヴイドを選^{えら}びて羊の群^{むれ}より之^{これ}を取り、牝羊^{めひつじ}の背後^{うしろ}より
 七二 これを迎^{むか}え給^{たま}いしが、 七二 これ、その下僕^{しもべ}ヤコブ、その
 嗣^{ゆかり}産イスラエルを牧^{ぼく}せしめんためなりき。 七二 かくて彼^{かれ}
 はその心^{こころ}の無^{つみなき}辜によりて彼等^{かれら}を牧^{ぼく}し、その手^ての巧^{たくみ}妙^みさ
 もてこれ^{みちび}を導^{みちび}きぬ。⁴⁰⁾

第七十八篇 (第七十九篇)

イエルサレムの破壊を歎く

一 アサフの詩。¹⁾

第七十八篇 イエルサレム及び聖殿の滅亡後に作られたものらしい。

38) かようにして力づき給うて。
 39) ヨゼフの子孫エフライム族の領地
 に建てられたシロの聖幕屋。契約の
 櫃は、フィリスト人がしぶしぶイス
 ラエル人に返した時から、もうシロ
 には戻らなかつた。しかしそれは処
 々方々に移された後、イエルサレム
 に末長く安置されることになった。
 40) ヘブレオ語本によれば、「心の全
 きによりて」。即ち正しい、申し分
 のない心で。

天主よ、異邦人等汝の嗣産に入り来り、汝の聖なる御殿を潰し、イエ
ルサレムを果実の監守所²⁾となし、^三汝の下僕等の屍を天の鳥の餌と
なし、汝の聖者等³⁾の肉を地の獣に与え、^四彼等の血をイエルサレム
の周囲に水の如く流したり。されどこれを葬むる者あらざりき。^五我
等は隣人等には恥かしめらるるもの、周囲に居る人々には蔑まれ嗤わ
るるものとなりたり。^六主よ、いつまでぞ。汝末長く怒りて在さんか。
汝の御憤り火の如く燃えんか。^七汝を識らざる異邦人等と、汝の御
名を呼ばざる国々との上に、御忿怒を注ぎ給え。^八そは彼等ヤコブを
喰い尽し、^九その居所を荒したればなり。^{一〇}我等の旧き不義⁶⁾を憶い
出で給うなかれ。汝の御憐憫をして、速かに我等を迎えしめ給え、そ
は我等甚だ憐れなる者となりたればなり。¹⁾我等の救主なる天主よ、
我等を助け給え。主よ、御名の光栄のために⁸⁾我等を救い、御名のた
めに我等の罪を赦し給え。^{一〇}これ、異邦人の間にて、「彼等の天主は

2) 賽一・八参照。
ヘブレオ語本は「廢墟」。1) 3) 天主と契約を結んでい
る人々。4) 耶一
〇・二五。5) カ
ルデア人を羊小屋
を荒らす野獸にた
とえてある。
6) 祖先の罪。我ら
はそれから改心し
たから、主の御好
意を期待している
7) 賽六四・九。
8) もし異邦人がい
つも勝つなら、主
の御栄えそのもの
も害われるでしよ

何処にかある。」と、人の云うことなからんためなり。願わくは汝の下僕等の流されたる血の報復を、我等の目の前にて異邦人等の間に知らしめ給え。二願わくは捕虜等の呻吟の汝の御前に至らんことを。汝の御腕の大いなるによりて、殺されたる者の子等を己が所有となし給え。二三しかして主よ、我等の隣人等に対しその懷に、彼等が汝に加えたる恥かしめを、七倍ににして報い給え。二三されど汝の民にして汝の牧場の羊¹¹⁾なる我等は世々に亘りて汝を頌え奉らん。千代万代に汝の讚美を宣べ伝え奉らん。

う。――9)ふところには金を入れている。――10)完全数で侮辱に相等する報復を表わす。
11)詩七七のようにイスラエルを羊の群に譬えて一篇の結びとしてある。

第七十九篇 (第八十篇)

荒らされたる葡萄畑を思いて

一終まで。1) 変るべき者のために
に。2) アサフの証詞なる詩。3)
二汝イスラエルを治め給う者よ、

第七十九篇 1) 詩篇第四第五の註一参照。――2) 詩四四の註二参照。――3) イスラエル王国全滅の少し前に、アツシリア人が北の十族の領地に侵入した折の作。

三	羊 ひつじ の如 ごと く ⁴⁾ ヨゼフを導 みちび き給 たま う者 もの よ、御意 みこころ を注 と め給 たま え。汝 なんじ 智天使 ケルビム ⁵⁾ の上 うへ
四	に坐 ま し給 たま う者 もの よ、現 あらわ れ給 たま え、三エフライム、ベンヤミン、及びマナツ
五	セの前に。汝 なんじ の御権能 みちから を振 ふる い起 おこ し、我等 われら を救 すく わんために来 きた り給 たま え。
六	天主 かみ よ、我等 われら を立歸 たちかえ らしめ、汝 なんじ の御面 みおもて を示 しめ し給 たま え。さらば我等 われら 救 すく わ
七	るべし。 ^五 主万軍 しゅばんぐん の天主 かみ よ、汝 なんじ の下僕 しもべ の祈禱 いのり に對 むか いて、 ⁶⁾ 汝 なんじ いつまで
八	怒 いか らんとし給 たま うや。 ^六 いつまで涙 なみだ のパンを我等 われら に食 くら わせ、量器 ます に満 み つ
九	るほどの涙 なみだ を飲物 のみもの として我等 われら に与 あた えんとし給 たま うや。 ^七 汝我等 なんじわれら の隣人 となりびとら 等
一〇	に我等 われら を論争 いさかい の種 たね となし給 たま いたれば、我等 われら の敵 てき は我等 われら を嘲笑 あざわら えり。
一一	八万軍 はんぐん の天主 かみ よ、我等 われら を立歸 たちかえ らしめ、汝 なんじ の御面 みおもて を示 しめ し給 たま え。さらば我
一二	等救 すく わるべし。 ^九 汝 なんじ はエジプトより葡萄樹 ぶどうのき を移 うつ し、異邦人等 ことくにびとら ⁷⁾ を逐 お い
一三	出して、之 これ を植 う え給 たま えり。 ⁸⁾ 一〇汝 なんじ は彼等 かれら の眼前 めのまえ に旅路 たびじ の案内者 みちびきて となり
一四	その根 ね を植 う え給 たま いしに、そは地 ち に満 み ち蔓延 はびこ り、二その蔭 かげ は山々 やまやま を、そ
一五	の枝 えだ は天主 かみ の杉 すぎ ⁹⁾ を、覆 おほ いぬ。二三そはそ枝 えだ を海 うみ にまで、その小枝 さへだ を

4) またもや詩七七及び七八の終りのように羊の譬えが用いてある。
 5) ケルビムは被造物全部を代表する。
 6) 祈りにもかかわらず。――7) カナアンの人々。――8) イスラエル人を葡萄樹や羊の群になぞらえるのは、旧約聖書によく用いられる譬え。――9) 天主の御力を象徴する最も高い木。

一三 河¹⁰⁾にまでさしのべけり。二三 汝何とて路^{みち}ゆくすべての人^{ひと}にこれを摘^つ
 一四 ましめんと、その生垣^{いけがき}を毀^{こぼ}ち給^{たま}えるぞ。一四 森^{もり}の猪^{いのしし}之^{これ}を荒^あらし、¹¹⁾
 一五 奇異^{あや}しき野獸^{やじゆう}之^{これ}を喰^くい尽^{つく}せり。一五 万軍^{ばんぐん}の天主^{かみ}よ、回^{かえ}歸^り給^{たま}え。天^{てん}よ
 一六 り望^{のぞ}み、みそなわし、この葡萄樹^{ぶどうのき}を訪^{おもと}れ給^{たま}え。一六 しかして汝^{なんじ}の御右^{おんみぎ}
 手^ての植^うえ給^{たま}えるこのものを仕^し上^あげ、汝^{なんじ}が御自^{おんみづか}らのために強^{つよ}くなし給^{たま}
 一七 える人^{ひと}の子^こ¹²⁾の上^{うへ}をみそなわし給^{たま}え。一七 火^ひに焼^やかれ、掘^ほり倒^{たお}された
 一八 るものは、汝^{なんじ}の御顔^{みかほ}の譴責^{とがめ}によりて亡^{ほろ}びん。一八 願^{ねが}わくは汝^{なんじ}の御手^{みで}を
 汝^{なんじ}の右手^{みぎて}の人^{ひと}¹³⁾の上^{うへ}に、また汝^{なんじ}が御自^{おんみづか}らのために強^{つよ}くなし給^{たま}える人^{ひと}
 一九 の子^こ¹⁴⁾の上^{うへ}にあらしめ給^{たま}え。一九 さらば我等^{われら}汝^{なんじ}より離^{はな}れ去^さることな
 二〇 し。汝^{なんじ}は我等^{われら}を活^いかし給^{たま}わん、我等^{われら}は汝^{なんじ}の御名^{みな}を呼^よび奉^{まつ}らん。二〇 主^{しゅ}
 万軍^{ばんぐん}の天主^{かみ}よ、我等^{われら}を立^{たち}歸^{かえ}らしめ、汝^{なんじ}の御面^{みおもて}を示^{しめ}し給^{たま}え、さらば我^{われ}
 等^ら救^{すく}わるべし。¹⁵⁾

10) エウフラト河。
 11) 葡萄畑に最も危険な敵。アツシリア人をさす。——12) イスラエル。——13) 右に坐す者は特別な榮譽と保護とを受ける。ここでは天主の御寵愛と御保護とを受けているイスラエルを称してかく云う。——14) 一六節参照。主もかく自称された。——15) 本節は三度目の繰返し

第八十篇

(第八十一篇)

祭日の讃歌

一 終まで¹⁾ 葡萄酒^{さけ} 压榨器^{しほりき} のために、²⁾ アサフの詩^し。
 二 我等^{われら} の祐助者^{たすけて} なる天主^{かみ} に向^む かいて喜び躍^{よろこ} れ、ヤコブの天主^{かみ} に向^む かいて歓び叫^{よるこさけ} べ。^三 奏歌唱^{かなでうたうたい} い出^い でよ、鼓^{つづみ} を、音快^{おとよ} き琴^{こと} を、小琴^{おごと} と共に鳴^な らせかし。^四 新月^{しんげつ} に喇叭^{ラッパ} を吹^ふ き鳴^な らせ。汝等^{なんじら} の祝典^{いわい} の嚴^{おごそ} かなる日^ひ に然^{しか} せよ。³⁾ 五 そはイスラエルにおける掟^{おきて}、ヤコブの天主^{かみ} に対^{たい} する義^ぎ なればなり。^六 彼はこれ^{かれ} を、エジプトの地^ち より出^い で来^{きた} りし時^{とき} のヨゼフ⁴⁾ に、証^{あかし} となし給^{たま} いき。彼は知^し らざりし言語^{ことば} を聞^き きぬ。^七 彼はその背^せ より重荷^{おもに} を取除^{とりぞ} き給^{たま} えり、その手^て は負籠^{おいかこ} もて⁵⁾ 仕^{つか} えおりしなり。^八 汝患難^{なんじなやみ} の時^{とき} に我^{われ} を呼^よ びしかば、我^{われ} 汝^{なんじ} を救^{すく} い出^{いだ} しぬ。我^{われ} 嵐^{あらし} の潜^{ひそ} める所^{ところ} にて、汝^{なんじ} に応^{こた} え、抗論^{さからい} ⁶⁾ の水^{みづ} の潜^{ほとり} にて汝^{なんじ} を験^{ため} せり。^九 わが民^{たみ} よ、聴^き け、我^{われ} 汝^{なんじ} に証^{あかし} せん。イスラエルよ、汝^{なんじ} も

第八十篇 1) 詩篇第四
 第五の註一参照。

2) 詩八の註二参照。

3) 第七月の新月の日に

はイスラエル人が祭

を行い、ラツパを吹

た。1) 4) ここではイス

ラエルと云うのと同じ

で、全国民を表わす。

5) イスラエル人は煉瓦

を荷かごに入れて運ば

された。1) 6) ヘブレオ

語「メリバ」。最後に

「セラ」。

一〇 し我^{われ}に聴^きかんとせば、一〇 汝^{なんじ}の中に新^{あた}しき神^{かみ}あるべからず、また汝^{なんじ}異なる
 二 神^{かみ}を拝^{おが}むべからず。二 是^{これ}は我^{われ}こそエジプトの地^ちより汝^{なんじ}を導^{みちび}き出^{いだ}せし主^{しゆなんじ}汝^{なんじ}
 三 の天主^{かみ}なればなり。汝^{なんじ}の口^{くち}を開^{ひら}け。我^{われ}これに満^{みた}さん。七 二 されどわが民^{たみ}
 四 はわが声^{こゑ}を聴^きかず、イスラエルは我^{われ}に意^{こころ}を留^{とど}めざりき。 一三 茲^{ここ}において
 五 我^{われ}彼^{かれ}等をその心^{こころ}の欲^{のぞ}むままに棄^すておきぬ。彼^{かれ}等は己^{おの}が工夫^{くふう}によりて進^{すす}み
 六 行^ゆかん。八 一四 わが民^{たみ}もし我^{われ}に聴^きき、イスラエルもしわが道^{みち}を歩^{あゆ}みしなら
 七 ば九 一五 我^{われ}或^{ある}は直^{ただ}に彼^{かれ}等の敵^{てき}を打^{うち}拉^ひぎ、彼^{かれ}等を悩^{なや}ましたる者^{もの}共^{ども}に向^むかい
 八 てわが手^てを伸^のべしならんに。一六 主^{しゆ}の敵^{てき}は彼^{かれ}を偽^{いつわ}り奉^{まつ}れり、されば彼^{かれ}等^ら
 九 の時^{とき}は世^よ々に続^{つづ}かん。一七 彼^{かれ}は麦^{むぎ}一〇 の膏^{あじ}味^{よき}を彼^{かれ}等に食^{しょく}せしめ、岩^{いわ}より出^いた
 一〇 蜜^{みつ}一^一をもて彼^{かれ}等を飽^あかしめ給^{たま}いぬ。一^二

第八十一篇

(第八十二篇)

正義の審判を行え

アサフの詩。

7) 出二〇・二。
 8) 徒一四・一五。
 9) 巴三・一三。
 10) 素祭の供え物
 として天主に献
 げねばならなか
 った。一^一天主
 が奇蹟を以てお
 与えになつた。
 12) 一四節の条件
 を満たした時に
 は。

天主は諸神¹⁾の会の中に立ち給えり、その只中にて諸神
 を審判²⁾き給う。汝等いつまで義³⁾しからぬ審判⁴⁾をなし、
 罪人等の面を憚⁵⁾り見んとするぞ。乏⁶⁾しき者と孤兒との
 ために裁⁷⁾き、賤⁸⁾しめられたる者と貧⁹⁾しき者とに公義¹⁰⁾を
 なせ。貧¹¹⁾しき者を救¹²⁾い、乏¹³⁾しき者を罪人の手より援¹⁴⁾け
 出¹⁵⁾せ。彼等は知らず悟¹⁶⁾らずして、暗闇¹⁷⁾の中を歩¹⁸⁾む。地
 の基礎¹⁹⁾は悉²⁰⁾く揺²¹⁾がん。我²²⁾云²³⁾えり、「汝等は神々なり、
 また汝等は皆至高²⁴⁾き者の子等なり。」と。されど汝等
 は人々の如²⁵⁾く死²⁶⁾なん、諸侯の一人²⁷⁾の如²⁸⁾く倒²⁹⁾れん。起³⁰⁾
 ち給え、天主よ、地を審判³¹⁾き給え、そは汝万³²⁾の国民の
 中³³⁾にて嗣³⁴⁾ぎ給³⁵⁾うべければなり。

第八十一篇 1) この神々とは、旧
 約聖書の他の多くの箇所と同じく
 イスラエルの裁き人たちをさす。
 2) ヘブレオ語本「セラ」——3) 箴二
 四・一一。——4) 人間の秩序の基礎。
 5) 天主の代理者。約一〇・三四—
 三六で主は本節を引用して、御自
 分の御神性を弁明しておいでにな
 る。——6) 諸侯の一人とは、アウグ
 スチノの説では「ルチフェル」。
 7) 汝らは神聖な職務に当たつてい
 るからとて容赦されまい。

第八十二篇 (第八十三篇)

敵に抵る祈り

一 アサフの讃美歌。¹⁾
 二 天主よ、誰か汝に如く者あらんや。天主よ、黙し給うなかれ。
 静まり居給うなかれ。^三 実に視給え、汝の敵騒ぎ立ち、汝を憎
 む者共頭を揚げたり。^四 彼等は汝の民に向かいて惡しき策略を
 めぐらし、汝の聖者等²⁾に向かいて陰謀をなしたり。^五 彼等は
 云えり、「いざ、我等彼等を国々の民の中より滅し去らん。し
 かしてイスラエルの名を最早憶い出さることなからしめよ。」
 と。^六 寔に彼等は心を一つにして相謀り、汝に敵い共に盟約を
 結べり、^七 そはイドウメア人³⁾の幕屋とイスマエル人、モアブ
 とアガル人、^八 ハゲバルとアンモン、及びアマレク、異邦人、⁴⁾
 ならびにチロの住民なり。^九 實にアッシリア人もまた彼等に与

第八十二篇 1) この有名

な歌手またはその子孫の
 作といわれている十二篇
 の詩の最後のもの。

2) イスラエル人。 1) 3) イ

スマエル人(創二五・一
 二以下)、アガル人(代

上五・一〇、一九) およ

びアマレク人(出一七・

八一・九) は、パレスチナ

の南部と東部とにいた荒

野の民。ゲバルは死海の

南にある山地。

4) フイリスト人。

一〇 せり、彼等はロトの子等を助けに來れり。5) 一〇 汝マディアン6) とシサラとに
 二 又キソン7) の溪流にてヤビンになし給いし如く、彼等にもなし給え。二 彼
 二 等はエンドル8) にて滅び、地の肥料となりたり。一三 彼等の諸侯を、オレブ、
 一三 ゼブ、ゼベー、及びサルマナ9) の如くなし給え。彼等の諸侯は皆、一四 我等天
 一四 主の聖所を嗣産として獲ん。」と云いたる者なり。一四 わが天主よ、彼等を車
 一五 輪の如く、風の前の麦藁の如くなし給え。一五 森を焼く火の如く、山を燃やす
 一六 焰の如く、一六 然汝彼等を汝の疾風もて追ひ立て、彼等を汝の御忿怒もて怖惑
 一七 わしめ給わん。一七 彼等の面に恥を満し給え、さらば彼等も、主よ、汝の御名
 一八 を求むるに至らん。10) 一八 願わくは彼等が、世々に至るまで恥ぢ赧み、慌て惑
 一九 い、支離滅裂となりて亡び失せんことを。一九 また願わくは彼等が、汝の御名
 の主というを知らんことを。全地において独り汝のみ至高き者にて在す。

5) ヘブレ
オ語本
「セラ」。

6) 士七章

7) 士四章

8) イスラ

エル平野

の小さな

町。

9) マディ

アンの領

主。

10) 敗戦の

結果。

第八十三篇 (第八十四篇)

聖所に憬れて

一 終まで。1) 葡萄酒庄搾器のために、2) コレの子等の

詩。3)

二 万軍の主よ、汝の幕屋はいかに愛すべきかな。三 わが

靈魂は主の大庭。4) を慕いて絶え入らんばかりなり、わが

心わが肉は活ける天主に向かいて喜び躍れり。四 実に雀

も己がために舍を、山鳩も己がためにその雛置くべき巢

を見出すなり。5) わが王にしてわが天主なる万軍の主よ、

汝の祭壇を！五 主よ、至福なるかな、汝の家に住む者。

彼等は世々に汝を讃め奉らん。6) 至福なるかな、汝より

御祐助を蒙る人。かかる人はその心に、上ること7) を志

したり、七 涙の谷にて、主の定め給える処へと。8) ハそは

第八十三篇 1) 詩篇第四第五の註

一参照。一2) 詩八の註二参照。

3) 詩四一の註二参照。一4) 聖所の

各部。一5) 天主よ、汝は動物にさ

え、汝の聖所に宿を与え給うた。

それですます私に聖なる御住居

に住む希望を抱き得るのである。

6) ヘブレオ語本「セラ」。一7) イエ

ルサレムは高地にあるので、聖殿

参詣者はのぼることになる。

8) すべて聖所への巡礼を思い立ち

その道の苦勞を思いつつもひるま

ない人は、ほむべきかな。ヘブレ

オ語本は「荒野の谷」。これは言

立法者^{リッポウシヤ}の祝福^{しゅくふく}を賜^{たま}い、彼等^{かれら}徳^{とく}より徳^{とく}に進^{すす}むべければなり。神々^{かみがみ}の天主^{かみ}はシオンにて見^みらるべし。^九主万軍^{しゅばんぐん}の天主^{かみ}よ、わが祈^{いのり}禱^{たう}を聴^きき容^いれ給^{たま}え。ヤコブの天主^{かみ}よ、御耳^{おんみみ}に留^とめ給^{たま}え。^{一〇}我等^{われら}の保護^{まもり}者^てなる天主^{かみ}よ、照^{みそ}覧^{なわ}し給^{たま}え。しかして汝^{なんじ}の受膏^{じゆこう}者^{しや}の面^{おもて}を眷顧^{かんり}み給^{たま}え。^{一一}実に汝^{なんじ}の大庭^{おほにわ}における一日^{いちにち}は、千日^{せんじち}にも勝^{まさ}りてよし。我^{われ}は罪人^{つみびと}の幕屋^{まくや}に住^すまんより、寧^{むし}ろわが天主^{かみ}の家^{いえ}にありて賤^{いや}しき者^{もの}となるを選^{えら}びたり。^{一二}それ、天主^{かみ}は憐憫^{あわれみ}と真実^{まこと}とを愛^めで給^{たま}う、主^{しゅ}は恩寵^{めぐみ}と栄光^{さかえ}とを与^{あた}え給^{たま}わん。^{一三}彼は罪^{つみ}なくして歩^{あゆ}む人々^{ひとびと}より、善^よき物^{もの}を奪^{うば}い給^{たま}わじ。万軍^{ばんぐん}の主^{しゅ}よ、汝^{なんじ}に依^{より}頼^{たの}む人^{ひと}は至福^{さいわい}なるかな。^{一二}

第八十四篇

(第八十五篇)

正義と平和と接吻する時来らん

終^{おわり}まで。コレの子等^{こらさく}作^しの詩^し。^一

第八十四篇

^一前の詩篇の註一、註三を参照。

葉通り云えばバカ谷で、
濕氣の少ない谷を云う。
⁹ 少くとも年に三度その
御住居に参詣すべしとい
う掟を定め給うた方。
¹⁰ ヘブレオ語本「セラ」。
¹¹ ヘブレオ語本「われは
むしろわが天主の家門
守とならんことを望む」。
¹² 司祭は毎日ミサ聖祭の
準備にこの詩篇を唱える

二三 主よ、汝は汝の地を祝し給えり。ヤコブの俘虜を回帰し、²⁾ 三 汝の
 民の不義を赦し、そのあらゆる罪を蔽い給えり。³⁾ 四 御忿怒を全く
 和げ、御義憤の激昂を抑え給えり。五 我等の救主なる天主よ、我等
 を立帰らしめ、御忿怒を我等より遠ざけ給え。六 汝は永久に我等を
 怒らんとし給うや。すなわち汝の御忿怒を万代より万代に及ぼさん
 とし給うや。七 天主よ、汝は翻りて、我等を活かし給わん。さら
 ば汝の民は汝によりて楽しむべし。八 主よ、御憐憫を我等に示し、
 御救拯を我等に賜え。九 我は主なる天主のわが衷にて語り給う所⁴⁾
 を聴かん、蓋は彼御民に、その聖者等に、また心より立帰りたる
 人々に、平和を語り給うべければなり。⁵⁾ 一〇 正に御救拯は彼を畏れ
 奉る人々に近し。かくて栄光我等の地に住まるに至らん。二 憐憫
 と眞実と互に相迎え、正義と平和と接吻したり。⁶⁾ 三 眞実は地より
 生え出で、正義は天より見下せり。一三 実に主は恩恵を賜い、我等の

2) 解釈者の多くは、バビロンの捕囚から帰つた後の事情を、この詩作の動機と考えている。—3) ヘブレオ語本「セラ」。
 4) 天主がわが願ひに答え給うたこと。
 5) 平和を与え給う天主が御怒りを解き給うたから。—6) 天主の御託身により、イスラエルのこの期待は実現した。それで御降誕の聖務日禱に特に本篇が唱えられる。

一四 地はその産物を出さん。⁷⁾ 正義は彼の御前に行き、その歩を道に印さん。

⁷⁾ 罪ゆえにかけられた呪いを解かれて、地は豊かに産物を出す。

第八十五篇 (第八十六篇)

患難の時の祈禱

一 ダヴィド自作の祈禱。¹⁾
 主よ 御耳を傾けて、我に応え給え。そは我乏しく貧しければなり。²⁾ 我は聖なるに由り、³⁾ わが魂を守り給え。わが天主よ、汝に依頼み奉る汝の下僕を救い給え。³⁾ 主よ、我終日汝に呼わり奉れるに由り、我を憐み給え。⁴⁾ 主よ、我汝にわが靈魂を挙げ奉れるに由り、汝の下僕の靈魂を樂しませ給え。⁴⁾ 実に、主よ、汝は仁慈深くして、柔しく、すべて汝を呼び求むる者に憐憫豊かに在すなり。⁵⁾
 六 主よ、わが祈禱に御耳を傾け、わが懇願の聲に御意を注め給え。
 七 我はわが患難の日に、汝に向かいて呼わり奉る、そは汝我に応え

第八十五篇 1) ダヴィドの他の作中から採つたものである

- 2) 詩三九・一八参照
- 3) これは思いあがつた言葉ではなく、感謝に満ちた、天主を熱愛する気持の表白
- 4) 詩二四・一参照
- 5) 耳二・一三。

八 給^{たま}え^ばなり。八主^{しゆ}よ、神^{かみ}々^{がみ}の中^{うち}に、汝^{なんじ}に如^しく者^{もの}なく、また汝^{なんじ}の御^み作^{わざ}に匹^{たぐ}儔^りうはあらず。九 汝^{なんじ}の造^{つく}り給^{たま}える諸^{もろ}々^{もろ}の国^{くに}人^{ひと}は来^{きた}りて、主^{しゆ}よ、汝^{なんじ}の御^み前^{まえ}に伏^ふし拜^{おが}み、汝^{なんじ}の御^み名^なを頌^{たた}榮^ええ奉^{まう}らん。一〇 一。そは汝^{なんじ}偉^い大^{だい}にして奇^くしき御^み業^{わざ}をなし給^{たま}え^ばなり。汝^{なんじ}ただ独^{ひと}り、天^{かみ}主^{しゆ}にて在^ます。二 主^{しゆ}よ、汝^{なんじ}の道^{みち}によりて我^{われ}を導^{みちび}き給^{たま}え、さらば我^{われ}汝^{なんじ}の真^ま理^{こと}を踏^ふみて歩^{あゆ}まん。わが心^{こころ}をして、汝^{なんじ}の御^み名^なを畏^{おそ}れしめんために、愉^{たの}しましめ給^{たま}え。三 主^{しゆ}よ、わが天^{かみ}主^{しゆ}よ、我^{われ}わが心^{こころ}を尽^{つく}して汝^{なんじ}を讃^ほめ、永^{とこ}久^{しえ}に汝^{なんじ}の御^み名^なを頌^{たた}榮^ええ奉^{まう}らん。三 一。そは汝^{なんじ}の御^み憐^{あわれ}憫^み我^{われ}に對^{たい}して大^{おほ}いにして、汝^{なんじ}わが魂^{たま}を冥^{よみ}府^ふの底^{そこ}より救^{すく}い出^{いだ}し給^{たま}いたればなり。一四 天^{かみ}主^{しゆ}よ、不^{ただ}義^{しからぬ}者^{もの}我^{われ}に逆^{さか}ら起^たち、力^{ちから}ある者^{もの}の会^{つどい}わが魂^{たま}緒^おを狙^{ねら}いたり、彼^{かれ}等^らはそ^{その}の眼^め前^{まえ}に汝^{なんじ}を置^おかざりき。一五 されど主^{しゆ}よ、汝^{なんじ}は憐^{あわれ}憫^み深^{ふか}く、情^{なさけ}あり、氣^き長^{なが}にして、仁^い慈^じに富^とみ、信^{まこと}実^{こと}ある天^{かみ}主^{しゆ}にて在^ます。一六 我^{われ}を眷^{かえり}顧^りみ、我^{われ}を憐^{あわれ}み給^{たま}え。汝^{なんじ}の下^{しも}僕^べに御^{おん}力^{ちから}を賜^{たま}い、汝^{なんじ}の婢^{しもめ}の子^こに救^{すく}拯^いを施^{ほどこ}し給^{たま}え。一七 我^{われ}を憎^{にく}む者^{もの}共^{ども}が見^みて恥^はじ入^いるよう、我^{われ}に益^{えき}となる徴^{しるし}を行^{おこな}い給^{たま}え、そは主^{しゆ}よ、汝^{なんじ}我^{われ}を

6) 詩篇その他に屢々予言されてゐる、教會の未來の普遍性。詩二一・二八などを見よ。一) 奴隸女が主家で産んだ子は、主人の許に留め置かれて下僕として使われた。

助け、我を慰め給いたればなり。

第八十六篇

(第八十七篇)

我等の母なるシオン

五	四	三	二	一
ありき。 ⁸⁾ ⁵⁾ 人シオンに就きてはかく	ンとを、我を識る者として心に記め	ンの諸門 ⁴⁾ を愛で給う。天主の都	コブのすべての幕屋に優りて、シオ	一 コレの子等の作、 ¹⁾ 頌歌 ²⁾
エチオピアの民とを。是等は彼処に	ん。 ⁷⁾ 視よ、他国人等と、チロと、	よ、汝に就きては榮ある事ども云わ	その基は聖なる山にあり。 ³⁾ 主はヤ	
		れたり。 ⁵⁾ 我はラハブ ⁶⁾ とバビロ		

第八十六篇 1) 詩四一の註二参照。 2) エゼキアの治世に、センナケリブの軍勢に勝つた時の作と一般に思われている。 3) 主はシオンを築き給うた。 4) 「シオンの門」とは、シオンの町というに同じ。 5) ヘブレオ語本「セラ」。 6) この世界最古最強の国たるラハブ即ちエジプト(賽三〇・七。五一・九)も、天主の都イエルサレムの崇高さを認めるであらう。 7) 例えば、バベル、フィリスティアやシリアなど沿岸の国、および遠隔のエチオピア(クスの)のような、イスラエルに敵意を抱いている民でさえいつかは真の神天主に帰依するであらう。 8) そうして聖なる都で国民権や都民権を獲得するであらう。

云わん、^い「人また人^{ひと}その中^{なか}にて生^うまれ
たり⁹⁾。至高^{いとたかきものおんみずか}者御自^{おんみ}らこれ^きを築^{たま}き給
えるに^あらずや」と。^六主^{しゅ}は民等^{たみら}と諸^{しよ}
侯^{たう}、その中^{なか}にありたる人々^{ひとびと}の記^{かきもの}録^{うち}の中^{うち}
に述^のべ給^{たま}わん、^七「汝^{なんじ}の中^{なか}にある住^{すまい}居^い
は、全^{まった}く楽^{たの}しめるもの^{こと}の如^{ごと}し」と。¹¹⁾

9) もしいつかイエルサレムの都民名簿を見るなら、こ
れらの民が悉く録されており、そのいづれについても
「かれもまたかしこに生まれたり」と云われるである
う。¹⁰⁾ 天主御自^{おんみ}ら、これらの民の帰依した後、その
名を聖都の都民名に記入し給う。¹¹⁾ この詩篇中の予
言はカトリック教会において成就した。世界のすべて
の民は、霊的イエルサレムなる教会に加わるべく、続
々やつて来たのである。

第八十七篇

(第八十八篇)

悩みの裡に主に叫ぶ

一 コレの子等^{こら}の頌歌^{たたえうた}終^{おわり}ま
で²⁾。マヘレト³⁾にて応^{こた}える
ために。エズラ人^{びと}エマン⁴⁾の
教訓^{きょうくん}⁵⁾
二 主^{しゅ}よ、わが救拯^{すくい}の天主^{かみ}よ、

第八十七篇 1) 詩四一の註二参照。 2) 詩篇第四第五の註一参
照。 3) ヘブレオ語「アルマハラト」。この詩のもの悲しい
内容によく合う哀調で歌うべしとの意。 4) 代上二・六にある
ザラの子。なぜ彼がエズラ人と称せられるのか、その理由は明
らかでない。七十人訳ではこの代りに「イスラエル人」とある
多分エマンが作詩者でコレの子らが作曲者なのであるう。
5) マスキル(教訓詩)

三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四

我^{われ}は昼^{ひる}も夜^{よる}も汝^{なんじ}の御前^{みまへ}に叫^{さけ}べり。三 願^{ねが}わくはわが祈禱^{いのり}を御眼前^{おんめのまへ}に至^{いた}らしめ、わが懇請^{ねがい}に御耳^{おんみみ}を傾^{かたむ}け給^{たま}え。四 そはわが靈魂^{たまし}禍^{わざわい}に満^みたされ、わが生命^{いのち}冥府^{よみ}に近^{ちか}づきたればなり。五 我^{われ}は穴^{あな}に下^{くだ}るべき者^{もの}とせられたり、我^{われ}は援助^{たすけ}なき人^{ひと}の如^{ごと}くなりたり、六 死者^{ししや}の中^{うち}に放^{はな}たれて汝^{なんじ}の最早^{はやみころ}御心^{ごこころ}に記^とめ給^{たま}わざる、墓^{はか}の中^{なか}に眠^{ねむ}る傷^{きず}つける者^{もの}の如^{ごと}くに。即^{すなわ}ちこの者^{もの}共^{ども}は汝^{なんじ}の御手^{ごて}より棄^すてられたり。六 七 彼等^{かれら}は我^{われ}を深^{ふか}き穴^{あな}に、暗^{くら}き処^{ところ}に、死^しの蔭^{かげ}に置^おけり。八 汝^{なんじ}の御忿怒^{ごいかり}は我^{われ}に向^むかいて湧^{はげ}し、汝^{なんじ}の諸^{もろもろ}々の波濤^{なみ}をわが上^{うへ}に至^{いた}らしめ給^{たま}えり。九 汝^{なんじ}はわが知人^{しりびと}を我^{われ}より遠^{とお}ざけ給^{たま}えり。彼等^{かれら}は我^{われ}を己等^{おのれら}にとりて憎^{にく}むべき者^{もの}となしたり。我^{われ}は付^{わた}されて、七 出^いで来^{きた}らざりき、一〇 わが眼^めは艱難^{なやみ}によりて衰^{おとろ}えぬ。主^{しゆ}よ、我^{われ}終^{はつ}日^ひ汝^{なんじ}に向^むかいて叫^{さけ}び、八 汝^{なんじ}に向^むかいてわが手^てをさし伸^のべき。二 汝^{なんじ}は死者^{ししや}に奇蹟^{ふしぎ}を行^{おこな}わんとし給^{たま}えり。即^{すなわ}ち医師^{いし}等^ら彼等^{かれら}を蘇生^{よみがえ}らせて、彼等^{かれら}の汝^{なんじ}を頌^{たた}え奉^{たてまつ}ることあらんや。二三 何人^{なにびと}か墓^{はか}の中^{なか}にて汝^{なんじ}の御仁慈^{おんいつくしみ}を、滅亡^{ほろび}の裡^{うち}にて汝^{なんじ}の信実^{まこと}を、宣伝^{のべつた}うることあらんや。一三 汝^{なんじ}の奇蹟^{ふしぎ}は暗闇^{くらやみ}に、汝^{なんじ}の義^ぎは忘却^{ぼうきやく}の国^{くに}に、知^しらるることあらんや。一四 されど

6) 救いの完成せぬ内であるから、天主の御手は助けようとなさらぬ
7) 悲惨な境遇に。
8) 二節の語の繰返し

主よ、我は汝に向かいて叫べり、⁹⁾ わが祈禱は朝に¹⁰⁾ 汝の御前に至らん。
 主よ、汝何とてわが祈禱を斥け給いしぞ、御面を我に背向け給いしぞ。
 我貧しくて、わが幼少より苦勞したり、挙げられては貶されて、恥じ惑えり。
 汝の御忿怒わが上を過ぎたり、汝の恐ろしさ我を惑わせたり。
 是等は終日水の如く我を圍繞り、相共に我を囲めり。
 汝我より友をも隣人も遠ざけ給えり、また不遇のゆえにわが知人をも然なし給えり。

9) 二節の語を再び繰り返す
 10) あけぼのの頃から。

第八十八篇

(第八十九篇)

天主の御約束は希望のいしずえ

一 エズラ人¹⁾ エタン²⁾ の教訓³⁾
 二 我は主の御憐憫を永久に謳わんかな
 わが口もて汝の信実を千代万代に告げんかな
 三 それ、汝は曰えり、「憐憫は永久に、天に立てられたり」と。汝

第八十八篇 1) 詩八七の註五参照。 2) 作者エタンはダヴィドの治世にアサフ及びエマンと共に歌隊長の役を勤めていた有名なレヴィ人らしい。代上一五・一七参照。 3) ヘブレオ語「マスキル」教訓詩の意。
 4) この詩はロボアムの治世に、エジプト王セサクがユダ領に侵入した頃のもの。王上一四章参照。

四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三

の信実もそこに備えられん。四我はわが選^{えら}びたる者と契約^{けいやく}を結^{むす}べり
我^{われ}わが下^{しも}僕^べダヴィドに誓^{ちか}いたり。五我は永遠^{とこしえ}まで六汝の後胤^{なんじすえ}を備^{そな}え
汝^{なんじ}の王座^{おうざ}を築^{きず}きて千代万代^{ちよよろおよ}に及^{およ}ぼさん。六主^{しゆ}よ、諸天^{てん}は汝^{なんじ}の奇^くし
き御業^{みわざ}を、聖者^{ひじり}等の集^{つどい}会^{かい}にて七は汝^{なんじ}の信実^{まこと}を、頌^{たた}えん。七蓋^{けだ}し雲^{くも}の
中^{うち}にて誰^{たれ}か主^{しゆ}に匹^{なら}儔^らぶ者^{もの}あらんや、天主^{かみ}の子^こ等^ら八の中^{うち}にて誰^{たれ}か天主^{かみ}
の如^{ごと}き者^{もの}あらんや。八聖者^{ひじり}等の会^{つどい}にて頌^{たた}榮^たえられ給^{たま}う天主^{かみ}は、偉大^{おおい}
にして、その周^{まわ}圀^りにあるすべてものに優^{まさ}りて畏^{おそ}るべし。九万軍^{ばんぐん}の天^か
主^みなる主^{しゆ}よ、誰^{たれ}か汝^{なんじ}に匹^{たぐ}儔^らう者^{もの}ぞ。主^{しゆ}よ、汝^{なんじ}は権能^{ちから}あり、汝^{なんじ}の信実^{まこと}
は汝^{なんじ}を圀^{めぐ}繞^る。一〇汝^{なんじ}は海^{うみ}の力^{ちから}を支配^{しはい}し、またその波^{なみ}濤^みの動搖^{うごく}を靜^{しず}め
給^{たま}う。一一汝^{なんじ}は傲^{たかぶ}る者^{もの}を挫^{くじ}きて、傷^{きず}つける者^{もの}の如^{ごと}くにし、汝^{なんじ}の大能^{ちから}あ
る御腕^{おんかいな}もて汝^{なんじ}の敵^{てき}を打散^{うちち}らし給^{たま}えり。一二諸天^{てん}は汝^{なんじ}の有^{もの}なり、地^ちもま
た汝^{なんじ}の有^{もの}なり。地球^{ちのたま}とこれに満^みてる物^{もの}とは、汝^{なんじ}の基^{もと}し給^{たま}える所^{ところ}、⁹⁾
一三北^{きた}と海^{うみ}とは汝^{なんじ}の創造^{つくり}給^{たま}える所^{ところ}なり。タボルとヘルモンとは汝^{なんじ}の

5) ダヴィドの治世が永遠に続くのは、ただイエズス・キリストによつてのみ。路一・三〇―三一参照
故にこの詩は聖務で御降誕に唱えられるダヴィドの治世が永遠に続くという予言は、その内容と一部の云い方が、母下七・五、一三、一六にある。―6) ヘブレオ語本「セラ」―7) 天使たちの集いで。
8) 天使たち。
9) 創二・一。

一四 御名によりて喜び躍らん。10) 一四 汝の御腕は権能を具えたり。願
 わくは汝の御手を強くし、汝の御右手を挙げ給わんことを。11)
 一五 義と審判とは汝の王座の基なり。憐憫と信実とは汝の御面前
 一六 に先だち進まん。一六 至福なるかな、歡び叫ぶ12)を知る民。主よ
 一七 彼等は汝の御顔の光の中を歩み、一七 汝の御名によりて終日喜び
 一八 躍り、汝の義によりて挙げらるべし。一八 実に汝は彼等の力の光
 一九 輝なり。13) 我等の角は汝の御好意によりて挙げられん。一九 寔に
 二〇 我等の支援は主の、即ち我等の王イスラエルの聖なる者14)のそ
 二一 れなり。二〇 かの時15) 汝啓視の中に汝の聖者等16)に語りて曰いぬ
 「我は力ある者に祐助を与え、わが庶民の中より選びたる者を
 二二 挙げたり。二二 我ダヴィドのわが下僕たるを見出でて、之にわが
 二三 聖油を塗れり。17) 三 実にわが手彼を助けん、わが腕彼を強く
 せん。二三 敵は彼に向かいて利なく、不義の子等18)は累ねて彼を

10) 全地の意。——11) 今あれ
 ほど強い敵どもに對して
 12) ヘブレオ語本「ラツパ
 の音」。その聖なるラツ
 パが喜ばしげに予告する
 祝祭を暗示す。——13) イス
 ラエルが名譽とし、かつ
 力とするのは、神として
 主を有すること。——14) ヤ
 ーヴェ。——15) 四、五、兩
 節に暗示してある時。
 16) 主としてサムエルとナ
 タン。——17) 母上一六・一
 一二。徒一三・二二。
 18) いわば不義を母として
 いる人間。

二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八

害うことなからん。二四我彼の面前よりその敵を断ち、彼を憎む者等を逃走らしめん。二五わが信実とわが憐憫とは彼と共にあり、その角はわが名によりて挙げらるべし。二六我彼の手を海の上に、その右の手を河川の上に置かん。19) 彼は我を呼ばん、「汝はわが父、わが天主にして、わが救拯の支柱なり」と。二八我また彼を長子となし、地の王等に優りて高き者となさん。二九我永久にわが憐憫を彼に対して保ち、わが契約を渝ることなく彼に守らん。三〇我またその後胤を世々の世々まで、その王座を天の日数の如く、存続かしめん。20) 三されどもしその子等わが法を棄て、わが規定のままに歩まず、三三わが義を瀆し、わが誠命を守らずば、三三我杖もてその不義に、打擲もてその罪に、報いん。三四さりながらわが憐憫を彼より取り去ることなく、わが信実に背くことなからん。三五なお我はわが契約を瀆さじ、またわが口唇より出でたることを空にせじ。三六我曾てわが聖にかけて誓えり、我ダヴィドに虚偽を云わじ、三七その後胤は永久に存し、三八その王座はわが眼前に日の如く、永久に円満な

19) この語で世界統治を約束し給ふ。
20) この御約束は、ただダヴィドの子孫中最も偉大なイエズス・キリストの御身に抱いてのみ成就した。

三九	る月の如くあらん、天にある証人は信実なり。 ²¹⁾ 三九され
四〇	ど汝は排け蔑み給えり、汝の受膏者を棄て給えり。 ²²⁾
四一	ね、 ^{四二} その生垣 ²⁴⁾ を悉く毀ち、その砦を恐怖にて満たし
四二	給えり。 ^{四三} 道ゆく者みな彼より掠奪れり、彼はその隣人
四三	等の恥かしむる所となれり。 ^{四四} 汝は彼を虐ぐる者等の右
四四	手を挙げ、その諸々の敵を悦ばしめ給えり。 ^{四五} 汝は彼の
四五	劍の援助を離れしめ、戦鬪にも彼を助け給わざりき。
四六	汝は彼より光輝を奪い去り、その玉座を地に投げ倒し
四七	その時の日数を短縮め、彼を恥辱もて覆い給えり。 ²⁵⁾
四八	主よ、いつまでぞ。汝末長く背を向け給うや。御忿怒
四九	火の如く燃えんか。 ^{五〇} わが生存うるが如何なるかを憶い
五〇	給え、抑々汝徒勞にすべての人の子を造り給えるにや。

²¹⁾ 以下七・一六。―ヘブレオ語本「セラ」。―²²⁾ 前の部分が明るい御約束であるに對して、終りの部分は暗い現在のめじめな有様を述べている。国の兵力(四一節)および王の勢力(四〇、四五兩節)は、悲惨な敗北後(四三節以下)挫折してしまつた。王は年よりも老いこんだ(四六節)。―²³⁾ ヘブレオ語本「その冠」。それを戴いていた君が異教徒に敗れた時からそれはいわば地上に投げ棄てられたようなもので、瀆されたわけである。―²⁴⁾ すべてユデア國を護るものをさす。―²⁵⁾ ヘブレオ語本「セラ」。

四九 生き存らえて死を見ず、己が靈魂を冥府より救い出すべき人、誰か
 五〇 ある。26) 主よ、汝が信実もてダヴィドに誓い給いし所に適う、汝の
 五一 往古の御憐憫、今何処にありや。27) 主よ、(我が懷中に抱ける) 数
 五二 多の異邦人より汝の下僕の受けし恥辱を御心に記め給え。主よ、汝
 五三 の敵はこれをもて罵れり、これをもて汝の受膏者の変更28) を罵れるな
 り。主は永久に祝せられさせ給え。然あれかし、然あれかし。29)

26) ヘブレオ語本「セラ」。—27) 母下七・一五。—28) ダヴィドに取つてかわる王。—29) 詩篇第三部の結び。詩四〇・一四および註参照。

第八十九篇 (第九十篇)

永遠の天主は命短かき人間の避難所

一 天主の人、1) モイゼの祈禱。2)
 主よ、汝は代々より代々に至るまで、我等の避難所にて
 在せり。二 山々成り、地と世界との形成られしに先だち
 て、天主よ、汝は永遠より永遠に在す。三人を卑賤に突
 落し給うなかれ。それ、汝は曰えり、「汝等人の子よ、

第八十九篇 1) 申三三・一。書一四・六。—2) イスラエル人の荒野通過の終り頃、即ちエジプトを出た、古き世代の、いろいろな罪を犯していた人々がほとんど死に絶えた後の頃。

立^{たち}歸^{かえ}れ。」と。³⁾ 抑^{そも}々^{そも}汝^{なんじ}の御^{おん}目^めの前^{まえ}には、千^{ねん}年^すも過^さぎ去^さりたる昨^{きのう}日^う
 の如^{ごと}く、夜^{よる}の不^ね寝^ず番^{ばん}の時^{とき}の如^{ごと}し。⁴⁾ 無^むと思^{おも}わるるもの^{もの}が、彼^{かれ}等^らの年^{とし}
 なるべし。⁵⁾ 六^{ろく}そは朝^{あした}に生^いえ出^でる草^{くさ}の如^{ごと}く、朝^{あした}に花^{はな}開^{ひら}きて過^すぎ去^さらん。
 夕^{ゆう}には落^おち、萎^{しお}れて枯^かれ果^はてん。⁶⁾ 寔^{まこと}に我^{われ}等^らは汝^{なんじ}の御^{おん}忿^い怒^{かり}によりて
 消^きえ失^うせ、汝^{なんじ}の御^{おん}義^ぎ憤^ふによりて怖^{おそ}じ惑^{まど}いたり。⁷⁾ 八^{はち}汝^{なんじ}は我^{われ}等^らの不^ふ義^ぎを
 汝^{なんじ}の御^{おん}眼^め前^{まえ}に、我^{われ}等^らの生^{しょう}涯^{がい}を御^み顔^{かお}の光^{ひかり}。⁸⁾ の中^{うち}に置^おき給^{たま}えり。⁹⁾ 九^く実^{じつ}に
 我^{われ}等^らの諸^{もろ}々^{もろ}の日^ひは消^きえ失^うせたり、我^{われ}等^らは汝^{なんじ}の御^{おん}忿^い怒^{かり}によりて衰^{おとろ}えた
 り。我^{われ}等^らの年^{とし}は蜘蛛^{くも}の如^{ごと}く。¹⁰⁾ 思^{おも}わるべし。¹¹⁾ 一〇^{いちじゅう}我^{われ}等^らの年^{とし}の日^ひ数^{かず}はすべ
 てにて七^{しち}十^{じゅう}年^{ねん}、強^{つよ}き者^{もの}にても八^{はち}十^{じゅう}年^{ねん}にして、その餘^よはただ勞^{あう}苦^くと悲^{かな}
 しみとのみ。¹²⁾ 蓋^{けだ}し衰^{おとろ}弱^{じやく}。¹³⁾ 我^{われ}等^らに臨^{のぞ}みてぞ、我^{われ}等^ら懲^な治^おさるべし。¹⁴⁾
 二^{ふた}誰^{たれ}か汝^{なんじ}の御^{おん}忿^い怒^{かり}の力^{ちから}を知^しり、汝^{なんじ}を畏^{おそ}るるあま^{あま}り、汝^{なんじ}の御^{おん}忿^い怒^{かり}を
 三^{さん}数^{かず}うる。¹⁵⁾ されば汝^{なんじ}の右^{みぎ}を知^しらしめ、智^ち慧^えもて心^{こころ}に教^{おし}え給^{たま}え。¹⁶⁾ 三^{さん}主^{しゅ}
 よ、回^{かえ}歸^{かえ}り給^{たま}え。いづま^{いづま}でぞ。汝^{なんじ}の下^{しも}僕^{べら}等^らのため^{ため}に、懇^{ねが}願^いを容^いれ給^{たま}

3) この祈願は、罪人の改心を望み給う天主の御旨に基づいて
 いる。——4) 天主の御意に逆らうことを徹底的に明らかにする
 ための、信心深い人への聖寵の光。
 5) くもの巢のようにつまらなく。——6) ラ
 テン語 Mansuetude
 は柔和の義。ここでは老人に來るいろいろな衰弱と解すべきである。——7) 集一八
 ・八。

一四 え。我等は朝に⁸⁾ 汝の御憐憫に満たされ、我等の日の限り喜び躍りて¹⁴ 樂しめり。一五 我等は汝が我等を挫き¹⁵ 給える日数、我等が憂目を見たる¹⁶ 年数に¹⁷ 応じて¹⁸ 樂しめり。一六 汝の下僕等を、また汝の御業を願み、¹⁹ 彼等の子等を導き²⁰ 給え。一七 かくて主我等の天主の光輝²¹ を我等の上²² に²³ あらしめ、我等のために我等の手の業を導き²⁴ 給え、然り、我等の手の業を汝こそ導き²⁵ 給え。

第九十篇 (第九十一篇)

天主は義人を守り給う

一 ダヴィドの讚美歌。¹⁾
至高者の御祐助の下に住む者は、²⁾ 天つ天主の御保護の下に住まるべし。³⁾ かかる者は主に云わん、
「汝はわが扶助者にしてわが避難所なり、わが天主なり、我彼に依頼み奉らん。⁴⁾ 三 そは彼獵人の良

8) 早くから。——9) 即ち彼らがカナアンに入つて約束の地を得た時。——10) ヘブレオ語本「ヤーヴェの美わしきをわれらの上にあらしめ」。

第九十篇 1) ヘブレオ語本にはない。ダヴィドの治世の終り頃多くのイスラエル人が恐ろしいペストで死んだことが作の動機。——カトリックの聖務日課の晩の祈り(終課)に用いられている。——2) 天主の御助けに信頼をかけている人。

四 より、鋭き言³⁾より 我を遁し給いたればなり。」と。四 彼そ
 の御肩^{おんかた}もて汝^{なんじ}を出^{かは}い給^{たま}わん、汝^{なんじ}その御翼^{みつばさ}の下^{した}に希望^{のぞみ}を繋ぐ
 べし。五 彼の信実^{まこと}は楯^{たて}となりて汝^{なんじ}を囲^{かこ}まん、汝^{なんじ}夜の恐怖^{おそれ}
 に⁴⁾怖^{おそ}るることあらじ。六 昼^{ひる}に飛^とび来^{きた}る矢^やにも、暗闇^{くらやみ}を歩^{あゆ}
 む禍^{わざわい}⁵⁾にも、討^{うち}入りや白昼^{まひる}の悪鬼^{あくつき}にも、また然^{しか}り。六⁶⁾ 汝^{なんじ}の
 傍^{かたわら}にて千人^{にん}、汝^{なんじ}の右^{みぎ}にて万人^{まんにん}、⁷⁾ 仆^{たお}るべけれど、汝^{なんじ}にはその
 近^{ちか}づくことなからん。八 実に汝^{なんじ}は己^{おの}が眼^めもて眺^{なが}め、罪人^{つみびと}等
 の報^{むくい}を見るべし。九 そは主^{しゆ}よ、汝^{なんじ}わが希望^{のぞみ}にて在^{まし}まはなり。
 汝^{なんじ}は至高^{いとたかき}者を汝^{なんじ}の避難^{のがれ}所^ほとなしたり。八⁸⁾ 一〇 災厄^{わざわい}汝^{なんじ}の許^{もと}に來^{きた}
 らず、患難^{なやみ}汝^{なんじ}の幕屋^{まくや}に近^{ちか}づかざるべし。二 此^{かれ}れ、彼^{なんじ}が汝^{なんじ}の
 あらゆる道^{みち}において汝^{なんじ}を守^{まも}らんと、汝^{なんじ}に就^つきてその天使^{みつかいたち}等
 に命^{めい}じ給^{たま}いたればなり。九⁹⁾ 一二 彼等^{かれら}は汝^{なんじ}の足^{あし}の石^{いし}に衝^つき当^{あた}ら
 ざるよう、手^てにて汝^{なんじ}を支^{ささ}えん。一三 汝^{なんじ}は毒蛇^{どくへび}と蝮^{まむし}との上^{うへ}を歩^{あゆ}

3) 悪事。――4) 夜討ち。――5) ヘブ
 レオ語本「ペスト」。――6) 七十人
 訳は悪霊の襲撃と考えている。
 7) 敵。「汝の傍に千本：落つべ
 し」として、六節の矢と考える
 人もある。――8) 八節の終までは
 第一歌隊の詞。九節の後半から
 第二歌隊の答。九節の前半は間
 に入れられた天主への祈禱。
 9) 守護の天使の存在を示す例に
 引かれる箇所。――マテオ四・六
 路四・一〇。――第一歌隊は目に
 見えぬ悪霊の軍勢を暗示し(六
 節、これに対して第二歌隊は
 善天使の軍勢をさす。即ち守護
 の天使たち。

一四 み、獅子と龍とを蹂躪らん。一四 彼我に依頼みしかば¹⁰⁾ 我彼を救い出さ
 一五 ん。彼わが名を識れるが故に、我彼を庇わん。一五 彼我に向かいて叫ばん
 に、我之に応えん。患難の時にも我彼と共にあり、之を救い出し之に榮
 あらしめん。一六 我寿命の長きもて彼を満たし、わが救拯を之に示さん。¹¹⁾

¹⁰⁾ ここから天主の御言葉。
¹¹⁾ 詩四九・一五参照。

第九十一篇 (第九十二篇)

善きかな、主を頌うること

一 安息日における讚美歌。¹⁾

二 善きかな、主を頌うること、至高者よ、汝の御名に奏で歌
 うこと、三 朝には²⁾ 汝の御仁慈を、夜には汝の信実を宣伝う
 るに、四 十絃琴を川い、小琴に合せて歌うこと。五 そは主よ、
 汝御所為³⁾ もて我を悦ばせ給えばなり。我御手の作によりて
 喜び躍らん。六 主よ、汝の御作はいかに偉大なるぞ。汝の思
 慮は甚だ深し。七 この事どもを、無智なる人は知らざるべ

第九十一篇 ¹⁾ 作者は誰か

わからない。安息日には公
 けの祭式中にこれを歌うこ
 とになつていた。――²⁾ ユデ
 ア教律法集タルムドによれ
 ばこの詩篇は朝犠祭を行う
 間に歌われた。――³⁾ イスラ
 エル民族の歴史における天
 主の御導き。

八 く、愚かなる者は曉らざるべし。八 罪人等草の如く萌え出で、凡て
不義を行^ふう者等の現れん時、然らん、これ彼等が世々に滅びんため
なり。四 九 されど主よ、汝は永遠に至高者にて在す。一〇 実に視給え、
汝の敵は、主よ、実に視給え、汝の敵は、亡ぶべく、凡て不義を行^ふ
う者は打散らざるべし。二 されどわが角は、五 野牛^六のそのの如く
挙げられん、わが晩年は豊かなる御憐憫を蒙らん。三 またわが目は
わが敵を見さげ、わが耳は我に起ち逆らえる心根悪しき者共に就き
て聞く所あるべし。三 義人は棕櫚の如く栄え、リバノンの杉の如く
成長たん。一四 主の家に植えられたる者は、我等の天主の家の大庭
にて栄ゆべし。一五 彼等は豊かに果を結ぶ晩年にも、なお成長ち、よ
く久しきに耐うべし、一六 これ、彼等が、主我等の天主の直く在して、
彼には不義のあらざることを、告げんためなり。

4) 天主は聖寵を与え給うが、罪人はこれを斥ける。――5) わが力。詩一七・三。七四・五、六、一一など参照。――6) 詩二一の註一四参照。
7) 八節と対照をなす棕櫚や杉は年経てもなお見事に生い茂るから、繁栄と長命と力との象徴。

第九十二篇

(第九十三篇)

力ある君

一 ダヴィド自作の讚美歌。安息日の前の日、地の据え
られたる記念日のために。¹⁾
二 主統治し給えり、美麗を纏いて在す。主力を着、
躬に帶とし給えり。実に彼は地球を確く立て給えり
そは揺ぐことなからん。²⁾ 汝の玉座は古より設けら
れたり。汝は永遠より在す。³⁾ 大河は挙げたり、主
よ、大河²⁾は挙げたりその声を。大河は挙げたりそ
の波濤を、⁴⁾ 多量の水の轟音させて。奇しきかな、
海の逆巻。奇しきかな、高処に在す主。³⁾ 五 汝の証詞
はいと信すべきものとなれり。主よ、聖は日久しき
に至るまで汝の家に応わしきなり。⁴⁾

第九十二篇

1) ヘブレオ語本には前書きが全くない。この詩は金曜日朝の犠祭中に歌われた。ユデア教会ではこの短かい詩をメシアに関するものと考えていた。最初の創造は天主の御国の基を据えたもの、救いはその御国の一段と高い新しい形式を始めたものである。それ故新約の教会では、祝日には朝の祈禱(讚課)において、この礼拝の歌をまつ先に唱える。2) 世界の国々を意味する、アッシリアのチグリズ河、バビロニアのエウフラト河。3) ヘブレオ語本「ヤーヴェは高き処に在してその勢いは多くの水の声よりも盛んなり」。4) 天主は御約束に従い、聖所を瀆聖から護り給うた。

第九十三篇 (第九十四篇)

御民の圧迫者に対する天主の審判

一 ダヴィド自作の詩。週の四日目に。¹⁾

主は復讐の天主なり、²⁾ 復讐の天主は思いのままに行い給えり。³⁾ 起ち給え、汝地を審判き給う者よ、傲る者に報を返し給え。⁴⁾ いつまでか罪人等は、主よ、いつまでか罪人等は誇るべき、⁵⁾ 放言して不義を語るべき、⁶⁾ 凡て不正を行う者語るべき。⁷⁾ 主よ、汝の民は、彼等の押し拉ぐ所となれり。彼我は汝の嗣産³⁾を悩ましたり。⁸⁾ 彼等は寡婦や外来者を殺し、⁴⁾ 孤兒を屠れり。⁵⁾ しかして云えらく、「主は見ざるべし、ヤコブの天主は悟らざるべし」と。⁶⁾ 汝等民の中の無智なる者よ、曉れ。汝等愚かなる者よ、いつかは賢かれ。⁷⁾ 耳を植え給いし者、聞き給わざらんや。また目

第九十三篇 ¹⁾ヘブレオ語本に

はない。これが典礼用であることは、ユデア教律法集タルムドおよびユデア人が現在行なっていることから確証される。

²⁾ 正当の報い。――³⁾ イスラエルの民。――⁴⁾ 人民の間における極悪の所行について、予言者たちは自分と同時代の人々に対し、同様に歎き訴えている(賽一・二三。一〇・一以下。耶五・二八。結二二・七。麼四・一など)。

一〇 を形成^{かたちづくる}し給^{たま}いし者^{もの}、見^みまもり給^{たま}わらずや。一〇 国々^{くにぐに}の民^{たみ}を懲^こらし給^{たま}う者^{もの}、譴責^{とが}
 二 め給^{たま}わざらんや。人^{ひと}に知識^{ちしき}を教^{おし}え給^{たま}う者^{もの}ぞ。二 主^{しゅ}は人々^{ひとびと}の思念^{おもひ}を、その空^{むな}
 三 しきを、知^しり給^{たま}う。三 主^{しゅ}よ、至福^{さいふく}なるかな、汝^{なんじ}の躋^{しづ}け給^{たま}う人^{ひと}、⁵⁾ 汝^{なんじ}の法^{のり}に
 四 就^つきて教^{おし}え給^{たま}う人^{ひと}、三 此^これ、罪人^{つみびと}のため^{ため}に坑^{あな}の掘^ほらるるまで、彼^{かれ}を禍^{わざわい}の日^ひ
 五 より遁^{のが}れしめて安^{やす}らかならしめ給^{たま}わんためなり。四 それ 主^{しゅ}はその民^{たみ}を捨^す
 六 て給^{たま}わざるべく、その嗣^{ゆかり}産^{はな}を離^{はな}れ給^{たま}わざるべし、^五 審判^{さはん}に正義^{せいぎ}歸^{かえ}り来^{きた}り、⁶⁾
 七 心^{こころ}の直^{ただ}き者^{もの}みなこれに循^{したが}う者^{もの}となるまでは、然^{しか}らん。一六 誰^{たれ}かわがため心根^{こころね}
 八 悪^あしき者^{もの}等に敵^{はむか}ひ起^たたんや。また誰^{たれ}か我^{われ}に与^{くみ}して、不義^{ふぎ}を行^{おこな}う者^{もの}等に逆^{さか}ら
 九 立^たたんや。一七 主^{しゅ}もし我^{われ}を助^{たす}け給^{たま}わざりしならば、わが魂^{たま}ほとん^{よみ}ど冥府^{すま}に住^{すま}
 一〇 いしならん。一八 我^{われ}が「わが足^{あし}よろめけり」と云^いいし時^{とき}にも、主^{しゅ}よ、汝^{なんじ}
 一九 の御憐憫^{おんあわれみ}我^{われ}を助^{たす}けぬ。一九 わが心^{こころ}にわが苦^{くる}しみの多^{おほ}きに従^{したが}い、汝^{なんじ}の御慰藉^{おんなぐさめ}わ
 二〇 が魂^{たま}を楽^{たの}しませたり。二〇 律法^{おきて}によりて難^{かた}き業^{わざ}を制^{さだ}め給^{たま}う⁸⁾ 汝^{なんじ}に、不義^{ふぎ}の
 二一 座^ざ関^か係^{けい}ありや。二 彼等^{かれら}は義人^{ぎじん}の魂緒^{たまのお}をつけ狙^{ねら}いて、無辜^{つみな}き血^ちを罪^{つみ}に定^{さだ}めん

5) 作者は啓示により、天主が宜き時に裁き給うべきことを知つてい
 る。——6) 正義は最後には勝つに相違ない
 7) サウルとその部下の者とに追い詰められた結果。
 8) ヘブレオ語本「律法にとよせて害うことをはかる」。

二三 二
とす。三されど主はわがため避難所に、わが天主はわが希望の助け手に
なり給えり。三かくて彼は彼等にその不義を報い、彼等の悪意によりて
これを滅ぼし給わん。主我等の天主はこれを滅ぼし給わん。9)

9) 教会はこの詩を御受難の主に云わせている。

第九十四篇 (第九十五篇)

讚美のすすめ

一 讚美歌、ダヴィドの自作1)
いざ、我等主に向かいて喜び躍らん、我等の救主なる天主に向か
いて歡び叫ばん。二我等讚美しつつまだきにその御面前に至り、
奏歌もて彼に歡び叫ばん。三それ、主は大いなる神なり、諸々の
神に優れる大王なり。四そは地の極すべて、その御手にあり、2)
山の高き処も彼の有なればなり。五実に海も彼の有、彼之を造り
給いき。乾ける地もその御手之を形成りしなり。六いざ我等拝み
平伏さん、我等を造り給いし主の御前にて歎かん。3) 七そは、彼こ

第九十四篇 1) ヘブレ

オ語本には前書きがな
い。ヘブレオ書にはこ
の詩がダヴィドの作と
云つてある。これは共
同礼拝に人を呼ぶ叫び
(招辞)である。

2) 異教徒は自然を神と
して拝む。―3) 感謝と
痛悔との涙。ヘブレオ

そ我等の天主にして、我等はその牧場の民、その御手の羊なればなり。⁴⁾ 汝等もし今日その御声を聞かば、汝等の心を頑固にするなかれ。⁵⁾ 九 荒野における試みの日に怒らせたる時の如く。「彼処にて汝等の父祖は、我を試み、我を験しけるが⁶⁾ わが作を見たり。⁷⁾ 我かの代に不興を覚ゆること四十年にして云いけらく、『彼等は恒に心迷う。二また彼等はわが道を知らざりき。』と。かくて我怒りて誓いぬ、『彼等はわが安息に入るべからず』と。⁸⁾

第九十五篇

(第九十六篇)

主の来臨

一 ダヴィド自作の歌。捕囚の後に家の建てられし時。汝等主に向かい新しき歌を唱え、全地よ、主に向か

語本「ひざまずかん」。—⁴⁾ 牧者と羊の群の譬えがここにもまた使用されている。—⁵⁾ 来三・七。—⁶⁾ 天主を試みることは、ここにすべからざることとして戒めてあるが、その実例二つの内、一つは荒野の旅の二年目にホレブの近くで起こつたこと(出一七・一以下) 今一つはその四年目にカデスで起こつたことである(民二〇・二)。—⁷⁾ カナアンを手に入れて落ちつくこと。—⁸⁾ 来四・三。

第九十五篇 一)ヘブレオ語本には前書きなし。これは契約の櫃をシオン山に移す時歌つた歌の一部である

二 いて唱え。主に向かいて唱え、その御名を褒め、日に日にその救拯を
 三 告げよ。異邦人の間にその御栄光を、諸々の民の間にその奇しき御業
 四 を宣べよ。それ、主は偉大にして大いに讃うべく、諸々の神に優りて
 五 畏るべき者に在す。²⁾ 五 所は異邦人の神々は皆悪鬼³⁾ なれども、主は諸天
 六 を造り給いに由りてなり。讚美と美麗とその御眼前にあり、聖と御
 七 稜威とその聖所にあり。汝等主に帰せよ、異邦人のやからよ、主に帰
 八 せよ、榮と誉とを。主に帰せよ、その御名に頌榮を。供物を取りてそ
 九 の大庭に入れ、その聖なる庭にて主を拝せよ。全地はその御面前に揺
 一〇 らげかし。汝等、異邦人の間にて云え、主の統治し給えることを。実
 二 に彼地球を堅く立て給えり、そは揺るがざるべし。彼公平もて民を裁き
 三 給わん。二 諸天は楽しめ、地は雀躍りせよ。海とこれに満てる物とは震
 四 動けかし。三 田畑とその中にあるすべての物とは喜ばん。その時⁴⁾ 森の
 五 あらゆる樹木も雀躍りすべし、主の御面前にて。そは彼来り給えばな

(代上一六・八一三六)。詩一
 〇四・一一一五
 はその歌の前の
 部で、この詩は
 終りの部。
 2) 詩四六・三参
 照。一³⁾ ハブレ
 オ語本では「空
 しき物」。即ち
 偶像。一⁴⁾ 天主
 が全世界の王と
 認められ給う時
 殊にメシアの時
 代。

り、⁵⁾ 地を裁かんとて来り給えばなり。彼は地球を公平もて、民をその真実もて、裁き給わん。

第九十六篇

(第九十七篇)

王たる主の御栄え

一 かのダヴィドの作。彼の国のよく治まりたる時。¹⁾ 主統治し給えり、地は喜び躍れ、多くの島々²⁾ は樂しめかし。二 雲と闇と彼の周囲にあり、³⁾ 義と公平とその御座の基たり。三 火その御前に先立ち進み、その敵の周囲にて焰をあげん。四 その電光は地球を照らした。五 山々も主の御面前、全地も主の御面前にては、⁴⁾ 蠟の如く融け去りき。六 諸天は彼の正義を告げ、すべての民はその栄光を見たり。七 彫める像を拝む者、己が偶像を誇りとする者は、みな滅

⁵⁾ メシアたるキリストが抱いになるから。

第九十六篇

¹⁾ 詩一七が作られたのと同じ頃で、ダヴィド晩年の作。根本思想は、メシアに関するもので、天主の王としての御栄えを「地の諸民」に顕わす。――²⁾ 島々とは、ここではただ、よくある例のように地中海沿岸の国々をさすばかりでなく、異教世界の諸国諸民をも意味する。
³⁾ 世界の大王御出現の記事は、シナイ山の天主御出現の記事に基づいている。――⁴⁾ 御怒りの火、もしくは聖寵の光により。

八 びよかし。彼を拝み奉れ、そのすべての天使等。⁵⁾ ハシオン
 は聞きて、楽しみけり、主よ、汝の御審判ゆえに、ユダの
 娘等は、喜び躍りぬ。^九 実に汝は全地に超えたる至高き主
 諸々の神を凌ぎて甚だ高く在すなり。^{一〇} 汝等主を愛し奉る
 者よ、惡を憎め。主はその聖者等の靈魂を護り給う、彼等
 を罪人の手より遁し給わん。⁶⁾ 二 義しき者に光明⁷⁾ 心の
 直き者に悦樂出現れたり。^三 汝等義しき者よ、主によりて
 悦び、その聖徳の記憶を讃め称えよ。⁸⁾

第九十七篇

(第九十八篇)

主に新しき歌を

一 ダヴィド自作の詩。¹⁾
 汝等主に向かいて新しき歌を唱え、そは彼奇しき御業をな
 し給いたればなり。その御右手、その聖なる御腕は彼のた

5) 出二〇・四。利二六・一。五
 ・八。―聖パウロはイエズス・
 キリストが天使たちより限りな
 く優れておいでになることを示
 すために、本節を、来一・六に
 引用している。―6) 歴五・一五。
 羅一二・九。―7) 敬虔な人々は
 光、即ちメシア時代の幸福を享
 けるであろう。―8) その神性を
 憶つて喜べ。

第九十七篇 1) 詩九五・一以下
 同様主の救いのみわざの成就を
 頌え、天主の御国の輝かしい將
 来の有様を示す。

めに救拯をなせり。²⁾ 主はその救拯を知らしめ給えり、その義を異邦人等の眼前に顕し給えり。³⁾ 彼はイスラエルの家に対して、その御憐憫と信実とを思い出で給えり。地の果も皆我等の天主の救拯を見たり。³⁾ 全地よ、主に向かい、て歡喜の声を挙げよ。歌え、雀躍して、樂を奏でよ。⁵⁾ 小琴もて主に讚歌唱え、小琴と讚歌の声ともて、打延べたる喇叭と角笛の音ともて。王たる主の御眼前にて歡び叫べ。⁷⁾ 震動け、海と之に満てる物、地球とその中に棲める物。⁸⁾ 八河川は手を拍て、山々も共に喜び躍れ、主の御眼前にて然せよ、そは彼地を裁かんとて来り給えばなり。彼は地球を正義もて、民を公平もて、裁き給わん。⁴⁾

第九十八篇

(第九十九篇)

主は聖なる王

一 ダヴィド自作の詩。¹⁾
主統治し給えり、²⁾ 民等怒

第九十八篇 一) 三度「聖」で終わる句(三、五、九節)により三つに分かたれる詩。作者は、あらゆる国民がイスラエルの天主を大王と認める時代を、現在の如く見ている。二) 詩九六の冒頭を

2) 主はその全能によつてこれをなし給う
3) 御降誕第三のミサの聖体拝領後の文。
賽五二・一〇路三・六参照
4) 詩九五・一三参照。

二 ならば怒れ。智天使の上に坐し給う者なり、地搖ぎ動けかし。
 三 はシオンにありて偉大に、諸々の民の上に高く在し給う。
 四 汝の偉大なる御名を頌えよかし、そは畏るべく、聖にして、
 五 の譽は審判を好めばなり。汝は直き道を備え、ヤコブの中に審判
 六 と義とを行い給えり。
 七 汝等主我等の天主を頌え奉り、その足
 八 台の前に平伏せ、そは聖なればなり。
 九 その司祭等の中にモイ
 十 ゼ及びアーロンあり、またその御名を呼び奉る者の中にサムエル
 十一 あり。彼等主を呼び奉りしに、彼之に応え給いぬ。
 十二 彼雲の柱の
 十三 中に在して彼等に語り給いき。
 十四 彼等御証詞と、その彼等に授け
 十五 給いし律法とを守りぬ。
 十六 主よ、我等の天主よ、汝は彼等に
 十七 給いき。天主よ、汝は彼等に恵深く在せど、
 十八 彼等のあらゆる企み
 十九 に報復をなし給いぬ。
 二十 汝等、主我等の天主を頌え、その聖なる
 二十一 山にて拝み奉れ、そは主我等の天主は聖にて在せばなり。

参照。――3) 契約の櫃の

上に鎮座し給う天主は
 いわばそれを足台とし
 て使つておいでになる
 わけ。――4) 天主はサム
 エルには雲の柱の中か
 ら語つておいでになら
 ないので、ここでは單
 にモイゼとアーロンか
 荒野通過中のイスラエ
 ルの民をさすものと解
 すべきである。

5) 「イスラエル人はモ
 イゼ、アーロン、及び
 サムエルに逆らい、敢
 て不敬な事をしたから
 天主報復し給え」。

6) シオン山。

第九十九篇 (第百篇)

聖殿に入りつつ

一 讚美の詩^{○1)}

二 全地よ、天主に向かい、^{よろこび}喜び叫べ、^{たの}楽しみつつ主^{しゆ}に事^{つか}え、^こ雀
躍^{おど}しつつその御眼前^{みまへ}に入れ^{○2)} 三 汝等主の天主にて在^{まゐ}すことを知^し
れ。我等^{われら}を造^{つく}りしは、彼^{かれ}にして我等自身^{われらみづか}にあらず^{○3)} 我等^{われら}は彼^{かれ}
の民^{たみ}にして、その牧場^{まきば}の羊^{ひつじ}なり^{○4)} 四 汝等讚美しつつその門^{かど}に、
讚歌^{ほめうた}いしつつその庭^{にわ}に入れ。彼^{かれ}を頌^{たた}え、その御名^{みな}を讚^ほめよ。五 実^げ
に主^{しゆ}は仁慈^{いつくしみふか}深く在^{まゐ}して、その憐憫^{あわれみ}は永遠^{とこしえ}に、その信実^{まこと}は千代万^{ちよよろ}
代^よまでも存^{ぞん}すればなり。

第百篇 (第百一篇)

支配者の決心

一 ダヴィド自作の詩^{○1)}

第百篇

1) 作詩の正確な時はわからない。しかしダヴィド王がここで

第九十九篇 1) この歌は

いわゆる讚美の犠牲の奉
献の際に歌うことになつ
ていた。――2) 聖所に。

3) ヘブレオ語本「されば

われらはそのものなり」。

4) 詩九四・七とその註参

照。

主よ、我汝に向かいて憐憫と審判とを謳わん、我奏で歌い
て、^二汝のわが許に來り給わん時²⁾ 汚玷なき道によりて
わが了れるを示さん。我はわが心の辜なきままに、わが家
の中を歩みぬ。³⁾ 我は義しからぬ事を、わが目の前に置か
ず、⁴⁾ 邪曲をなす者等を憎めり。我に着かざりき、^四 心の
曲れるは。我より遠ざかりし心根悪しき者は、⁵⁾ 我之を知
らんともせざりき。^五 己が近き者を秘かに誹る者は、我之
を迫害みぬ。⁶⁾ 目傲り、心飽くことを知らざる者は 我之
と共に食わんとせざりき。^六 わが目は地の忠実なる者に向
かい、我と共に坐せしめんとし、汚玷なき道によりて歩む
者、是ぞ我に事えしなる。⁷⁾ 傲り行う者はわが家の中に住
まざるべく、不義を語る者はわが目の前に立ちしことあら
ざりき。^八 朝に⁸⁾ 我は主の都より、不義を行う者共を悉く

立派な決心をしているのは、イ
スラエル諸族を糾合して国を立
てた頃によく適合すると思われ
る。——²⁾ お恵みを携えて。
³⁾ 家での暮らしと同様に、キリ
スト教信者の共同ならびに個人
生活においても、天主が始終共
にましまし、且嘉し給うように
しなければならぬ。——⁴⁾ 喜ん
で見るために。——⁵⁾ 私に反対、
従つて善に励もうとしない人々
⁶⁾ 私の宮廷に居ることを容赦し
ない。——⁷⁾ 私の役人に取り立て
よう。——⁸⁾ 絶えず。

滅ぼし去らんと、⁹⁾ 地のあらゆる罪人等を殺しぬ。

⁹⁾ 改心しないような悪人は、すべて天主の都におかない。

第百一篇 (第百二篇)

いたく悩める者の悲歎と祈願

一 憐なる者¹⁾ が、憂いて主の御眼前に己が懇願を披瀝せし時の祈²⁾ 禱。

二 主よ、わが祈禱を聴き容れ給え、わが叫喚を汝の御許に至らしめ給え。^三 汝の御面を我に背向け給うなかれ。いつにてもわが悩み居る日には、御耳を我に傾け給え。いつにても我の汝を呼び奉らん日には、速かに我に応え給え。^四 蓋しわが日々は煙の如く消え失せ、わが骨は柴の如く枯れたり。³⁾ 我草の如く撃たれて、わが心萎れたり、実に⁴⁾ 我はわがパンを食することをだに忘れしなり。^六 わが呻吟の声によりて、わが骨はわが肉につけり。⁵⁾ 我は

第百一篇 ¹⁾ ここでは

ユデアの民全部をさす

²⁾ 一四・一五、一七、

二一、二九、各節によ

れば、バビロンの捕囚

末期の作。――樹俊の七

詩篇中の第五。――³⁾ 詩

三六・二〇。六七・三

⁴⁾ 食を取ることをさえ

忘れるほどであつた。

⁵⁾ 百一九・二〇参照。

一八 荒野のペリカンに等しくなれり、ねぐらにおる梟の如くなれ
 一七 我目覚めおりて、屋根にただ孤おる雀の如くなれり。
 一六 わが敵は終日我を誹り 我を讃えし者も我を仇として誓いぬ。
 一五 実に我はパンの如く灰を食し、⁷⁾ わが飲物に涙を混えぬ、
 一四 これ汝の御忿怒と御義憤とに由り、汝が我を持ち上げて投げ
 一三 つけ給える故なり。⁸⁾ 三 わが齡は髯の如く傾けり。我は草の如
 一二 く萎れたり。三されど主よ、汝は永遠に存え給い、汝の記憶は
 一一 千代万代に及ぶ。⁹⁾ 汝起ちてシオンを憐み給わん、そは、之を
 一〇 憐み給うべき時なるによりて、その期既に至れるによりてなり。
 九 実にその石は、汝の下僕等に喜ばれたり、彼等はその地⁹⁾を
 八 悼まん。¹⁰⁾ 一六 主よ、異邦人等は汝の御名を、地の諸々の王は汝
 七 の御栄光を畏れん、一七 そは主シオンを建て給いたるに由りて、
 六 また御栄光を佩びて現れ給うべきに由りてなり。¹¹⁾ 一八 彼は賤し

悩みのせいで、骨と皮ばかりに疥せ衰えた。
 6) 両鳥とも不潔で、荒野の辺に棲むのを好む。
 7) 「灰を食す」という云い方は、ただ心配と悲しみとのたとえ。これは灰の中に坐したり、灰を頭に振りかけたりする服喪の習慣に基づいている。
 8) 旋風が物を吹き飛ばし激しく地面に叩きつけて粉々に碎くように。
 9) イエルサレムの廢墟。
 10) バビロン捕囚中の切なる懷郷の念。
 11) 約一・一四。

一九 きの者の祈禱を顧み、その懇願を輕しめ給わざりき。一九 是等の事他代
 二〇 に書き伝えられよかし、さらば創造らるべき民¹²⁾ 主を讃め称えん。
 二一 〇そは彼その高き聖所より望み見給いたるに由りてなり。主が天よ
 二二 り地を見おろし給えるは、二三 足枵をはめられたる者の呻吟を聞き給
 二三 わんがため、殺されたる者¹³⁾ の子等を解放ち給わんがため、二三 彼等
 二四 のシオンにて主の御名を、イエルサレムにてその讚美を告げんため
 二五 なり。二三 〇そは主に事えんとて、民等や王等の相集まりて一つとなる
 二六 時にこそ。¹⁴⁾ 二四 彼その力もて途ゆく間に彼¹⁵⁾ に答えけらく、「わが
 二七 日数の少きを我に知らせ給え。¹⁶⁾ 二五 わが日の半ばにて我を召還し給
 二八 うなかれ。¹⁷⁾ 二六 汝の年齢は千代万代に亘るを。二六 主よ、¹⁸⁾ 二七 汝元始に地
 二九 を据え給いぬ。また諸天も汝の御手の作なり。二七 是等は亡びん、さ
 三〇 れど汝は存え給う。是等はみな衣服の如く古びん。汝是等を袍の如
 三一 く更え給わん、されば是等は変るべし。二八 されど汝は同一にて在す

12) この民は将来キリスト教に帰依するユデア人と異邦人とから成るはず。賽四三・二一参照。――13) バビロンへ拉致の際と捕囚の間に死んだ人々。――14) 一六節参照。――15) 天主。――16) 主が自分たちを全く滅ぼし給う思召しなのか、民が問う。――17) 新しい時代を迎えたいという憧憬からかく願う。――18) 来一・一〇――一二参照。

二九

汝の年は尽くることあらじ。汝の下僕等の子等は住まらん、¹⁹⁾その後胤は世々に存うべし。

¹⁹⁾天主はイスラエル人を父祖の地に返し、保護を加えて安らかに住まわせ給うであらう。

第 百 二 篇 (第百三篇)

天主の御憐憫の讚美

一 ダヴィドの自作。¹⁾

讚め奉れ、わが魂よ、主を、わが衷なるすべてのものよ、その聖なる御名を。二 わが魂よ、主を讚め奉れ、そのすべての御恩恵を忘るるなかれ。三 そは汝のあらゆる不義を赦し給う者、汝のあらゆる疾病を癒し給う者、四 汝の生命を滅亡より護り給う者、汝に仁慈と憐憫とを蒙らせ給う者、五 汝の欲望を佳物にて満たし給う者なり。汝の少壯は驚の如く新たになるべし。²⁾六 主は凡て不義を忍ぶ者に憐憫を垂れて審判を行

第百二篇 ¹⁾イスラエルが

天主から蒙つたいろいろな御恩に対するダヴィドの感謝の歌。現代の解釈者の内にはこれをダヴィドより後代の作とし、ただ思想だけダヴィド的であると思つている人もある。²⁾毎年鷲の羽毛が抜け変わることにより譬えてある。

七	給う。彼はその道をモイゼに、その御旨をイスラエルの子等に、知らせ給
九八	えり。主は憐憫に満ち情深く、氣長にして慈悲豊かに在す。3) 彼はいつま
一〇	でも怒り給うことなく、永遠に威嚇し給うことなからん。一〇彼は我等の罪に
二	従いて我等を扱い給わず、我等の不義に従いて我等に報い給わざりき。二そ
一二	は天の地より離れて高きが如く、彼を畏れ奉る人々に対して、御憐憫を強く
一三	し給いたればなり。二二彼は東の西より隔たれるほど、我等の不義を我等より
一四	遠ざけ給えり。4) 主がこれを畏れ奉る人々を憐み給えるは、父がその子を
一五	憐むが如し。一四それは彼我等の形成られしを知り、我等の塵なることを憶い給
一六	えばなり。5) 一五人はその齡草の如く、野の花の如く栄えん。6) 一六それは風その
一七	上を過ぎんか、忽ちあらずなりて、最早その在処だに知らざるべければなり。
一八	然れども主の御憐憫は、永遠より永遠に至るまで、彼を畏れ奉る者の上に
一九	あり、その義は子等の子等に及ぶ。一八その契約を守り、その御誠命を心に留
	めてこれを行わんとする者、即ち是なり。一九主はその玉座を天に設け給えり、

3) 出三四
 ・六。
 4) 全く赦
 し給う。
 5) 泥土で
 形作られ
 また塵に
 歸るべき
 定め。
 創二・七
 など参照
 6) 百七・
 一〇。詩
 一〇一・
 五、一二

二〇 その王権は万物を治むべし。⁷⁾ 主を讃め奉れ、その諸々の天使よ。⁸⁾ 汝等力強く、その御命令の声を聴きて、その御言を行
三 者よ。主を讃め奉れ、その万軍よ、汝等御旨を行うその下
三 僕等よ。主を讃め奉れ、その諸々の御作よ。その支配に属す
るすべての処において、わが魂よ、主を讃め奉れ。⁹⁾

第 百 三 篇 (第百四篇)

自然界の讃美

一 ダヴィドの自作。¹⁾
わが魂よ、主を讃め奉れ。²⁾ 主よ、わが天主よ、汝はいと偉大
にて在す。汝は讃美と美麗とを着、³⁾ 光を衣服の如く纏い、天
を革幕の如く張り、⁴⁾ その高き方を水もて覆い給う。汝は雲を
己が戦車となし、風の翼にのりて歩み、⁵⁾ 風を己が使者となし
燃え立つ火を己が下僕となし給う。汝は地をその基底の上に

7) 詩九五、九六両篇参照
8) すべての被造物に天主を讃美せよと呼びかける
9) 結尾でまた冒頭に帰る。

第百三篇 Dへブレオ語
本になし。——2) 天主の創造、全能、御慈愛の讃歌
これは聖書中の詩歌の最大傑作の一つと称せられて
いる。——3) 同様の思想
はあらゆる民族の神話にも見当たる。

六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八

据え給えり、そは世々に傾くことなからん。六 深淵は衣服の如くその覆布
たり、⁴⁾ 水山々の上を越して留まるべし。七 そは汝の叱咤⁵⁾に逃げ去り、
汝の雷霆の声に恐れん。八 山々は上り、谷々は汝がその為に定め給える処
に下る。⁶⁾ 九 汝はその越ゆべからざる境界を設け給えり、さればその地を覆
わんと帰り来ることなからん。⁷⁾ 一〇 汝は谷々に泉を湧出でしめ給う、水は
山々の間を流れ過ぐべし。一二 野の諸々の獣は飲み、野驢馬もその渴の時に
待望まん。一三 天空の鳥もその辺に住みて、岩間より声を発さん。一四 汝その
高き処より山々に灌漑ぎ給う、地は汝の御作の実に飽くべし。⁸⁾ 一五 汝家畜
のために草を、人々の用に蔬菜を、生えしめ給う。是は汝が地よりパンを
出し給わんため、一六 葡萄酒が人の心を愉しましめんため、彼が油もてその
面を晴れやかならしめんため、またパンが人の心を強からしめんためな
り。⁹⁾ 一七 野の樹木と、彼の植え給えるリバノンの杉とは飽き足るべし、^{一七} 雀
はそこに巢を造るべし。蒼鷺の家は是等に拔んでたるものなり。^{一〇} 一八 高き

4) 創一・九以下参照。
5) 雷鳴。
6) 水がひいて陸が露われると、山や谷がそういう風に見えてくる。
7) 百三八・一〇。――8) みわざとは雲。その実とは雨。
9) 自然界の最も卓れた産物
10) その巢は最も高い所にある、従つて他

一九 山々は鹿の、岩々は猓の、避難所なり。一九 彼は時の印に月を造り給え
 二〇 り、¹¹⁾日はその没むを知る。二〇 汝暗黒を設け給いたれば、そは夜となれり。
 二一 その時森の獣は皆徘徊い歩かん。二一 若き獅子は獲物を攫わんとして咆え、
 二二 天主より己が餌食を求む。二二 日出るや、是等は相集まれり、その臥処に臥
 二三 すなるべし。二三 人は出でて夕までその業に、その労働に従わん。¹²⁾ 主よ、
 二四 汝の御作はいかに偉大なるぞ。汝は御智慧もて万物を造り給えり。地は汝
 二五 の所有物にて充滿ちたり。二五 この大にして手を拡げたる海、そこには匍う
 二六 物数知れず、生物の小なるも大なるもあり。二六 船舶そこを通るべし。汝が
 二七 その中にて遊ばしめんとて形成り給えるかの龍¹³⁾もまた然り。二七 皆、汝が
 二八 宜き時に食物をこれに与え給うよう、汝に待望むなり。二八 彼等は汝のこれ
 二九 に賜う物を拾い集めん、汝が御手を開き給うや、皆佳物にて満たさるべ
 三〇 し。¹⁴⁾ されど汝御面を背向け給うならば、彼等狼狽え、汝その氣息を取
 去り給うならば、彼等殞れて旧の塵に帰らん。三〇 汝霊を遣し給わんか、

に拔んでてい
 る。——¹¹⁾旧約
 時代には教会
 曆も民間の曆
 も太陰曆であ
 った。——¹²⁾昼
 は人間の活動
 する時、夜は
 野獣の徘徊す
 る時。——¹³⁾へ
 ブレオ語本
 「わに」。一説
 では鯨。
¹⁴⁾「よき物に
 飽き足りぬ」
 とする方可。

三二 彼等創造られん。かくて汝地の面を新にし給うべし。三願わくは主
 三三 の御栄光世々にあらんことを。主その御作を悦び給わん。三彼地を
 三三 顧みて之を震わしめ給う。彼山々に触れ給えば、そは煙を吐く。15)
 三三 我生ける間は主に向かいて歌い、存うる限はわが天主に向かいて
 三四 讃歌を唱わん。16) 三願わくはわが申しごとの彼に悦ばれんことを。
 三五 また我は主によりて悦ばん。三五罪人と義しからぬ者とは、最早あら
 ざるよう地より失せ去れかし。17) わが魂よ、汝主を讃め奉れ。18)

15) 出一九・一八。二
 〇・一八。16) 本一四
 五・二。17) かれら
 は天主御創造の目的
 に背いているから。
 18) 聖会はこの詩篇を
 聖霊降臨の聖務の祈
 りに用いる、それは
 殊に三〇節のため。

第百四篇 (第百五篇)

御導きに対する感謝

一 アレルヤ。
 汝等主を頌え
 て²⁾その御名
 を呼び、異邦

第百四篇 1) ヘブレオ語本では前の詩篇に付いている。ウルガタではこの典礼上
 の慣用語(「主を讃めよ」との意)が、詩一〇四―一〇六。一一〇―一一八。一三
 四。一三五。一四五―一五〇の各篇の冒頭にある。2) 代上一六・八によれば、
 詩一〇四の最初の十五節は、ダヴィドが契約の櫃をシオン山の聖幕屋に奉遷した
 時、レヴィ人等が歌つたものである。

二 人等の間にその御作を告げよ。 二 彼に向かいて歌え、彼に向かいて讃歌を
 三 唱え、その諸々の奇蹟を談れ。 三 汝等その聖なる御名によりて誇れ、主を
 四 求むる者の心は愉しめかし。 四 汝等主を求めて、 三 強くなれ。常にその御
 五 面を求めよ。 五 そのなし給える奇蹟、その異象と、その御口の審判 4) とを
 六 心に記めよ。 六 アブラハムの後胤よ、汝等彼に仕え奉る者よ、ヤコブの子
 七 等よ、汝等彼に選ばれたる者よ。 七 彼こそは主我等の天主なれ。その御審
 八 判は全地に及ぶ。 八 彼はその契約を、その幾千代かけて命じ給いし言を、
 九 世々に亘りて御心に記め給えり。 九 そはアブラハムに対して取極め給いし
 一〇 ものにして、 5) イサークに対する御誓約なり。 6) かくてこれをヤコブの
 二 ために律法として、イスラエルのために永遠の契約として立て、 二 曰いけ
 三 らく、「我汝等が相伝の縄張たる、カナアンの地を汝に与えん」と。 三 彼
 四 等数少く、いと僅かにして、そこに客たり、 三 異邦より異邦へ、この国よ
 五 りかの民の許へと移り行きし時、 一四 彼何人にも彼等を害することを容し給

3) 地上の樂園を探し求め、それを得れば幸福になれると信じている人々に反対して。 4) 天主が御民イスラエルのために異邦人に下し給う天罰。
 5) 創二二・一六以下。
 6) 創二六・二以下。

一五 わず、彼等のために王等を懲戒め給いき。一五「汝等わが受膏者⁷⁾に触るる
 一六 なかれ、わが預言者等に悪しき事をなすなかれ」と。一六しかして地上に饑
 一七 饑を呼び下し⁸⁾。パンの扶持を悉く断ち給いぬ。一七彼は一人の人を彼等の
 一八 前に遣⁹⁾し給いき。ヨゼフが奴隸として売られしなり。一八彼等はその足を足
 一九 械によりて辱しめ、鐵その靈魂を貫きけり⁹⁾。一九そは彼の言¹⁰⁾の適中る時
 二〇 までなりき。主の御言彼を燃やしけるなり。二〇王は人を遣して之を解き、
 二 民の君¹¹⁾之を放ち、三之を立ててその家令となし、そのすべての所有物の
 三 宰となしぬ、三これ、彼をしてその諸侯を己の如く諭させ、その長老等に
 三三 智慧を教えしめんためなりき。三三やがてイスラエル、エジプトに入り、ヤ
 三四 コブ、カムの地に客となりぬ。三四さるほどに主はその民を大いに殖やし、
 三五 之をその敵よりも強からしめ給いき¹²⁾。三五彼はその民を憎ましめ、その下
 三六 僕等に対して欺瞞を行わしめんとして、彼等の心を変え給いぬ。三六彼はそ
 三七 の下僕モイゼ、その選¹³⁾び給いしアーロンを遣し給い、三七カムの地にてそ

7) 特に聖とせられたる者。
 8) ヨゼフの時
 代に。創四一・五三参照。
 9) ヨゼフは獄中で、命も危うくなるような虐待を受け、
 10) 多分た。――
 11) フアラオ。
 12) 出一・七以下。――
 13) 出三・一〇。四・二九。

の徴しるしと奇蹟ふしぎとの事を彼等かれらに行い給たまいぬ。¹⁴⁾ 二八 彼は闇やみを遣つかして暗くらくし給たま

いしが、人ひとはその御言みことばに抗さからざりき。¹⁵⁾ 二九 彼は彼等かれらの水みづを血ちに変かえて

その魚うおを殺ころし給たまいぬ。¹⁶⁾ 三〇 彼等かれらの国くには彼等かれらの王おうの奥室おくのまに至いたるまで、蛙かわず

を出いだしぬ。¹⁷⁾ 三一 彼語かれものい給たまいしに、蠅はえと蚊かと、彼等かれらのすべての境さかいに入り

来きたりぬ。¹⁸⁾ 三二 彼は彼等かれらに雨あめの代かわりとして雹ひょうを、その国くにに燃もゆる火ひを下くだ

し、¹⁹⁾ 三三 彼等かれらの葡萄樹ぶどうのきと無花果樹いちじくのきとを撃うち、その境界内さかいうちなる樹きを折おり

碎くだき給たまいき。²⁰⁾ 三四 彼語かれものい給たまいしに、蝗いなごと根切虫ねきりむしと数知かずしれず来きたり、²⁰⁾ 三五 彼

等らの国中くにじゅうの草くさを悉ことごとく喰くい尽つくし、またその地ちの作物さくもつを残のこらず喰くい尽つくしぬ。

三六 彼かれなおも彼等かれらの国くにの内うちなる初生ういごを、彼等かれらの劳苦らくくを反つくしたる初穂はつほを撃う

ち、²¹⁾ 三七 銀しろがね、金こがねを携たづなえしめて彼等かれらを連つれ出いだし給たまいけるが、その族やからの中

には弱よわき者ものあらざりき。²²⁾ 三八 エジプトは彼等かれらが出いでしを喜よろこびぬ、そは

彼等かれらを恐おそる念ねんこれを襲おそいたればなり。²³⁾ 三九 彼は彼等かれらの覆布おおいとして雲くもを

夜よるは彼等かれらを照てらさんために火ひを、展のべ給たまいき。²³⁾ 四〇 彼等かれら請求こいもとめしに、

14) 出七・一〇以下

15) ヘブレオ語本や

七十人訳は「逆ら

いたりき」。―出一

〇・二一以下。

16) 出七・二〇。

17) 出八・六。

18) 出八・一二以下

19) 出九・二四。

20) 出一〇・一二以

下。―21) 出一二・

二九。―22) 出一二

・三五以下。

23) 出一三・二一以

下。詩七七・一四

哥前一〇・一。

四一 鶉来り、また彼天のパンもて彼等を飽かしめ給いぬ。²⁴⁾ 四二 彼岩を割き
 給いしに、水送り出で、河川となりて乾燥地を流れゆきたり。²⁵⁾
 四三 これ、彼がその下僕アブラハムに賜いし聖なる御言を御心に記め給
 いしに由るなり。²⁶⁾ 四四 彼かく導きて、その民を雀躍しつつ、その選
 給いし者を悦びつつ、出でしめ給いき。²⁷⁾ 四五 しかして彼等に異邦人等の
 地を賜いしかば、彼等民等の労苦²⁷⁾を己が有としたり、^{四五}そは彼等が
 主の義とし給う所を守り、その法に遵わんためなりき。

24) 出一六・一三以下。――25) 民二〇・八以下。――26) 創一七・七。――27) カナアン人の建てた町々、その植えた葡萄樹その他の樹木その種を播いた畑

第百五篇 (第百六篇)

忘恩の民に対する主の御憐憫

一 アレルヤ。¹⁾
 主を頌えよ、彼慈しみ深く在せば、その御憐憫は世々に
 存すれば。²⁾ 二 誰か主の御権能の業を語るを得んや。誰か
 その讃むべきことを悉く云い聞かすを得んや。³⁾ 三 至福な

第百五篇 1) 第二のアレルヤ詩篇。
 この詩は前のと甚だ似ていて、やはリイスラエルの歴史の概要を述べている。――2) 尤一三・二一。
 3) 集四三・三五。

四 かな、御規定を守り、いつの時にも義を行う者。主よ、汝の民への御好意
 五 によりて、⁴⁾ 我等を憶え、汝の御救拯もて我を訪れ給え。⁵⁾ さらば我等汝が選
 六 び給いし者の幸を見、汝の国人の愉樂を樂しむに至らん、これ汝が汝の嗣産と
 七 共に讃えられ給わんがためなり。⁶⁾ 我等は我等の父祖と等しく、罪を犯し、不
 八 正をなし、不義を行えり。⁷⁾ 我等の父祖はエジプトにて汝の奇蹟を悟らず、汝
 九 の御憐憫の豊かなるを心に記めず、海、即ち紅海に上りゆきて、御忿怒を招き
 一〇 ぬ。⁸⁾ 然るに彼はその御力を知らしめんとて、その御名のために彼等を救い給
 一 一 き。⁹⁾ 即ち紅海を叱咤し給いしに、そは乾きたれば、彼等を導きて荒野の如
 一 二 く深淵を通らしめ、¹⁰⁾ 憎む者の手より彼等を救い、敵の手より彼等を贖い給
 一 三 いぬ。¹¹⁾ 二時に水彼等を悩ます者共を覆いしかば、その一人だに残らざりき。¹²⁾
 一 四 是において彼等その御言を信じ、その讚美を歌いぬ。¹³⁾ 彼等は忽ちにしてそ
 一 五 の御業を忘れ、その御攝理を待たず、¹⁴⁾ 荒野にて欲みに欲み、水なき処にて天
 主を試み奉りき。¹⁵⁾ 彼乃ち彼等にその請求めしものを賜いしかど、その靈魂

4) 汝が
 選民イ
 スラエ
 ルにな
 し給う
 た、御
 摂理に
 よつて
 5) 出
 四・二
 一。
 6) 出
 四・二
 七。
 7) 出
 七・二。
 七・二。

二八	二七	二六	二五	二四	二三	二二	二一	一九	一八	一七	一六
異邦人等の間に投げ入れ、之を国々に散らさんとし給いぬ。二八 彼等は	等に向かい御手を挙げ、以て彼等を荒野にて打伏せ、二七 その後胤を	二五 その幕屋にて眩き、主の御声に聴き従わざりき。二六 彼是において彼	二四 曰いしならんが、二四 彼等は望ましき地を無視して、御言を信ぜず、	て、破隙 ¹³⁾ の上にてその御前に立たざりしならば、彼等を滅ぼさんと	給いしモイゼが、その彼等を亡ぼし給わざるよう、御忿怒を転さんと	ぬ、そはエジプトにて偉大なる事を、二三 カム ¹²⁾ の地にて奇蹟を、紅海	にて懼るべき事を、なし給いし者なるを。二三 されば彼、もしその選	り。一九 彼等はホレブにて壇を造り、彫める像を拝み、二〇 かくて己が	覆い、 ⁹⁾ 一八 なお火その徒党の中に燃え出て、焰罪人等を焼き尽しけ	ロンを、怒らせければ、一七 地開けてダタンを呑み、アビロンの徒党を	に厭心を起し給いぬ。 ⁸⁾ 一六 彼等陣中にてモイゼを、主の聖なる者ア

8) 民一一・三一。
 9) 民一六・三二。
 10) 出三二・四。
 11) イスラエルの光
 栄にてまします天
 主。―12) エジプト。
 13) 敵の侵入を防ご
 うと、突破口に立
 つ兵士のよう、
 罪によつて天主と
 イスラエル人との
 間に間隙のできた
 所に立つて取りな
 した。

なおもべールフェゴル¹⁴⁾に帰依して、死者¹⁵⁾の供物を食えり。

かくその数々の悪計もて彼を怒らせ奉りければ、彼等の間に滅

亡増したりき。^{三〇}時にフィネエス起ちて宥め奉りぬ。是において

災禍やみけり。¹⁶⁾ ^{三一}そは千代万代に亘り永久に至るまで、義とし

て彼に歸せられたり。^{三二} ^{三三}彼等また抗論の水¹⁷⁾の辺にて、彼を怒ら

せ奉りしかば、彼等ゆえにモイゼも煩わされぬ。^{三三} ^{三四}そは彼等彼の

氣に逆らいしにより、彼その唇もて誤りたればなり。^{三四} ^{三五}彼等は主

が己等に曰いし如く、異邦人等を滅ぼさずして、^{三五} ^{三六}異邦人等の間

に混り、その所行にならい。^{三六} ^{三七}その彫像に事えけるが、そは彼等

にとりて蹉跌となりぬ。^{三七} ^{三八}しかして彼等は己が息子娘等を悪鬼¹⁸⁾

に献げたり。^{三八} ^{三九}かくて彼等は罪なき血を、カナアンの彫像に献げ

しその息子娘等の血を、流しぬ。よりて国は血に穢され、^{三九} ^{四〇}彼等

の所行に汚され、彼等は己が悪計のままに姦淫¹⁹⁾を行いけり。

14) モアブの地にあるフ

オゴルの山で礼拝され

たバールの神。—15) 活

ける天主に対照して、

生命のない偶像の神々

16) 民二五・一〇—一三

17) 民二〇・一一以下。

民が信ぜずしてモイゼ

を逡巡させた時、彼は

その疑惑ゆえに約束の

地に入るを許されなか

つた。—18) モロクの神

19) 偶像礼拝。天主とイ

スラエルとの関係が夫

婦に譬えてある。

四一〇

四二

四三

四四

四五

四六

四七

四八

四〇。されば主はその民に対して怒り猛り給い、その嗣産を厭いて、
 四一。彼等を異邦人等の手に付し給いしかば、
 四二。彼等を憎む者共これを支配し、
 四三。敵これを悩まし、
 四四。彼等その手の下に屈服したり。
 四五。彼は幾度も彼等を救い給いき。
 四六。されど彼等はその謀る所によりてこれに逆らい奉りしかば、
 四七。己が不義に由りて打ち伏せられぬ。
 四八。しかも彼は彼等の悩める時に顧み、その祈禱を聴き、
 四九。その御契約を思い出で、
 五〇。御憐憫の豊かなるに由りて悔い給い、
 五一。20) 彼等をして、これを捕えたるすべての者より、
 五二。憐憫を受けしめ給えり。
 五三。21) 主よ、我等の天主よ、
 五四。我等を救いて、
 五五。異邦人等の間より我等を集め給え、
 五六。これ、我等が汝の聖なる御名を頌えて汝の讚美を光榮とせんためなり。
 五七。主イスラエルの天主は、
 五八。世々より世々に至るまで、
 五九。祝せられさせ給え。
 六〇。すべての民は、
 六一。然あれかし、
 六二。然あれかし！
 六三。と云うべし。
 六四。22)

20) 四〇節以下の罰を与えた

ことを悔い給

うた。――21) 申

三〇・三。

22) 詩篇第四部の

結尾をなす

詩八八の註二

七参照。

第百六篇 (第百七篇)

試みより救われし感謝

一 アレルヤ。¹⁾

主を頌え奉れ、彼慈しみ深く在せば、その御憐憫は世々に亘れば。²⁾

主に贖われたる者³⁾は然云うべし。主これを敵の手より贖い、これを

集むるに国々より、^三日の出る所没る所より、北より、海よりし給え

り。^四彼等は荒野を、水なき処を彷徨い、住むべき市に至る道を見出

さざりき。^五彼等飢え且渴きて、その衷に靈魂衰えにけり。^六彼等乃ち

悩みて主に叫び奉りしに、彼これをその困窮より救い出し、^七彼等が

住むべき市に往くことを得るよう、これを直き途に導き給いぬ。^八彼

等主に、その御憐憫を、またその人の子等に対する奇しき御業を、感

謝せよかし。^九そは彼、生氣なき靈魂を飽かしめ、飢えたる靈魂に善

き物を満たし給いたればなり。^{一〇}彼等が暗闇と死の蔭⁴⁾との裡に坐せ

第百六篇 1) 第三

のアレルヤ詩篇。

大方の解釈者の説

では、バビロンの

捕囚が終つて少時

後に作られたもの

であると。— 2) 詩

一〇五・一参照。

3) バビロンの軛を

解き放されてから

少し後のイスラエ

ル人。— 4) 墓穴の

ように暗い牢獄。

二 者、窮乏と鉄と⁵⁾に縛しめられたる者たりしは、二 天主の御言に叛き、至高
 三 者の御旨を攪亂したりしに由るなり。二三 されば彼等の心は勞苦によりて挫けた
 四 里。彼等弱りしが、これを助くる者なかりき。二三 ここにおいて彼等悩みて主に
 五 叫び奉りしに、彼これをその困窮より遁れしめ、一四 暗闇と死の蔭との中よりこ
 六 れを導き出し、その絆を断ち給いぬ。一五 彼等主に、その御憐憫を、またその人
 七 の子等に対する奇しき御業を、感謝せよかし。一六 そは彼、青銅の門を毀ち、鉄
 八 の門⁶⁾を碎き給いたればなり。一七 彼は彼等をその不義の道より取り去り給い
 九 ぬ、蓋し彼は己が不義ゆえに拉がれしなり。一八 その靈魂はあらゆる食物を厭い
 彼等死の門にまでも近づきけり。一九 彼等乃ち悩みて主に叫び奉りしに、彼これ
 二〇 をその困窮より遁れしめ、二〇 御言を遣して、彼等を癒し、これをその滅亡より
 二一 救い出し給いぬ。二二 彼等主に、その御憐憫を、またその人の子等に対する奇し
 二三 き御業を、感謝せよかし。二三 しかして讚美の犠牲を献げ、雀躍してその御業を
 二四 宣べ伝えよかし。二三 船にて海に下り、広き水の上にて仕事をなす者等、二四 彼等

5) 詩一
 〇四・
 一八参
 照。
 6) 牢獄。

二五 は主の御業と、深淵⁷⁾におけるその奇蹟とを見たり。二五 彼語い給えば、疾風起
 二六 り、その波濤高くあがりぬ。二六 そは上るや天に至り、下るや奈落の底に至り、
 二七 人々の魂災禍によりて消えにけり。二七 彼等醉漢の如く、踉蹌い蹢躅き、その智
 二八 慧も悉く吞まれたりき。二八 彼等乃ち悩みて主に叫び奉りしに、彼これをその困
 二九 窮より引き出し 二九 疾風を鎮めて微風となし給いしかば、その波も静まれり。
 三〇 よりて彼等その風ぎたるを悦びけるが、主これをその望みし港に導き給い
 三一 ぬ。三一 彼等主に、その御憐憫を、またその人の子等に対する奇しき御業を、感
 三二 謝せよかし。8) 三三 しかして民の集える所にて彼を頌え、長老等の坐せる所にて
 三三 これを讃めよかし。三三 彼は河を荒野に、水源を乾ける地に変え、三四 穰豊かなる
 三五 地を、そこに住める民の意根悪しきに由りて、塩原⁹⁾に変え給えり。三五 彼は荒
 三六 の野を湖水に、水なき地を水源に変え、三六 飢えたる者をそこに置き給いたれば、彼
 三七 等住むべき市を建て、三七 畑に種蒔き、葡萄畑に植付して、生りたる実を收穫れ
 三八 けり。三八 彼また彼等を祝し給いければ、彼等甚だ多くなりぬ。なお彼等の家畜

7) 海の。
 8) 四回、
 即ち、
 八、一
 五、二
 一、三
 一の各
 節に反
 復され
 ている
 9) ソド
 マとゴ
 モラと
 の滅亡
 の時の
 ように

三九	をも減らし給わざりき。三九されど彼等少くなり、不運なる患
四〇	難と苦痛とに悩まされたり。四〇輕侮は諸侯に注がれ、彼こ
四一	れをして道なき所を、道によらずして彷徨わしめ給い、四一貧
四二	しき者を窮乏より助け出して、その家族を羊の如くならしめ
四三	給いぬ。四二直き者は見て楽しまん、不義は全くその口をふ
四三	さがん。四三賢くして、是等の事を守り、且主の御憐憫を悟
	らんとする者は誰ぞや。四三

第百七篇 (第百八篇)

イスラエルに対する天主の御祐助

一	一 ダヴィド自作の頌歌
二	二 わが心は定まれり、天主よ、わが心は定まれり、我わが
三	三 光榮によりて歌い奏で奉らん。三 起きよ、わが光榮よ、起
四	四 きよ、堅琴と小琴よ、我黎明に起き出ん。四 主よ、我民等の

10) 善人悪人に対する賞罰がそれぞれ交互に述べてある
 11) 急速に殖えるたとえ。
 12) 不敬な者は驚きと怖れとで言葉も出ぬであろう。
 百二二・一九。――13) ヘブレオ語本ではすすめであるがウルガタの疑問文もそれと同意。

第百七篇1)二―六節は、詩五六・八一―一二。七一―四節は、詩五九・七一―一四に相当。但し若干小さい相違点がある。――2)魂の底から。

五 中^{なか}にて汝^{なんじ}を頌^{たた}え、国人^{くにびとら}等^らの中^{なか}にて汝^{なんじ}に奏^{かな}で謳^{うた}わん。五 そは汝^{なんじ}の御憐憫^{おんあわれみ}は大^{おお}いにして天^{てん}を
 六 凌^{しの}ぎ、汝^{なんじ}の真^ま実^{じつ}は雲^{くも}にまで及^{およ}べばなり。六 天主^{かみ}よ、汝^{なんじ}は諸天^{しよてん}の上^{うへ}に、汝^{なんじ}の御榮光^{みさかえ}は全地^{ぜんち}
 七 の上^{うへ}に、高^{たか}く現^{あら}われよかし、七 そは汝^{なんじ}の愛^めで給^{たま}う人々^{ひとびと}の解放^{とくはな}たるを得^えんためなり。汝^{なんじ}
 八 の御右手^{おんみぎて}もて救拯^{すくい}を施^{ほどこ}し、我^{われ}に応^{こた}え給^{たま}え。八 天主^{かみ}その聖所^{せいじよ}にて曰^{のたま}えり、「我喜^{われよろこ}び躍^{おど}り、シ
 九 ケムを分^{わか}ち、幕屋^{まくや}の谷^{たに}を測^{はか}量^からん。九 ガラードはわが有^{もの}なり、マナツセはわが有^{もの}なり、
 一〇 またエフライムはわが頭^{こころ}の膏^{かぶと}、ユダはわが王^{おう}、一〇 モアブはわが希望^{のぞみ}の盟^{たらい}ぞ。我^{われ}イドウメ
 二 アにはわが脊^{くろ}を伸^のべん、異邦人^{ことくにびとら}等^らはわが友^{とも}となれり。」と。二 堅備^{かため}ある市^{まち}に我^{われ}を導^{みちび}くべ
 一 二 きは誰^{たれ}ぞや。イドウメアにまでも我^{われ}を導^{みちび}くべきは誰^{たれ}ぞや。一 二 天主^{かみ}よ、我^{われ}等を棄^すて給^{たま}える
 一 三 汝^{なんじ}にあらずや、天主^{かみ}よ、我^{われ}等の軍勢^{ぐんせい}と共^{とも}に、出征^{いでゆ}かんとはし給^{たま}わざるか。一 三 我^{われ}等を患難^{なやみ}
 一 四 より助^{たす}け出^{いだ}し給^{たま}え、人^{ひと}の救援^{すくい}は空^{むな}しければなり。一 四 天主^{かみ}によりて、我^{われ}等雄々^{おおお}しき振舞^{ふるまひ}を
 なさん、さらば彼^{かれ}、我^{われ}等の敵^{てき}を無^むに帰^きせしめ給^{たま}わん。

第百八篇 (第百九篇)

不義なる敵と不信なる輩に対して

一 終まで。¹⁾ ダヴィドの詩。²⁾
 二 天主よ、わが讚美に黙し給うなかれ。³⁾ そは罪人の口と欺瞞多き人の口と、我に向かいて開きたればなり。³⁾ 彼等は欺瞞多き舌もて我に敵い語り、憎悪の語もて我を囲み、故なく我を攻めたり。⁴⁾ 彼等は我を愛する代りに、⁴⁾ 我を誹りき、されど我は祈りぬ。⁵⁾ 彼等は善に悪もて、わが愛に憎悪もて、我に報いたり。⁶⁾ 彼等の上に罪人を立て給え、悪魔⁶⁾ その右に立てよかし。⁷⁾ 願わくは彼裁かるる時に、罪せられて出んことを、またその祈禱罪とならんことを。⁷⁾ 八 その日数は少かれ、その職は他人之を得よか

第百八篇 1) 詩篇第四第五の註一参照。
 2) 多分サウルに追われていた頃の作。
 いわゆる呪いの詩篇の一つ。 3) 敵に誹られ、ダヴィドは己の潔白を証し給わんことを主にお願いする。 4) わが愛に報いるに愛を以てせず。 5) 多くの敵の中の一人。多分ドエグ。詩五一・二参照。 6) 仇する者という広い意味で。ヘブレオ語本「訴訟人」。
 7) 真の痛悔がなければ、「祈り」は「罪」になる。なぜならそれは「祈り」でなく、身の程をわきまえず天主の御憐みを頼み過ごすことになるから。

一〇九 し。八) 九 その子等は孤兒に、その妻は寡婦になれ。一〇 その子等は所定めず流浪
 いて物乞し、その住居より逐い出されよ。二 そのすべての所有物は金貨之を
 窺い、その勞して得たる所は他人之を奪い取れ。二三 誰も彼を助くる者なく、
 また彼の孤兒等を憐む者もなかれかし。一三 彼の後裔は断絶し、彼の名は一
 代にして抹し去られよ。一四 彼の父祖の不義は主の御眼前に思い出られよ、彼
 の母の罪は抹さるることなかれ。一五 彼等は常に主の御前にあれ、願わくは彼
 等の記憶地より滅びんことを。一六 そは彼憐憫を施すことを思わず、一七 却つて
 よるべなき人や乞食や心の傷める者を殺さんとして迫害したればなり。一八 ま
 た彼は呪咀を好みぬ、さればそは彼に來らん。彼は祝福を欲せざりき、され
 ばそは彼より遠ざからん。彼は衣服の如く呪咀を着たり、さればそは水の如
 く彼の衷に。九) 油の如く彼の骨に入りぬ。一九 そは彼にとりて、身を覆う衣服
 の如く、また常に締むる帶の如くなれ。二〇 これこそ主の御前にて我を誹る者
 等、及びわが靈魂に向いて惡しき事を云う者等の報いなれ。二一 されど主よ、

八) この文のユダへの適用については徒一・二〇参照。
 九) この水の譬えは暗に、民五・一一以下にある呪いの水をさす

主よ、汝は御名のために我を扱い給え、そは汝の御憐憫は妙なればなり。我
 を救い給え、^{三三}そは我乏しく貧しくして、わが心わが衷にて悩みおればな
 り。^{三三}我は傾く時の日影の如く消え失せ、蝗¹⁰⁾の如く打ち払わる。^{三四}わが膝
 は断食によりて弱り、わが肉は油¹¹⁾のために変り果てたり。^{三五}我は彼等に誹
 らるる者となれり、彼等は我を見て、その頭を振りぬ。^{三六}主よ、わが天主よ、
 我を助け給え、汝の御憐憫に従いて我を救い給え。^{三七}しかしてこれが汝の御
 手なること、また主よ、汝がそをなし給えることを、彼等に知らしめ給え。
^{三八}彼等は呪わん、されど汝は祝し給わん。我に逆い起つ者等は恥辱を得よ、
^{二九}されど汝の下僕は楽しむべし。^{二九}我を誹る者等は恥辱を着よかし、^{三〇}二重¹²⁾の
^{三〇}袍の如く羞恥を纏えかし。^{三〇}我はわが口もて大いに主を頌え、衆くの人の只
^{三一}中にてこれを讃め奉らん、^{三三}そは彼、わが靈魂を迫害者より救わんとて、
 貧しき者の右に、¹³⁾立ち給いたればなり。

10) 人々は
 この田畑
 の害虫を
 駆除する
 11) 油が不
 足なため
 に。
 12) 体を二
 重に包む
 マント。
 13) かれら
 の辯護者
 として。

第百九篇

(第百十篇)

メシアの神性

一 ダヴィドの詩。¹⁾

主²⁾ わが主³⁾ に曰いけらく、「汝^{なんじ}、わ

が右^{みぎ}に坐せよ、わが汝の敵^{なんじ}を汝の足台^{あしだい}

となすまで。⁴⁾」主^{しゅ}は汝^{なんじ}の徳能^{ちから}の笏^{しやく}を

シオン⁵⁾より差し出し給わん、「汝^{なんじ}の

敵^{てき}の只中^{ただなか}に君臨^{くんりん}せよかし。」^三汝^{なんじ}の徳能^{ちから}

ある日^ひ⁶⁾には、主権聖者^{しゅけんひじり}等の光輝^{かがやき}に包^{つつ}

まれて、汝^{なんじ}の許^{もと}にあり。我^{われ}、曉星^{あけのほし}の前^{まえ}

に、汝^{なんじ}を胎^{たい}より生^うみぬ。⁷⁾主^{しゅ}誓^{ちか}い給^{たま}

えり、悔^くい給^{たま}うことあらじ。「汝^{なんじ}は永^{とこ}

久^{しえ}に、メルキセデク^{メルキセデク}の先例^{のり}に従^{したが}う⁸⁾司^し

第百九篇 1) 作者はダヴィド。これに対しては、徒二

・三四に使徒聖ペトロの証言があり、マテオ二二・四三

―四四に聖主御自身の御証言がある。―2) ヤーヴェ、

すなわち天主。―3) ダヴィドの主。これは一節後半、

三、四、七、各節からわかるように、単なる人間であ

り得ない。それでこの語は旧約で約束されたメシアを

意味する。―4) 東方諸国の王たちには、敵に勝つとそ

の首を足で踏みつける習慣があつた。―5) 天主の御国

で王たる神人の在すべき中心。―6) キリストが諸天使

諸聖人に囲まれて行い給う審判の日。―7) 既に詩二・

七にあつた言葉。この方がかくも偉大な権能を有し給

う理由は、単なる人間でなく神人であるから。―8) キ

リストの司祭職がメルキセデクのと似ていることは、

聖パウロが来七・四―一〇に述べている。

五 祭^{さい}なり⁹⁾と。主^{しゅ}は汝^{なんじ}の右^{みぎ}に
 六 在^{いま}して、¹⁰⁾その御震怒^{みいかり}の日^ひに¹¹⁾
 王^{おう}等を打破^{うちやぶ}り給^{たま}わん。彼^{かれ}は列^{くに}
 七 国^{くに}の民^{たみ}の中^{うち}にて裁^さき、破滅^{はつめつ}を満^み
 たし、多^{おほ}くの者^{もの}の頭^{こうべ}を地^ちに踏^ふみ
 碎^{くだ}き給^{たま}わん。彼^{かれ}は路^{みち}にて流^{ながれ}よ
 り飲^のみ、¹²⁾これに由^よりて頭^{こうべ}を抬^{もた}
 げ給^{たま}わん。

9) ダヴィドには犠牲を行う司祭の権はない。故にこの「汝」は彼をさすのではない。—10) 天主はキリストとその權威を分ち給うため、これを御右手に置き給うた。今は共同の敵に勝つよう助け給うため、おん自らキリストの右に坐し給う。
 11) 三節に汝のちからある日とあるのと同じ日。—12) 御軍の先頭に立ち給うキリストには、渴を癒すため踏み留まる休養の暇すらない。それ故天主は彼を勝利者として、御自分の右に挙げ給うたのである。

第百十篇

(第百十一篇)

主の奇しき御業をほめ奉らん

一 アレルヤ。¹⁾
 主^{しゅ}よ、我^{われ}は義人^{ぎじん}の団^{だん}、²⁾及^{およ}び集^{つどい}会^{かい}の中^{うち}にて、わが心^{こころ}を
 二 尽^{つく}し、汝^{なんじ}を頌^{たた}え奉^{まつ}らん。主^{しゅ}の御意^{みい}はそ^{その}の御意^{みい}のまま

第百十篇¹⁾ここからまたアレルヤの詩篇が九つ続く。詩一一〇は、冒頭の各語が二十二のアルファベット文字で始まる二十二行から成っている

二 至福なるかな、主を畏れ、その御誠命をいたく欲む人。 三 その後胤
 三 は地にて権力あらん、直き者の族は祝せられん。 四 その家には栄華
 四 と富とあり。その義は世々の世々まで存す。 五 直き者には、暗闇の
 五 中に光さし出でたり、そは情深く、憐憫に満ち、且義しく在す者な
 六 り。 七 憐みて貸す人は嘉すべきかな、²⁾ かかる人は己が云分を審判
 六 の時に通すべし。 七 そは彼、永久に揺ぐことなかるべければなり。
 七 義人は永久の記憶に残らん。彼は悪しきことを聞きても怖れざる
 八 べし。その心は主に依頼む覚悟あり、 八 その心は確く立ちたり、彼
 九 その敵を見下すまで、揺がざるべし。 九 彼は貧しき者に分ち与えた
 一〇 り、その義は世々の世々まで存し、その角³⁾は栄光の裡に挙げらる
 一〇 べし。⁴⁾ 一〇 罪人は見て憤らん、齒咬して失せ行かん、罪人の欲望は
 亡び去るべし。

作者は多分、詩一一
 ○のと同一。――²⁾愛
 のわざの報い。九節
 もそうである。
³⁾権勢を表わすため
 よく用いられる譬え
⁴⁾聖パウロは哥後九
 ・九で、初代キリス
 ト教徒に惜しみなく
 貧者に施すことをす
 すめるため、このく
 だりを引用している

第百十二篇 (第百十三篇)

主の御名は祝せられかし

一 アレルヤ。¹⁾

下僕等よ、²⁾ 主を讃め奉れ、主の御名を讃め奉れ。

主の御名は祝せられかし、今より世々に至るまで。

三日の出るよりその没るまで、主の御名は讃むべきか

な。⁴⁾ 主は諸々の国人の上に高く在し、その御栄光は

諸天の上にあり。³⁾ 誰か主我等の天主の如き者あり

や、彼は高処に住い、⁶⁾ 天に地にある卑きものを顧み

て、⁷⁾ 乏しき者を地より抱きあげ、貧しき者を糞土よ

り起し給う。⁴⁾ ハそはこれを諸侯と共に、御民の諸侯と

共に、位せしめんとてなり。⁹⁾ 彼は石婦を、子等の喜

ばしき母として、家に住まわせ給う。⁵⁾

第百十二篇 1) この詩篇は次の五つ

と共に、イスラエルの三大祭用「ハレル」すなわち讚美歌である。

2) ヴルガタが、わらべの意もある

pueri と訳したので、本篇は小兒の

葬儀に用いられる。――3) 馬一・一一

4) マゲニフィカトの聖母のお言葉を

思い合わせよ。――5) 作者はサムエル

の母アンナ(母上二・五)のことを

考えているのであろう。イスラエル

の女は、子供を産むことにより、始

めて家の全権を得た。

第百十三篇

(第百十四篇、第百十五篇)

主に栄えあれ

一 アレルヤ。¹⁾
 イスラエルがエジプトより、ヤコブの家が蛮民²⁾の許より出し時³⁾、ニユデアは主の聖所、イスラエルはその領地となりぬ。⁴⁾ 三海⁵⁾は見て逃げ去り、ヨルダンは後に退き、^四山は牡羊の如く、丘は小羊の如く、躍れり。⁶⁾ 五そもそも汝に何事のあればとて、海よ、汝は逃げ去りしぞヨルダンよ、後に退きしぞ。^六 山よ、汝牡羊の如く、丘よ、汝小羊の如く、躍りしぞ。^七 地は主の御面前にて、ヤコブの天主の御面前にて、震動きたり。^八 彼こそ岩を湖水に、断崖を泉水に変え給いしなれ。⁷⁾
 九 (一) 我等にあらず、主よ、我等にあらずして、ただ汝

第百十三篇 1) この詩篇はヘブレオ語本ではハツキリ二篇に分れ、前のは一―八節、後のは残りの十八節を含む。―2) ラテン語 *barbari* は、第一義「野蛮な」。ここは「えびす」即ち外国の民の意。ギリシャ人やローマ人は外国人をすべて「えびす」と称した。―3) 出一三・三。―4) 祭政一致のイスラエルでは、天主が王であつた。⁵⁾ 紅海。―6) 出一九・一八に、天主が十誠を授け給うた時、シナイ山が震動したとある。⁷⁾ 出一七・六。―8) ヘブレオ語本ではここか

一〇 の御名に頌榮を歸し給え、一〇(三)そは汝の憐憫と汝の信実とのゆえにして、異邦
 二 人等が、「彼等の天主何処にかある」と云うことのなからんためなり。9) 一二(三)さ
 一三 れど我等の天主は天に在す、その欲し給う所は何にても悉くなし給えり。
 一四 一三(四)異邦人等の偶像は、白銀や黄金にして、人の手の作なり。10) 一三(五)口あれど
 一五 も語わず、眼あれども見ず。11) 一四(六)耳あれども聞かず、鼻あれども嗅がず。
 一六 一五(七)手あれども探らず、足あれども歩まず。またその咽喉より叫ばず。一六(八)こ
 一七 れを作る者は、これに似よかし、これに依り頼む者も亦然れ。一七(九)イスラエル
 一八 の家は主に希望を置けり、彼は彼等の援助者にして、その保護者にぞ在す。
 一九 一八(一〇)アーロンの家は主に希望を置けり、彼は彼等の援助者にして、その保護
 二〇 者にぞ在す。一九(一一)主を畏るる者は、主に希望を置けり、彼は彼等の援助者に
 二一 して、その保護者にぞ在す。二〇(一二)主は我等を御心に留め、我等を祝し給えり。
 二二 イスラエルの家を祝し給えり、アーロンの家を祝し給えり。二二(一三)主を畏るる
 二三 者は、小なるをも大なると共に之を祝し給えり。二三(一四)願わくは主汝等の上に

第百
 十五篇
 9) 上記
 の問に
 対する
 答。
 10) 本一
 三四・
 一五。
 11) 申一
 四・二
 八。智
 一五・
 一五。

二六 二五 二四 二三
 恵みを増加え給わんことを、汝等の上にも、汝等の子等の上にも。
 二三(一五) 天地を造り給いし主より、汝等に祝福あれかし。 二四(一六) 天の天は主
 の有なり、されど地は彼これを人の子等に与え給えり。 二五(一七) 死せる者は、
 主よ、汝を讃め奉ることなからん、¹²⁾ 冥府に降る者は誰も然せざらん。¹³⁾
 二六(一八) されど生ける我等は主を祝し奉る、今のこの時より世々に至るま
 で。

12) この民を死
 なせ給うなら
 イスラエルに
 讚美は絶える
 であらう。
 13) 巴二・一七

第百十四篇 (第百十六篇上)

死の苦しみより救われし人の感謝

一 アレルヤ。¹⁾
 主わが祈祷の声に応え給うべければ、我愛し奉れり。 二 彼は彼我に御耳を
 傾け給いたればなり。 よりて我わが日の限り呼び頼み奉らん。 三 死の苦痛
 我を囲み、冥府の危険我に臨めり。 我患難と苦痛とに遇いて、 四 主の御名
 を呼び奉りぬ、「主よ、わが靈魂を救い出し給え」と。 五 主は情深くして

第百十四篇

1) ヘブレオ語
 本では、この
 詩篇と次のと
 を合わせて一
 篇としてある

六 義しく、我等の天主は憐み給う。主は小さき者を
 守り給う、我挫けたりしに、彼我を救い給いぬ。
 七 回歸れ、わが魂よ、汝の安息に、そは主汝に善を
 なし給いたればなり。八 即ち彼わが魂を死より、わ
 が眼を涙より、わが足を滑り倒るるより、助け出し
 給えるなり。九 我は生ける者の国にありて、主に
 嘉せられん。

第百十五篇 (第百十六篇)

感謝の歌

二 一(一〇)アレルヤ。¹⁾
 我信じ奉れり、²⁾ 故に我語れり、されど
 我いたく挫けたり。³⁾ 三(二) わが力に餘れ
 る時、我云いぬ、「人は皆、欺く者なり」

作者および作詩の動機は不明。ユデアのある云伝えではエゼキアを本篇の作者としている。四段に分かれ、最初の二段には、作者がいかなる死の危険から遁れたかが述べてあり(一―四、五―九節)、あとの二段はその救い手なる天主への感謝である(一〇―一四、一五―一九節)。――2)この世において

第百十五篇 1)ヘブレオ語本になし。――2)詩一一四が Dilexi「我愛し奉れり」で始まるに対し、本篇は Credidi「我信じ奉れり」で始まる。――3)作者は大なる患難に遇い、ひたすら天主にのみすが(一節前半)。人の助けは役に立たぬと考えたの

三	と。4) 三(一二) 我 ^{われ} その我 ^{われ} に賜 ^{たま} える一切 ^{すべて} に對 ^{たい} して、何 ^{なに}
四	をか主 ^{しゆ} に報 ^{むく} い奉 ^{まつ} らんや。四(一三) 我 ^{われ} は救 ^{すく} 拯 ^い の爵 ^{さか} 5) を
五	取りて、主 ^{しゆ} の御 ^み 名 ^な を呼 ^よ び奉 ^{まつ} らん。五(一四) 我 ^{われ} すべて
六	の御 ^み 民 ^{たみ} の前 ^{まえ} にて、主 ^{しゆ} にわが誓 ^{ちか} 約 ^い 6) を還 ^{はた} さん。
七	六(一五) 主 ^{しゆ} の御 ^{おん} 眼 ^め に、その聖 ^{ひじり} 者 ^ら 等 ^ら の死 ^し は貴 ^{とう} し。7)
八	七(一六) ああ主 ^{しゆ} よ、それ、我 ^{われ} は汝 ^{なんじ} の下 ^{しも} 僕 ^べ なり。我 ^{われ} は
九	汝 ^{なんじ} の下 ^{しも} 僕 ^べ にして、汝 ^{なんじ} の下 ^{しも} 婢 ^め の子 ^こ なり。8) 汝 ^{なんじ} はわ
一〇	が絆 ^{はだ} を断 ^た ち給 ^{たま} えり。八(一七) 我 ^{われ} は汝 ^{なんじ} に讚 ^{さん} 美 ^び の犧 ^{いけ} 牲 ^{にえ} を
	献 ^{ささ} げ、主 ^{しゆ} の御 ^み 名 ^な を呼 ^よ び奉 ^{まつ} らん。九(一八) 我 ^{われ} はすべて
	の御 ^み 民 ^{たみ} の眼 ^め 前 ^{まえ} にて、主 ^{しゆ} にわが誓 ^{ちか} 約 ^い を還 ^{はた} さん。
	一〇(一九) 主 ^{しゆ} の家 ^{いえ} の大 ^{おお} 庭 ^{にわ} 9) にて、イエルサレムよ、
	汝 ^{なんじ} の只 ^{ただ} 中 ^{なか} にて、然 ^{しか} せん。

である(二節)。1) 4) 信賴できぬ者。1) 羅三・四。1) 5) 杯というこの美しいたとは、和祭の儀式から取つたもの。その時犠牲の肉の一部を奉納者に返すと、その人はこれを家族、友人、貧者たちと共に食し、またその饗応中感謝のさかずきをみなに回したものであつた。詩二一・二七参照。1) 6) 犠牲を天主に獻げるといふ誓い。1) 7) 敬虔な人々が悪人に殺されるのは、天主にとつてどうでもいい事ではない。1) 8) 主家で生まれた奴隸(出二三・一二参照)は、他の奴隸よりも主人に大事にされた。それは普通その親子などが長年奉公していて主人との仲が親しいからである。9) 犠牲の獻げられる所。

第百十六篇 (第百十七篇)

讚美のすすめ

二一
一 アレルヤ。

万の国よ、主を讚めよ、万の民よ、彼を讚めよ。二その御憐憫は我等の上に堅くして、主の信実^{まこと}は永遠に存すればなり。一

第百十七篇 (第百十八篇)

救いを得たる感謝

一
一 アレルヤ。一

主を頌え奉れ、彼慈しみ深く在せば、その御憐憫は世々に存すれば。二イスラエルはいざ云えかし、彼の慈しみ深く在すことを、その御憐憫の世々に存することを。三アーロンの家はいざ云えかし、その御憐憫の世々に存することを。四主を畏るる者はいざ云えかし、その御憐憫の世々に存することを。

第百十六篇 一) 天主が異邦人を召し給うのは御憐みの業、ユデア人を召し給うのはその信実の業。

第百十七篇 一) この詩篇はゾロバベルの神殿を祝別した時に歌われたものらしいこれは交互に歌うことになつてゐる。二詩一〇四、一〇五、一〇六各篇の冒頭参照。

五 我患難の中より主を呼び奉りしに、主我に応えて、広濶き所に我を置き
 給いぬ。³⁾ 六 主はわが援助者なり、我は怖れじ、人我に何をかなし得ん。⁴⁾
 七 主はわが援助者なり、我わが敵を見下さん。八 主に依り頼むこそよけれ、
 人を頼むにいやまさる。九 主に希望を置くこそよけれ、諸侯に希望を置く
 にいやまさる。一〇 異邦人舉りて我を囲みしが、我主の御名によりて彼等に
 仇を復したり。二 彼等我を囲みしが、我主の御名によりて彼等に仇を復し
 たり。三 彼等蜂の如く⁵⁾ 我を囲み、茨の中なる火の如く焼きしが、我主の
 御名によりて彼等に仇を復したり。三 我衝かれて、倒れんばかりよろめき
 けるが、主我を支え給いき。一四 主はわが力わが讚美にして、我に救拯とな
 り給えり。⁶⁾ 一五 歡喜と救拯との声は義人の幕屋にあり。一六 主の御右手は、
 御徳能を示したり、主の御右手は我を擧げたり、主の御右手は御徳能を示
 したり。一七 我は死せずして生き存え、主の御業を談らん。一八 主は我を懲
 らしに懲らし給えり、されど死には我を付し給わざりき。一九 義の門を、⁸⁾

3) わたしを救
 い出し給うた
 4) 来一三・六
 5) 無数に群ら
 がり、かつそ
 のように執拗
 に。一六 出
 五・二。
 7) イスラエル
 8) 聖殿の門。
 義の天主はそ
 こに住み給い
 ただ義人たち
 のみ近づかれ
 る。

二〇 我われに開ひらけ、我われこれより入いりて、主しゅを頌たたえ奉まつらん。九) 三〇 是これ

三 こそ主しゅの門もんなれ、義人ぎじんはこれより入いるべし。三 我われ汝なんじを頌たた

え奉まつらん。そは汝なんじ我われに応こたえて、わがために救すく拯いとなり給たま

二 いたればなり。三 建築者たつものの棄すてし石いし、これこそ隅すみの親おや

二三 石いしとせられたるなれ。三 是これ、主しゅのなし給たまえる所ところにして

二四 我等われらの目めには不思議ふしぎなり。二四 是これ、主しゅの設もうけ給たまえる日ひなり、

二五 我等われら喜び躍おどりて、この日ひに樂たのしまん。一一) 二五 ああ主しゅよ、我われ

二六 を救すくい給たまえ、ああ主しゅよ、榮さかえしめ給たまえ。二六 主しゅの御名みなによ

りて來きたる者ものは祝しゅくせられよかし。一二) 我等われらは主しゅの家いえより汝等なんじら

二七 を祝しゅくしたり。二七 主しゅこそ天主かみにして、我等われらを照てらし給たまいた

れ。祭壇さいだんの角つのに至いたるまで、青葉あおば繁しげれる枝えだもて、祝いわいの日ひ

二八 に備そなえせよ。一三) 三 汝なんじこそわが天主かみなれ、されば我われ汝なんじを頌たた

え奉まつらん、汝なんじこそわが天主かみなれ、されば我われ汝なんじを崇あがめ奉まつら

9) 本節は行列が聖殿に近づくのを表わし、まだ開かれぬ門内には司祭の一歌隊がいたのである。

10) 二列の石を結合する大石。キリストによつて始めて、天使界と人間界、ユデア人と異邦人が結合された。マテオ二一・四二。可一二・一〇。路二〇・一七。徒四・一一。彼前二・七以下参照。一一) 聖殿復興の祝祭。聖会は本節を御復活の大祝日の典礼中よみがえり給うた主に適用している。一二) イエルサレム御人城の主に対する民衆の歡呼(マテオ二一・九)。一三) 犠牲の獣は、司祭の庭を埋め尽くし祭壇の角に達するほど沢山であつてほしい。

ん。我^{われ}汝^{なんじ}を頌^{たた}え奉^{まつ}らん、そは汝^{なんじ}我^{われ}に応^{こた}えて、わがた
めに救^{すく}拯^{たい}となり給^{たま}いたればなり。二九 主^{しゆ}を頌^{たた}え奉^{まつ}れ、
彼^{かれ}慈^いしみ深^{ふか}くましませば、その御^{おん}憐^{あわれ}憫^みは世^よ々に存^{ぞん}す
れば。14)

第百十八篇

(第百十九篇)

生活の規範としての天主の律法

アレルヤ。

アレ フ

一 幸福^{さいわい}なるかな、道^{みち}にありて汚^{けが}れざる者^{もの}、主^{しゆ}の御^み法^{のり}
を歩^{あゆ}む者^{もの}。二 幸福^{さいわい}なるかな、その証^{あかし}詞^しを探^{さが}り、心^{こころ}を
尽^{つく}して彼^{かれ}を求^{もと}むる者^{もの}。三 蓋^{けだ}し不^ふ義^ぎを行^{おこな}う者^{もの}等^{ども}は、彼^{かれ}
の道^{みち}を歩^{あゆ}まざりしなり。四 汝^{なんじ}は御^{おん}誠^い命^{めい}を懇^{ねん}ろに守^{まも}ら
んことを命^{めい}じ給^{たま}えり。五 わが道^{みち}が汝^{なんじ}の御^{おん}規^き定^{てい}を守^{まも}る

14) 一節参照。——この詩篇はメシアに関
するもの。キリスト時代のユデア人が
そう思っていたことは、彼らがキリス
トの御入城の時これを用いたのでわか
る。

第百十八篇)ヘブレオ語本では、この
詩篇は各節の冒頭の字がアルファベツ
ト順になつていて、八節毎に同じ文字
で始まるようになつてゐる。一二二節
を除くほか、各節に一つずつ、「御法
すなわち律法」に代る云い方が出てく
る。御言、御定め、御誠命、御掟、御
証詞、御教え、などという語である。
作者はそれによつて、旧約の天啓の内

六 方かたに向むかわんこそ望のぞましけれ。六 我われ、汝なんじの諸もろ々の御おん誠い命ましめに目めを注とめおらんか、
七 その時ときは滅ほろ亡びに至いたることあらじ。七 我われ、汝なんじの正せい義ぎの御おん規さだ定めを学まなびたらん時ときは、
八 直なおき心こころもて汝なんじを頌たたえ奉まつらん。八 我われは汝なんじの御おん規さだ定めを守まもらん。我われを全まつたくは棄すて給たまうことなかれ。

ベ ト

九 若わか人うどは何なにによりてその道みちを直なおくするや。汝なんじの御おん言ことばを守まもるによりてこそ。
一〇 我われわが心こころを尽つくして汝なんじを求もとめ奉まつれり。汝なんじの御おん誠い命ましめより我われを離はなれしめ給たまわさ
一 我われは汝なんじの御おん言ことばをわが心こころに蔵おさめ、²⁾ 汝なんじに罪つみを犯おかさざらんことを期きせり。
二 主しゅよ、汝なんじは祝しゆくすべきかな、汝なんじの御おん規さだ定めを我われに教おしえ給たまえ。^三 我われわが唇くちびるもて、
三 汝なんじの御おん口くちの御おん定さだめを悉ことごとく宣つたへたり。^四 我われは汝なんじの証あかし詞みちの道みちを、³⁾ 諸もろ々の
財たからの如ごとくに、悦よろこべり。^五 我われは汝なんじの御おん誠い命ましめを守まもり、汝なんじの道みちに目めを注そそがん。^六 我われ
は汝なんじの御おん規さだ定めを思おもひ廻めぐらし、汝なんじの御おん言ことばを忘わすれざらん。

ギ メ ル

容全体を
さしてい
るのであ
る。これ
は流寓時
代、もし
くはその
後の作ら
しい。
2) わたし
の行いの
動機。
3) 御掟を
守つて暮
らすこと

一七 汝の下僕に報い、我を活し給え、⁴⁾ さらば我汝の御言を守らん。
 一八 わが眼を開き給え、さらば我汝の御法の奇しき⁵⁾ を眺めん。^{一九} 我
 は地上に客たる者⁶⁾ なり、汝の御誠命を、我に隠し給うなかれ。
 二〇 わが靈魂は、いつの時にも、汝の御規定を慕うことを欲せり。
 二一 汝は高ぶる者を責め給えり。汝の御誠命より離るる者は呪われた
 るかな。^{二三} 誹毀と侮蔑とを我より取り除き給え、そは我汝の証詞を
 求めたればなり。^{二三} 実に諸侯坐して、我に敵い語りぬ。されど汝の
 下僕は御規定を思い廻らしけり。^{二四} そは汝の御証詞はわが默想の
 種、汝の御規定は我に忠告⁷⁾ となればなり。
 ダ
レ
ト
 二五 わが魂は鋪石に付けり、汝の御言に循いて我を活かし給え。⁸⁾
 二六 我わが道を云いあらわしたれば、⁹⁾ 汝我に応え給えり、汝の御規定
 を我に教え給え。^{二七} 汝の御規定の道を我に悟らしめ給え。さらば我

4) 作者の体を活かすこと、もしくは民の命をつなぐこと。
 5) その中に秘められている信仰の玄義。
 6) 客には所有地などない。しかし作者には、天主が在すだけで十分。――いかなる場合にも困るようなことはない。
 7) 我々は苦勞の重荷に押しひしがれているが、天主を思い出すと元気が湧く。
 8) 熱烈な祈りと默想とをして。

二八 汝の奇しき御業を思い廻らさん。二八 わが魂は疲労のあまり眠れり、汝の御言
 二九 によりて我を強め給え。二九 不義の道を我より遠ざけ給え、しかして汝の御法
 三〇 によりて、我を憐み給え。三〇 我は信実の¹⁰⁾道を選べり、汝の御規定は我これ
 三一 を忘れざりき。三一 我は汝の御証詞に愛着せり、主よ、我を滅亡に至らしめ給
 三二 うなかれ。三二 汝のわが心を満くし給いし時は、我汝の御誠命の道を走れり。¹¹⁾
 へ
 三三 主よ、汝の御規定の道を、我に規範として負わせ給え、さらば我常にこれ
 三四 を探ねん。三四 我に了悟を与え給え、さらば我汝の御法を探り究め、わが心を
 三五 尽してこれを守らん。三五 汝の御誠命の徑に我を導き入れ給え、そは我これを
 三六 こそ欲みたればなり。三六 貪慾にはあらで、汝の御証詞に、わが心を傾け給
 三七 え。三七 わが目を逸して、空しきこと¹²⁾を見ざらしめ、汝の道によりて我を活
 三八 かし給え。三八 汝を畏るるによりて、汝の下僕に汝の御言を確くし給え。三九 わ
 三九 が怖れたる恥¹³⁾を我より取り去り給え、そは汝の御規定は樂しければなり。

10) 汝に対
 する忠実
 の。
 11) 喜びに
 よつて。
 12) 神聖な
 内容を有
 せぬこと
 13) 作者の
 心に深く
 徹える恥
 しさは、
 ただ天主
 の御掟に
 忠実でな
 かつた時
 感ずるも
 のだけ。

四〇 視給え、我は汝の御誠命を慕えり、汝の公義によりて我を活かし給え。

ワ フ

四一 また主よ、わが上に、汝の御憐憫を、汝の御言に循いて汝の御救拯を、来ら

四二 しめ給え。四三 さらに我、われを誹る者共に言を返さん、そは我汝の御言に希望

四三 を置きたればなり。四四 わが口より真実の言を、全くは取除き給うなかれ、そ

四四 は我汝の御審判に太く希望をかけたればなり。四五 されば我は常に汝の御法を守

四五 らん、世々に至り、世々の世々に至るまでも。四六 しかして我は広き所を歩み

四六 ぬ、¹⁵⁾ そは我汝の御誠命を求めたればなり。四七 我また王等の眼前にて、汝の御

四七 証詞のことを語りしが、恥辱を蒙らざりき。四八 我またわが好みし汝の御誠命に

四八 つきて思い廻らしぬ。四九 我はわが好みし汝の御誠命に向かいてわが手を擧げ、

汝の御規定をまねび行いぬ。

ザ イン

四九 汝の下僕に汝の仰せし言を御心に記め給え、汝之によりて我に希望を与え給

14) 私の
彼らに

云うべ

きこと

は、汝

が教え

て下さ

ると期

待して

いる。

15) 安心

して、

ゆつた

りした

気持で

五〇 えり。五〇これはわが挫けし時に、我を慰めたり。そは汝の御言我を活かし
 五一 たればなり。五一傲る者等は全く不当に行いぬ、されど我は汝の御法より離
 五二 れざりき。五二主よ、我は汝の古の¹⁶⁾御規定を思い出でて、慰藉を受けた
 五三 り。五三汝の御法を棄つる罪人等ゆえに、落胆我を襲えり。五四汝の御定めは
 五五 わが旅する処にて、わが歌草¹⁷⁾たりき。五五主よ、我は夜にも汝の御名を思
 五六 い出でて、汝の御法を守れり。五六この事の我に成りしは、我汝の御規定を
 探ねし¹⁸⁾に由りてなり。

へ ト

五七 汝はわが分なり、主よ、我は汝の御法を守らん、と云えり。五八我はわが
 五九 心を尽して汝の御面に願ひぬ、汝の御言に循いて我を憐み給え。五九我はわ
 六〇 が道を考え調べ、汝の御証詞にわが足を向けたり。¹⁹⁾六〇我は汝の御誠命を
 六一 守らんと、覚悟して、惑わず。六一罪人の繩は我を繞れり、されど我汝の御
 六二 法を忘れざりき。六二汝の御規定の義しきによりて、我汝を頌えんと、夜半

16) 大昔から間
 違いのない。
 17) ふしよき、
 喜びの歌の好
 材料。—18) 私
 は汝の御定め
 を守ることを
 わが本分とし
 た。—19) 私は
 どうすれば汝
 の御証詞を私
 の生活の規範
 とすることが
 できるか、思
 いめぐらす。

六三 に起き出でぬ。六三 我はすべて汝を畏るる者及び汝の御誠命を守る者の同僚なり。六四 主よ、汝の御憐憫は地に満ちたり、汝の御規定を我に教え給え。

テ ト

六五 主よ、汝の御言に循いて、汝の下僕を懇切に扱い給えり。六六 仁慈と、規律

六七 と、知識とを我に教え給え、そは我汝の御誠命を信賴したればなり。六七 我押

六八 し拉がるる前には、科を犯しぬ、されば我汝の御言を守れり。六八 汝は慈しみ

六九 深く在せば、汝の仁慈によりて我に汝の御規定を教え給え。六九 傲る者の不義

七〇 はわが上に増し加われり。されど我はわが心を尽して汝の御誠命を探り究め

七〇 ん。七〇 彼等の心は乳の如く凝固まれり、20) されど我は汝の御法を思い廻らせ

七一 り。七一 我が汝の御規定を学び得るよう、汝が我を挫き給うこそ、我にとりて

七二 善けれ。七二 汝の御口の法は、幾千の金銀にも優りて、わがために善きなり。

ヨ ド

七三 我を作り、我に形を与えたるは、汝の御手なり。我に了悟を与え給え、さ

20) ヘブレ

オ語本は

「彼等の

心は肥え

太りて脂

の如し」。

脂は冷淡

無感覚、

頑迷な心

の象徴。

凝固した

乳は液状

でなくな

つて、も

う流動し

ない。

七四 らば我^{われなんじ}汝^{おんいましめ}の御誠命^{まな}を学^{まな}ばん。 汝^{なんじ}を畏^{おそ}るる者^{もの}は、我^{われ}を見て悦^{よろこ}ぶべし、そは
 七五 我^{われなんじ}汝^{おんいましめ}の御言^{のぞみ}に希望^おを置きたればなり。 主^{しゅ}よ、我^{われ}は知^しる、汝^{なんじ}の御定^{おんさだ}めの公^た
 七六 正^{ただ}しくして、汝^{なんじ}がその信実^{まこと}によりて我^{われ}を挫^{くじ}き給^{たま}えることを。 汝^{なんじ}の下僕^{しもべ}に
 七七 対^{たい}する御言^{みことば}に循^{したが}いて、汝^{なんじ}の御憐憫^{おんあわれみわれ}我^{われ}を慰^{なぐさ}むべきものとなれかし。 汝^{なんじ}の御
 七八 憐憫^{あわれみわれ}我^{われ}に來^{きた}れかし、さらば我^{われ}生^いくるを得^えん、そは汝^{なんじ}の御法^{みのり}、わが默想^{もくそう}の
 七九 種^{たね}なればなり。 傲^{たかぶ}る者^{もの}は滅^{ほろ}びよかし、そは彼等^{かれら}不当^{ふとう}にも我^{われ}に不義^{ふぎ}をなし
 八〇 我^{われ}に向^むかえよかし、また汝^{なんじ}の御証詞^{おんあかし}を知^しれる者^{もの}も然^{しか}せよ。 汝^{なんじ}の御掟^{おきて}によ
 りて、わが心^{こころ}を汚^{けが}れなからしめ給^{たま}え、これ我^{われ}の滅^{ほろ}びざらんためなり。

カ
フ

八一 わが魂^{たま}は汝^{なんじ}の救拯^{すくい}にこがれて憔^{やつ}れたり、されど我^{われなんじ}汝^{おんいましめ}の御言^{のぞみ}に希望^おを置
 八二 けり。 汝^{なんじ}の御言^{みことば}ゆえにわが眼^め衰^{おとろ}えたり、曰^{いわ}く、「汝^{なんじ}いつの時^{とき}にか我^{われ}を
 八三 慰^{なぐさ}めんとやし給^{たま}う」と。 實^けに我^{われ}は霜^{しも}の中^{なか}の革囊^{かわぶくろ}の如^{ごと}くなれり。 我^{われなんじ}汝^{おんいましめ}の

21) 心の眼。
 22) 霜の中にお
 かれ、寒冷に
 曝された革袋
 は収縮する。
 ヘブレオ語本
 は「煙の中の
 革袋の如く」。
 革袋は使わぬ
 時、かけてお
 くが、ヘブレ
 オ人は煙突を
 用いぬので、
 煙にあたる。

御規定を忘れたることなし。八四 汝の下僕の日数は幾許なりや。汝いつの時に我を迫害
む者等に審判を行わんとやし給う。八五 不義なる者は我に虚構事を語れり、そは汝の御法
の如くにはあらず。八六 汝の御誠命は悉く真実なり。彼等は不当にも我を迫害みたり。汝
我を助け給え。八七 彼等は地にて殆ど我を滅ぼしたり、されど我は汝の御誠命を棄てざり
き。八八 汝の御憐憫に循いて、我を生かし給え、さらば我汝の御口の御証詞を守らん。

ラメド

主よ、汝の御言は窮りなく天に存す、九〇 汝の信実は千代万代に及ぶ。汝地を確く据え
給いたれば、そは恒に存す。九一 汝の御定めによりて、日は押し進む。そは万の物汝に仕
え奉ればなり。九二 汝の御法もしわが黙想の種ならざりしならば、我或はわが屈辱の裡に
亡びしならん。九三 汝の御規定は我永久にこれを忘れじ、そはこれによりて汝我を生か
し給いたればなり。九四 我は汝の有なり。我を救い給え、我は汝の御規定を探ねたればな
り。九五 罪人等は我を亡ぼさんとて、我を待てり、されど我は汝の御証詞を悟れり。九六 我
はすべての完全きもの²³⁾に限りあるを見たり、汝の御誠命は甚だ広し。

メ ム

九七 主よ、わが汝の御法を好めることは、そも如何ばかりぞ。そは終日わ

九八 が思い廻らすものなり。九八 汝の御誠命によりて、汝は我をわが敵に優り

九九 て賢からしめ給えり、そは永久に我と共にあればなり。九八 我は我に教え

しすべての者に優りて悟れり、そは汝の御証詞わが思い廻らすものなれ

一〇〇 ばなり。24) 一〇〇 我は老いたる者に優りて悟れり、そは我汝の御誠命を求め

一〇一 たればなり。一〇一 我はあらゆる悪しき道を避けて足を止めたり、これ、

一〇二 汝の御言を守らんためなり。一〇二 我は汝の御規定より離れたることなし、

一〇三 そは汝我に御法として与え給いたればなり。一〇三 汝の御言はわが頸にい

一〇四 かばかり甘きぞや。わが口には蜜に優れり。一〇四 我は汝の御誠命により

て了悟を得たり、さればこそ我は不義のあらゆる道を厭いたるなれ。

又 ン

一〇五 汝の御言はわが足には燈火、わが徑には光なり。25) 一〇六 我は汝の正義

23) 成りしもの」と訳する人もある。

24) 最大の知識は、この世のことではなく、

天主の御掟を知ることを。

25) 天主の御掟を、世の暗闇を通つて天主

の御許に至る正しい道を示す光としたい

一〇七 一〇八 一〇九 一一〇 一一一 一一二 一一三 一一四 一一五 一一六

の御規定を守らんと、誓い且思い定めたり。一〇七 主よ、我はいたく挫け
たり。汝の御言に循いて我を活かし給え。一〇八 主よ、わが口の志の献
物²⁶⁾を嘉納して、汝の御規定を我に教え給え。一〇九 わが魂緒は恒にわが
手の中にあり、²⁷⁾されば我汝の御法を忘れたることなし。一一〇 罪人等は
我に罾をかけたり、されど我は汝の御誠命を離れて彷徨わざりき。
一一一 我は汝の御証詞を、永久の嗣産にと求め得たり、そはわが心の歡喜
なればなり。一一二 我は報酬のために、いつまでも汝の御規定を行わんと
て、わが心を傾けたり。

サ メ ク

一一三 我は不義なる者²⁸⁾を憎み、汝の御法を愛でたり。一一四 汝はわが援助
者にして支持者なり、されば我汝の御言に希望をかけたり。一一五 汝等心
根悪しき者よ、我より離れ去れ、我はわが天主の御誠命を探り究めん。
一一六 汝の御言に循いて我を支え給え、さらば我生くべし。我をしてわが

²⁶⁾「わが口の
献げ物」とは
作者が天主に
今献げたばか
りの祈りと誓
い。――²⁷⁾わが
命はすぐにも
なくなるよう
なはないも
の。士一二・
三参照。
²⁸⁾ヘブレオ語
本「横による
めく者」。こ
れは天主とバ
ールとに共に
仕えようとす
る者をさす。

希望に敗ることなからしめ給え。 一一七 我を助け給え、さらば我は救わるべく
 毎も汝の御定めを思い廻らさん。 一二八 汝はすべて汝の御規定より退き離るる者
 を棄て給えり、そは彼等の思う所、不義なればなり。 一二九 我は地のすべての罪
 人を違背者と見倣せり、是に山りて我汝の御証詞を好めり。 一三〇 汝を畏るる念
 もてわが肉を貫き給え、そは我汝の御審判²⁹⁾を怖るればなり。

ア イン

一三二 我は権と義とを行えり、我を誹る者等に我を付し給うなかれ。 一三三 汝の下
 僕を支えて善に至らしめ給え。願わくは傲る者等の我を誹ることなかれかし。

一三三 わが目汝の御救拯を望みて衰えたり、汝の正義の御言に対してもまた然
 り。 一三四 汝の御慈悲に循いて汝の下僕を扱い、汝の御定めを教え給え。 一三五 我

は汝の下僕なり、我が汝の御証詞を知らんために 了悟を我に与え給え。

一三六 主よ、働き給うべき時なり、彼等は汝の御法を破れり。 一三七 是に山りて我
 は、黄金や黄玉に優りて、汝の御誠命を愛でたるなり。 一三八 故に我は汝の諸々

29) 天主

が昔下

し給う

た天罰

申二八

・七の

ような

30) 八二

節参照

の御誠命に循^{したが}いたりき。我^{われ}はあらゆる不義^{ふぎ}の道^{みち}を憎^{にく}めり。

フエ

一二九 汝^{なんじ}の御証詞^{みあかし}は妙^{たえ}なるかな、さればこそわが靈魂^{たましい}これを探^{たず}ねたるなれ。

一三〇 汝^{なんじ}の御言^{みことば}を教^{おし}うるは、照^てらして小^{ちひ}さき者^{もの}等に了悟^{さとり}を与^あう。一三一 我^{われ}わが口^{くち}を

開^{ひら}きて喘^{あえ}ぎぬ³¹⁾。そは我^{われ}汝^{なんじ}の御誠命^{おんいましめ}を慕^{した}えばなり。一三二 我^{われ}を眷顧^{かえり}み、我^{われ}を憐^{あわれ}み

給^{たま}え、そは汝^{なんじ}の御名^{みな}を愛^{あい}する者^{もの}に對^{たい}する義^ぎなればなり。一三三 汝^{なんじ}の御言^{みことば}に循^{したが}いて

わが歩^{あゆ}みを導^{みちび}き、いかなる不義^{ふぎ}をも我^{われ}に君臨^{くんりん}せしめ給^{たま}うなかれ。一三四 我^{われ}を人々^{ひとびと}

の誹謗^{そしり}より救^{すく}い給^{たま}え、これ、我^{われ}が汝^{なんじ}の御誠命^{おんいましめ}を守^{まも}るを得^えんためなり。一三五 汝^{なんじ}の

下僕^{しもべ}³²⁾に向^むかいて汝^{なんじ}の御顔^{みかお}を輝^{かが}かし、汝^{なんじ}の御定^{おんさだ}めを我^{われ}に教^{おし}え給^{たま}え。一三六 わが目^め

水^{みづ}の小川^{おがわ}を流^{なが}れ下^{くだ}らしめたり、そは人々^{ひとびと}汝^{なんじ}の御法^{みのり}を守^{まも}らざりしが故^{ゆえ}なり。

サ
デ

一三七 主^{しゆ}よ、汝^{なんじ}は義^{ただ}しく、汝^{なんじ}の審判^{さはん}は直^{なお}し。一三八 汝^{なんじ}は汝^{なんじ}の義^ぎと信実^{まこと}とをもて、汝^{なんじ}

の御証詞^{みあかし}を確^{かた}く命^{めい}じ給^{たま}えり。一三九 わが熱心^{ねっしん}は我^{われ}を慥^{やっ}れしめたり、そはわが敵^{てき}汝^{なんじ}

31) 大いに望み

慕うさ

ま。

32 民六

・二五

詩四・

七など

参照。

一四〇

の御言みことばを忘れわすければなり。一四〇 汝なんじの御言みことばは火ひを経てへ甚はなはだ確実たしかなり。33) され

一四一

ば汝なんじの下僕しもべこれを愛めでたり。一四一 我われは若わかしくて蔑みけまれたり、されど我われ汝なんじの

一四二

御定おんさだめを忘れわすれず。一四二 汝なんじの義ぎは永遠とこしなえに義ぎなり、また汝なんじの御法みのりは真実まことなり。

一四三

一四三 悩なやみ苦しくるみ、我われを襲おそいたれど、汝なんじの御誠命おんいましめはわが默想もくそうの料しろなり。

一四四

一四四 汝なんじの御証詞みあかしは永遠とこしなえに公義ただし、我われに了悟さとを与あたえ給たまえ、さらば我われ生いくべし。

コ
フ

一四五

一四五 我われわが心こころを尽つくして呼よわりぬ、主しゆよ 我われに応こたえ給たまえ。我われは汝なんじの御定おさだめを

一四六

もと 求もとめん。一四六 我われ汝なんじに向むかいて呼よわりぬ、我われが汝なんじの御誠命おんいまめを守まもるを得えんため

一四七

に、我われを救すくい給たまえ。一四七 我われ朝未明あさまだきに34) 呼よわりぬ、そは我われ汝なんじの御言みことばに希望のぞみを置お

一四八

きたればなり。一四八 わが目曙めあけぼのに先さきんじて汝なんじに向むかえり、我われ汝なんじの御言みことばを思おも

一四九

い廻めぐらさんとしてなり。一四九 主しゆよ、汝なんじの御憐憫おんあわれみに循したがいて、わが声こゑを聴きき、汝なんじ

一五〇

の御定おんさだめに循したがいて、我われを生いかし給たまえ。一五〇 我われを迫害せめむ者共ものどもは不義ふぎに近ちかづけ

一五一

り、35) されど彼等かれらは汝なんじの御法みのりより遠とほく離はなれたり。一五一 主しゆよ、汝なんじは近ちかく在あるす、

33) 精錬され

た金属に譬

えてある。

34) 熱心に祈

るのに最も

よい時。

35) 悪人が不

義なる事を

して、義人

に近く

迫るほど、

彼らにます

ます天主の

御掟から遠

く離れる。

一五二 しかして汝の道は悉く真実なり。 一五三 我は始より汝の御証詞につきて、汝がこれを永遠に定め給いたることを知れり。

レ ス

一五三 わが屈辱をみそなわして我を救い出し給え、そは我汝の御法を忘れたることなればなり。 一五四 わが訴訟を裁きて我を贖い給え。汝の御言のために我を生かし給え。

一五五 救拯は罪人等を離るること遠しそは彼等汝の御定めを求めたることなればなり。

一五六 主よ、汝の御憐憫は夥多なるかな、汝の御規定に循いて我を生かし給え。 一五七 我を

一五八 迫め、我を悩ます者は多し。我は汝の御証詞より離れたることなし。 一五九 我邪曲をなす

一六〇 者を見て憂悶に悴れぬ、そは彼等汝の御言を守らざりしに由りてなり。 一六一 主よ、視給

え、我が汝の御誠命を愛せることを。汝の御憐憫によりて我を生かし給え。 一六二 汝の御

言の源は真実なり、汝の正義の御定めは悉く永久に存す。

シ

一六一 諸侯は故なく我を迫害みたり。されどわが心は汝の御言を畏れたり。 一六二 我は汝の

御言を悦ばん、多くの獲物を見出でたる者の如くに。 一六三 我は不義を憎み嫌え
り、されど我は汝の御法を好めり。 一六四 汝の正義の御規定ゆえに、我日に七
度³⁷⁾ 汝を頌え奉れり。 一六五 汝の御法を好む者には豊かなる平安あり、彼等には
蹉跌となる物なし。 一六六 主よ、我は汝の御救拯を待ち望み、汝の御誠命を好み
ぬ。 一六七 わが魂は汝の御証詞を守り、いたくこれを好めり。 一六八 我は汝の御誠
命と汝の御証詞とを守れり、そはわが道すべて汝の御眼前にあればなり。

タ ウ

一六九 主よ、わが祈禱を汝の御眼前に至らしめ給え、汝の御言に循いて、我に了
悟を与え給え。 一七〇 わが懇願を汝の御眼前に入らしめ給え、汝の御言に循いて
我を救い給え。 一七一 汝その御定めを我に教え給わん時、わが唇讃歌を吐き出
さん。 一七二 わが舌汝の御言を宣伝えん、汝の御誠命はすべて公義しければなり。
一七三 汝の御手我を救わんとせよかし、そは我汝の御誠命を選びたればなり。
一七四 主よ、我は汝の御救拯を願望めり、汝の御法はわが黙想の料なり。 一七五 わ

36) 私が 怖れる のは、 人間で なく汝 の御言 葉。
37) 七は ユデア の完全 数。詩 七八・ 一二な ど参照

一七六
 が魂は生きて汝を讃め称えん。さらば汝の御規
 定は我を助けん。一七六 我は失せたる羊の如く彷徨えり、
 38) 汝の下僕を探ね給え、そは我汝の御
 誠命を忘れざりしに由りてなり。

第百十九篇

(第百二十篇)

聖寵と平安への憬れ

一 階の歌。¹⁾
 我患難に逢いて主に叫びしに、彼我に応え給いぬ。²⁾ 主よ、わが魂を不義の唇より、欺く舌より、救い給え。三 汝に何をか与えん、また汝の欺く舌に何をか加えん。四 丈夫の鋭き矢と、焼き尽す炭火³⁾となり。五 我は禍なるかな、そはわが宿

38) 聖書によく出て来る、人間を天主の小羊とする譬え。キリストの善牧者の(約一〇・一一一六)および失せたる小羊の(マテオ一八・一二一四)譬話参照。

第百十九篇 1) ヘブレオ語「ハマーアロト」。種々の説明中最も多く認められているものに従えば、ニカノル門のそば、女子の前庭から男子の前庭へ上る所に十五の段があり、レヴィ人たちはそこに立つて歌を歌ったから、かく云うと。2) 多分まだ「異郷バビロン」に留っていた姓名不詳の人の作。この第一の階の歌は、流寓を悲しむ歌。3) ヘブレオ語本「えにしだの炭火」。これは非常に強い熱を出すと云われ、苦罰の譬え。

七六
り長引き、⁴⁾ 我はケダルの住民と共に住みたれ
ばなり。⁵⁾ ⁶⁾ わが魂は久しく客たりき。 我は平
和を憎む者等と共にありて平安なりき、我が彼
等に語りし時、彼等故なく我を攻めけり。

4) ヘブレオ語本「われはメセク（黒海とカスピ海との間に住んでいた民）のうちに客たり」。―5) ケダル人はアラビアの一族。メセクとケダルとは例として挙げてあるので、意味は「恐ろしい敵のうちに」。

第百二十篇 (第百二十一篇)

忠実なる保護者

一 階の歌。¹⁾

二 我山々²⁾にわが眼をあげたり、彼処より援助我に來らん。³⁾
三 わが援助は主よりこそ、是、天地を造り給いし者なり。
四 願わくは、彼が汝の足のよろめくを容し給わざらんことを。
五 また汝を護り給う者が微睡み給わざらんことを。
六 視よ、イスラエルを守り給う者は、微睡むことも眼ること
七 もなからん。 主は汝を守り給う、主は汝の保護者にし

第百二十篇 1) 第二の階の歌。

詩一一九の註一参照。―2) バビロンに引かれた人々が慕い懼れているシオン山。祈る時にはその方を向いた。―3) 代下二〇・一七。―4) 作者は己と語る。

六 て、汝の右手に在す。⁵⁾ 六 昼は日汝を焦かざるべく、
 七 夜は月もまた然せざるべし。⁶⁾ 七 主は汝を諸々の悪よ
 八 り守り給う、願わくは主が汝の靈魂を守り給はんこ
 とを。 八 願わくは主が汝の入ると出ると⁷⁾を守り給
 わんことを、今のこの時より世々に至るまで。

第百二十一篇 (第百二十二篇)

聖都入城の歓喜

一 階の歌。¹⁾
 「我等主の家に行かん。」と我に云われしことを、我悦
 びぬ。ニ エルサレムよ、我等の足は汝の大庭に立てり。
 三 その部分が互に連り合える市の如く、建てられたるイ
 四 エルサレムよ。²⁾ 四 実に彼処へこそ、族は、主の族は、イ
 スラエルの証詞に循い、主の御名を讃えんとて、上りゆ

⁵⁾ 聖書では、保護者が被保護者の右に立つのが慣い。詩一五・八。一〇九・五など参照。――⁶⁾ この月は、暑い国々で危険な夜の寒さをさすのかも知れない。――使七・一六。――⁷⁾ すなわちすべての行動。

第百二十一篇 1) 第三の階の歌。
 詩一一九の註一参照。――2) 年に三回、即ち過越祭、ペンテコステ祭、幕屋祭の三大節には、ユデアの成人男子はエルサレムへ参詣しなければならなかつた(出二三・一四)。

五 きしなれ。五 それ、彼処には審判の座設けられたり、ダヴィ
六 ドの家の玉座なり。3) 六 汝等イエルサレムの平和になることを
七 願え。汝を愛する人々の恵み溢れよかし。七 汝の砦の内は安
八 穩なれ、汝の塔の内は豊かなれ。八 わが兄弟、及びわが近き
九 人々のために、我は汝に平安を携りぬ。九 主我等の天主の家
のため、4) 我汝に幸を求めたり。

3) そこからダヴィド家の王たちが世を治め、裁判を行なつた。―4) 作者にイエルサレムへの聖なる憧憬を起させる原因。兄弟愛が第一因(八節)で、宗教上の熱心が第二因(九節)。

第二百二十二篇 (第二百二十三篇)

虐げらるる者の希望

一 階の歌。1)
我汝に向かいてわが眼を挙げたり、天に住み給う者よ。
二 視よ、下僕等の眼がその主人の手に向かうが如く、
下婢等の眼がその女主人の手に向かうが如く、2 然、
我等の眼も主我等の天主に向かいて、その我等を憐み

第二百二十二篇 1) 第四の階の歌。詩

一一九の註一参照。バビロンにいたある捕虜が苦しみ仲間を代表して作つた祈り。―2) 眼が目上の者の手に向かうとは、その者から何かを貰うことを期待するという意。

三 給わん時を俟つなり。我等を憐み給え、主よ、我等を憐み給え、そは我等いたく蔑視
 四 に飽かされたればなり。実に我等の靈魂はいたく飽かされたり、豊かなる者の嘲笑と
 高ぶる者の蔑視とに。

第二百二十三篇 (第二百二十四篇)

主はわれらの味方

一 階の歌。

一 主もし我等の中に在し給わざりせば、今イスラエルは云えかし、
 二 主もし我等の中に在し給わざりせば、人々我等に逆いて起ち上り
 三 時、恐らくは我等を生きながら呑みしならん。3) 彼等の激怒
 四 の我等に向かい燃えし時、恐らくは水我等を没し去りしならん
 五 に。我等の靈魂は激流を渡れり、恐らくは我等の靈魂堪え難き水
 六 を渡りしならん。4) 彼等の齒の餌食として我等を付し給わざりし
 七 主は、祝せられさせ給え。我等の靈魂は、鳥捕る者の罟より、雀

第二百二十三篇 1) 第

五の階の歌。詩一一九の註一参照。

2) 挿入句。3) 敵を

野獣に見立ててある

4) 敵を賽八・七以下

にあるアツシリア人

のように、漲り溢れ

る流れに譬えてある

八
の如く挽ぎ放されたり。罾は破れて、我等は放たれたり。我等の援助は
主の御名にあり、これ、天地を造り給いし者なり。⁵⁾

⁵⁾ 詩一二〇・
八参照。

第百二十四篇 (第百二十五篇)

主の御保護

一 階の歌¹⁾

二
主に依頼む者は、シオンの山の如し。永久に動かさることなか
るべし、住みてニエルサレムにある者は。山々はその周囲にあ
り、主はその御民の周囲に在す、今のこの時より世々に至るまで。
三 蓋し主は義しき者の領分に、罪人の笏を遺し給わじ、²⁾ そは義
しき者までもその手を不義に伸ぶることのなからんためなり。³⁾
四 主よ、善人と心の直き者とを恵み給え。五 されど曲れる道に傾
ける者は、不義を行う者と共に、主これを逐い払い給わん。イス
ラエルの上に平安あれ。

第百二十四篇 ¹⁾ 第六

階の歌。詩一一九の註
一参照。――²⁾ 義しき者
の領分とは曾てイスラ
エル人の住む所として
与えられた地。罪人の
笏とは、邪惡な支配権
³⁾ それがあまり長く続
くと、善人たちの抵抗
力が挫けてしまいかも
知れない。

第百二十五篇

(第百二十六篇)

捕囚より帰りし喜び

一 階の歌¹⁾

主がシオンの捕虜を回帰し給いし時、我等は慰められたる者の如くなりき。²⁾ 三 その時我等の口は歡樂に、我等の舌は喜悦に充滿されたりき。その時異邦人等の中にも云う者あらん、「主彼等のために大事をなし給えり。」と。三 主は我等のために大事をなし給えり、我等は楽しむ者となれり。四 主よ、我等の捕虜を回帰し給え、南にある激流の如くに。³⁾ 五 涙しつつ播く者は⁴⁾ 雀躍しつつ刈り取らん。六 往く時は、彼等往きて、その種を播きつつ泣きぬ。七 されど来る時には、彼等雀躍しつつ、その禾束を携え来らん。

第百二十五篇

1) 第七

の階の歌。詩一一九の註一参照。――2) ヘブレオ語本「我々は夢みる如くなりき。」即ちそれは殆ど眞実と思われなかつた。――3) 即ちユデアの人口を新たに父急速に殖やし給え。⁴⁾ 石の多い山地に種を播く者。

第二百二十六篇 (第二百二十七篇)

人間の労苦と天主の御祝福

一 サロモンの階の歌。¹⁾

主家を建て給うに非ずば、これを建つる者の
 勤勞も空し。主城市を守り給うに非ずば、こ
 れを守る者の夜警も徒勞なり。空しきかな、
 汝等の夜明くる前に起き出ること。汝等苦痛
 のパンを食する者よ、²⁾ 坐し居りて然る後に
 起き出よ、彼その愛し給う者に睡眠を賜いた
 ればなり。^三 視よ、主の嗣産は子等なり、報
 酬は胎内の実なり。^四 丈夫の手にある矢の如
 く、逐い払われたる者³⁾の子等も亦然り。
^五 幸福なるかな、これをもて己が望を満たす

第二百二十六篇 ¹⁾第八の階の歌。詩一一九の
 註一参照。現代のみならず昔の解釈者のある
 人々も、「サロモンの」という語を眞実と認
 めない。この詩篇を聖殿再興の時に作つた作
 者が、最初の聖殿を建てたサロモンの名を借
 りたのである。――²⁾すなわちどんなに朝早く
 から労働を始め、晩遅くなつてから漸く休み、
 つらい思いをしてパンを得て食べても、天主
 の御祝福がなくては、ただ努力が徒勞になる
 ばかりである。この「建つる」と「夜警」と
 は聖殿再建中のこと。それを建てた人々は食
 事のため腰をおろしても、すぐ仕事や石垣の
 番に呼ばれて、また立たねばならず、本当に
 「苦しみのパン」を食した。尼四・一七参照
³⁾ 敵に勝てずに。

人^{ひと}。4) 彼は門^{かど}にてその敵^{てき}に語^もわん時^{とき}も、5) 恥辱^{はじ}を受^うくることあらざるべし。

4) 子等の群に囲まれた父。――5) 人々の集会や裁判の場所たる「門」の所で、不当な攻撃を受けても。

第百二十七篇 (第百二十八篇)

天主を信ずる家庭の幸福

一 階^{きざはし}の歌^{うた}。1)

幸福^{さいわい}なるかな、すべて主^{しゅ}を畏^{おそ}る者^{もの}、その道^{みち}を歩^{あゆ}む者^{もの}。ニそは汝^{なんじ}、己^{おの}が手^てを勞^{ろう}して得^えたる物^{もの}を、食^{しょく}すべければなり。汝^{なんじ}は幸福^{さいわい}にして、仕合^{しあわ}せ善^よかるべし。三 汝^{なんじ}の妻^{つま}は汝^{なんじ}の家^{いえ}の奥^{おく}にありて、2) 実豊^{みのりゆた}かなる葡萄樹^{ぶどうのき}の如^{ごと}く、汝^{なんじ}の子等^{こら}は汝^{なんじ}の食卓^{しょくたく}の周圍^{まわり}にありて、橄欖^{かんらん}の若樹^{わかぎ}の如^{ごと}し。四 視^みよ、主^{しゅ}を畏^{おそ}る人^{ひと}は、かく祝^{しゅく}せらるべし。五 願^{ねが}わくは主^{しゅ}がシオンより汝^{なんじ}を祝^{しゅく}し給^{たま}いて、汝^{なんじ}がその生^いくる日^ひの限^{かぎ}り、イエルサレムの幸^{さち}を見^み、六 かつ汝^{なんじ}の子等^{こども}の子等^{こども}とイスラエルとの上^{うへ}に平安^{へいあん}を見^みんことを。3)

第百二十七篇 1) 第

九の階の歌。詩一

一九の註一参照。

2) 妻の領分は家の

なか。――3) 詩一二

四・五参照。

第二百二十八篇

(第二百二十九篇)

過去を思いて希望を抱く

一 階の歌¹⁾

彼等はわが若き時²⁾より、屢々我を攻め悩ましたり、今イス
ラエルは云えかし、³⁾ 彼等はわが若き時より、屢々我を攻め
悩ましたり、されど我に勝つ能わざりき、と。^三 罪人等はわ
が背の上を打ち敲けり。⁴⁾ 彼等はその不義を長うせり。^四 義
しき主は罪人等の首を斬り給わん。^五 シオンを憎む者はみな
恥を得て退き歸れかし。^六 彼等は抜かる前に枯れ果つる、
屋根の草の如くなれかし。^七 これは刈る者もその手に、束ぬ
る者もその懷に満たさず。^五 八また道行く人々も云いたること
なし、「汝等の上に主の祝福あれ。」^六 我等主の御名によりて
汝等を祝せり」と。^六

第二百二十八篇

1) 第十の階

の歌。バビロンにいた捕虜の子孫の作であるらしい。

詩一一九の註一参照。

2) ヘブレオの歴史の初期、

おもにエジプト滞在中の頃

3) 挿入句。——4) ヘブレオ語

本「耕す者はわが背を耕し」

我を虐待したとの意。

5) 麦を束ねる人は、短かく

切つた茎を、服の前裾を持

ちあげてそのなかに拾い集

めた。——6) 取り入れの時の

挨拶。得二・四参照。

第二百二十九篇

(第三百三十篇)

悔悛の歌

一 階きざはしの歌うた。1)
 主しゅよ、我われ深ふかき淵ふち2)より汝なんじに向むかいて叫さけび奉たてまつる。二 主しゅよ、わが
 声こゑを聴きき容いれ給たまえ。願ねがわくはわが懇ねが願いの聲こゑに、汝なんじの御おん耳みみを傾かたむ
 け給たまわんことを。三 主しゅよ、汝なんじもし不ふ義ぎに御おん目めを留とどめ給たまわば、
 主しゅよ、誰たれか能よく立たつことを得えんや。四 されど汝なんじには仁い慈くしみあり
 また主しゅよ、汝なんじの御おん法のり3)ゆえに、我われ汝なんじを待まち望のぞめり。わが魂たまはそ
 の御おん言ことばによりて支さえられたり、五 わが魂たまは主しゅに希のぞ望みをかけた
 り。六 朝あさの警まも衛りより夜よるに至いたるまで、イスラエルは主しゅに希のぞ望みを
 置おけよかし。4)七 そは主しゅに憐あは憫れあり、また彼かれに豊ゆたかなる贖あがいあ
 ればなり。八 されば彼かれは御おん自みらみイスラエルを、そのすべての
 不ふ義ぎより贖あがい給たまうべし。

第二百二十九篇 1) 第十一の
 階の歌。詩一一九の註一参
 照。―バビロンの捕虜たち
 の悔悛の祈り。聖会はこれ
 を死者のための典型的な祈
 りとして用いている。悔悛
 の七詩篇中の第六。
 2) 淵とは不幸や悲惨の譬え
 3) いろいろなお約束の付い
 ている律法。―4) ヘブレオ
 語「朝を待ち望む夜警の者
 よりも。」

第百三十篇 (第百三十一篇)

謙遜なる者の平安

一 ダヴィドの階の歌。¹⁾

主よ、わが心高ぶらず、わが眼驕らず、²⁾ 我また大いなる事
にも、分に過ぎたる奇しき事にも歩まざりき。³⁾ 実に我は謙
れる心がけにして、わが魂驕らざりき。さればわが魂の報酬
は、乳離れしたる幼児がその母に対する如し。³⁾ 願わくはイ
スラエルが主に希望を置かんことを、今のこの時より世々に
至るまで。

第百三十一篇 (第百三十二篇)

天主ダヴィド相互の約束

一 階の歌。¹⁾

主よ、ダヴィドと、そのすべての柔和

第百三十篇¹⁾第十二の階の歌。詩一一九の註一参照。

この詩篇はダヴィドの生涯の要約のようである。

2) 他人を見下して威張らず

3) 以前のようになく、母に抱かれておとなしく。

第百三十一篇 ¹⁾第十三の階の歌。詩一一九の註一参照。代下六・四一以下によれば、この詩篇は、サロモンの代に聖殿奉献、契約の櫃奉遷の祭をした時、唱え

三 二 三四 三 六 七 八 九 一〇 二 三

とを、御心に記め給え、^一いかに彼が主に誓いしか、ヤコブの天主に
誓を立てしかを。^三我必ずわが家の幕屋に入らず、わが臥床の褥に
上らず、^四わが眼に睡眠を、わが喉に仮睡を、^五わが顚顚に安息を容
さず、ついに主のために処を、ヤコブの天主のために幕屋を、見出す
まで、かくてあらん。」と。^六視よ、我等はエフラタ²⁾にて之を聞き、
森の野³⁾にて之を見出でたり。^七我等その幕屋に入り、その御足の立
ちし処⁴⁾にて礼拝せん。^八主よ、起ちて、汝の鎮まり給う処⁵⁾に入り
給え、汝の聖なる御櫃と共に。^六汝の司祭等は正義を着、汝の聖者等
は喜び躍れかし。^{一〇}汝の下僕ダビドのために、汝の受膏者⁷⁾の面を
斥け給うなかれ。^二主はダビドに信実を誓い給いたれば、之を破り
給うことあらじ。即ち曰わく「我汝の胎の果の中より、汝の位に即か
しめん。^八」^三汝の子等もしわが契約と、わが彼等に教うべき証詞とを
守らば、彼等の子等もまた世々に至るまで汝の位に坐すべし。」と。

たり歌つたりした
祝いの歌の一つで
あるらしい。
2) エフライムと同
義語で、シロの村
をさす。――3) ヘブ
レオ語キリアト・
イエアリム(森の
町)。⁴⁾ 契約の櫃
の上。――5) サロモ
ンの聖殿に用意さ
れた永久的鎮座の
場所。――6) 代下六
・四一。――7) サロ
モン。――8) 母下七
・一二。路一・五
五。徒二・三〇。

一三 それ、主はシオンを選び給えり、これを御自分の御座所を選び給えり。一四 即ち曰わく、「是こそ世々の世々に至るまでわが安息所なれ。我ここに住わん、そは我之を選びたればなり。一五 我その寡婦⁹⁾を祝しに祝せん、その貧しき者をパンに飽かしめん。一六 我その司祭等に救拯を着せん、またその聖者等は喜びて躍りに躍らん。一七 我彼処にダヴィドの角を生えしめん、わが受膏者のために燈火を備えた¹⁰⁾り。一八 彼の敵には我恥辱を着せん、されど彼の上にはわが聖なる物¹¹⁾輝くべし。」と。

9) ヘブレオ語本「その糧」。一〇) 角と燈火(路二・三二)とがダヴィドに与えられるといふのは、メシアが彼の子孫中から出るから。一馬三・一。一一) メシアの王としての、また大司祭としての威光を示す頭の冠。

第百三十二篇 (第百三十三篇)

同胞の和合

一 「ダヴィドの階の歌¹⁾」
視よ、同胞一致して住むは、²⁾ いか
善く、いかに楽しきかな。 二 そは頭に

第百三十二篇 一) 第十四の階の歌。詩一一九の註一参照。ヘブレオ語本、イタラ訳、ウルガタ訳によれば、本篇の作者はダヴィド。實際この中にはこの偉大な王の精神が横溢している。一2) シオンが祝福の場所と云

三
 注ぎし香油の、髭に、アーロンの髭に流れ
 下り、その衣の裾に流れ下りしが如く、³⁾ 三へ
 ルモンの露の、シオンの山に下りしが如く。⁴⁾
 実に主は彼処にて御祝福を、世々に及ぶ生命
 を遣り給えるなり。

第百三十三篇 (第百三十四篇)

夜の讚美

一 階の歌。¹⁾
 視よ、いざ、主を讃め奉れ、主のすべての下僕等よ、主の
 家に、我等の天主の家の大庭に立つ者よ。²⁾ 夜に³⁾ 汝等、
 聖所に向かいて汝等の手を挙げ、主を讃め奉れ。³⁾ 願わく
 は天地を造り給いし主、シオンより汝⁴⁾ を祝し給はんこと
 を。

つてあるから(三節)、共に住むとは、イエル
 サレムで共に祝祭を行うことをさすのらしい。
³⁾ パレスチナ独特の身だしなみの譬えは、シオ
 ンから、そこに集まつた参詣者達に下る貴い御
 祝福を意味するもの。――⁴⁾ ヘルモン山からはイ
 エルサレムへ涼風が吹いてくる。

第百三十三篇¹⁾第十五の、かつ
 最後の、階の歌。詩一一九の註
 一参照。――²⁾ 司祭レヴィ人など
 アーロンの子孫。――³⁾ 夜にも祈
 る。――⁴⁾ 多分聖殿の夜警のかし
 らに対する祝福の挨拶の言葉。

第百三十四篇 (第百三十五篇)

いざ天主を讃美せん

一 アレルヤ。¹⁾

二 汝等主の御名を讃めよ。讃めよ下僕等、主を、
三 汝等主の家に、我等の主の家の大庭に、立つ者よ。²⁾ 三 主を讃めよ、主は慈しみ深く在せば。その
四 御名に奏で歌え、そは芳しければ。 四 所は主、御自分のためにヤコブを、
五 その大御宝としてイスラエルを選び給いたればなり。 五 それ、我は主の偉大
六 に在すと、我等の天主のあらゆる神々に優り給うとを知れり。 六 主は天に
七 おいても地においても、海においてもすべての淵においても、何にもあれ
八 その欲し給いし所を、なし給えり。 七 彼は地の極より雲をもたらし、電光
九 を雨となし給えり。その御倉庫よりは風を出し給う。 八 彼は人より畜に至
るまで、エジプトの初子仔を撃ち給いき。³⁾ 九 エジプトよ、彼は汝の只中に
徴と奇蹟とを遣して、ファラオとそのすべての臣僕等とに下し給えり。⁴⁾

第百三十四篇

1) いわゆるアレルヤの詩篇の一つ。詩一〇四、一〇五兩篇の註一参照。 2) 詩一三三・一及び註一参照。 3) 出一二・二九。 4) 出七章以下。

二〇 彼は多くの異邦人を撃ち、勢力ある王等を殺し給いぬ。⁵⁾ ニアモル人の王
 二 セホン、バサンの王オグ、及びカナアンの諸々の王国即ち是なり。⁶⁾ 三 かく
 三 て彼は彼等の地を嗣産として、その御民イスラエルに嗣産として、与え給い
 一五 ぬ。三 主よ、汝の御名は永遠に存す、主よ、汝の記憶は千代に八千代に及ぶ。
 一四 それ、主はその御民を審判き、その下僕等に関する祈願を受け給わん。一五 異
 一六 邦人の偶像は白銀や黄金にして、人の手の作なり。⁷⁾ 一六 口あれども物言わず、
 一七 眼あれども見ず。⁸⁾ 一七 耳あれども聞かず、またその口には氣息あらざるなり。
 一八 これを作る者等は、これに似よかし。これに依頼む者いずれもまた然れ。
 一九 イスラエルの家よ、主を讃めよ。アーロンの家よ、主を讃めよ。⁹⁾ 二〇 レヴ
 二一 イの家よ、主を讃めよ。汝等主を畏るる者よ、主を讃めよ。三二 イエルサレム
 に住み給う主は、シオンより祝せられさせ給え。

5) 書一二
 ・一、七
 6) 民二一
 ・二四、
 三五。
 7) 詩一一
 三・一二
 一六参
 照。
 8) 智一五
 ・一五。
 9) 詩一一
 三・一八
 一八九及
 詩一一七
 ・二一四
 参照。

第三百三十五篇 (第三百三十六篇)

主の御憐憫の讚美

一 アレルヤ。

汝等主を頌え奉れ、彼慈しみ深く在せば、その御憐憫は永遠なれば。¹⁾

二 汝等神々の天主²⁾を頌え奉れ、その御憐憫は永遠なれば。三 汝等諸々

の主の主を頌え奉れ、その御憐憫は永遠なれば。四 彼独り大いなる奇蹟

をなし給う、こは、その御憐憫永遠なればなり。五 彼は御智慧もて天を

造り給いぬ、こは、その御憐憫永遠なればなり。³⁾六 彼は水の上に地を堅

く据え給いぬ、⁴⁾こは、その御憐憫永遠なればなり。七 彼は大きいなる光

を造り給いぬ、こは、その御憐憫永遠なればなり。八 かくその御憐憫永

遠なればこそ、昼を掌どるべき日を、九 その御憐憫永遠なればこそ、夜

を掌るべき月と星とを然なし給いしなれ。⁵⁾十 彼はエジプトをその長子諸

共、撃ち給いぬ、こは、その御憐憫永遠なればなり。⁵⁾二 彼は彼等の只

第三百三十五篇

- 1) 詩一一七・一参照。それと冒頭が同じ。この詩篇は聖会で始終用いる連禱の最も古い手本。
2) 申一〇・一七。
3) 創一・一。
4) 大陸は海水の上に浮いているように見える。
5) 出一二・二九。

二五 我等の敵より我等を救い給いしなれ。二五 彼はすべての肉物に食物を与え給う、こはその御憐憫永遠なればなり。二六 汝等天つ神を頌え奉れ、こは、その御憐憫永遠なればなり。
二六 汝等諸々の主の主を頌え奉れ、こは、その御憐憫永遠なればなり。

第百三十六篇 (第百三十七篇)

とらわれの時を偲びて

一 イエレミヤの、ダヴィドの詩。¹⁾
バビロンの河²⁾の畔、我等彼処に坐し、シオンを憶い出でては泣きぬ。二 我等その只中なる楊柳に、我等の樂器をかけた³⁾ 即ち彼処にて、我等を捕虜として引き行きし者等、我等に歌の詞を求め、我等を連れ去りし者等、「我等にシオンの歌の中より、讚歌を一つ歌い聞かせよ。」と云いしが、四 かくて我等他国にて主の歌を唱うべけんや。五 イエルサレムよ、我もし汝を忘れなば、わが右の手忘れられよかし。六 我もし

第百三十六篇 1) ダヴィドの詩に倣いイエレミヤの精神で作られたこの詩篇は、バビロンの捕囚から帰還後間もない頃の作らしい。
2) エウフラト、チグリス、カボラス、およびウライの四大河。― 3) 絃樂器の伴奏をつけたのは、通常ただ喜びの歌にだけ。

汝を思い出でざりせば、我もしイエルサレムを
わが愉樂の首位に置かざりせば、わが舌わが顎
に着けよかし。主よ、イエルサレムの日に、
エドムの子等を思い出で給え、彼等曰く「毀て
これをその基礎までも毀て。」と。憐なるバビ
ロンの娘よ、汝が我等に与えし汝の報に報いん
者は幸福なるかな。汝の幼兒等を捉えて、岩
に投げつけん者は幸福なるかな。

第百三十七篇

(第百三十八篇)

主の道を謳うべし

一 ダヴィド作。

主よ、我わが心を尽して、汝を讃え奉らん、そ
は汝わが口の言を聴き給いたればなり。我天使

4) まだ救われぬ異教の人たちは、ただ正義
しか知らない。敵をも赦す愛が始めて根本
の掟とされたのは、イエズス・キリストの
聖福音において。聖福音の偉大な点は、苦
しめられた者の復讐の欲求をすべて禁止し
たばかりでなく、惡に報いるに善を以てす
ることを、教え且できるようにした所にあ
る。――5) 小児に対するかかる仕打ちは、昔
戦争中一般に行われた習慣の一つ。

第百三十七篇

1) ダヴィドの精神によつて
作られたもの。

二 等²⁾の眼前にて汝に向かい奏で歌わん、^三汝の聖なる御殿に向かいて伏し
 おがみ、汝の御憐憫と汝の信実とのゆえに、汝の御名を讃え奉らん、そは
 三 汝その御名を一切に優りて大いならしめ給いたればなり。^三いつの日にて
 もわが汝を呼び奉らん時、我に応え給え。汝はわが魂の中なる力を増し給
 四 わん。^四願わくは地の王等がみな、汝を讃え奉らんことを、そは彼等汝の
 五 御口の諸々の言を聞きたればなり。^五しかして彼等主の道につきて歌えか
 六 し、そは主の御栄光大いなればなり。^六実に主は高貴く在して、卑き者を
 七 眷顧給う、されど高ぶる者はただ遠くより之を知り給うのみ。^七我患難の
 八 只中を歩まん時は、汝我を生かし給わん、しかして汝わが敵の忿怒に対し
 て、汝の御手を差し伸べ給えり、かくて汝の御右手我を救えり。^八主はわ
 がために報い給わん、主よ、汝の御憐憫は永遠なり。汝の御手の作を蔑視
 み給うなかれ。^三

2) ヘブレオ語「エロヒム」。これは地上の権勢ある者をもさすことがある。—3) 汝は汝のものを完成するためわがものを憐み給うである(聖アウグスチノ)。

第百三十八篇 (第百三十九篇)

天主の遍在と全知

一 終まで、¹⁾ ダヴィドの詩。²⁾
 主よ、汝我を験し、我を知り給えり。³⁾ 汝はわが坐すをも、また
 わが起つをも、⁴⁾ 知り給えり。³⁾ 汝は遠方より、⁵⁾ わが思念を了り
 給えり。わが徑とわが繩張とは、汝の探り究め給える所なり。
 四 また汝はわが道を悉く前より見抜き給えり、そはわが舌に言⁶⁾
 なければなり。⁵⁾ 視給え、主よ、汝は最新しきをも、旧きをも、
 一切を知り給えり。汝は我を形成り、わが上に汝の御手を置き給
 えり。⁷⁾ 我につきての汝の御知識は我に不可思議となれり、そは
 高くして、我及ぶ能わず。⁷⁾ 我汝の御霊を離れて、何処にか行く
 べき。また汝の御面前より、何処にか逃ぐべき。⁸⁾ 我天に昇る
 とも、汝彼処に在し、我冥府に下るとも、汝そこに在す。⁸⁾ 我黎

第百三十八篇 1) 詩篇

第四第五の註一参照。

2) 本篇はバビロン捕囚

時代かその後の作と信

じている人が多い。

3) 耶一七・一〇参照。

4) 私が休んでいる時や

働いている(働こうと

起き出る)時の思いや

言葉。1) 5) 前以て、豫め

6) 汝の知り給わぬ言葉

7) 天主の支配力を象徴

百一三・二一参照。

8) 歴九・二。

一〇 明に翼を借りて、海⁹⁾の涯に住むとも、^{一〇}彼処にてさえ、
 汝の御手我を導き、汝の御右手我を保たん。^二また我は云
 いぬ、「或は闇我を蔽い、夜はわが喜悦によりてわが光と
 ならん。」と。¹⁰⁾ ^{二三}されど闇すら汝には暗からずして、夜も
 汝には昼の如く明るからん。その闇の如く、その光も然り。
^{二三}抑々汝はわが腎¹¹⁾を掌中にし、わが母の胎より我を受け
 取り給えり。^{一四}我は汝を讃め称え奉る、そは汝畏むべく
 偉大に在せばなり。奇しきかな汝の御作、しかしてわが魂
 深くそを知れり。^{一五}わが骨は汝に隠れなし、そは汝が人知
 れず造り給えるものなり。またわが物質は地の底¹²⁾にあり
 き。^{一六}わが全からざるは、汝の御眼の照覧し給う所にして
 汝の書にはすべて録されん、日々はその中に誰もあらざる
 間に、定めらるべし。¹³⁾ ^{一七}されど天主よ、汝の友は、我に

9) ヘブレオ人の方角の云いあら
 わし方で、「西」のこと。
 10) 天主の一切をみそなわし給う
 ことをよしとする人々の慰めに
 なる。この箇所は、キリスト御
 復活前夜聖土曜日のエクスルテ
 ソトに用いられているが、それ
 はその夜がキリスト御復活の喜
 びを我々にもたらしたから。
 11) 体の内部。天主は髓や血管や
 骨や肉を織りなして、精巧な織
 物となし給うた。——12) 地の底に
 潜んでいるように私が隠れてい
 た母の胎。——13) 天主の豫知は、
 作者にとつて、人間のあらゆる
 行為の書いてある本のようなも
 の。

一八 は太く尊ばれたり、彼等の権力は甚だ強くなれり。一八我これを数え
 一九 んか、砂よりも多からん。我起き出でしに、なお汝と共にあり。14)
 二〇 天主よ、願わくは汝罪人を殺し給わんことを、血の人々よ、汝等
 二一 我より離れ去れかし。15) 二〇そは汝等思念の裡にて「彼等徒らに汝の
 二二 諸市を得ん。」と云えばなり。16) 二三主よ、我は汝を憎みし者等を憎
 二三 み、汝の敵ゆえに憔悴れたるにあらずや。二三我は満身の憎悪もて彼
 二四 等を憎む、かくて彼等は我に敵となりたり。二三天主よ、我を驗して
 二五 わが心を知り給え。我を査べて、わが徑を識り給え。二四しかして我
 二六 に不義の途ありやをみそなわし、我を永遠の道に導き給え。

第百三十九篇

(第百四十篇)

敵に対して主の御助けを願う

一 終まで、1) ダヴィドの詩。2)
 二 主よ、悪しき人より、我を助け

第百三十九篇 1) 詩篇第四第五の註一参照。――2) この詩は
 間違はなくダヴィド王の作。その作られたのは多分サウル
 の迫害時代。

14) 作者は寝ても覚め
 ても天主のことばか
 り考えているが、そ
 の御英智の深さは底
 知れぬ。――15) 悪とあ
 らゆる関係を断つ。
 16) 天主がイスラエル
 人に一時パレスチナ
 の町々を与えること
 ができてゐるが、
 やはり我々が勝つ。

三 出し、不義の人より、我を救い取り給え。三 彼等は心の裡にて不義を企
四 めり。彼等は終日戦闘を図りぬ。四 彼等は蛇の如く、その舌を鋭くせり、
五 その唇の下には燬の毒あり。五 主よ、罪人の手より我を護り、不義の人
六 々より我を救い出し給え、そは彼等はわが歩を覆さんと企みたればな
七 り。六 傲る者は我に対して畏を伏せ、網として索を張り、わがため道の
八 辺に躓かす物を置きたり。七 我は主に云いぬ、汝はわが天主なり。主
九 よ、わが懇願の声を聴き容れ給え。八 主よ、主よ、わが救拯の力よ。汝
は戦闘の日^ひにわが頭を蔽い給えり。九 主よ、わが望みに反して、我を罪
人に付し給うなかれ。彼等は我に敵かいて企みをなせり。彼等が誇るこ
とのなからんために、汝我を棄て給うなかれ。一〇 我を囲む者等の頭
二 その唇の害毒、彼等自身を覆わん。二 彼等の上には炭火^く降らん。汝
三 彼等を火に投げ入れ給わん。彼等は艱難に堪えざるべし。一二 舌多き人は
地上^{ちじよう}にて栄えざらん、不義^{ふぎ}の人は禍の襲う所となりて、滅ぶるに至るべ

3) 本五・一一。
羅三・一三。一
ヘブレオ語本
「セラ」。一四) ヘ
ブレオ語本「セ
ラ」。一五) ヘブレ
オ語本「セラ」。
6) 天主がわが頭
を蔽い護り給う
間に、願わくは
我を圧迫する者
の頭上に禍の下
らんことを。
7) 昔ソドマに降
つたように。創
一九・二四参照。

一三 し。我は知る、主が乏しき者に義を行い、貧しき者の仇を報い給わん
 一四 ことを。されど義しき者は汝の御名を頌え、直き者は汝の御顔の前
 に⁸⁾住まわん。

8) 汝の優渥なる御保護の下に。

第百四十篇 (第百四十一篇)

悪人の陰謀に対する義人の祈願

一 ダヴィドの詩¹⁾

主よ、我汝に向かいて呼ばわり奉れり、我に応え給え。わが汝に向
 かいて呼ばわり奉る時、わが声に注意し給え。わが祈禱は香²⁾の
 如く汝の御眼前に上れかし。わが手を挙ぐるは、夕の犠祭³⁾の如く
 なれかし。主よ、わが口に守衛を、わが唇の周圍に戸を立て給え。
 四 不義を行う人々と共に、罪の弁解をなさんとて、わが心を悪意あ
 る言葉に傾かしめ給うなかれ。さらば我彼等の選みたるものと、何
 の関係もなからん。義しき者は情もて、我を懲らし、我を責めん。

第百四十篇 1) サウ

ルに追われていた頃の作らしい。——2) 朝
 夕香壇でくゆらす香
 3) 夕の犠祭には毎日
 小羊を屠り、それと
 共に香や麦粉や葡萄
 酒などをささげた。

六 されど罪人の油⁴ わが頭に注がるることなかれ。そはわが祈禱、
 彼等の好む所になお反きおればなり。 六 彼等の士師等は、⁵ 岩よ
 り落ちて挫けたり。彼等は力あるに由りて、わが言を聴くべし。⁶
 七 土塊が地の上に投げられたる如く、我等の骨は冥府の辺に散ら
 八 されたり。⁷ 八 されど主よ、主よ、わが眼は汝に向かう。我は汝に
 九 希望を置けり。わが魂緒を取り去り給うなかれ。 九 彼等が我にか
 一〇 けたる畏より、また不義を行ふ者等の蹟かす物より、我を護り給
 え。一〇 罪人等は己が網にかからん、我は過ぎ去るまで、独りおる
 なり。⁸

第百四十一篇 (第百四十二篇)

死のもだえのうちの祈り

一 ダヴィドの教訓¹⁾ 彼が洞窟にありし
 時²⁾の祈禱。

第百四十一篇 1)ヘブレオ語「マスキル」。歌の種
 類。―2)この事は母上二二・一に述べてある。

4)油は幸福の象徴。
 5)ダヴィドを悩ました不敬なる輩の長たち。
 6)天罰が下れば、私の祈りの聴き入れられたことがわかるだらう。
 7)暴力でわれらの命を奪おうとする。―8)迫害者に逢わずに網(危険)を通り過ぎる。

二 我わが声をあげて、主に呼わり奉りぬ、わが声をあげて、主に願
 い奉りぬ。³⁾ 我はその御眼前にわが祈禱を披瀝し、その御前にわが
 患難を陳べ奉る。⁴⁾ わが氣力我より失せんとする時にも、汝はわが
 徑⁴⁾ を知り給う。わが歩みしその道に、⁵⁾ 彼等は我にと畏を伏せた
 り。⁵⁾ 我右を眺め、見渡したれど、我を知る者なかりき。⁵⁾ 逃げ隠
 るる方法、我に絶えて、わが魂を顧みる者なし。⁶⁾ 主よ、我汝に向
 かいて、呼わり奉りぬ。我は云いぬ、「汝はわが希望なり、生ける
 者の国⁶⁾ にてわが受くべき分なり」と。⁷⁾ わが懇願に注意し給え、
 我甚だ卑くせられたればなり。我を迫害む者等より、我を救い出し
 給え、彼等は我に優りて強ければなり。⁸⁾ 我をして汝の御名を頌え
 しめんために、わが魂を牢獄⁷⁾ より導き出し給え。汝が我に報い給
 うまで、義しき者等、我を待つなり。⁸⁾

3) 本七六・二。
 4) すなわちわが慰め
 5) 右はいつも保護者
 の立つ側。作者は天
 主がそこに立ち給う
 よう祈る。――6) 生け
 る者の国とは、作者
 がその近きを感じて
 いる「よみの国」と
 反対でこの世のこと
 詩一五・五参照。
 7) 患難のたとえ。殊
 にかれが潜んでいた
 洞窟。――8) アシジの
 聖フランシスコは、
 死ぬ時この一篇を唱
 え、最後の節を唱え
 終つて息絶えた。

第百四十二篇 (第百四十三篇)

患難に遭いて御憐みを乞う

一 ダヴィドがその子アブサロムの追う所となりし時の詩。¹⁾
 主よ、わが祈禱を聴き容れ給え。汝の信実によりてわが請願を御耳に
 留め給え。汝の正義によりて我に応え給え。²⁾ 汝の下僕と共に審判に
 臨み給うなかれ、そは汝の御眼前にては、生ける者誰も義しとせられ
 ざるべければなり。³⁾ 実に敵はわが靈魂を迫害み、わが生命を地に打
 伏せ、死して久しき者の如くに我を暗闇に置きたり。⁴⁾ かくてわが靈
 わが衷にて憂い、わが心わが衷にて乱れたり。⁵⁾ 我は往古の日々を偲
 び、汝の諸々の御業を思い廻らし、汝の御手のなし給える所³⁾を考え
 廻らしぬ。⁶⁾ 我汝に向かいてわが手をさし伸べぬ、わが魂汝を慕いて、
 水なき地の如し。⁴⁾ 主よ、速かに我に応え給え。わが靈は衰えたり。
 我に汝の御面を背け給うなかれ。恐らくは我穴に下る者の如くならん。

第百四十二篇

- 1) 母下一七章。――これは悔悛の詩篇の第七。――2) 作者はいわば暗いよみの国にいるような氣持であつた。
 3) 以前汝が私にし
 て下さつたよい事
 4) ヘブレオ語本「セラ」。音楽の調子を強めて歌詞の意を強調すること。

八 我^{われなんじ}汝^{のそみ}に希望^{おほ}を置き奉^{まつ}りたれば、朝^{あした}に汝^{なんじ}の御憐憫^{おんあわれみ}を我^{われ}に聞^きかしめ給^{たま}え。我^{われなんじ}汝^にに
 わが魂^{たま}を挙げ奉^{まつ}りたれば、わが歩^{あゆ}むべき道^{みち}を我^{われ}に知^しらしめ給^{たま}え。九 主^{しゆ}よ、我^{われ}を
 わが敵^{てき}より救^{すく}い出^{いだ}し給^{たま}え。我^{われなんじ}汝^の御許^{みもと}に逃^{のが}れ来^{きた}れり。一〇 汝^{なんじ}はわが天主^{かみ}に在^{ましま}せば
 汝^{なんじ}の御旨^{みむね}を行^{おこな}うことを我^{われ}に教^{おし}え給^{たま}え。汝^{なんじ}の善^よき靈^{みたま}は我^{われ}を直^{なお}き地^ちに導^{みちび}き給^{たま}うべ
 し。二 主^{しゆ}よ、汝^{なんじ}は御名^{みな}のため^に、汝^{なんじ}の公義^{こうぎ}によりて、我^{われ}を活^いかし給^{たま}わん。汝^{なんじ}は
 わが魂^{たま}を患難^{なやみ}より導^ひき出^{いだ}し、三 汝^{なんじ}の御憐憫^{おんあわれみ}によりてわが敵^{てき}を打^{うち}ち散^ちらし給^{たま}わ
 ん。かく汝^{なんじ}はわが魂^{たま}を悩^{なや}ます者^{もの}を悉^{ことごと}く滅^{ほろ}ぼし給^{たま}うべし。そは我^{われなんじ}汝^の下僕^{しもべ}なれば
 なり。

第百四十三篇

(第百四十四篇)

主を王と戴く民は幸いなるかな

一 ゴリアトに敵対^{むか}うダヴィドの詩^し。¹⁾

祝^{しゆく}すべきかな、主^{しゆ}わが天主^{かみ}、闘^{たたか}うことをわが手^てに、
 戦^{いくさ}争^{そう}することをわが指^{ゆび}に、教^{おし}え給^{たま}う者^{もの}。

第百四十三篇

1)「ゴリアトに向かう」はヘブ
 レオ本になし。ユデアの教師の解釈者たちは
 この作詩の時を、ダヴィドが幾度もフィリス
 ト人に勝つた後、世を治めた最初の頃として

5) 詩五

〇・一

三。

二 彼はわが仁慈、わが避難場にして、わが扶助者、わが解放者、わ
 三 が庇護者なれば、我これに希望を置けり。彼はわが民を我に服わせ
 四 給う者なり。主よ、人そも何者なれば、汝之に御躬らを知らせ給
 五 い、また人の子そも何者なれば、汝之を重んじ給うや。人は無にひ
 六 とし、その日は影の如く過ぎゆく。主よ、汝の諸天を傾けて下り
 七 山々⁴⁾に触れ給え、さらばそは煙を吐かん。電光を閃かし給え、
 八 さらば汝そを散らし給うべし、汝の御矢を放ち給え、さらば汝そを
 九 壊り給うべし。高処より汝の御手をさし伸べ、大水より、異邦人
 一〇 の子等⁵⁾の手より、我を助け出し我を救い給え。彼等の口は空し
 一 き事を語れり、彼等の右手⁶⁾は不義の右手なり。天主よ、我汝に
 二 向かいて新らしき歌を歌い、汝に向かいて十絃の琴を奏でん。⁷⁾
 三 汝は王等に救拯を与え給う者、禍の劍より汝の下僕ダヴィドを救
 四 い給える者なり。二我を助け出し給え。異邦人の子等⁸⁾の手より、

いる。——2) 実際には
 ダヴィドはイスラエ
 ル諸族の大部分を武
 力で征服しなければ
 ならなかつた。しか
 しダヴィドは戦勝を
 すべて天主の御祐助
 のおかげとしている
 3) 百八・九。一四・
 二。——4) 自然界、靈
 界、史上のすべての
 偉大なもの。——5) 異
 教徒である敵。
 6) 同盟や契約を結ぶ
 には手を打つ。
 7) 詩三二・二参照。
 8) 本篇七節と同様。

二 我^{われ}を救^{すく}い給^{たま}え。彼等^{かれら}の口^{くち}は空^{むな}しき事^{こと}を語^{かた}れり、彼等^{かれら}の右^{みぎ}手^ては不義^{ふぎ}
 一三 の右^{みぎ}手^てなり。二 彼等^{かれら}の男子^{おとこ}等は、その若^{わか}き時^{とき}には新^{あた}らしき草^{くさ}木^き
 一四 の如^{ごと}く、彼等^{かれら}の女子^{おんな}等は聖^み殿^{どの}の如^{ごと}く、磨^{みが}き立^たて周^{まわ}りを飾^{かざ}れり。
 一三 彼等^{かれら}の穀^く倉^{くら}は満^みちて、此^{これ}より彼^{かれ}に溢^{あふ}れ、彼等^{かれら}の羊^{ひつじ}は仔^こ多^{おほ}くして
 一四 その出^いるや数^{かず}知^しれず、一四 彼等^{かれら}の牡^お牛^{うし}は肥^こえたり。垣^{かき}には倒^{たお}れたる
 一五 所^{ところ}も、破^{やぶ}れたる所^{ところ}もなく、また彼等^{かれら}の街^{まち}衢^{また}には嘆^{なげ}きの叫^{さけ}びなし。
 一五 人々^{ひとびと}はこれら^もを有^もてる民^{たみ}を、幸^{さい}福^{ふく}なりと云^いえり。されど主^{しゅ}を已^{おの}
 一五 が天主^{かみ}とする民^{たみ}こそ幸^{さい}福^{ふく}なれ。10)

第百四十四篇

(第百四十五篇)

天主の偉大と仁慈との讚美

一 ダヴィド自作^{じさく}の讚美^{さんび}。1)
 二 わが王^{おう}天主^{かみ}よ、我^{われ}汝^{なんじ}を崇^{あが}め、世^よ々に亘^{わた}り、世^よ々の世^よ々
 二 に至^{いた}るまで、汝^{なんじ}の御^み名^なを頌^{たた}え奉^{まつ}らん。二 我^{われ}いつの日^ひに

9) ヘブレオ本ではこれ
 も下記も一人称になつ
 ている。即ち「我等の
 男の子らは……」云々
 10) イスラエルの幸福は
 我々が真の神天主を認
 め且崇める所にある。

第百四十四篇

1) ヘブレオ語「テヒ
 ラー」。アルファベット文字で各節
 が始まつている詩であるが、現在の
 ヘブレオ本ではヌンの字がない。

も汝を頌え、世々に亘り、世々の世々に至るまで汝の御名を讃め奉らん。

三 主は偉大に在して、大いに讃むべきかな、その偉大さは限りなし。四 代ま

た代、汝の御業²⁾を讃め、汝の奇蹟を宣べ伝えん。五 彼等は汝の聖なる御稜

威の大きいなるを語り、汝の奇しき御業を談らん。六 また彼等は汝の畏るべき

大能を説き、汝の偉大なるを談らん。七 彼等は汝の仁慈溢るる記憶を云い出

で、汝の正義に喜び躍らん。八 主は憐みに満ち、情に富み、氣長にして仁慈

深く在す。九 主はすべてのものに愛深く在し、御憐憫はそのあらゆる御作に

及ぶ。一〇 主よ、汝のすべての御業は汝を頌え、汝の聖者等³⁾は汝を讃めよか

し。二 彼等は汝の御国の栄光を説き、汝の御権能を語らん、三 そは、汝の御

権能と、汝の御国の大いなる栄光とを、人の子等に知らせんためなり。四 汝

の御国は万世の御国にして、汝の支配はあらゆる代々に及ぶ。主はそのすべ

ての御言葉信実にして、その諸々の御業聖なり。五 主はすべて倒るる者を支

え、挫けたる者を引き立て給う。一五 主よ、万人の眼は汝を仰ぎ望む、汝は宜

2) 天主が

イスラエ

ルになし

給うた大

なる御業

3) 天主の

忠実な友

すべての

敬虔なイ

スラエル

人。

一六 き時に食物を彼等に与え給う。⁴⁾ 一六 汝は御手を開きて、あらゆる
 一七 生ける物に祝福を充滿し給う。一七 主はそのすべての道義しく、そ
 一八 のすべての御業聖にて在す。一八 主はすべて之を呼び奉る者、すべ
 一九 て誠もて之を呼び奉る者に近く在す。一九 彼は彼を畏るる者の志望
 二〇 を果し、その懇願を聴き容れて、之を救い給わん。二〇 主はすべて
 二 彼を愛し奉る者を守り給う。されど不義なる者を悉く滅ぼし給わ
 二 ん。二 わが口は主の讚美を語らん。⁵⁾ また肉⁶⁾は擧りて、世々に
 亘り、世々の世々に至るまで、その聖なる御名を讚め奉れかし。

第百四十五篇

(第百四十六篇)

真の助力者はただ主のみ

一 アレルヤ。¹⁾ アツゲオ及び
 二 ザカリヤによる。²⁾
 三 わが魂よ、主を讚めよ。我

第百四十五篇 1) 以下六つのアレルヤ詩篇が、詩篇書全巻の結
 尾をなす。詩一〇四の註一参照。 2) アツゲオ及びザカリヤと
 いう語はヘブレオ本にはない。これはこの両予言者が、バビロ
 ンの捕囚の終つて後その時代に作られたこの詩篇を、度々歌わ

4) 天主はかくも尊き王
 にましましながら、人
 々には慈父の如く、そ
 の各々のため配慮し、
 必要に応じてこれに糧
 を与え給う。 5) 終り
 に作者はまた一節の讚
 美の思想に帰る。

6) 即ち全人類。

三 はわが生ける間、主を讃め奉らん、わが在らん限りわが天主に奏で歌い奉らん。
 四 諸侯に依り頼むなかれ、三人の子等にも然するなかれ、彼等によりては
 五 救拯なければなり。四 その氣息出で去らんか、彼旧の土に歸るべく、その目
 六 には彼の思念³⁾ 悉く滅びん。五 幸福なるかな、ヤコブの天主を己が祐助者と
 七 し、主己が天主にその希望を置く者、⁴⁾ 六 彼こそは天地、海、及びその中なる
 八 万の物を造り給いし者、七 世々に亘りて信実を守り、⁵⁾ 暴虐を忍びたる人々
 九 のために審判を行い、飢えたる人々に食を与え給う者なれ。主は足楷を嵌め
 一〇 られたる者を解き給う、八 主は盲人に光を与え給う、主は挫けたる者を引き
 一 立て給う、主は義しき者を愛し給う。九 主は他国の者を守り給う。彼は孤児
 二 と寡婦とを支え給わん、されど罪人の道は之を滅ぼし給うべし。一〇 主は世々
 三 に亘りて、シオンよ、汝の天主は千代万代に、統治し給わん。

せたとい
 う意味。
 3) 計画。
 4) 徒一四
 ・一四。
 黙一四。
 七。
 5) 人間は
 度々約束
 を守らな
 いが、天
 主は必ず
 御約束を
 果たし給
 う。

第百四十六篇 (第百四十七篇)

大能の天主への讃美

一 アレルヤ。1)
 汝等主を讃めよ、奏で歌うは善きことなれば。我等の天主に、喜
 びに満てる相応わしき讃美あれかし。二 主はイエルサレムを建て
 給う、彼イスラエルの散れる者等を集め給わん。三 彼は心の碎け
 たる者を癒し、2) その傷に繃帯し給う。3) 四 彼は星の衆多を数え、
 すべてこれをその名もて呼び給う。4) 五 我等の主は偉大にして、そ
 の御徳能また偉大なるかな。その御智慧は無量なり。六 主は柔和
 なる者5) を引き挙げ罪人等を地にまで圧し伏せ給う。七 汝等感謝
 して主に歌え、小琴もて我等の天主に奏で歌え。八 彼は雲もて天
 を覆い、雨もて地に備え給う者、山々6) に草を、人の用に蔬菜を
 生ぜしめ給う者、九 家畜に、また彼に向かいて啼く鴉の仔に、そ

第百四十六篇 1) 詩一

○四及び一〇五の註一
 参照。一2) 詩三三・一

九及び賽六一・一参照

3) 選民の傷。一4) それ

を一つ一つ詳しく知つ

ておいでになる。

5) おとなしく耐え忍ぶ

者。一6) 人間の手の届

かない所までも。

一〇 の食^{しよく}を与^{あた}え給^{たま}う者^{もの}なり。7) 一〇 彼は馬^{うま}の力^{ちから}を欲^{この}み給^{たま}わじ、また人^{ひと}の脚^{あし}8) を嘉^{よみ}し給^{たま}わじ。
二 主^{しゆ}は之^{これ}を畏^{おそ}れ奉^{まつ}る者^{もの}、その御憐憫^{おんあわれみ}に希望^{のぞみ}を置^おく者^{もの}を、嘉^{よみ}し給^{たま}うなり。

7) 天主は御自ら動物のため配慮し、これを養い給うが(八節)、更にまた御民が忠誠を守る限り、いかに強い敵からでも、苦しめられ圧迫されるかれらを、保護して下さる。——8)それがどんなに強く、速くても。

第百四十七篇

シオンよ、汝の天主を讃め称えよ

一 (一二三) アレルヤ。1)
イエルサレムよ、主^{しゆ}を讃^ほめ称^{たた}えよ、シオンよ、汝^{なんじ}の天主^{かみ}を讃^ほめ称^{たた}えよ。三(一三) そは彼汝^{かれなんじ}の門^{もん}の門^{かぬき}を堅^{かど}うし、2) 汝^{なんじ}の内^{うち}なる汝^{なんじ}の子等^{こら}を祝^{しゆく}し給^{たま}いたればなり。三(一四) 彼汝^{かれなんじ}の四境^{さかい}に平和^{へいわ}を与^{あた}え、汝^{なんじ}を麦^{むぎ}の膏^{あじ}味^{よき}3) に飽^あかしめ給^{たま}う。四(一五) 彼^{かれ}その勅^{みこと}り4) を地^ちに下^{くだ}し給^{たま}う、その御言^{みことば}は速^{すみ}かに馳^はせゆく。五(一六) 彼雪^{かれゆき}を

第百四十七篇 1) ヘブレオ本では本篇が前篇と合して一篇となつてゐる。故に節の通算番号を括弧に入れて付けた。
2) イエルサレムの門が再建せられ、その護りの門が備え付けられたばかりであつた。尼七・一—四参照。——3) 詩八〇・一七。及びその註参照。——4) 大急ぎで任務を果たす使者に譬えてある。

六 羊毛の如く降らし、霧を灰の如く散らし給う。六(一七)彼その雹を
 七 小き塊の如く投げ給う、その寒冷に逢いては、誰か堪うるこ
 八 とを得んや。七(一八)彼は御言を出して之を融かし給わん。その風
 九 吹かんに、水流れん。五) 八(一九)彼はその御言をヤコブに、その義
 とその規定とをイスラエルに、告げ給う。九(二〇)彼はいづれの国
 民にもかくなし給いしにあらず、六) 彼等にはその御定めを願し
 給わざりしなり。
 アレルヤ。七)

5) 春のそよ風の結果。
 6) かようにイスラエルは
 諸国民の中で栄ある地位
 を占めている。――この
 詩篇は二節ゆえに献堂式
 やその記念祭の折の祈り
 に用いられる。但し最後
 のアレルヤは省く。

第百四十八篇

天地の讚美

一 アレルヤ。一)
 二 汝等、諸天より主を讚めよ。高き処にて彼を讚めよ。三 其のすべての天
 三 使よ、彼を讚めよ、その万軍よ、彼を讚めよ。三 日と月よ、彼を讚めよ、

第百四十八篇

1) 詩・〇四の註
 参照。

四 すべての星と光よ、彼を讃めよ。諸天の天よ、彼を讃めよ、また諸天の
 五 上なる水も、²⁾主の御名を讃めよかし。そは彼語い給いしに、是等のもの
 六 成り、彼命じ給いしに、是等のもの創造られたればなり。彼は永遠に、
 七 世々の世々に至るまで、是等を立て給えり。彼法則を定め給いたれば、そ
 八 は過ぎ去ることあらじ。³⁾地より、主を讃めよ、龍よ、またすべての深淵
 九 よ、火よ、霰よ、雪よ、氷よ、その御言を行ふ疾風よ、山々と諸々の
 一〇 丘よ、実を結ぶ樹木とあらゆる杉よ、⁴⁾野獸とすべての家畜よ、蛇と翼
 二 ありて飛ぶものよ、地の王等と諸々の民よ、諸侯と地のすべての裁き人
 三 よ、⁵⁾若者等と処女等、老いたるも幼きと諸共に、主の御名を讃めよかし。
 四 一三 そはただその御名独り高ければなり。⁵⁾一四 その讃美は天地にあまねく、
 五 彼その民の角⁶⁾を高くし給えり。その諸々の聖者等に、彼に近き民なるイ
 六 スラエルの裔等に、讃美せられ給えかし。
 七 アレルヤ。

2) 但三・五九、六〇。―この云い方について、創一・七参照。
 3) 侵さるることなからんの意。―4) とりわけ家畜。
 5) 一切に拔んでて。―6) 力の意。主は御民を捕囚から救い出し、再び独立を与え給うた。

第百四十九篇

選民の讚美

一 アレルヤ。¹⁾
 汝等主に新らしき歌を唱え。その讚美は聖者等²⁾の集会の中に響き渡れ。イスラエルは己を造り給いし者によりて樂しめ、シオンの子等はその王によりて喜び躍れ。三 彼等は歌隊もて³⁾その御名を讚めよ、鼓と堅琴ともて彼に奏で参らせよ。四 そは主、その御民を嘉し給えばなり。しかして彼救拯の時⁴⁾に柔和なる者を高め給わん。五 聖者等は榮光によりて喜び躍るべし、その臥床⁴⁾にて樂しむべし。六 彼等の口には天主の稱揚、その手には両刃の劍あらん。⁵⁾七 そは異邦人等に復讐を、諸民に懲罰を加えんため、八 彼等の王等を足桎にて、彼等の貴族等を鉄の手桎にて縛めんため、九 録されたる審判⁶⁾を彼

第百四十九篇 1) 詩一〇四の註一参照。2) ヘブレオ語「ハシデイム」。これは天主の愛子の意でイスラエル人のこと。この詩篇中に三回出てくる(一、五、九、各節) 3) ヘブレオ語本「舞いつつ」。宗教的舞踊をしながら。4) 臥床は独りごとを云う場所。5) イスラエル人は周囲の異教民族を防ぐため、石垣を築いて絶えず用意していなければならなかつた。尼三・三三―三八など参照。6) 予言者たちが録した。

等^らに行^{おこな}わんためなり。これぞそのすべての聖^{ひじり}者^ら等の栄^{さかえ}光^{ひかり}なる。
アレルヤ。

第百五十篇

大なる讚美

一	二	三	四	五	六
一 アレルヤ。 ¹⁾	汝 ^{なんじら} 等 ^ら 主 ^{しゅ} を讚 ^ほ めよ、 ²⁾	徳 ^{ちから} 能 ^{のう} の蒼 ^{あお} 穹 ^{くわう} にて。 ³⁾	その偉 ^い 大 ^{だい} さの甚 ^{はた} だしきに由 ^よ りて彼 ^{かれ} を讚 ^ほ めよ。 ⁴⁾	もて彼 ^{かれ} を讚 ^ほ めよ。堅 ^{たて} 琴 ^{こと} と小 ^お 琴 ^{こと} ともて、彼 ^{かれ} を讚 ^ほ めよ。 ⁵⁾	と歌 ^か 隊 ^{たい} ³⁾ ともて彼 ^{かれ} を讚 ^ほ めよ。絃 ^{いと} 簫 ^{たけ} もて彼 ^{かれ} を讚 ^ほ めよ。 ⁶⁾
	その聖 ^{せい} 所 ^{じよ} にて。彼 ^{かれ} を讚 ^ほ めよ、その御 ^み	その大 ^{だい} 能 ^{のう} の御 ^み 業 ^{わざ} ゆえに彼 ^{かれ} を讚 ^ほ めよ。 ⁷⁾	喇叭 ^{らっぱ} の音 ^{おと}	鼓 ^{つづみ}	佳 ^よ き鐃 ^{によう} 鈸 ^{はち} ⁴⁾ もて彼 ^{かれ} を讚 ^ほ めよ。歡 ^{よろこ} 喜 ^び の鐃 ^{によう} 鈸 ^{はち} ⁵⁾ もて彼 ^{かれ} を讚 ^ほ め
					よ。 ⁶⁾ 氣 ^き 息 ^{いき} あるもの、 ⁶⁾ 舉 ^こ りて主 ^{しゅ} を讚 ^ほ めよかし。
					アレルヤ。 ⁷⁾

第百五十篇 1) 詩一〇四の註一参照。 2) 「讚めよ」が十回繰り返さ
れていることは意味深い。十は完
成の数。 3) 詩一四九・三にある
如く、舞踊。 4) 盤状の金属楽器
で互に打ち合わせる。 5) 小さい
のは冴えた音を立て、大きいのは
騒々しい音を立てる。 6) イスラ
エル人のみならずすべての人。
7) この詩篇も前の三篇同様、冒頭
と末尾とにアレルヤがある。かく
て詩篇書全卷はアレルヤ「主を讚
めよ」を以て終わる。